

# 実相寺古墳群

—別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書—



平成28(2016)年7月

別府市教育委員会

別府市埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集

実相寺古墳群

別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書

平成二十八(2016)年七月 別府市教育委員会





鬼ノ岩屋・実相寺古墳群（上が北）



鷹塚古墳全景（西から）



鷹塚古墳全景（左が北）



鷹塚古墳全景（右が北）



鷹塚古墳墳丘北西隅（上が北）



鷹塚古墳羨道内（玄門側から）



鷹塚古墳1トレンチ出土遺物

## 序 文

本書で報告します実相寺古墳群と鬼ノ岩屋古墳群は、江戸時代の文献にも記載があるなど古くから知られた古墳でした。実相寺古墳群では、昭和20年代後半から30年代前半にかけて古墳群の脇を通る九州横断道路の建設によって多くの遺跡が発見されたことにより注目を集め、実相寺古代遺跡公園が整備されるなど郷土の歴史を学ぶ場としても親しまれてきました。鬼ノ岩屋古墳群は市立上人小学校に隣接しており社会科教育の場としても活用されております。また、両古墳群ともに文化財愛護少年団が結成されており、活発な活動が行われるなど古墳を通じた文化財愛護精神の醸成も図られています。

別府市では平成28年度から郷土の歴史や伝統文化を学ぶ場として「別府学」を創設して、小中学校の9年間を通じて郷土別府を知る取り組みを始めています。郷土の歴史や伝統文化を学ぶことは、郷土への愛情を育むことにも繋がり、この実相寺古墳群や鬼ノ岩屋古墳群は、活きた教材資料としても活用できるものだと思います。

最後になりましたが、実相寺古墳群の調査を実施した別府大学文化財研究所を始め、各種関係者並びに、地元の方々に厚くお礼申し上げます。また、ご指導いただきました両古墳群の調査検討委員会の各委員をはじめ、関係各位にも重ねてお礼申し上げます。

平成28年7月

別府市教育委員会

教育長 寺岡 悌二

## 例 言

- 1 本書は大分県別府市大字北石垣字天神畑に所在する実相寺古墳群の総括調査報告書である。
- 2 調査は平成 19 年度から平成 23 年度にかけて別府大学文化財研究所が実施した。平成 26 年度からは国庫補助事業費等を使用して別府市教育委員会に「実相寺古墳群調査検討委員会」を設置し、調査結果の検討を行った。
- 3 本書に掲載する調査報告のうち第 3 章第 1 節 1 太郎塚古墳・次郎塚古墳及び 2 鷹塚古墳については、別府大学文化財研究所が刊行した報告書を同研究所の承諾を得て転載再編集した。
- 4 本書におけるレベル高は海拔を示す。
- 5 地中レーダー（GPR）・電気・電磁探査は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所に委託し、航空写真撮影は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 6 本書の執筆は以下のとおりである。
  - 第 1 章 調査の経緯 秦 広之
  - 第 2 章 遺跡の位置と環境 秦 広之
  - 第 3 章 調査の成果
    - 第 1 節 1・2 別府大学文化財研究所 2013 『実相寺古墳群』より転載再編集
      - 3 秦 広之
      - 4 奈良文化財研究所
    - 第 2 節 1 別府市教育委員会 2010 『市内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書 1』より転載再編集
      - 2 別府市教育委員会 2016 『市内遺跡発掘調査に伴う発掘調査報告書 7』より転載再編集
    - 第 3 節 関連遺跡の調査
      - 1 別府市教育委員会 2008 『春木芳元遺跡古寺地区』より転載再編集
  - 第 4 章 各論
    - 第 1 節・第 2 節 玉川剛司（別府大学文化財研究所 研究員）
    - 第 3 節 上野淳也（別府大学文学部 准教授）
    - 第 4 節 田中裕介（別府大学文学部 教授）
    - 第 5 節 桃崎祐輔（福岡大学人文学部 教授）
  - 第 5 章 総括 秦 広之
- 7 第 3 章第 1 節 1・2 における土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局等監修による『新版標準土色帖』を使用している。
- 8 本書の編集は、実相寺古墳群調査検討委員会の指導のもと、玉川剛司氏の協力を得て、秦が行った。

# 目次

巻頭図版

序文

例言

## 第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯と目的	1
第2節 過去の調査と研究	1
第3節 調査の経過	3
第4節 調査の組織	5

## 第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	6

## 第3章 調査の成果

第1節 実相寺古墳群の調査	12
1 太郎塚古墳・次郎塚古墳の調査	12
2 鷹塚古墳の調査	38
3 天神畑古墳の調査	78
4 地中レーダー（GPR）・電気・電磁探査	88
第2節 鬼ノ岩屋古墳群の調査	102
1 鬼ノ岩屋1号墳	102
2 鬼ノ岩屋2号墳	112
第3節 関連遺跡の調査	124
1 春木芳元遺跡古寺地区	124

## 第4章 各論

第1節 須恵器からみる別府市内の古墳時代の様相	137
第2節 別府市内の横穴式石室	149
第3節 墳丘について	155
第4節 実相寺古墳群に所在する二基の石棺について	165
第5節 別府実相寺古墳群出土馬具の検討	173

## 第5章 総括

第1節 鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の調査成果	181
第2節 豊後における鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の位置付け	184
第3節 東九州における首長墓の動向と鬼ノ岩屋・実相寺古墳群	188
第4節 鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の歴史的意義	189



挿図目次

第1図 『豊後国速見郡石垣原図』（部分）	1
第2図 昭和36年作成の「埋蔵文化財包蔵地調査カード」	2
第3a図 昭和51年作成の「実相寺古墳群測量図」	2
第3b図 発掘調査を伝える新聞記事	4
第3c図 別府市内の遺跡地図	7
第3d図 別府市内の古墳時代関連遺跡	9
第3e図 実相寺古墳群配置図（1/800）	10
第4図 太郎塚・次郎塚古墳トレンチ配置図（1/300）	12
第5図 太郎塚3トレンチ平面図・断面図（1/60）	13
第6図 太郎塚5トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	14
第7図 太郎塚6トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	14
第8図 太郎塚7トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	15
第9図 太郎塚7トレンチ出土遺物1（1/4）	16
第10図 太郎塚7トレンチ出土遺物2（1/4）	17
第11図 太郎塚11トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	19
第12図 太郎塚11トレンチ出土遺物（1/4）	20
第13図 次郎塚1トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	21
第14図 次郎塚1トレンチ出土遺物（1/4）	21
第15図 次郎塚2トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	22
第16図 次郎塚4トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	23
第17図 次郎塚4トレンチ出土遺物（1/4）	23
第18図 次郎塚8トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	24
第19図 次郎塚9トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	25・26
第20図 次郎塚9トレンチ出土遺物（12：1/2、その他：1/4）	27
第21a図 太郎塚・次郎塚古墳表採出土遺物（1/4）	28
第21b図 太郎塚古墳・次郎塚古墳墳丘復元図（1/300）	31
第22図 鷹塚古墳トレンチ配置図（1/300）	38
第23図 鷹塚1トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	41・42
第24図 鷹塚1トレンチ出土遺物（1/4）	43
第25図 鷹塚2トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	44
第26図 鷹塚3トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	47・48
第27図 鷹塚3トレンチ羨道部内及び天井石土層図（1/60）	50
第28図 鷹塚3トレンチ羨道部平面図・断面見通し図（1/60）	51・52
第29図 鷹塚3トレンチ出土遺物（1-14：1/4、15-17：1/2、18：1/2、19：1/1）	55
第30図 鷹塚4トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	57
第31図 鷹塚5トレンチ平面図・土層断面図（1/60・1/80）	59・60
第32図 鷹塚6トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	61
第33図 鷹塚7トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	62
第34図 鷹塚7トレンチ出土遺物（1/4）	62
第35図 鷹塚8トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	63
第36図 鷹塚9トレンチ出土遺物（1/4）	64
第37図 鷹塚9トレンチ平面図・土層断面図（1/60）	65
第38図 鷹塚6～9トレンチ配置図（1/80）	66
第39図 鷹塚古墳表採遺物（1/4）	67
第40図 鷹塚古墳墳丘復元図（1/300）	70
第41図 天神畑古墳位置図（1/800）	78
第42図 調査区位置図（1/600）	79
第43図 石室平面図・断面図（1/50）	81
第44図 石室平面図・断面図【奥壁除去後】（1/50）	82
第45図 出土遺物（1/3）	83
第46図 太郎塚古墳・次郎塚古墳 GPR探査平面図（400MHz）	91
第47図 太郎塚古墳 GPR探査平面図（270MHz）	92
第48図 次郎塚古墳 GPR探査平面図（270MHz）	93

第 49 図	次郎塚古墳 GPR 探査断面図 (270MHz)	93
第 50 図	次郎塚古墳 電気探査断面	94
第 51 図	太郎塚古墳・次郎塚古墳 電磁探査平面図	95
第 52 図	天神畑古墳 GPR 探査平面図 (400MHz)	96
第 53 図	天神畑古墳 GPR 探査断面図 1 (400MHz)	97
第 54 図	天神畑古墳 GPR 探査断面図 2 (400MHz)	98
第 55 図	鷹塚古墳 GPR 探査平面図 (400MHz)	99
第 56a 図	鷹塚古墳 GPR 探査平面図 (270MHz)	100
第 56b 図	実相寺古墳群 GPR 探査成果平面図 (1/1000)	100
第 57 図	鬼ノ岩屋 1 号墳調査区位置図 (1/300)	102
第 58 図	第 1 調査区平面図・土層断面図 (1/60)	103
第 59 図	第 3 調査区平面図・土層断面図 (1/60)	104
第 60 図	第 5 調査区平面図・土層断面図 (1/60)	105
第 61 図	出土遺物 (1/3)	106
第 62 図	鬼ノ岩屋 1 号墳復元図 (1/300)	107
第 63 図	鬼ノ岩屋 1 号墳石室実測図【現況図】 (1/100)	109
第 64 図	鬼ノ岩屋 1 号墳石室実測図【石室形復元】 (1/100)	110
第 65 図	鬼ノ岩屋古墳位置図 (1/1000)	112
第 66 図	第 1 トレンチ平面図・土層断面図 (1/50)	113
第 67 図	第 2 トレンチ平面図・土層断面図 (1/50)	114
第 68 図	第 3 トレンチ平面図・土層断面図 (1/50)	115
第 69 図	鬼ノ岩屋 2 号墳墳丘復元図想定図 (1/300)	116
第 70 図	鬼ノ岩屋 2 号墳石室実測図 (1/100)	119
第 71 図	塚原出土遺物実測図 (1/4)	121
第 72 図	調査地域図	124
第 73 図	調査区配置図 (1/300)	125
第 74 図	第 1 調査区遺構配置図 (1/100)	126
第 75 図	1 号石棺 (1/40)	127
第 76 図	1 号石棺周辺部出土遺物 (1/4)	127
第 77 図	1 号石棺内出土遺物 (1・2 : 1/4、3 : 1/2、4・5 : 1/1)	129
第 78 図	第 2 調査区遺構配置図 (1/100)	130
第 79 図	2 号石棺 (1/40)	131
第 80 図	第 2 調査区出土遺物 (1/4)	131
第 81 図	春木芳元遺跡出土須恵器編年図 (1/6)	138
第 82 図	太郎塚古墳・次郎塚古墳出土須恵器 (25 : 1/8、その他 : 1/6)	139
第 83 図	太郎塚古墳・次郎塚古墳出土須恵器編年図 (25 : 1/8、その他 : 1/6)	140
第 84 図	鷹塚古墳出土須恵器 (26 : 1/8、その他 : 1/6)	141
第 85 図	鷹塚古墳出土須恵器編年図 (26 : 1/8、その他 : 1/6)	142
第 86 図	天神畑 1 号墳出土須恵器 (1/6)	143
第 87 図	天神畑 1 号墳出土須恵器編年図 (1/6)	144
第 88 図	北石垣遺跡出土須恵器等編年図 (1/6)	146
第 89 図	別府市内の横穴式石室実測図 (1/200)	150
第 90 図	別府湾沿岸・阿蘇地域の横穴式石室編年図 (1/300)	152
第 91 図	筑後川上流域・豊前地域の横穴式石室編年図 (1/300)	153
第 92 図	鷹塚古墳墳丘縦横断面図 (1/300)	157・158
第 93 図	方墳の平面規模散布図	163
第 94 図	実相寺 1 号石棺 (1/20)	167
第 95 図	実相寺 2 号石棺 (1/20)	169
第 96 図	実相寺古墳群次郎塚出土馬具トレース図・復元想定図	179
第 97 図	鷹塚古墳 (1/500)	181
第 98 図	太郎塚古墳・次郎塚古墳 (1/500)	182
第 99 図	天神畑 1 号墳 (1/100)	183
第 100 図	鬼ノ岩屋古墳群 (1/1000)	183
第 101 図	豊後及び豊前東部における首長墓の変遷	185

第 102 図	豊後における玄室規模の比較	186・187
第 103 図	玄室規模散布図	187
第 104 図	関連遺跡	189
第 105 図	鬼ノ岩屋・実相寺古墳群	189
第 106 図	駅路図	190

表目次

表 1	太郎塚・次郎塚古墳出土土器観察表	29
表 2	太郎塚・次郎塚古墳出土馬具観察表	29
表 3	鷹塚古墳出土土器観察表	68
表 4	鷹塚古墳出土馬具観察表	68
表 5	鷹塚古墳出土装身具観察表①	68
表 6	鷹塚古墳出土装身具観察表②	68
表 7	春木芳元遺跡古寺地区遺物観察表	133
表 8	別府市内における古墳・集落別の須恵器型式一覧	147
表 9	別府市周辺主要横穴式石室の規模比較一覧	149
表 10	本稿取り扱い方墳一覧	159
表 11	玄室規模の比較	187

写真目次

巻頭図版 1	鬼ノ岩屋・実相寺古墳群	
巻頭図版 2	鷹塚古墳全景	
巻頭図版 3	鷹塚古墳全景・鷹塚古墳墳丘北西隅	
巻頭図版 4	鷹塚古墳羨道内・鷹塚古墳 1 トレンチ出土遺物	
写真図版 1	太郎塚古墳 3 トレンチ周溝検出状況ほか	32
写真図版 2	太郎塚古墳 10 トレンチ南側土層堆積状況ほか	33
写真図版 3	次郎塚古墳 8 トレンチ検出状況ほか	34
写真図版 4	太郎塚古墳・次郎塚古墳出土遺物	35
写真図版 5	次郎塚古墳出土遺物	36
写真図版 6	鷹塚古墳 1 トレンチ全景ほか	71
写真図版 7	鷹塚古墳 3 トレンチ羨道内玄門付近ほか	72
写真図版 8	鷹塚古墳 5 トレンチ全景ほか	73
写真図版 9	鷹塚古墳 1・9 トレンチ完掘状況	74
写真図版 10	鷹塚古墳出土遺物	75
写真図版 11	鷹塚古墳出土遺物	76
写真図版 12	天神畑 1 号墳石室全景ほか	85
写真図版 13	天神畑 1 号墳調査前ほか	86
写真図版 14	鬼ノ岩屋 1 号墳第 1 調査区ほか	108
写真図版 15	鬼ノ岩屋 2 号墳第 1 トレンチ全景ほか	117
写真図版 16	鬼ノ岩屋 2 号墳第 2 トレンチ平坦面葺石検出状況	118
写真図版 17	塚原出土遺物	122
写真図版 18	春木芳元遺跡古寺地区第 1 調査区全景ほか	134
写真図版 19	春木芳元遺跡古寺地区第 2 調査区全景ほか	135
写真図版 20	春木芳元遺跡古寺地区出土遺物	136
写真 1	太郎塚古墳（左）・次郎塚古墳（右）	11
写真 2	鷹塚古墳	37
写真 3	天神畑古墳	77
写真 4	地中レーダー探査	87
写真 5	鬼ノ岩屋古墳群全景	101
写真 6	鬼ノ岩屋 2 号墳	111
写真 7	春木芳元 1 号石棺	123
写真 8	実相寺山露頭	165
写真 9	実相寺 1 号石棺	167
写真 10	実相寺 2 号石棺	169
写真 11	実相寺古墳群次郎塚古墳出土馬具	180

# 第1章 調査の経緯

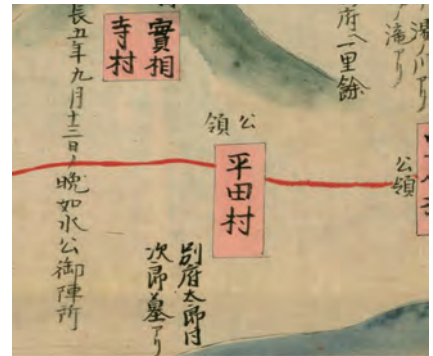
## 第1節 調査に至る経緯と目的

実相寺古墳群は大分県別府市大字北石垣字天神畑に所在する古墳群で、鷹塚古墳・太郎塚古墳・次郎塚古墳・天神畑古墳から構成されている。平成19年度から23年度にかけて行われた別府大学文化財研究所による発掘調査の結果、太郎塚古墳・次郎塚古墳の墳形及び規模が判明し、鷹塚古墳の墳形が方墳であると判明するなどの調査成果を受けて、平成25年3月に鷹塚古墳・太郎塚古墳・次郎塚古墳が「実相寺古墳群」として大分県指定史跡に指定された。

別府大学文化財研究所による調査成果を受けて、別府市教育委員会は実相寺古墳群の本質的価値について検討し古墳群の保護を図ることを目的に平成26年度に実相寺古墳群調査検討委員会を設置して、調査成果の検討及び昭和32年に国史跡に指定されている鬼ノ岩屋古墳も含めて別府市に所在する古墳群の位置付けについて検討を行った。

## 第2節 過去の調査と研究

実相寺古墳群を構成する古墳群は、幸若舞でも演じられた『百合若大臣』に擬えて、古くから知られる存在であった。元禄7年(1694)に石垣原合戦の取材で別府の地を訪れた福岡藩の儒学者貝原益軒が絵師に描かせた『豊後国速見郡石垣原図』にも「別府太郎同次郎墓アリ」と記されており、少なくとも江戸時代の前期には古墳の存在が知られていた事が判る。18世紀末に編纂された『豊後国誌』には「荒墓 三所。並在石垣荘石垣原。一曰別府太郎。一曰別府次郎。一曰緑丸。緑丸蓋鷹名。」と記されている。

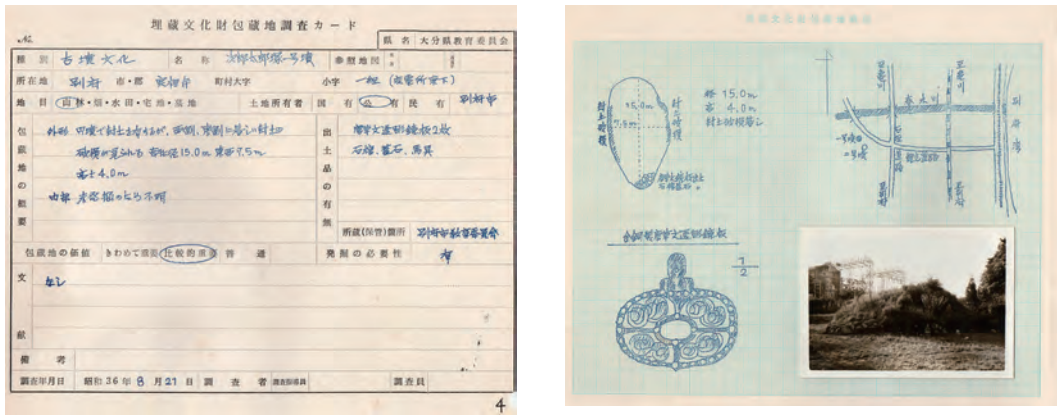


第1図『豊後国速見郡石垣原図』(部分)

昭和25年(1950)に制定された別府国際観光温泉文化都市建設法の最初の事業として昭和26年(1951)から着工した国際観光道路(現在の「九州横断道路」)は、別府国際観光港を起点に鉄輪から湯布院へと通じるルートであるが、その途中にある実相寺古墳群周辺では、昭和20年代末から昭和30年代初頭にかけて工事が行われており、別府女子大学(現在の別府大学)の賀川光夫氏らによって緊急の発掘調査が行われ、縄文時代後期の遺物や弥生時代の竪穴住居などが発見されている(『別府市実相寺春木遺跡概要』『別府市国際観光道路に於ける先史時代遺跡の調査』)。

昭和33年(1953)には馬具(県指定名称:唐草文透彫鏡板)が次郎塚古墳付近から出土している。この馬具については平成15年刊行の『別府市誌』では「太郎塚古墳出土」とされている資料であるが、隣接して存在する太郎塚古墳・次郎塚古墳については呼称の混乱が認められ、昭和29年(1954)報告(『別府市実相寺春木遺跡概要』)では現在と同じ北側の古墳を「次郎塚古墳」としているが、昭和30年代に入り北側の古墳が「太郎塚古墳」と呼ばれるようになる一方、昭和35年(1960)度から昭和37年(1962)度にかけて全国的に埋蔵文化財包蔵地の分布調査が行われた際には北側の古墳を「次郎太郎塚1号墳」、南側の古墳を「次郎太郎塚2号墳」と遺跡

名が付与され、昭和 50 年（1975）に作成された改定版にも踏襲されている。昭和 30 年代から同 60 年代にかけて、現在「次郎塚古墳」呼ばれる北側の古墳は、「次郎太郎塚 1 号」もしくは「太郎塚古墳」と呼称されていた。なお、馬具発見直後の昭和 35 年に作成された「埋蔵文化財包蔵地カード」には、馬具の出土位置が記され、出土位置は現在「次郎塚古墳」と呼称している北側の古墳「次郎太郎塚一号墳」の南東側隣接地とされており、この馬具が現在の「次郎塚古墳」から出土していることが判る。



第 2 図 昭和 36 年作成の「埋蔵文化財包蔵地調査カード」（左：表面、右：裏面）

現在は、北側の古墳を「次郎塚古墳」、南側の古墳を「太郎塚古墳」と呼称しており、これは大分県教育委員会が平成 20 年（2008）に刊行した『大分県遺跡地図』に準じており、本報告でもこれを踏襲する。

昭和 51 年（1976）には別府市教育委員会が別府大学に委託し、実相寺古墳群の測量調査が行われている。この際作成された測量図には測量調査を担当した吉留秀敏氏により、当時まだ発見されていなかった天神畑古墳の位置に石室の存在が指摘されているほか石棺の出土位置についての重要な情報が記載されている。なお天神畑古墳は、平成 2 年に開発に伴う調査が行われ、発掘調査によって古墳が確認された。



第 3a 図 昭和 51 年作成の「実相寺古墳群測量図」

### 第3節 調査の経過

#### (1) 調査の方法

実相寺古墳群の調査については、平成19年(2007)度から平成23年(2011)度にかけて別府大学文化財研究所により範囲確認調査が進められ古墳群の重要性が認識されることにより、平成26年(2014)度から別府市教育委員会に「実相寺古墳群調査検討委員会」を設置して、別府大学文化財研究所による調査結果の検討及び古墳群の価値について検討を行った。

#### (2) 調査の経過

##### 太郎塚古墳・次郎塚古墳1次調査(平成19年(2007)度)

別府大学文化財研究所により平成20年(2008)2月1日から2月22日まで、太郎塚古墳・次郎塚古墳1次調査として、各古墳に4本のトレンチ、計8トレンチを設定して調査が行われた。太郎塚古墳の7トレンチからは周溝が確認され、周溝底部から多数の須恵器が出土した。次郎塚古墳では1・4トレンチにおいて周溝が確認されている。

##### 太郎塚古墳・次郎塚古墳2次調査(平成20年(2008)度～平成21年(2009)度)

別府大学文化財研究所により平成20年12月13日から平成21年4月30日まで、太郎塚古墳・次郎塚古墳2次調査として、周溝の依存状況及び墳丘の残存状況を確認するため9～11トレンチを設定して調査が行われた。9・11トレンチで周溝を確認したほか、9トレンチでは多数の須恵器が出土した。また、墳丘の測量調査も併せて行われた。

##### 鷹塚古墳1次調査(平成20年(2008)度～平成21年(2009)度)

別府大学文化財研究所により平成21年2月26日から4月30日まで、鷹塚古墳1次調査として3本のトレンチを設定して調査が行われた。1トレンチで墳丘盛土と考えられる土層を確認し、3トレンチでは、前庭部の側面と考えられる石材が確認されている。

##### 鷹塚古墳2次調査(平成21年(2009)度～平成22年(2010)度)

別府大学文化財研究所により平成21年8月1日から平成22年6月30日まで、鷹塚古墳2次調査が実施され、古墳の時期・墳形・規模に関する課題を検討するため6本のトレンチを設定して調査が行われた。5・6・7・8トレンチで1段目の石列が確認され、墳形が方墳であることが判明した。また、1トレンチからはTK43～TK209型式期の遺物が出土した。

##### 鷹塚古墳3次調査(平成22年(2010)度～平成23年(2011)度)

別府大学文化財研究所により行われた鷹塚古墳3次調査では、開口部及び羨道部内の依存状況の確認を目的とした調査が行われている。調査の結果、羨道部は、幅2.5m・現存長6.5mという県内最大の羨道を持つ巨石墳であることが確認された。また、スキヤニングレーザーによる3次元測量も実施した。

別府市教育委員会は、平成 24 年（2012）3 月 8 日に「市指定史跡実相寺古墳群発掘調査検討会」を開催し、小田富士雄福岡大学名誉教授、後藤宗俊別府大学名誉教授を交えて調査結果の報告検討を行った。

平成 26 年（2014）度

別府市教育委員会は、平成 27 年（2015）1 月 26 日から 1 月 30 日にかけて、実相寺古墳群の地中レーダー（GPR）・電磁・電気探査を奈良文化財研究所に委託し実施した。平成 27 年 3 月 30 日に「実相寺古墳群調査検討委員会」を開催して別府大学文化財研究所により行われた調査結果の報告検討を行った。

平成 27 年（2015）度

別府市教育委員会は、平成 27 年 11 月 19 日に実相寺古墳群調査検討委員会を開催し、出土遺物の検討や古墳群の位置付けについて検討を行った。12 月 18 日には文化庁記念物課主任調査官の現地視察が行われ古墳群に関する協議を行った。

平成 28 年（2016）度

別府市教育委員会は、平成 28 年 6 月 19 日に実相寺古墳群調査検討委員会を開催し、総括報告書について検討を行った。

平成 22 年 2 月 22 日付大分合同新聞



平成 23 年 3 月 2 日付大分合同新聞



第 3b 図 発掘調査を伝える新聞記事

#### 第4節 調査の組織

調査主体 別府市教育委員会  
調査責任者 寺岡悌二（別府市教育委員会 教育長）

##### 実相寺古墳群調査検討委員会

委員長 田中裕介（別府大学文学部 教授）  
副委員長 福永伸哉（大阪大学大学院 教授）  
桃崎祐輔（福岡大学人文学部 教授）  
重藤輝行（佐賀大学芸術地域デザイン学部 教授）  
杉井 健（熊本大学文学部 准教授）  
上野淳也（別府大学文学部 准教授）  
湊 博秋（別府市教育庁 教育参事）

調査事務 永野康洋（別府市教育庁生涯学習課 課長）  
本田明彦（別府市教育庁生涯学習課 課長）  
矢野義知（別府市教育庁生涯学習課 課長補佐兼文化財係長）  
河野秀徳（別府市教育庁生涯学習課 課長補佐兼文化財係長）  
中西郁夫（別府市教育庁生涯学習課 課長補佐兼文化財係長）  
柏木正義（別府市教育庁生涯学習課 課長補佐兼文化財係長）  
荒金一明（別府市教育庁生涯学習課文化財係 主査）  
釘宮誠治（別府市教育庁生涯学習課文化財係 主査）  
塚崎里沙（別府市教育庁生涯学習課文化財係 主事）  
小間加奈子（別府市教育庁生涯学習課文化財係 非常勤職員）  
調査担当 秦 広之（別府市教育庁生涯学習課文化財係 主任）

調査指導 小田富士雄（福岡大学 名誉教授）  
後藤宗俊（別府大学 名誉教授）  
禰冨田佳男（文化庁文化財部記念物課 主任文化財調査官）  
林 正憲（文化庁文化財部記念物課 文化財調査官 調査指導当時）  
後藤晃一（大分県教育庁文化課副 主幹 調査指導当時）  
横澤 慈（大分県教育庁文化課 主任 調査指導当時）  
越智淳平（大分県教育庁文化課 主任）

調査協力 文化庁文化財部記念物課 大分県教育庁文化課  
玉川剛司（別府大学文化財研究所 研究員）



## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

実相寺古墳群が所在する別府市は、九州の北東部、瀬戸内海に面した大分県の東海岸のほぼ中央に位置し、北を日出町・宇佐市、西を由布市、南を大分市と接する。

市内には古くから「別府八湯」と呼ばれる温泉群が点在し、2千2百を超える源泉から湧出する温泉は、毎分8万3千リットルにも及び、この豊富な天然資源を浴用として利用するほかに、湯の花製造などの伝統産業や、地獄などの観光資源としても利用し独特な温泉文化を形成している。平成24年（2012）9月には、温泉を利用した独特な生活・生業の在り方が評価を受け鉄輪・明礬地区が国の重要文化的景観に選定された。

実相寺古墳群は、鶴見連山の開析砕屑物が土石流や泥流となって形成された別府扇状地の北側に位置し、土中には「別府石」と呼ばれる大小の角閃石安山岩が厚く堆積している。古墳は標高50～60m前後の扇状地上に位置しているが、鶴見連山に降り注ぐ雨水は別府扇状地の地下に染み込み、一部は地熱で温められたのちに温泉として利用され、一部は古墳の位置する標高付近で湧水として地上に現れる。現在は宅地開発等により湧水を見ることは出来なくなったが、昭和30年代頃までは湧水を利用した水田と農業集落が点在する景観が広がっていた。

周辺を流れる河川は、古墳群の北側に鶴見連山の麓に端を発する春木川及び明礬・鉄輪などの地獄地帯を抜ける平田川が流れている。

### 第2節 歴史的環境

別府市内では旧石器時代から近世にかけての遺跡が存在する。旧石器時代では、丘陵上にある羽室遺跡でナイフ型石器が出土している。

縄文時代の遺跡は、早期後半の押型文期に遺跡が増加し、十文字原第1遺跡では集石遺構が調査されている。野田遺跡では、姫島産の黒曜石が出土するなど各地との交流の痕跡も認められる。後期の羽室遺跡では鐘崎式の竪穴住居跡が1棟確認されている。後期中葉になると春木川沿いの春木芳元遺跡で西平式土器が出土し、扇状地での活動も認められるようになる。

弥生時代になると扇状地を見下ろす高台にある羽室遺跡では中期初頭段階の高地性集落が確認されている。遺跡数が増加するのは後期から終末期にかけての時期で、石垣地区などの扇状地で遺跡が多く認められるようになる。春木芳元遺跡では合わせ口甕棺や集落跡が確認されているほか、別府大学のある円通寺遺跡では多数の竪穴住居跡とともに小型仿製鏡が出土するなど拠点的な集落が現れる。

円通寺遺跡では、弥生時代後期後葉～終末期にかけての集落が確認され小型仿製鏡が出土した。弥生時代後期から終末期にかけて活発な活動の痕跡が確認できたこれらの遺跡は、古墳時代になると規模を縮小し、北石垣遺跡などで断片的に古墳時代の遺跡の存在が確認されるものの集落の動向を把握することは困難となる。以後、古墳時代を通じて集落遺跡の様相は不明確な状態となる。



- 1 温水遺跡    2 ふいが城遺跡    3 扇山遺跡    4 湯の森遺跡    5 北鉄輪遺跡    6 野田遺跡  
 7 火男火売神社地遺跡    8 宮園遺跡    9 竈門氏墓地遺跡    10 羽室遺跡    11 貴船城遺跡  
 12 鬼ノ岩屋1号墳    13 鬼ノ岩屋2号墳    14 円通寺遺跡    15 北石垣遺跡    16 春木芳元遺跡  
 17 次郎塚古墳    18 太郎塚古墳    19 鷹塚古墳    20 末行遺跡    21 四郎丸遺跡  
 22 南石垣遺跡    23 吉祥寺跡    24 田ノ湯石棺墓群    25 朝見神社石棺墓群    26 志高湖岸遺跡  
 27 小杉遺跡    28 浜脇横穴墓群    29 大友浜脇館跡    30 立石城跡    31 鬼ノ岩屋古墳群  
 32 元林遺跡    33 実相寺古墳群

第3c図 別府市内の遺跡地図



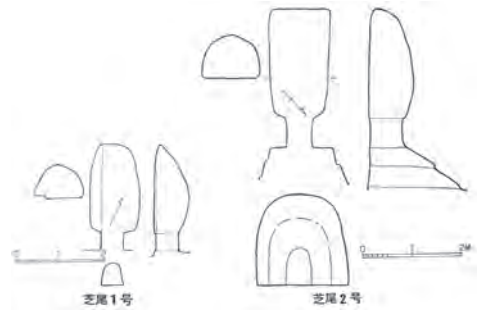
別府地区の古墳時代遺跡



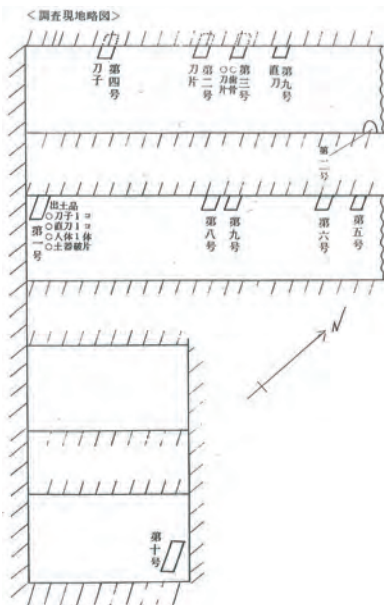
枇杷の木（朝見神社石棺墓群）出土短甲  
（京都大学文学部 1968）



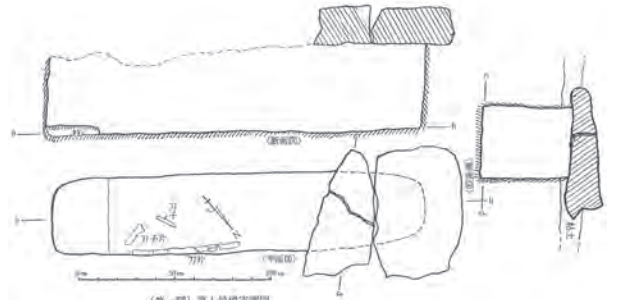
朝見神社石棺墓群



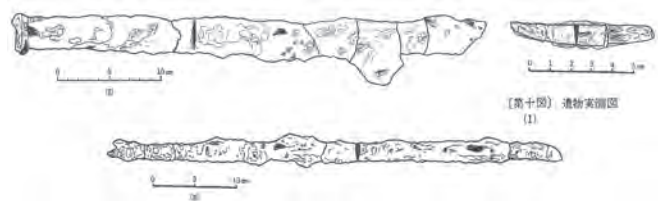
浜脇横穴墓群（別府市役所 1985）



田ノ湯石棺墓群遺構配置図  
（後藤 1969）



田ノ湯石棺墓群第1号墳  
（後藤 1969）



田ノ湯石棺墓群出土遺物  
（後藤 1969）

第3d図 別府市内の古墳時代関連遺跡

集落遺跡の調査事例の少ない古墳時代の当地域であるが、これとは対照的に古墳時代になると墳墓や石棺墓などの遺跡が多く確認されるようになる。古墳時代前期の墓域は確認されていないが、中期になると別府南部の朝見神社石棺墓群において複数の箱式石棺墓が確認されている。昭和8年(1933)に刊行された『別府市誌』によると、朝見枇杷の木において大正15年(1926)に行われた水道工事の際に、4～5基の箱式石棺墓が出土し「何れも厚さ三寸平均の平たい石で、長方形に組合せ、棺の内部は朱で塗りつめている。右は同一墳丘内に石棺が二個並列してあるものである」と記載されている(鳥居1933)。また、京都大学総合博物館には別府市朝見枇杷の木出土の鉄刀破片1個・短甲破片1個・頸甲・肩甲各破片8個・土師器破片8が保管されており(京都大学文学部1968)、短甲の型式は三角板革綴となり中期前葉に位置づけられている(西嶋2014)。

田ノ湯石棺墓群では、昭和41年(1966)に石蓋土杭墓が開発工事中に発見され、10基の石蓋土杭墓が調査されているが、すでに壊されたものも含めると20数基が存在していたと報告されている(後藤1969)。

春木芳元遺跡古寺地区において、箱式石棺が発掘調査され棺内から鉄剣・大刀・鉄斧が出土し、付近からは5世紀後半～末の須恵器が出土した。墳丘は確認されていないが、石棺を取り囲むように隅丸方形の周溝が確認されており、本来墳丘を伴っていた可能性も指摘されている(下森2007)。

後期後葉になると春木川を挟んで鬼ノ岩屋古墳群と実相寺古墳群が築造される。TK43型式期には、鬼ノ岩屋2号墳と太郎塚古墳・次郎塚古墳が造られ、TK209型式期になると鬼ノ岩屋1号墳と鷹塚古墳が造られる。実相寺古墳群では鷹塚古墳の次に天神畑古墳が造られるなど、後期後葉から終末期にかけて古墳が連続的に築造されるようになる。

別府南部の浜脇・朝見の丘陵一帯に浜脇横穴墓群が構築される。丘陵沿いに複数の群をなし、50基前後の横穴墓が確認されているが、本格的な発掘調査は行われていない。金毘羅山横穴墓から出土したと伝えられる遺物には、鉄製轡鏡板・金環・銀環・勾玉・管玉・切子玉・ガラス製小玉・鉄鏃・鉄釘・須恵器破片・土錘などが出土したとされ(別府市役所1985)、古墳時代後期から終末期にかけて構築されたものと考えられる。

#### 第1章・第2章 引用・参考文献

- 梅原末治 1924 「豊後國速見郡北石垣村の石室古墳」『考古学雑誌第14号第4号』考古學會  
鳥居龍蔵 1933 「第三節 原始時代」『別府市誌』別府市教育會  
別府女子大学上代文化研究所編 1954 頃 『別府市実相寺春木遺跡概要』別府市立図書館  
賀川光夫 1956 頃 『別府市國際觀光道路開掘に於ける先史時代遺跡の調査』別府市教育委員會  
賀川光夫 1957 「原始・古代の別府」『大分縣地方史 第11・12号』大分県地方史研究会  
京都大学文学部 1968 『京都大学文学部博物館考古学資料目録 第2部日本歴史時代』京都大学  
後藤重己 1969 『別府市域における集落景観の変遷資料 - 南明荘古墳調査報告 - 』南明荘古墳調査団  
坂本嘉弘 1971 「別府市朝見地区に於ける組合石棺出土例報告」『ちかたび13』別府大学考古学専攻生  
大分県教育委員會編 1983 『羽室遺跡発掘調査概報』大分県教育員會  
別府市役所編 1985 『別府市誌』別府市役所  
別府市 2003 『別府市誌』別府市  
下森弘之編 2007 『春木芳元遺跡古寺地区』別府市教育委員會  
別府市教育委員會編 2009 『市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1』別府市教育委員會  
清水宗昭 2012 『べっぷの文化財 No.42 - 別府市の古墳文化 - 』別府市教育委員會・別府市文化財保護審議會  
別府市教育委員會編 2016 『市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7』別府市教育委員會  
西嶋剛広 2014 「甲冑から見た九州と倭王権との地域間交流」『古墳時代の地域間交流2』  
第17回九州前方後円墳研究会大分大会 九州前方後円墳研究会



第 3e 図 実相寺古墳群配置図 (1/800)

たろうづか      じろうづか  
太郎塚古墳・次郎塚古墳の調査



写真1 太郎塚古墳（左）・次郎塚古墳（右）

所在地：別府市大字北石垣字天神畑

調査の情報

調査機関：別府大学文化財研究所

調査期間：平成19年（2007）2月1日～2月22日

平成20年（2008）12月13日～平成21年（2009）4月30日

調査担当者：上野淳也（別府大学文学部 准教授）

玉川剛司（別府大学文化財研究所 研究員）

報告書：2013『実相寺古墳群』別府大学文化財研究所

報告書担当者：玉川剛司（別府大学文化財研究所 研究員）

第3章第1節1で報告する太郎塚古墳及び次郎塚古墳の発掘調査の結果は、平成19年度・20年度に行われた別府大学文化財研究所による調査成果（2013『実相寺古墳群』別府大学文化財研究所）を同研究所の承諾を得て掲載するものである。掲載にあたり本書の体裁にあわせるため若干の修正を加えている。

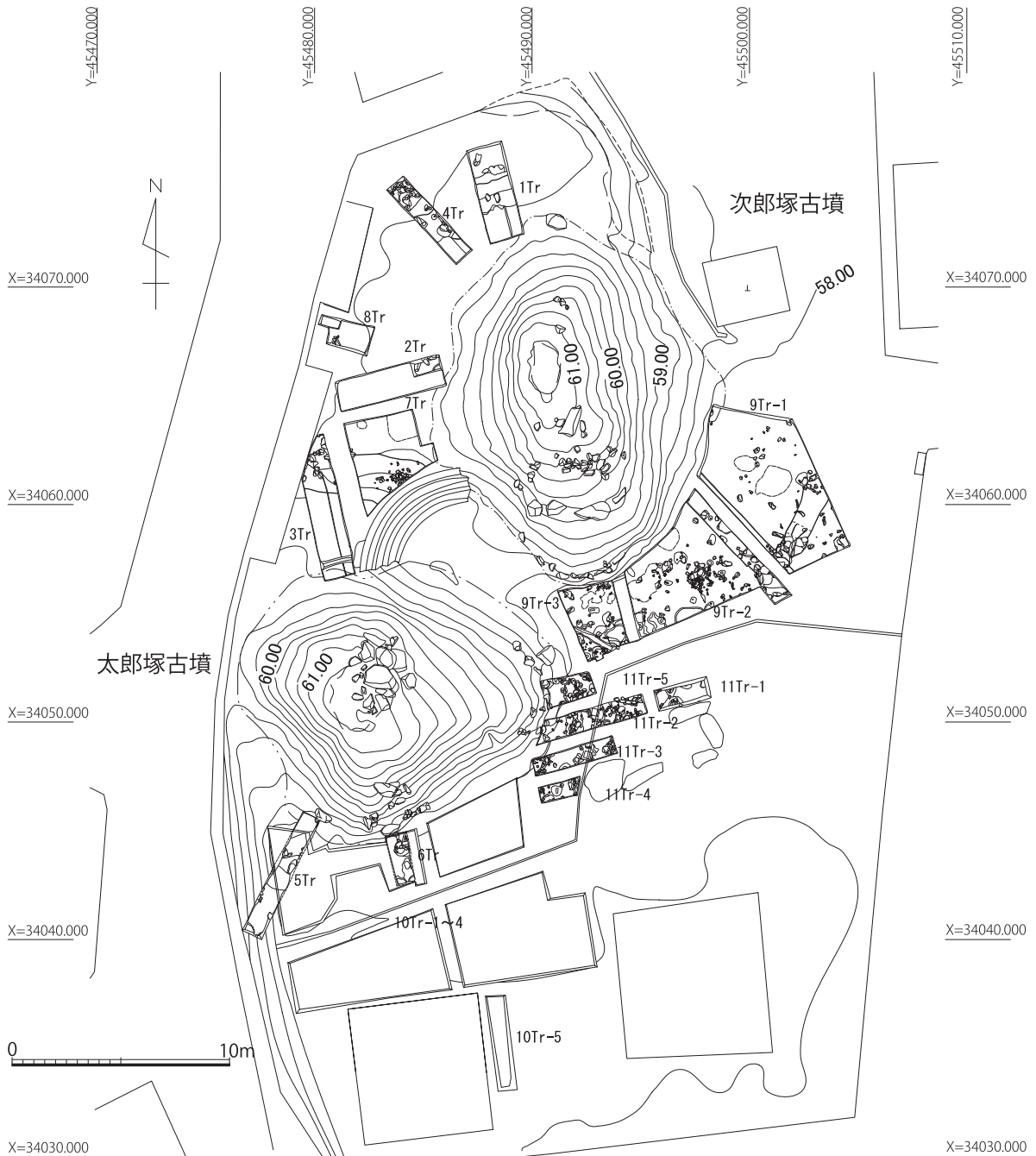
### 第3章 調査の成果

#### 第1節 実相寺古墳群の調査

##### 1 太郎塚古墳・次郎塚古墳の調査

太郎塚古墳と次郎塚古墳は、現状で2.5 m程しか離れておらず、かなり隣接して所在している。19・20年度の学術発掘調査では、2基の古墳の墳丘規模及び墳形と築造時期の確認のため、太郎塚古墳に3・5・6・7・10・11トレンチの計6カ所、次郎塚古墳には1・2・4・8・9トレンチの計5カ所を設定し確認調査を実施した（第4図）。

調査の詳細については、各古墳ごとに述べていく。



第4図 太郎塚・次郎塚古墳トレンチ配置図 (1/300)

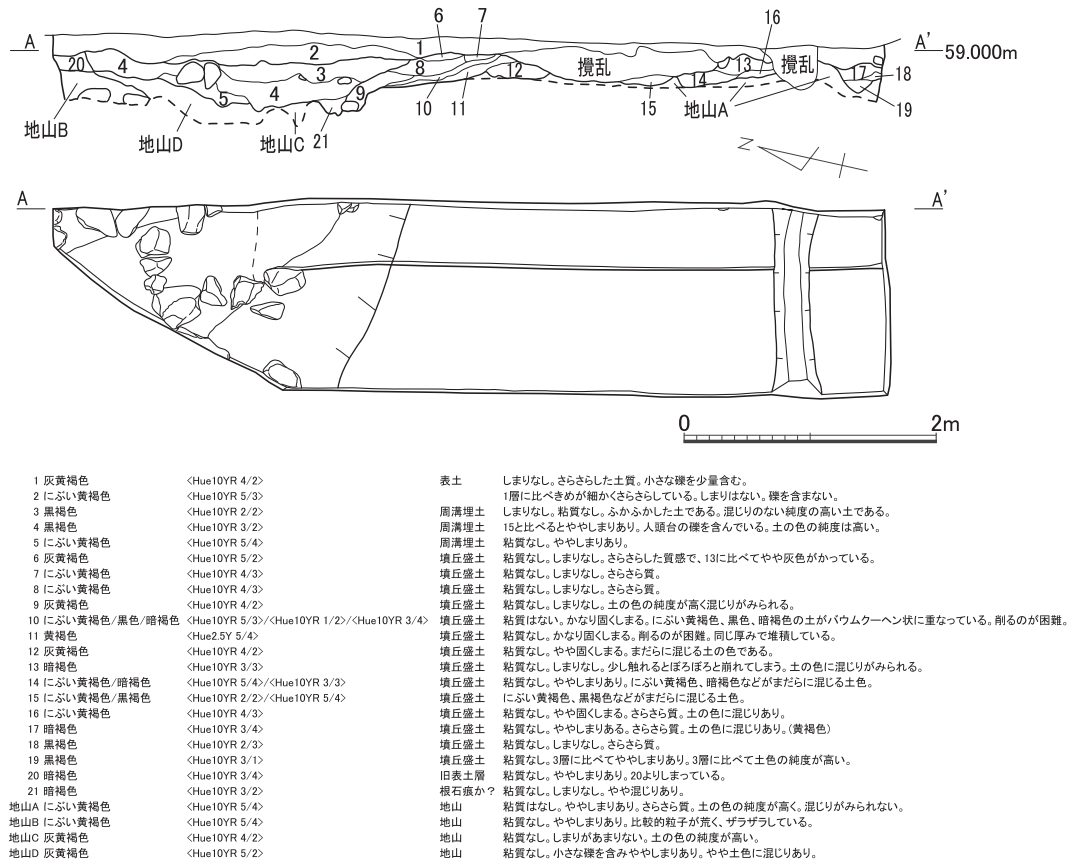
太郎塚 3トレンチ (第5図)

太郎塚古墳の周溝及び墳形の確認のため、墳丘北側の花壇に沿って長軸 6.6 m、短軸 4.8 m、幅 1.5 mの台形状に調査区を設定した。調査の結果、調査区北側より 2.7 mの地点で周溝を検出した。また、調査区北側から 2.5 mで墳端と思われる墳丘盛土の立ち上がり、さらに南側で墳丘盛土を確認した。検出した墳丘盛土の堆積状況を確認するため、長さ 5 m、幅 0.5 mのサブトレンチを設定した。

周溝については、底幅 0.5 m、深さ 0.5 mの逆台形状を呈している。土層の堆積状況は、3～5層が周溝埋土で、礫を含みながらレンズ状に堆積し、周溝底には人頭大の礫が流れ込んでいる。これらの礫は、葺石もしくは墳端の根石が流れ込んだものであると考えられる。周溝より墳端にかけては、幅 0.5 mの緩やかに傾斜したテラス面が確認でき、4層が埋土として堆積している。

墳端については、9層と21層の境あたりで、墳丘側に立ち上がる盛土(6・8層)がみられることから、墳端であると考えられる。

墳端より南側では、墳丘盛土として6～19層が版築状に堆積しているのが確認できた。



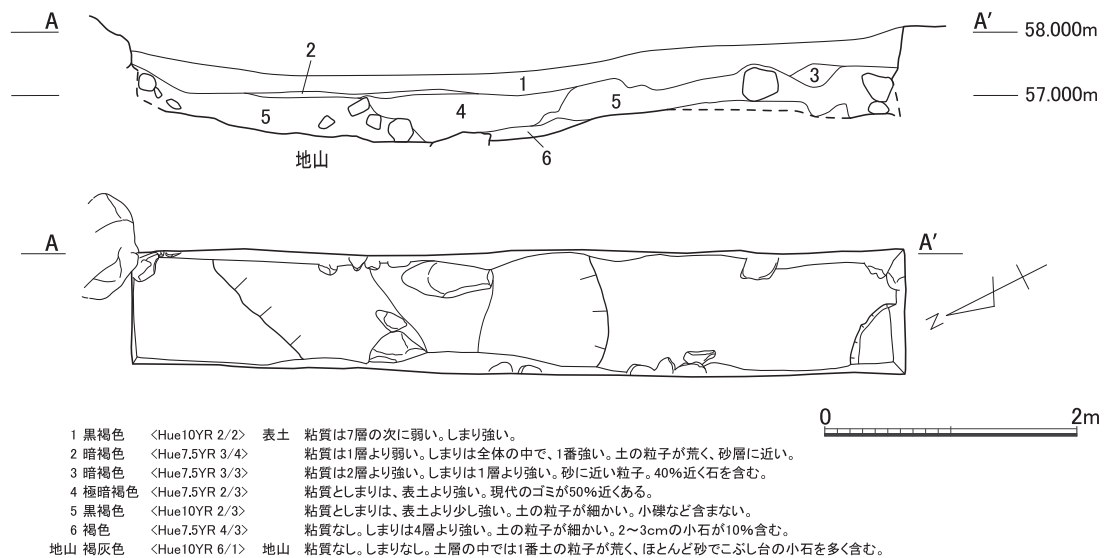
第5図 太郎塚3トレンチ平面図・断面図 (1/60)

太郎塚 5トレンチ (第6図)

太郎塚古墳の墳形の確認を行なう為、墳丘の南側に長さ 6 m、幅 1 mのトレンチを南西向きに設定した。調査の結果、0.6 m掘り下げた時点で拳大の礫を含んだ砂質の地山が検出されたものの大規模な削平を受けており、墳丘に伴う遺構は確認できなかった。

土層堆積状況は、1～6層は攪乱土を含む表土層である。地山は褐灰色土である。



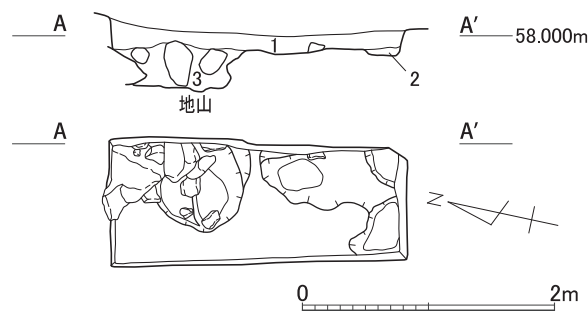


第6図 太郎塚5トレンチ平面図・土層断面図 (1/60)

### 太郎塚 6トレンチ (第7図)

太郎塚古墳の墳形及び石室の入り口を確認をするため、墳丘の南側に長さ 2.35 m、幅 1 m のトレンチを南北方向に設定した。調査の結果、0.1 m 掘り下げたところで地山を検出し、現代の削平を受けているのが確認された。しかし、トレンチ北側端で検出した攪乱は、長さ 1.1 m、幅 0.7 m、深さ 0.3 m を測り、位置が石室の入口と想定される箇所であることから、羨道部右側の腰石を抜き取った痕跡である可能性が高い。

土層堆積状況は、1～3層が攪乱土を含む表土層である。4層の明黄褐色土は、地山でしまり・粘質共に強く、5～10cm程の礫を含む。



第7図 太郎塚6トレンチ平面図・土層断面図 (1/60)

### 太郎塚 7トレンチ (第8～10図)

3トレンチで確認した周溝が、どのように巡るのかを確認するため、3トレンチの東側の次郎塚古墳との間に、台形状の調査区を設定した。

調査の結果、3トレンチから続く周溝が、若干丸みをおびて調査区南側に向けて巡るのが確認できた。周溝底からは、地山直上で多くの遺物片を検出した。また、南側の周溝上端ラインを確

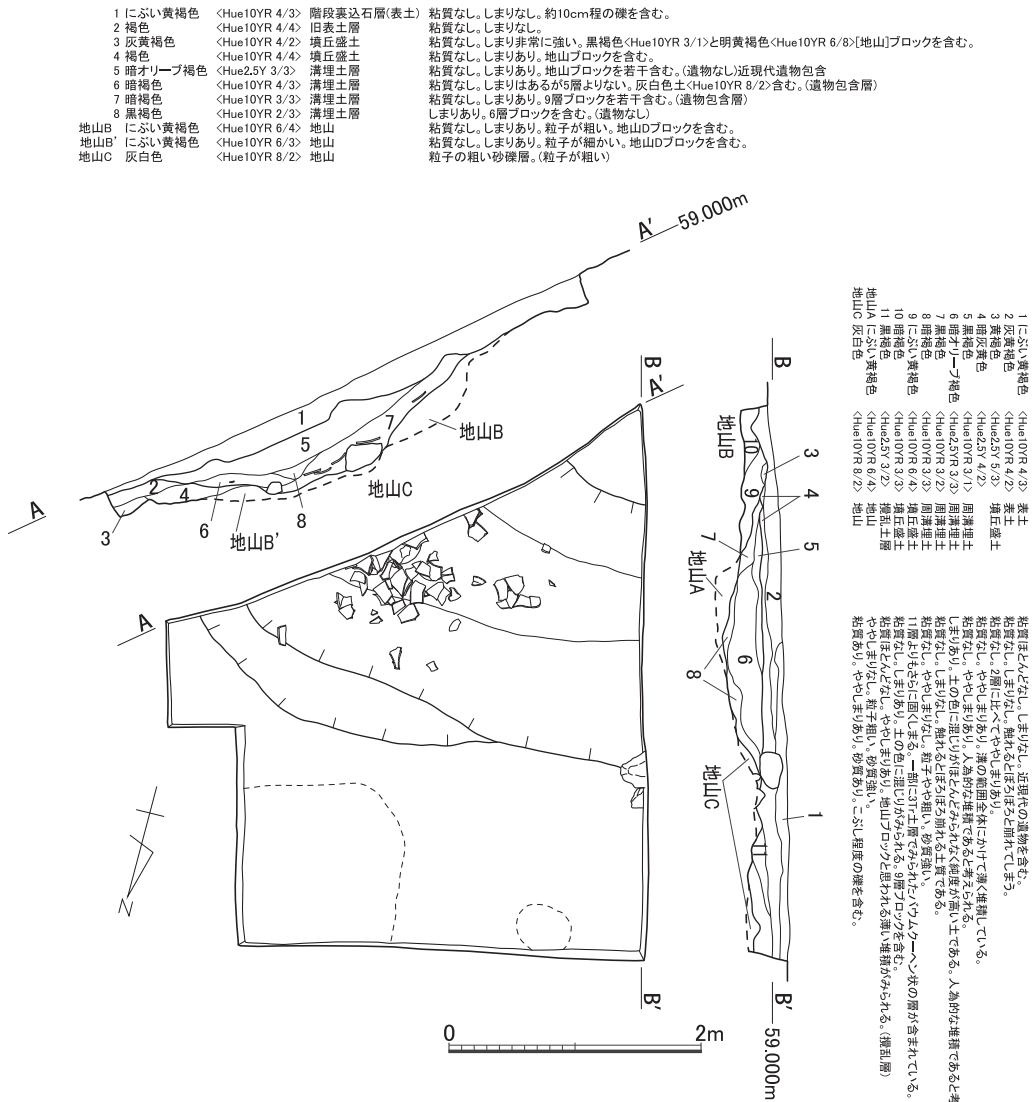
認するため、長さ 0.8 m、幅 0.6 m の拡張部を設定した。

周溝は、調査区西壁で幅 2.0 m、深さ 0.3 m、調査区南壁で 2.8 m、深さ 0.4 m で、断面形態が、台形状を呈している。土層の堆積状況については、西壁面では 5～8 層、南壁面では 5～8 層が周溝埋土である。また、西壁面の南側から 1.3 m 幅で、太郎塚古墳に伴う墳丘盛土（7・9・10 層）が残存しており、南壁面では、次郎塚古墳に伴う墳丘盛土（2～4 層）が確認できた。

周溝内から出土した遺物についての詳細は、後で述べるが、周溝でも一番低い箇所に集中しているため、どちらの古墳に伴う遺物であるかは不明である。しかし、南壁面の 7 層に含まれる遺物が大量であることから、大量については太郎塚古墳に伴うものであると考えられる。

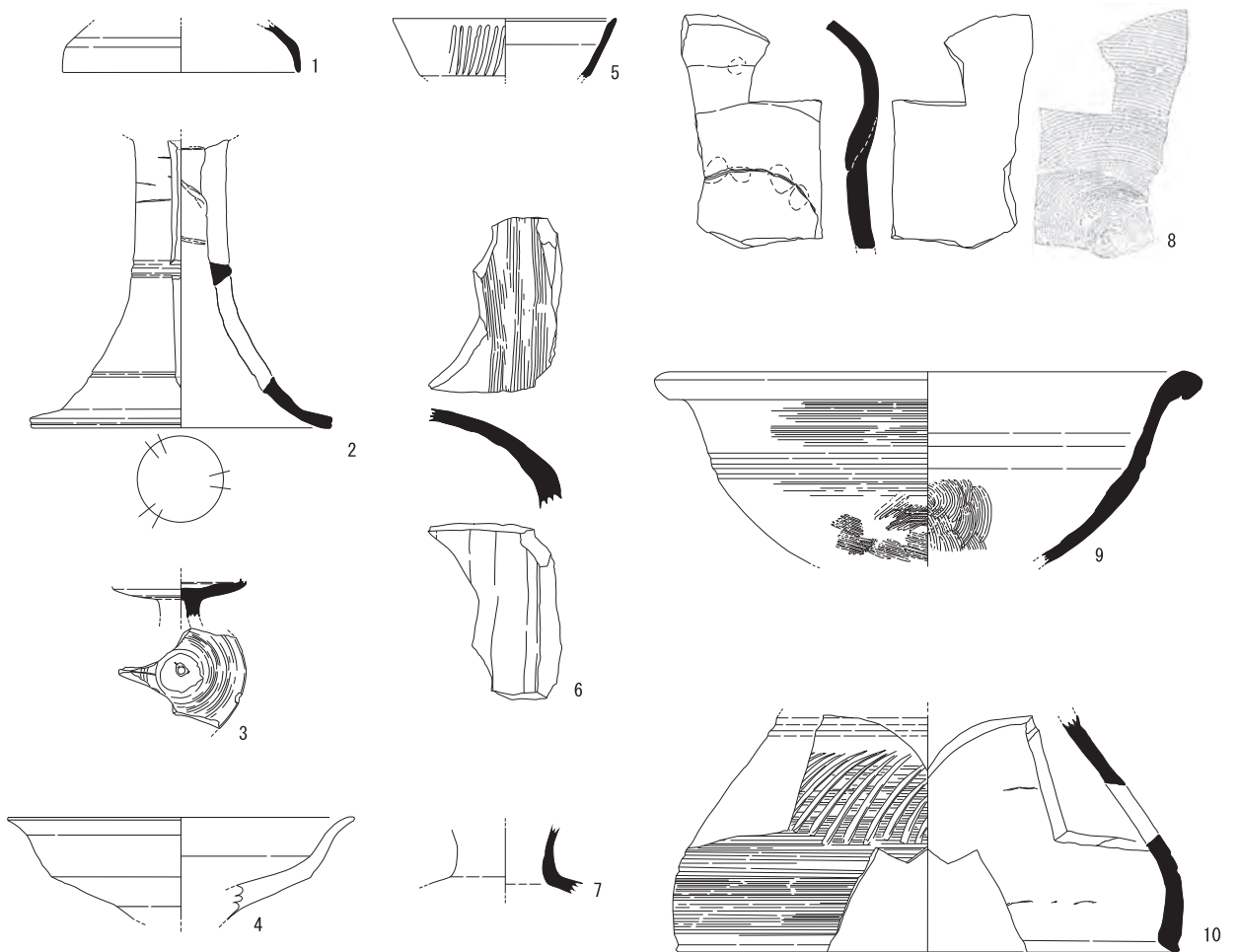
遺物は周溝埋土中より出土している。第 9 図 1～3・5～10・第 10 図 1・2 は須恵器で、第 9 図 4 は土師器である。

第 9 図 1 は坏蓋である。外・内面調整は共に回転ナデを施す。2・3 は高坏。2 は脚部で、復元底径 16.1cm、残存高 15.5cm を測り、脚部中央に 2 条の沈線、裾部付近に 1 条の沈線を巡らせ

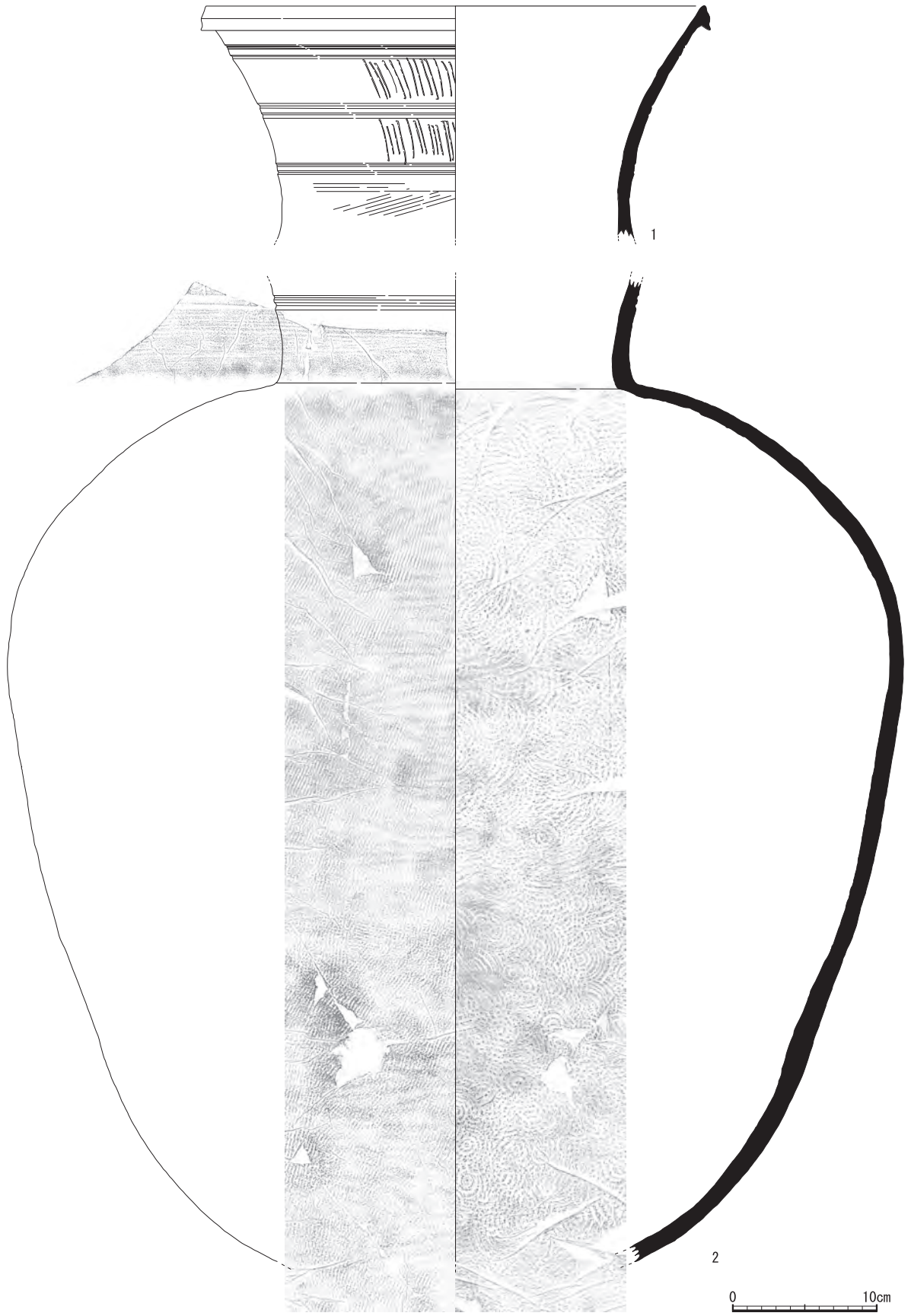


第 8 図 太郎塚 7 トレンチ平面図・土層断面図 (1/60)

ている。また、方形スカシが2段で、3方向にあげられて、外面調整は回転ナデを施す。内面調整は全体に回転ナデ、上部にシボリを施す。3は高坏の坏底部である。坏部屈曲部径7.0cm、残存高2.1cm、脚部頸部径2.5cmを測る。外面調整は全体に回転ナデ後、受部にカキ目を施す。また、一部赤焼けており、受部にヘラ記号がある。内面調整は回転ナデを施しており、灰かぶり釉がかかっている。4は土師器の高坏の坏部である。復元口径18.6cm、残存高5.5cmを測る。外・内面調整は共に回転ナデを施す。5は壺の口縁部である。復元口径12.0cm、残存高3.2cmを測る。外面調整は回転ナデ後ヘラ工具施文を施す。内面調整は回転ナデを施す。6は横瓶の胴部である。外面調整は全体に回転ナデ、一部に工具ナデを施す。内面調整は回転ナデを施す。7は提瓶の頸部で、残存頸部径は6.0cm、残存高は3.5cmを測る。外・内面調整は共に回転ナデを施す。外面に一部灰かぶり釉がかかっている。8は提瓶の底部である。外面調整はカキ目を施す。内面調整は回転ナデを施し、一部にユビ圧痕が見られる。また、一部に灰かぶり釉がかかっているためその対面に口があったと思われる。9は器台の坏部である。復元口縁径29.4cm、残存高10.3cmを測り、坏部中央部に2条の沈線を巡らせている。外面調整は全体に回転ナデ、沈線より下位にカキ目後タタキを施す。内面調整は回転ナデを施し、アテ具痕がみられる。また、灰かぶり釉がかかっている。10は器台の脚部である。復元底径27.0cm、残存高12.7cmを測る。外面調整は全体にカ



第9図 太郎塚7トレンチ出土遺物1 (1/4)



第10図 太郎塚7トレンチ出土遺物2 (1/4)

キ目後三角スカシ、その上部に1条の沈線、下部に2条の沈線、そして上下の沈線間に左下から右上方向へのハケを施す。また、灰かぶり釉が2条の沈線より上位にかかっている。内面調整は回転ナデを施す。第10図1・2は大甕の同一個体である。1は大甕の口辺部である。復元口径34.6cm、残存高16.2cmを測る。外面調整は2条の沈線が3組あり、その3組の沈線間に工具による線状文、沈線より下位に回転カキ目後ナデを施す。工具による線状文については、回転中に板状の工具を土器表面にあて、刻むように付けたものだと思われる。また、この文様は波状文を施す方法と同系統の作業方法である。内面調整は回転ナデを施す。2は大甕の口辺部から胴下半部である。残存高は68.7cmを測り、口辺部に2条の沈線を巡らせる。外面調整は口辺部に回転ナデ、胴上半・中央部にタタキ、胴下半部にタタキ後カキ目を施す。内面調整は口辺部に回転ナデを施し、アテ具痕がみられる。また、胴下半部に打ち欠いた際の痕跡がみられる。

出土して遺物の時期は、TK43～TK209並行期であると考えられる。

#### 太郎塚 10 トレンチ

太郎塚古墳の墳丘南側に石室入口が想定される事から、開口部の遺存状況及び墳丘規模の確認のために5区の調査区を設定し、樹木を避けて調査を行った。調査区の総面積は、267㎡である。

調査の結果、全面的に削平を受けており、墳丘に伴う遺構は検出できなかったため、図の掲載については省略したい。

#### 太郎塚 11 トレンチ (11tr-1・11tr-2・11tr-3・11tr-4・11tr-5) (第11・12図)

墳丘の端部や周溝確認を目的として、墳丘東側に設置されたフェンスをまたいで5本のトレンチを南北方向に設定した。11tr-1・2を長さ8m、11tr-3を長さ4m、11tr-4を長さ2m、それぞれの幅を1mで設定した。また、11tr-5を長さ2.5m・幅1.5mで設定した。全てのトレンチにおいて地表から20～30cmは表土である。

調査の結果、11tr-2と11tr-5から墳丘盛土と思われる層を検出し、トレンチ墳丘側(11tr-2、11tr-3、11tr-4、11tr-5)より北東から南に若干カーブする周溝が検出された。周溝の幅は1.8m程である。

##### 11tr-1・11tr-2

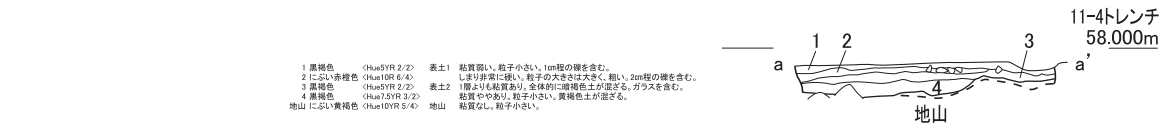
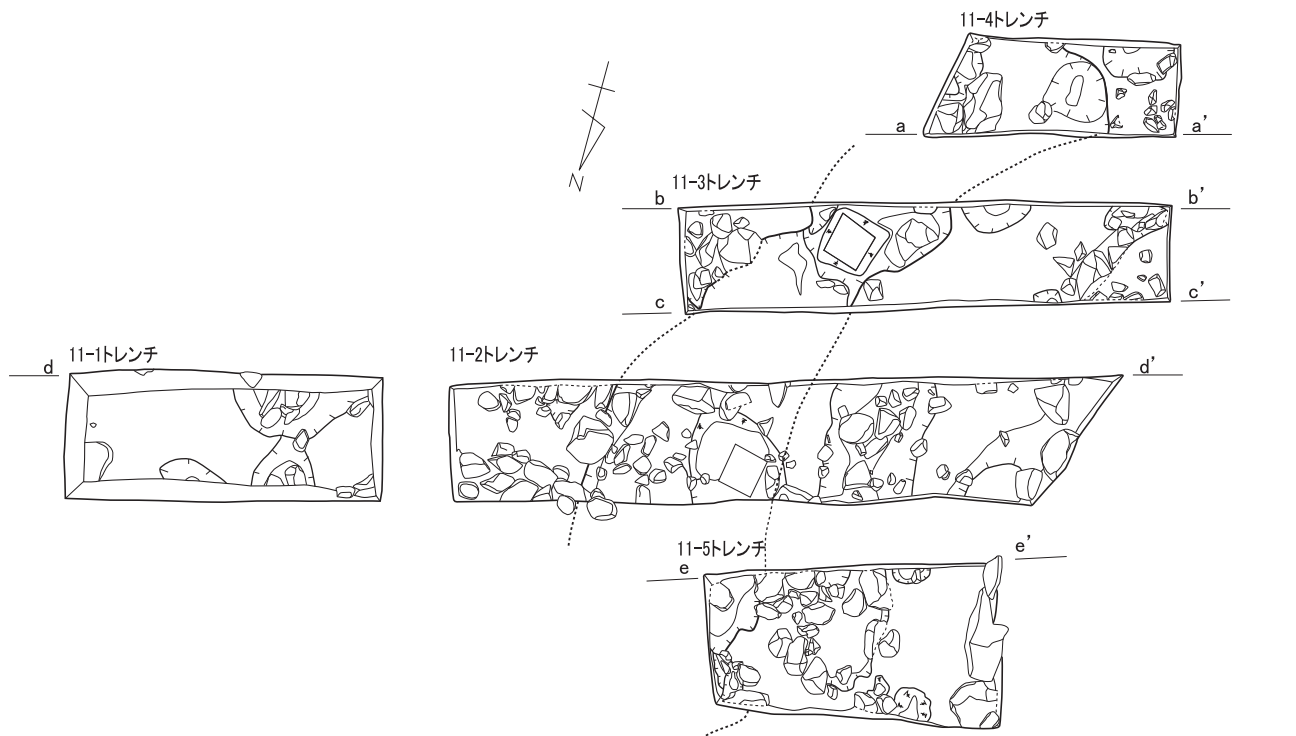
墳丘側で盛土の一部と考えられる層を検出した。幅1.8mほどの地山層削り出しによる溝が検出された。

11tr-2のにぶい黄褐色土層(地山)直上に堆積する9層が墳丘の盛土と考えられる。トレンチ墳丘側から2.2mの所に地山の掘り込みが確認できる。これは、地山を掘り込み土手を作ることによって、墳丘からの盛土の流出を防ぐための工程ではないかと考えられる。またこの地山の掘り込み上端から傾斜の緩やかな溝が確認された。周溝と考えられ幅1.8mを測る。

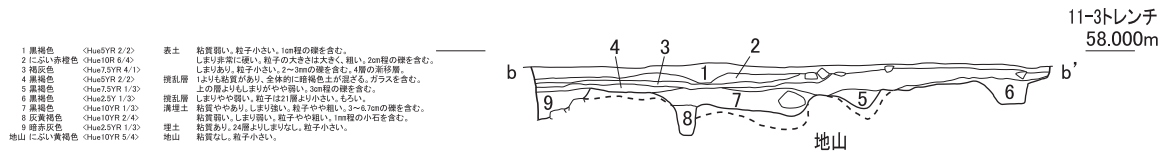
##### 11tr-3

墳丘側は地山の層まで削平を受けているため墳丘盛土は確認できなかった。しかし、トレンチ中央より地山層削り出しによる周溝と考えられる溝を検出した。

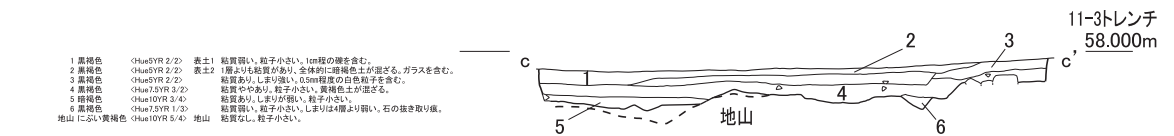
周溝は、トレンチ中央部東側に地山を掘りこみ、幅2.2mを測る。7～9層が周溝の埋土である。



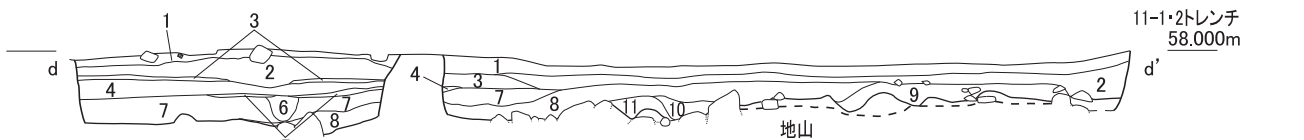
- |                         |     |                                   |
|-------------------------|-----|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 (Hue5YR 2/2)      | 表土1 | 粘質弱い、粒子小さい、1cm程の礫を含む。             |
| 2 に近い赤褐色 (Hue10R 6/4)   | 表土2 | しまり非常に強い、粒子の大きさは大きく、粗い、2cm程の礫を含む。 |
| 3 黒褐色 (Hue5YR 2/2)      | 表土2 | 層より粘質があり、全体的に暗褐色土が混ざる。ガラスを含む。     |
| 4 黒褐色 (Hue7.5YR 3/2)    | 表土2 | 粘質ややあり、粒子小さい、黄褐色土が混ざる。            |
| 地山 に近い黄褐色 (Hue10YR 5/4) | 地山  | 粘質なし、粒子小さい。                       |



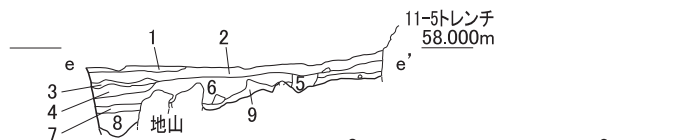
- |                         |     |                                   |
|-------------------------|-----|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 (Hue5YR 2/2)      | 表土  | 粘質弱い、粒子小さい、1cm程の礫を含む。             |
| 2 黒褐色 (Hue5YR 2/2)      | 表土2 | しまり非常に強い、粒子の大きさは大きく、粗い、2cm程の礫を含む。 |
| 3 黒褐色 (Hue5YR 2/2)      | 表土2 | 層より粘質があり、全体的に暗褐色土が混ざる。ガラスを含む。     |
| 4 黒褐色 (Hue7.5YR 3/2)    | 表土2 | 粘質ややあり、粒子小さい、黄褐色土が混ざる。            |
| 5 暗赤褐色 (Hue2.5Y 1/3)    | 埋戻土 | 粘質ややあり、しまり強い、粒子やや粗い、3-6.3cmの礫を含む。 |
| 6 黒褐色 (Hue10YR 1/2)     | 埋戻土 | 粘質弱い、しまり強い、粒子やや粗い、1cm程の小石を含む。     |
| 7 黒褐色 (Hue10YR 1/2)     | 埋戻土 | 粘質ややあり、しまり強い、粒子やや粗い、3-6.3cmの礫を含む。 |
| 8 黒褐色 (Hue2.5YR 1/3)    | 埋戻土 | 粘質弱い、しまり強い、粒子やや粗い、1cm程の小石を含む。     |
| 9 暗赤褐色 (Hue2.5Y 1/3)    | 埋戻土 | 粘質ややあり、しまり強い、粒子やや粗い、3-6.3cmの礫を含む。 |
| 地山 に近い黄褐色 (Hue10YR 5/4) | 地山  | 粘質なし、粒子小さい。                       |



- |                         |     |                                   |
|-------------------------|-----|-----------------------------------|
| 1 黒褐色 (Hue5YR 2/2)      | 表土  | 粘質弱い、粒子小さい、1cm程の礫を含む。             |
| 2 黒褐色 (Hue5YR 2/2)      | 表土2 | しまり非常に強い、粒子の大きさは大きく、粗い、2cm程の礫を含む。 |
| 3 黒褐色 (Hue5YR 2/2)      | 表土2 | 層より粘質があり、全体的に暗褐色土が混ざる。ガラスを含む。     |
| 4 黒褐色 (Hue7.5YR 3/2)    | 表土2 | 粘質ややあり、粒子小さい、黄褐色土が混ざる。            |
| 5 暗赤褐色 (Hue2.5Y 1/3)    | 埋戻土 | 粘質ややあり、しまり強い、粒子やや粗い、3-6.3cmの礫を含む。 |
| 6 黒褐色 (Hue10YR 1/2)     | 埋戻土 | 粘質弱い、しまり強い、粒子やや粗い、1cm程の小石を含む。     |
| 地山 に近い黄褐色 (Hue10YR 5/4) | 地山  | 粘質なし、粒子小さい。                       |



- |                         |     |   |
|-------------------------|-----|---|
| 1 黒褐色 (Hue5YR 2/2)      | 表土1 | 粘質弱い、粒子小さい、1cm程の礫を含む。                         |
| 2 黒褐色 (Hue5YR 2/2)      | 表土2 | しまり非常に強い、粒子の大きさは大きく、粗い、2cm程の礫を含む。             |
| 3 黒褐色 (Hue5YR 2/2)      | 表土2 | 層より粘質があり、全体的に暗褐色土が混ざる。ガラスを含む。                 |
| 4 に近い赤褐色 (Hue10R 6/4)   | 表土2 | 粘質ややあり、粒子小さい、黄褐色土が混ざる。                        |
| 5 暗赤褐色 (Hue2.5Y 1/3)    | 埋戻土 | 粘質ややあり、しまり強い、粒子やや粗い、3-6.3cmの礫を含む。             |
| 6 暗褐色 (Hue7.5YR 5/6)    | 埋戻土 | 粘質ややあり、しまり強い、粒子やや粗い、3-6.3cmの礫を含む。             |
| 7 黒褐色 (Hue2.5YR 3/2)    | 埋戻土 | 粘質ややあり、しまり強い、粒子やや粗い、3-6.3cmの礫を含む。             |
| 8 黒褐色 (Hue2.5YR 3/2)    | 埋戻土 | 粘質ややあり、しまり強い、粒子やや粗い、3-6.3cmの礫を含む。             |
| 9 暗赤褐色 (Hue10YR 4/2)    | 埋戻土 | 粘質弱い、しまり強い、全体的に黄褐色 (Hue10YR 5/6) を含む、古墳の埋戻土か。 |
| 10 黒褐色 (Hue10YR 2/2)    | 埋戻土 | 粘質あり、粒子小さい、に近い黄褐色が混ざる。                        |
| 11 黒褐色 (Hue7.5YR 3/2)   | 埋戻土 | 粘質あり、粒子小さい、2cm程の礫を含む。                         |
| 地山 に近い黄褐色 (Hue10YR 5/4) | 地山  | 粘質なし、粒子小さい。                                   |



- |                         |      |  |
|-------------------------|------|--|
| 1 黒褐色 (Hue5YR 2/2)      | 表土1  | 粘質弱い、粒子小さい、1cm程の礫を含む。  |
| 2 黒褐色 (Hue5YR 2/2)      | 表土2  | しまり非常に強い、粒子の大きさは大きく、粗い、2cm程の礫を含む。                                |
| 3 黒褐色 (Hue5YR 2/2)      | 表土2  | 層より粘質があり、全体的に暗褐色土が混ざる。ガラスを含む。                                    |
| 4 暗褐色 (Hue7.5YR 4/1)    | 表土2  | 粘質やや強い、しまり強い、全体的に暗褐色 (Hue10YR 7/6) の粒子を含む。                       |
| 5 黒褐色 (Hue5YR 3/1)      | 表土2  | 粘質やや強い、しまり強い、全体的に暗褐色 (Hue10YR 7/6) の粒子を含む、13層よりやや多い、13層に比べ、やや粗い。 |
| 6 黒褐色 (Hue2.5YR 3/2)    | 埋戻土  | 粘質弱い、しまり強い、黄色の土層だが、1cm程の小石を含むため、ボロボロしている。                        |
| 7 黒褐色 (Hue2.5YR 4/1)    | 埋戻土1 | 粘質なし、しまりなし、黄色の土層であり、溝状遺構の埋戻土層である。                                |
| 8 黒褐色 (Hue10YR 3/2)     | 埋戻土2 | 粘質なし、しまりなし、黄色の土層であり、溝状遺構の埋戻土層である。層よりわずかに強い。                      |
| 9 暗赤褐色 (Hue10YR 4/2)    | 埋戻土  | 粘質弱い、しまり強い、全体的に黄褐色 (Hue10YR 5/6) を含む、古墳の埋戻土か。                    |
| 地山 に近い黄褐色 (Hue10YR 5/4) | 地山   | 粘質なし、粒子小さい。  |

第 11 図 太郎塚 11 トレンチ平面図・土層断面図 (1/60)

溝の断面形状は、地山に礫が多量に入るため、いびつな形状を呈している。

11tr-4

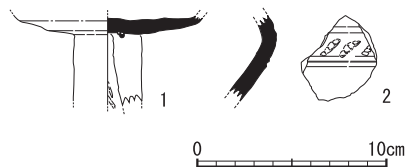
墳丘側の一段高い地山の部分は削平されており、墳丘盛土は確認できなかった。トレンチの墳丘側で地山層削り出しによる溝を確認した。この溝は、周溝であると考えられる。この溝を4層の黒褐色土層が埋土として堆積している。

11tr-5

トレンチ西側で盛土と考えられる層を検出した。東側では地山を掘りこんだ溝状遺構が確認でき、周溝である可能性が高い。

トレンチ西側に地山を掘りこんだ周溝であろうと考えられる溝状遺構が確認でき、それを7層の褐灰色土層・8層の黒褐色土層の埋土が水平に堆積している。トレンチ東側では、墳丘盛土と考えられる、9層の灰黄褐色軟質土が地山直上に堆積している。溝状遺構と墳丘盛土は、地山に入りこんだ幅50cmほどの石2つで隔てられている。

第12図1・2はトレンチ内の周溝から検出された遺物である。1は高坏の脚部から坏身の破片である。脚部は3方向スカシであり、脚部上側にシボリが確認される。2は甕の破片である。胴部外面には、上位に1条、下位に2条の沈線を巡らせ、その間にナナメ方向の刺突文が施されている。2条の沈線より上位は自然釉の付着が確認される。

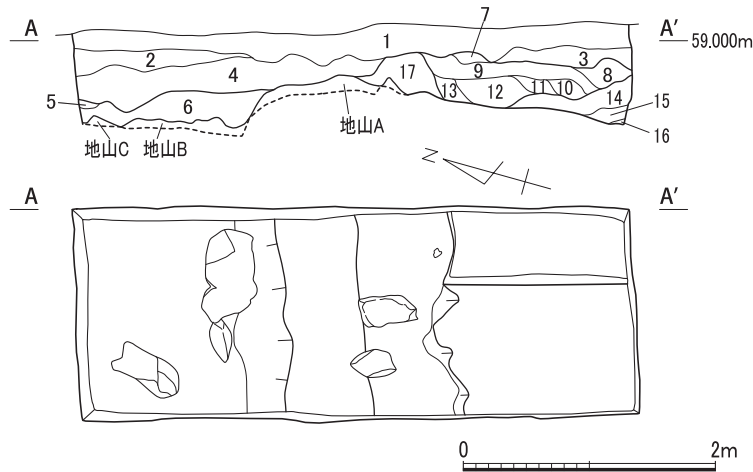


第12図 太郎塚11トレンチ出土遺物(1/4)

次郎塚 1 トレンチ (第 13・14 図)

次郎塚古墳の周溝および墳形の確認のため、墳丘の北側に長さ 4.5 m、幅 1.5 m の調査区を設定した。掘り下げの結果、調査区北側より 1.2 m のところで墳端、1.7 m のところで 4 トレンチの周溝に繋がる周溝の上端、周溝上端から調査区南側までの間には墳丘盛土を検出した。また、墳丘盛土の状況を確認するために、長さ 1.5 m、幅 0.5 m のサブトレンチを設定し掘り下げた。

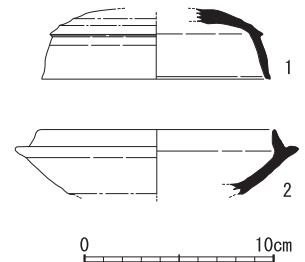
周溝は、深さ 0.5 m で対岸の立ち上がりは検出できなかった。土層の堆積状況は、5・6 層が周溝埋土で、4 層は厚く堆積しているため、短期間で墳丘側から流れ込んだものと考えられる。また、最下層の地山 B・C は、地山 A と同じ黄褐色系の土層であるが、B・C は A よりも締まりがないことから地山の風化土もしくは、地山の再堆積層である可能性がある。



1 黄褐色	表土	粘質はややある。しまりなし。粒子細かい。砂質あり。5~6cm台の礫を若干含む。
2 極暗赤褐色	<Hue2.5YR 2/2>	粘質あり。1より多少強い。粒子は細かい1と同じくらいの粒子。砂質は多少あり。1よりはない。混粒物は、1~2cm台の礫を多少を含む。
3 橙色	<Hue7.5YR 6/6>	粘質あり。1、2より粘質は強い。粒子は細かい1、2と同じくらいある。砂質あり2よりもある。混粒物はブロックを含む。
4 黒褐色	<Hue10YR 2/2>	粘質強い。粒子は細かい2と同じくらい。砂質は一部あり。混粒物は、3~4cmの礫を少量含む。
5 黒色	<Hue2.5YR 2/1>	周溝埋土 粘質あり。しまりは強い。粒子は細かい。砂質なし。混粒物なし。
6 黒色	<Hue10YR 1.7/1>	周溝埋土 粘質あり。しまりあり。粒子は上と同じくらいの細かさ。砂質あり。他よりもある。混粒物はブロックを少量含む。
7 明黄褐色	<Hue2.5YR 6/6>	墳丘盛土 粘質あり。1と同じくらいの粘質。1、2と同じくらいのしまり。粒子は細かい1、2と比べて変わらない。混粒物は、ハミスを少量含む砂質あり。
8 暗褐色	<Hue7.5YR 3/3>	墳丘盛土 粘質あり。しまりあり。粒子は細かい。混粒物はこぶしより大きいブロックを含む砂質なし。
9 褐色	<Hue10YR 4/4>	墳丘盛土 粘質あり。3と同じくらい。しまりあり。粒子も細かい3と同じくらいの細かさ。混粒物はブロックを含む砂質なし。
10 明黄褐色	<Hue2.5YR 7/6>	墳丘盛土 粘質9に比べるとない。しまりが強い。粒子は細かい。砂質あり。混粒物はハミスを含む。
11 明黄褐色	<Hue2.5YR 7/6>	墳丘盛土 粘質9に比べるとない。粒子は10とほぼ同じ。砂質あり。混粒物はブロックを少量含む。10よりもやや黒味を帯びる。
12 にふい黄褐色	<Hue10YR 5/3>	墳丘盛土 粘質あり。しまりがあるが一部しまりがない部分もある。粒子は大きい。砂質あり。混粒物はブロック、ハミスを含む。
13 明黄褐色	<Hue2.5YR 7/6>	墳丘盛土 粘質あり。しまりあり。粒子は上に比べて大きい。砂質あり。混粒物はブロックを少量含む。
14 にふい黄褐色	<Hue10YR 6/3>	墳丘盛土 粘質あり。1よりはしまりあり。粒子は8よりは少し大きい。砂質なし。混粒物はブロックを少量含む。
15 明黄褐色	<Hue2.5YR 6/6>	墳丘盛土 粘質あり。しまりは強い。粒子は細かい。砂質多少あり。混粒物はブロックを含む。
16 明黄褐色	<Hue2.5YR 6/6>	墳丘盛土 粘質あり。しまりは強い。粒子は細かい。砂質なし。混粒物なし。
17 明褐色	<Hue2.5YR 5/6>	墳丘盛土 粘質あり。しまり一部ない。粒子は細かい。砂質あり。混粒物なし。
地山A にふい黄色	<Hue10YR 5/3>	地山 粘質あり。しまりあり。粒子は細かい。砂質なし。混粒物はブロックとハミスを少量含む。
地山B 黄褐色	<Hue2.5YR 5/3>	地山 粘質あり。しまりなし。粒子は若干細かい。砂質なし。混粒物はハミスを含む。
地山C 黄褐色	<Hue2.5YR 5/3>	地山 粘質あり。しまりBよりあり。粒子は細かい。砂質なし。混粒物はハミスを含む。

第 13 図 次郎塚1 トレンチ平面図・土層断面図 (1/60)

墳端から墳丘盛土が残っている間については、幅 1.4 m のテラス面がみられ、8 層が埋土として堆積している。またテラスにみられる 17 層については、南側で地山の掘り込みが墳丘側に向かって緩やかに傾斜しており、その上位の 8 ~ 16 層が細かい単位で版築状に堆積していることから、墳丘盛土の土留めのための機能性があったものと考えられる。17 層では、TK10 期並行の坏蓋(第 14 図 1) が出土しており、TK10 期よりも新しい時期に築造されたことがわかる。



第 14 図 次郎塚1 トレンチ出土遺物 (1/4)

出土遺物については、第 14 図 1 ~ 2 は須恵器である。1 は坏蓋で、復原口径 12.1cm、残存高 3.95cm を測る。外面の稜は明瞭で、



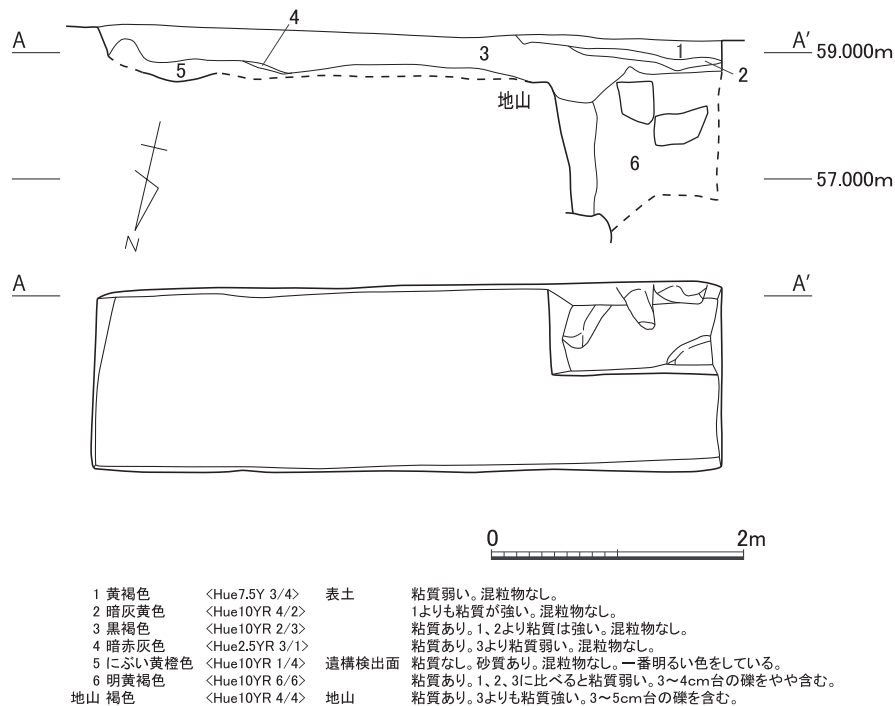
口縁端部はやや外反し、内面には段を有する。調整は外面の天井部に回転ヘラケズリ、稜より内面天井部まで回転ナデが施されている。胎土は石英と白色粒子を含み、焼成は良好である。色調は外面が黄灰色で、内面も黄灰色である。2は坏身で復原口径12.4cm、最大径15cm、残存高3.4cmを測る。外面の稜はあまり見られず、残存外面端部に回転ヘラケズリが若干見られる。調整は外面、内面ともに回転ナデが施されている。胎土は石英、長石、白色粒子を含み、焼成は良好である。色調は外面が褐灰色で、内面は黒褐色を呈す。遺物の時期は、1がTK10並行期、2は、TK43並行期であると考えられる。

次郎塚 2トレンチ (第15図)

次郎塚古墳の周溝を確認するために、墳丘西側の平坦面に長さ4.7m、幅1.0mのトレンチを設定した。

調査の結果、地表面より0.4m掘り下げたところ、黄褐色の地山と思われる層を検出した。そこで、地山かどうかを確認するために、トレンチ東側に長さ1.25m、幅0.8mのサブトレンチを設定し掘り下げをおこなった。

土層堆積状況は、1～4層は自然堆積で、全体的に西から東に向けて下降しながら堆積している。5層のにぶい黄橙色土において、明るい地山のような色調の層が検出された。サブトレンチを地表面より1.5m掘り下げたところで、褐色土の地山層を確認した。また、サブトレンチ内の6層明黄褐色土は整地による攪乱層だと考えられる。結果として周溝と考えられるような遺構は検出されなかった。



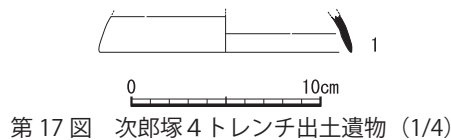
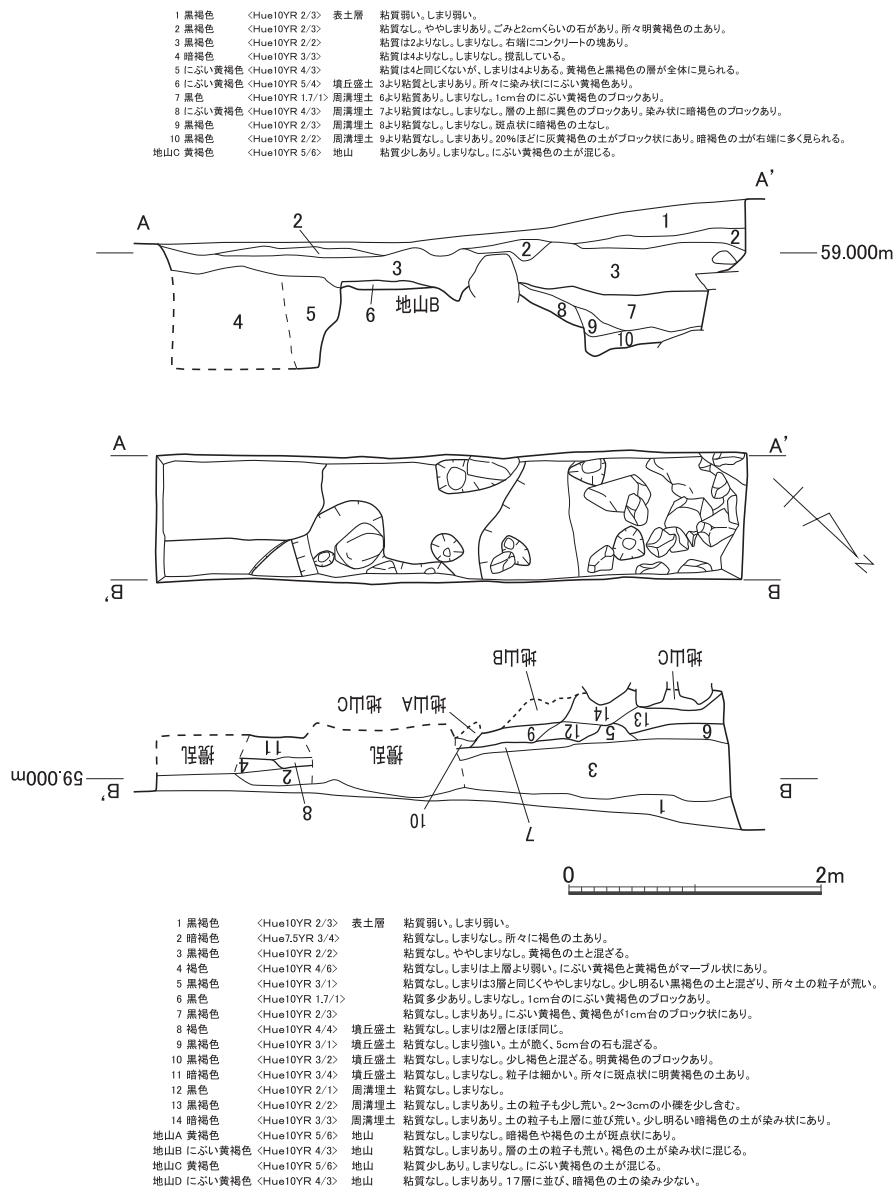
第15図 次郎塚2トレンチ平面図・土層断面図 (1/60)

次郎塚 4 トレンチ (第 16・17 図)

次郎塚古墳の北側に位置する 1 トレンチの西側で確認された周溝の続きを確認するため、長さ 5.0 m、幅 1.0 m の調査区を設定した。

調査の結果、墳丘側から 2.2 m まで大きく攪乱を受けているが、墳丘盛土及び墳端と周溝を検出した。墳端は、トレンチ墳丘側から 3.3 m 地点で弧を描くように確認された。

土層堆積状況は、西側壁面 A-A' の 3・4 層は、表土及び攪乱である。5 層は土坑埋土で、にぶい黄褐色土層であるが、しまりはなく黄褐色と黒色のブロック土が全体的に見られる。東側壁



面 B-B' の堆積状況は、1 層は、表土で、2～7 は整地土である。中でも 6 層は、にぶい黄褐色土、しまりがあり、黄褐色土が 1cm のブロック状に入り、強く押し固められた整地土である。8～11 層の墳丘盛土はしまりが強く、墳端に向けて緩やかに落ち込む。12～14 層は、周溝埋土である。また、14 層と地山 B の境が墳端であると思われる。

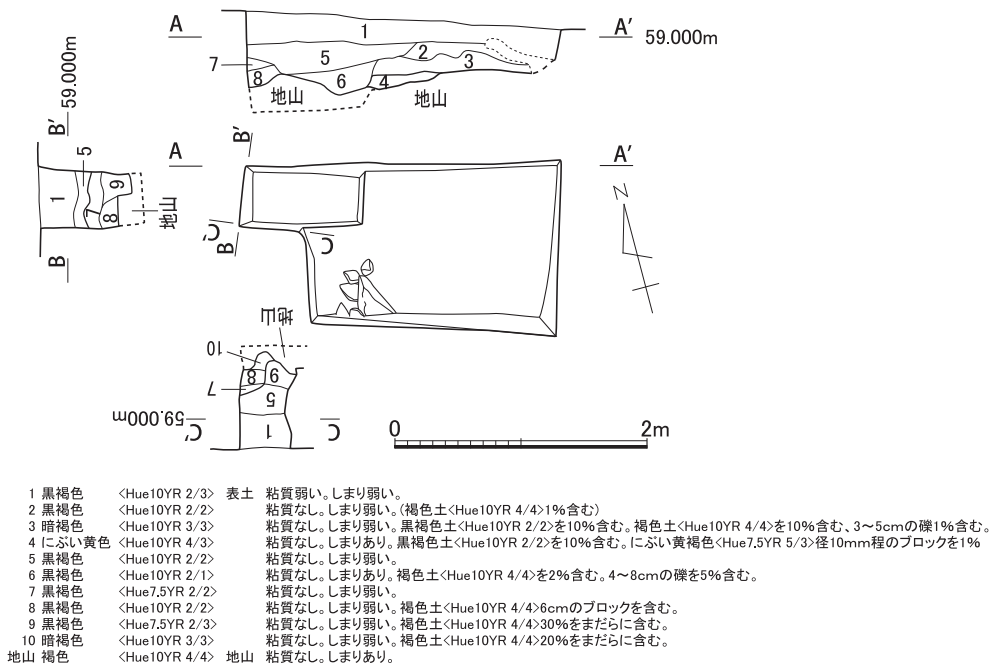
遺物は周溝埋土より出土している。

第 17 図 1 は須恵器で、坏蓋の口縁部のみ残存である。外・内面調整は共に回転ナデを施す。時期は TK209 並行期であろう。

### 次郎塚 8 トレンチ (第 18 図)

墳丘の規模・周溝の確認のため、2 トレンチと 4 トレンチの間に墳丘の西斜面から北西に向かって長さ 1.2 m、幅 1.5 m のトレンチを設定した。地表面から 0.4 m 掘り下げたところで地山を検出したが周溝は確認できず、1～6 層が表土または攪乱層である事が判明した。トレンチ内に遺構が検出されなかった為、西側に長さ 1 m、幅 0.5 m のサブトレンチを設けた。

7～10 層では黒褐色～暗褐色のしまりと粘性がない周溝の埋土層らしき層を検出したが、周溝とは断定できず、遺構の埋土層とした。



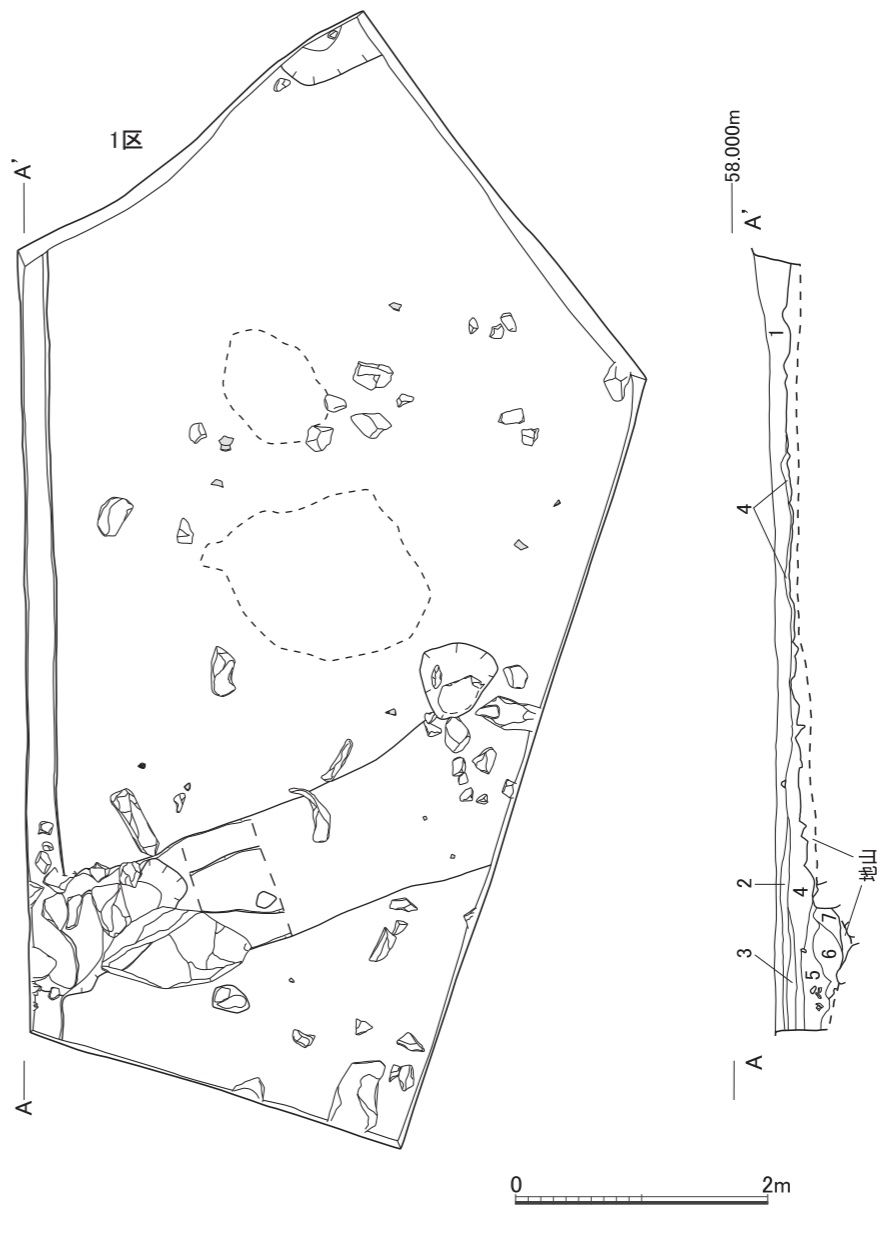
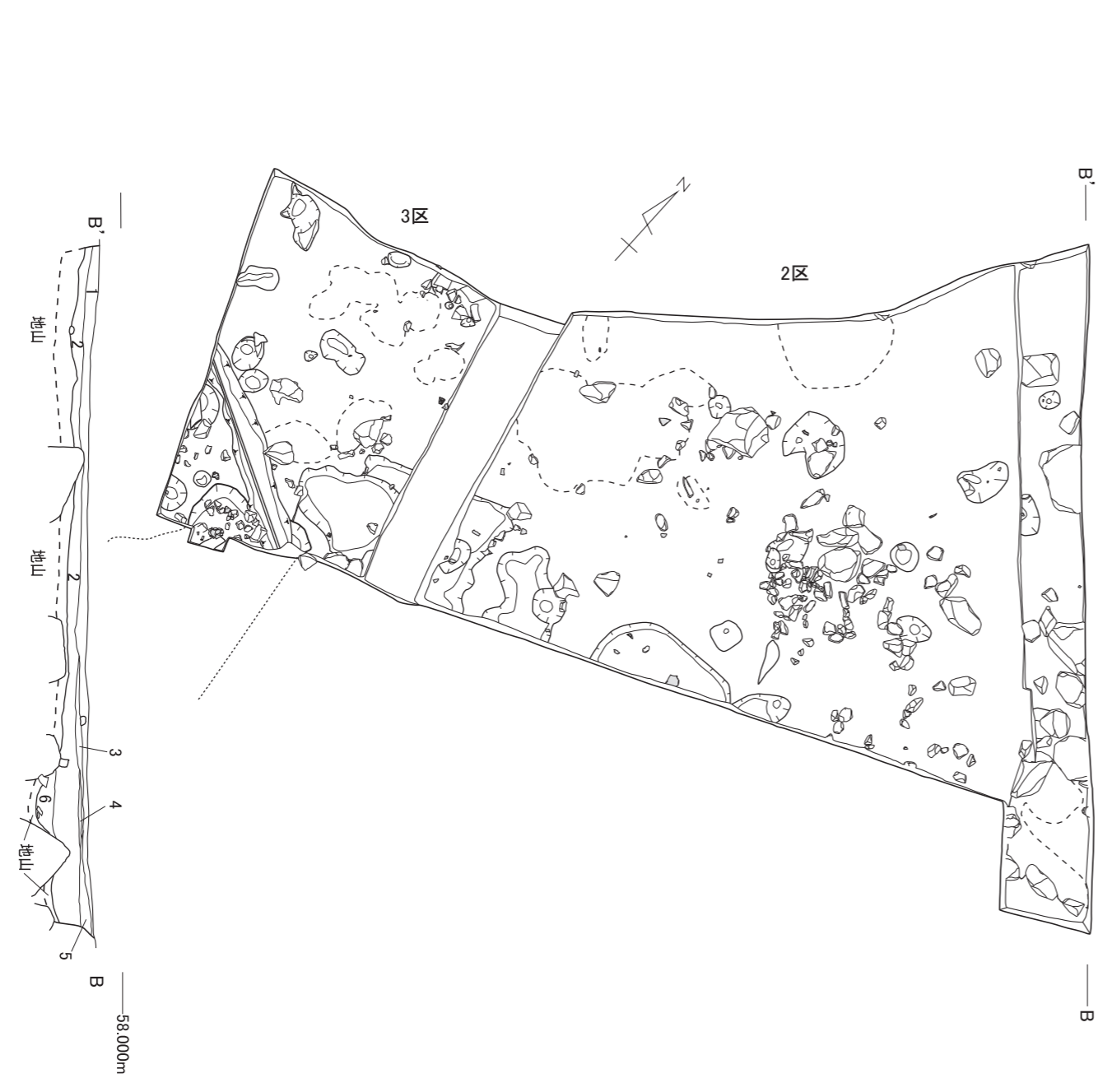
第 18 図 次郎塚 8 トレンチ平面図・土層断面図 (1/60)

### 次郎塚 9 トレンチ (第 19・20 図)

次郎塚古墳の周溝と墳形、また古墳の入口部であると想定できる箇所を確認するため、墳丘の南側に調査区を設定した。調査区は、平面的に広く確認できるように、東側から 1～3 区を設け調査を実施した。

調査の結果、全体的に削平を受けており、明確な遺構は確認できなかった。しかし、1 区から

1 黒褐色 <Hue7.5YR 3/2> 表土層 粘質あり。圃場整備の際に盛られたものと思われる。  
 2 黒色 <Hue7.5YR 2/2> 粘質弱い。しまり弱い。くすれやすい。圃場整備の際に盛られたものと思われる。  
 3 にふい赤褐色 <Hue7.5YR 1.7/1> 粘質あり。しまりなし。やや暗赤褐色を含む。  
 4 にふい赤褐色 <Hue10YR 6/4> しまり非常に強い。粒子は荒く、くすれやすい。2cm程の礫を含む。地面を平らにするために盛られた整地層だと思われる。  
 5 灰褐色 <Hue6YR 5/2> 粘質あり。粒子小さい。3~6cm程の礫を多く含む。くすれやすい。  
 6 黒褐色 <Hue7.5YR 3/2> 粘質あり。しまりは弱く柔らかい。粒子小さい。小豆色に染られた陶器の片を含む。  
 7 褐色 <Hue10YR 5/4> 粘質なし。しまり弱い。砂質である。深くなつた部分を平らにするための整地層だと思われる。  
 地山 地山



1 黒褐色 <Hue7.5YR 3/2> 表土層 粘土質。湿り気あり。2cmほどの礫を含む。圃場整備の際に盛られたものと思われる。  
 2 黒色 <Hue7.5YR 1.7/1> 粘質弱い。しまり弱い。くすれやすい。  
 3 にふい赤褐色 <Hue10YR 6/4> しまり非常に強い。粒子も大きさは荒く、2cm程の礫を含む。圃場整備の際に盛られたものと思われる。  
 4 黒褐色 <Hue7.5YR 3/2> 粘質ややあり。しまり弱い。くすれやすい。8を平らにするために盛られた整地層だと思われる。  
 5 黒褐色 <Hue7.5YR 3/1> 粘質あり。粒子小さい。3~6cm程の石を含む。小豆色に染られた陶器の片を含む。  
 6 にふい黄褐色 <Hue7.5YR 4/3> 粘質あり。しまりは弱く柔らかい。粒子小さい。深くなつた部分を平らにするための整地層だと思われる。  
 7 褐色 <Hue10YR 4/4> 粘質あり。しまり強い。6と同様に深くなつた部分を平らにするために盛られた整地層だと思われる。6よりも先に盛られたものと思われる。  
 地山 <Hue10YR 5/4> 粘質なし。しまりなし。砂質である。プロソックを含む。地山

第 19 図 次郎塚9トレンチ平面図・土層断面図 (1/60)

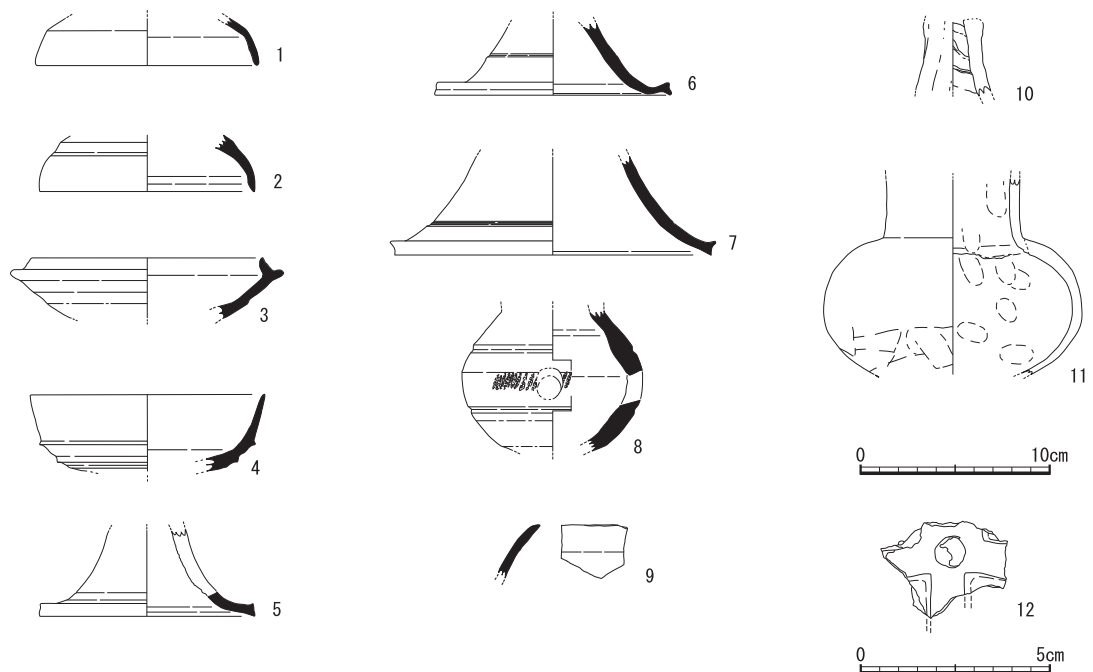
幅 1.0 m の周溝とみられる溝状遺構、3 区から南壁面から 11 トレンチの 5 区で検出した周溝と接続すると考えられる落ち込みを検出した。

1 区で検出した溝状遺構は、調査区西壁面から東壁面の南側にかけて内湾しながら巡っている。深さは、5 ～ 10 cm 程度で、溝の埋土として黒褐色の粘質土が堆積している。この溝状遺構は、次郎塚古墳に沿って巡っていることから、次郎塚古墳に伴う周溝であると考えられる。

3 区の南側壁面で検出した落ち込みは、深さ 12cm 程度で北側に向けて立ち上がっている。この遺構には、須恵器片等が地山直上でまとまって出土し、隣接する 11 トレンチ 5 区で検出された太郎塚古墳の周溝と接続する可能性が高く、トレンチ南側壁面から 0.5 m 北側の地点で途切れることになる。また、墳丘南側の等高線 59.500 m の箇所に羨道部の天井石と考えられる扁平の石材がみられることから、3 区と 2 区の間あたりが次郎塚古墳の内部主体の入り口であると想定できる。

出土遺物（第 20 図）は、1 ～ 9 が須恵器、10・11 が土師器、12 は馬具である。

1・2 は坏蓋である。1 は、復原口径 11.8cm、残存高 2.5cm を測る。外面、内面ともに回転ナデが施されている。口縁端部に段を有さず丸い。2 は、復原口径 11.4cm、残存高 3.0cm を測る。外面の稜はあまり見られず、外面、内面ともに回転ナデが施されている。口縁端部は少し尖っており、内面はわずかに段を有する。3 は坏身で復原口径 12.2cm、残存高 3.2cm を測る。口縁部が内湾し、たちあがりの角度は弱く、短い。受け部はやや上方向に伸び、端部は丸い。4 は高坏で復原口径 11.6cm、残存高 4.0cm を測る。外面の稜が明瞭で、口縁部はやや外傾し、端部は丸い。外面、内面ともに回転ナデが施されている。5 ～ 7 は高坏脚部片である。5 は、復原底径 11.4cm、残存高 4.6cm を測る。通常の高坏に比べるとスカシの位置が低いことから、脚部が短い高坏であろう。6 は、復原底径 12.6cm、残存高 3.8cm を測る。端部まで緩やかに傾斜し、水平になった後、外反している。7 は、復原底径 16.8cm、残存高 5.2cm を測る。端部まで緩やかに外反し、端部は内湾し、



第 20 図 次郎塚 9 トレンチ出土遺物（12：1/2、その他：1/4）

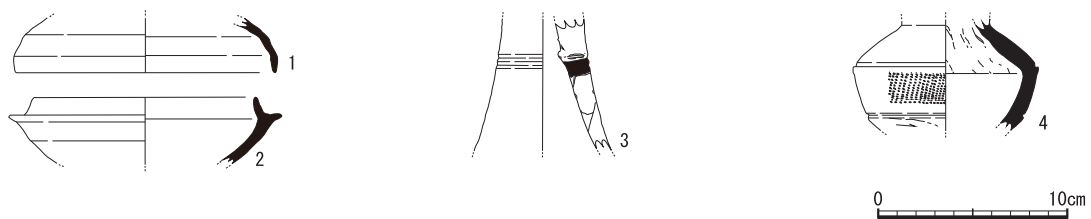
内湾した上部は下部よりやや長い。外面、内面ともに回転ナデが施されている。8は甕で、復原胴部最大径9.5cm、残存高7.5cmを測る。外面は上部より2段面沈線まで回転ナデをし、沈線を入れ、ハケ工具による刺突文後、注口のためのスカシを入れている。内面は回転ナデのみとなっている。9は長頸壺口縁部の破片と思われ、残存高は2.8cmを測る。残存部が小さいため詳細は不明瞭となる。外面、内面ともに回転ナデが施されている。10は高坏脚部片で、復原最大径4.0cm、残存高3.6cmを測る。上部の断面に坏部との接合面が見られた。外面の上方向に向かってヘラケズリが施されており、内面はシボリがある。11は長頸壺で、復原最大径13.5cmで、残存高10.4cmを測る。外面上部から胴部まで回転ナデ、胴部から下部までヘラケズリ、所々にオサエ、胴部に焼成痕が見られた。内面は回転ナデのみとなっている。

12は、鉄地金銅張の三葉形杏葉の破片であると考えられる。全長2.5cm、幅3.3cm、厚さ0.9cm、重さ7.9gを測る。鋳が文様帯の中央にみられる。昭和33年（1958）出土馬具とのかかわりを考えるうえで、重要な遺物である。

9トレンチ出土遺物の時期は、TK43～TK209型式並行で、TK209型式並行が主体であろう。

#### 太郎塚・次郎塚古墳表採遺物（第21a図）

第21の図1～4は須恵器である。1は坏蓋の口縁部である。その口縁部はやや内湾している。外・内面調整は共に回転ナデを施している。外面口縁端部に自然釉がかかっている。2は坏身である。立ち上がりは短く、内傾する。外・内面調整は共に回転ナデを施している。外面受部より下部に自然釉がかかっている。3は高坏脚部である。2条の沈線の上下部にスカシを穿孔する。外・内面調整は共に回転ナデを施している。4は甕の胴部である。外面調整は全体に回転ヨコナデ後下端部にヘラケズリが施される。2条の沈線が巡り、沈線間に連続刺突文が施されている。内面調整は全体に回転ヨコナデ後上部にシボリが施されている。表採遺物の時期は、各トレンチで出土した遺物と同じく、TK43～TK209型式並行である。



第21a図 太郎塚・次郎塚古墳表採出土遺物(1/4)

表1 太郎塚・次郎塚古墳出土土器観察表

挿図番号	調査区名	遺構	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第9図1	TRK 7Tr	周溝	須恵	坏蓋	(12.7)			2.5	回転ナデ	回転ナデ	E	良好	黄灰色	黄灰色	
第9図2	TRK 7Tr	周溝	須恵	高坏			(16.1)	15.5	回転ナデ	シボリ・回転ナデ	BCE	良好	褐灰色	黄灰色	3方向2段スカン
第9図3	TRK 7Tr	周溝	須恵	高坏	(7)	(2.5)		2.1	回転ナデ・カキ目後ナデ	回転ナデ	EF	良好	褐灰色	黄灰色	坏部外面にヘラ記号
第9図4	TRK 7Tr	周溝	土師	高坏	(18.6)			5.5	回転ナデ	回転ナデ	BD	良好	にぶい赤褐色	明褐色	
第9図5	TRK 7Tr	周溝	須恵	甕	(12)			3.2	回転ナデ後ヘラ工具施文	回転ナデ	B	良好	褐灰色	褐灰色	
第9図6	TRK 7Tr	周溝	須恵	横瓶					回転ナデ	回転ナデ	BCE	良好	褐灰色	褐灰色	胴部に工具ナデ
第9図7	TRK 7Tr	周溝	須恵	提瓶	(6)			3.5	回転ナデ	回転ナデ	BCE	良好	褐灰色	褐灰色	
第9図8	TRK 7Tr	周溝	須恵	提瓶					カキ目	回転ナデ	BCE	良好	赤灰色	赤灰色	
第9図9	TRK 7Tr	周溝	須恵	器台		(29.4)		10.3	回転ナデ・カキ目後タタキ	回転ナデ・アテ具痕	CE	良好	褐灰色	褐灰色	
第9図10	TRK 7Tr	周溝	須恵	器台			(27)	12.7	カキ目後沈線	回転ナデ	CE	良好	黄灰色	黄灰色	三角スカン
第10図1	TRK 7Tr	周溝	須恵	大甕	(34.6)			16.2	刺突文・沈線・カキ目ナデ	回転ナデ	BCE	良好	褐灰色	灰黄褐色	
第10図2	TRK 7Tr	周溝	須恵	大甕				68.7	タタキ後カキ目・回転ナデ	回転ナデ・アテ具痕	BE	良好	褐灰色	褐灰色	
第12図1	TRK 11Tr	周溝	須恵	高坏		(3.5)		4.6	回転ナデ・カキ目後ナデ	回転ナデ	BE	良好	灰黄褐色	黄灰色	3方向スカン
第12図2	TRK 11Tr	周溝	須恵	甕				4.5	刺突文・回転ナデ・沈線	回転ナデ	F	良好	褐灰色	褐灰色	
第14図1	JRK 1Tr	墳丘盛土	須恵	坏蓋	(12.1)			3.95	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	BE	良好	黄灰色	黄灰色	
第14図2	JRK 1Tr	墳丘盛土	須恵	坏身	(12.4)	(15)		3.4	回転ナデ	回転ナデ	BCE	良好	褐灰色	黒褐色	
第17図1	JRK 4Tr	周溝	須恵	坏蓋	(13.7)			2	回転ナデ	回転ナデ	F	良好	褐灰色	褐灰色	
第20図1	JRK 9Tr		須恵	坏蓋	(11.8)			2.5	回転ナデ	回転ナデ	ABE	良好	暗灰色	褐灰色	
第20図2	JRK 9Tr	柱穴	須恵	坏蓋	(11.4)			3	回転ナデ	回転ナデ	F	良好	褐灰色	暗灰黄色	
第20図3	JRK 9Tr		須恵	坏身	(12.2)			3.2	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	CE	良好	灰色	灰色	
第20図4	JRK 9Tr		須恵	高坏	(12.3)			4	回転ナデ	回転ナデ	B	良好	灰色	灰色	
第20図5	JRK 9Tr	周溝	須恵	高坏		(11.4)		4.6	回転ナデ	回転ナデ	B	良好	灰色	灰色	
第20図6	JRK 9Tr		須恵	高坏		(12.6)		3.8	回転ナデ	回転ナデ	BE	良好	褐灰色	黄灰色	
第20図7	JRK 9Tr		須恵	高坏		(16.8)		5.2	回転ナデ	回転ナデ	B	良好	灰色	暗灰黄色	
第20図8	JRK 9Tr		須恵	甕		(9.5)		7.5	回転ナデ・カキ目・ハケ工具刺突文	回転ナデ	BCD	良好	褐灰色	褐灰色	注口部有り
第20図9	JRK 9Tr		須恵	長頸壺				2.8	回転ナデ	回転ナデ	B	良好	褐灰色	褐灰色	
第20図10	JRK 9Tr		土師	高坏	(4)			3.6	ヘラケズリ	シボリ	B	良好	橙色	橙色	
第20図11	JRK 9Tr		土師	長頸壺	(13.5)			10.4	回転ナデ・オサエ	回転ナデ・ヘラケズリ	BD	不良	灰白色	灰白色	
第21a図1	TRK・JRK表探		須恵	坏蓋	(13.8)			2.9	回転ナデ	回転ナデ	ABD	良好	黄灰色	黄灰色	
第21a図2	TRK・JRK表探		須恵	坏身	(11.8)			3.6	回転ナデ	回転ナデ	BD	良好	黄灰色	褐灰色	
第21a図3	TRK・JRK表探		須恵	高坏	(7.2)			7	回転ナデ	回転ナデ	B	良好	褐灰色	褐灰色	
第21a図4	TRK・JRK表探		須恵	甕		(9.8)		5.9	回転ナデ・ヘラケズリ・沈線	シボリ・回転ナデ	B	良好	黄灰色	褐灰色	

法量の単位はcm。( )書きは、残存と復原を表す。  
胎土:A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子

表2 太郎塚・次郎塚古墳出土馬具観察表

挿図番号	調査区名	遺構	器種	作り	法量			
					全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
第20図12	JRK 9Tr	2区	三葉形杏葉	鉄地金銅張	2.5	3.3	0.9	7.9

## 小結（第 21b 図）

前述してきたように太郎塚古墳と次郎塚古墳について、周溝や墳形の確認のため調査区を設定し発掘調査を実施してきた。その中でも、太郎塚古墳では 3・7 トレンチ及び 9 トレンチ 3 区、次郎古墳では 1・4 トレンチ及び 9 トレンチ 1 区墳端や周溝の確認できた。これらの成果を基に復元案（第 21b 図）を作成した。トーンで塗りつぶした部分は、各古墳の周溝上端が確認できた箇所から復元したものである。また、周溝中の 2 本のラインは、周溝底部を確認した箇所から復元した。それでは、各古墳の復元案について見ていきたい。

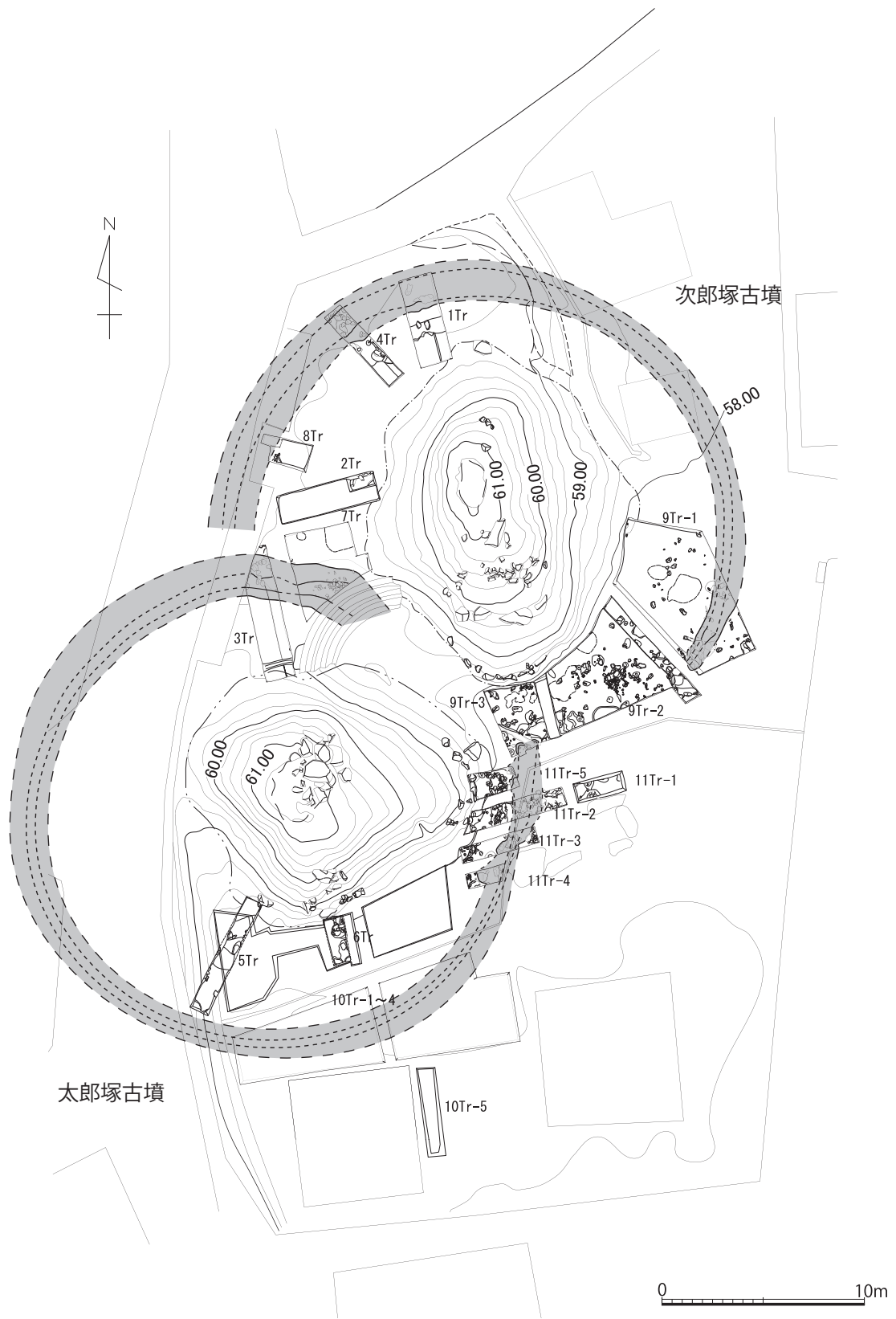
第 21b 図の太郎塚古墳の墳丘北側における周溝は、周溝底ラインで方向を確認すると、道路下から 3 トレンチ北端を通り、弧を描くように 7 トレンチの次郎塚古墳との間に設けられている石垣の階段の下に潜り込んでいるのが確認できた。また、墳丘南側平坦面では、ほとんど調査区で遺構面が削平されていたが、11 トレンチ 1～5 区で薄い堆積で周溝埋土がみられ、この周溝が 9 トレンチ 3 区の南壁面西側に沿って検出した土坑は須恵器・土師器片が多く出土した地点で、この土坑が周溝とつながり切れるものと考えられる。これらの検出した周溝底部の墳丘側の立ち上がりをつなぐと、墳長径約 23.0m の円形となる。周溝の墳丘外側上端は、現状で全長約 25.0m 以上であると想定できる。

次に、次郎塚古墳については、墳丘北側に平坦面の 1・4 トレンチで周溝を検出したが、対岸の立ち上がりは確認できず、調査区外側に拡がっているものと思われる。また、墳丘西側に設けた 9 トレンチ 1～3 区は、後世による削平や攪乱を受けているが、9 トレンチ 1 区で溝状遺構を検出した。この溝状遺構は、埋土の堆積が薄いものの墳丘にほぼ平行し、弧を描くように巡っていることから、次郎塚古墳に伴う周溝である可能性が高い。これらの調査区で検出した周溝下端を繋ぐと、墳長約 24.0 m の円墳となる。周溝の墳丘外側の上端ラインについては、確認できた箇所が少ないため、正確には判らないが少なくとも、全長 26.0 m 以上となるものと推定できる。

以上、両古墳の周溝と規模について述べてきたが、築造順についてはどうであろうか。両古墳とも墳丘北側で明瞭な周溝を確認したが、2・8 トレンチでは削平により検出できていない。しかし、両古墳の周溝が接合すると想定される 3・7 トレンチで周溝の切り合いが確認できない。また、両古墳の立地が 2.5m と近接していることから、設計段階での順序はあったものと推測される。

第 21b 図をみると、次郎塚古墳は、墳丘が南北方向に楕円形となり、墳丘南側の等高線 59.500 m の箇所に羨道部の天井石と考えられる扁平の石材がみられることから、次郎塚古墳の主体部入口は、墳丘南側の 9 トレンチ 3 区側で間違いのないと思われる。この 9 トレンチ 3 区で検出した太郎塚古墳の周溝は、次郎塚古墳の主体部への入口があるため途切れていると判断できる。つまり、設計段階で太郎塚古墳の墳丘と周溝が先に設計され、次に次郎塚古墳設計されたものと考えられる。しかし、墳丘の築造時期については、出土遺物より TK43 型式並行の同時期に築造されたものと考えられる。





第 21b 図 太郎塚古墳・次郎塚古墳墳丘復元図 (1/300)



太郎塚古墳3 トレンチ周溝検出状況



太郎塚古墳3 トレンチ完掘状況



太郎塚古墳3 トレンチ周溝土層堆積状況



太郎塚古墳5 トレンチ完掘状況



太郎塚古墳6 トレンチ完掘状況



太郎塚古墳7 トレンチ周溝内遺物出土状況



太郎塚古墳7 トレンチ南側土層堆積状況



太郎塚古墳10 トレンチ北側完掘状況



太郎塚古墳 10 トレンチ南側土層堆積状況



太郎塚古墳 11 トレンチ全景



次郎塚古墳 1 トレンチ周溝検出状況



次郎塚古墳 1 トレンチ完掘状況



次郎塚古墳 1 トレンチ土層堆積状況



次郎塚古墳 4 トレンチ周溝検出状況



次郎塚古墳 2 トレンチ完掘状況



次郎塚古墳 8 トレンチ検出状況



次郎塚古墳 8 トレンチ完掘状況



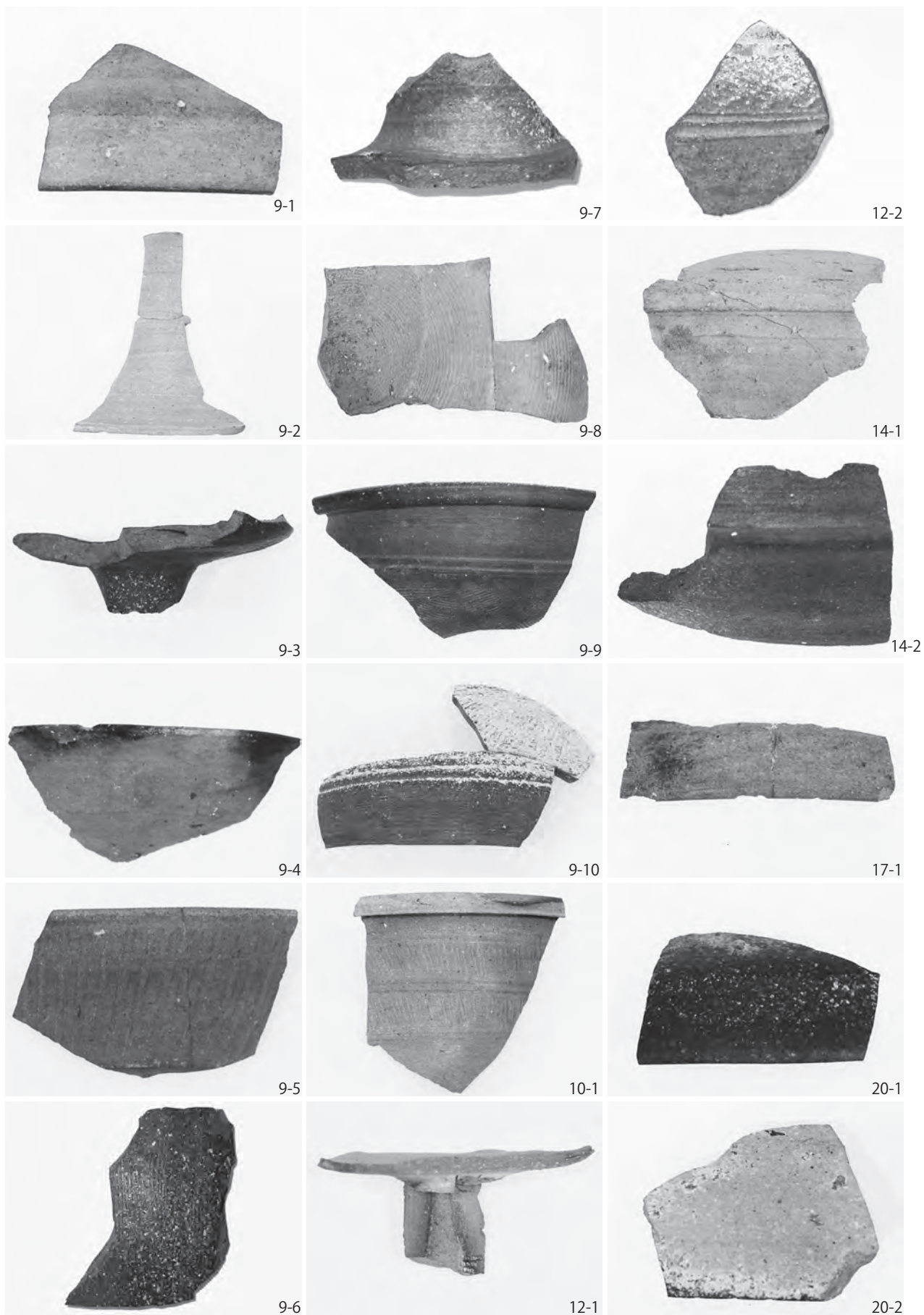
次郎塚古墳 9 トレンチ 1 区周溝検出状況



次郎塚古墳 9 トレンチ 3 区完掘状況



次郎塚古墳 9 トレンチ全景





20-3



20-9



21a-3



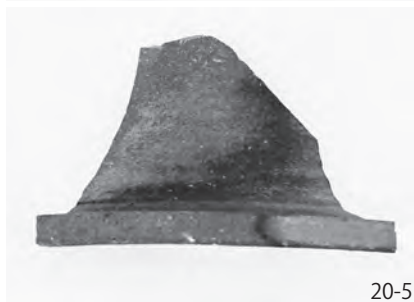
20-4



20-10



21a-4



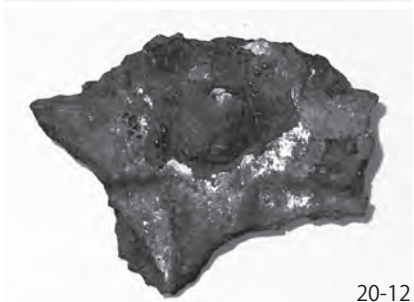
20-5



20-11



20-6



20-12



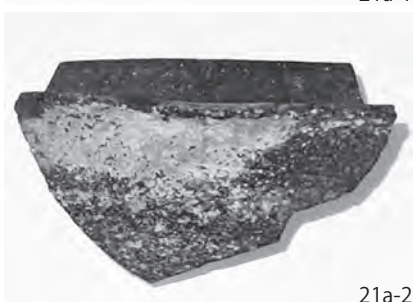
20-7



21a-1



20-8



21a-2

たかのつか  
鷹塚古墳の調査



写真 2 鷹塚古墳

所在地：別府市大字北石垣字天神畑

調査の情報

調査機関：別府大学文化財研究所

調査期間：平成 21 年（2009）2 月 26 日～4 月 30 日

平成 21 年 8 月 1 日～平成 22 年（2010）6 月 30 日

平成 23 年（2011）4 月 1 日～平成 24 年（2012）3 月 31 日

調査担当者：上野淳也（別府大学文学部 准教授）

玉川剛司（別府大学文化財研究所 研究員）

報告書：2013『実相寺古墳群』別府大学文化財研究所

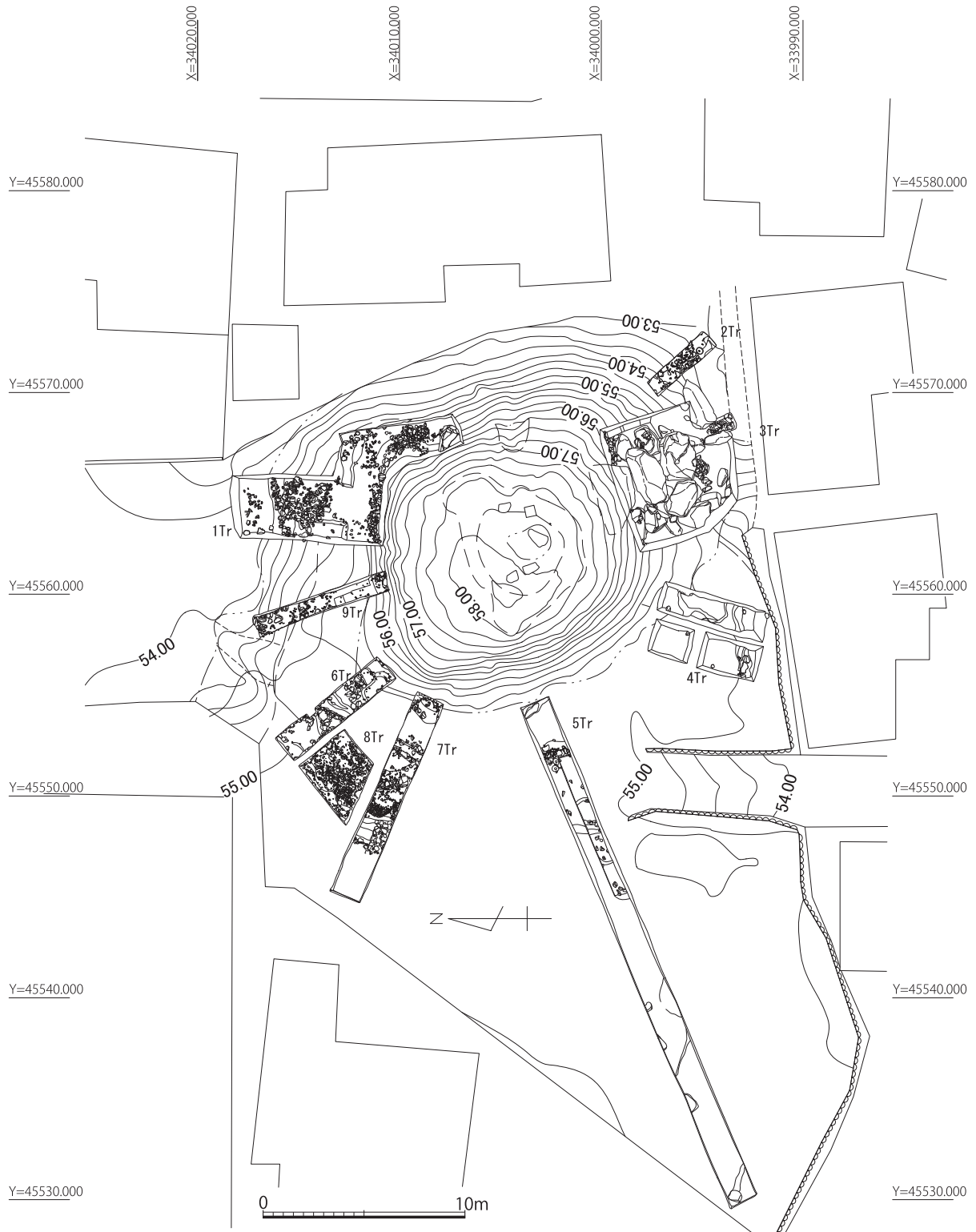
報告書担当者：上野淳也（別府大学文学部 准教授）

玉川剛司（別府大学文化財研究所 研究員）

第 3 章第 1 節 2 で報告する鷹塚古墳の発掘調査の結果は、平成 20 年（2008）度～23 年（2011）度に行われた別府大学文化財研究所による調査成果（2013『実相寺古墳群』別府大学文化財研究所）を同研究所の承諾を得て掲載するものである。掲載にあたり本書の体裁にあわせるため若干の修正を加えている。

## 2 鷹塚古墳の調査

鷹塚古墳は、太郎塚・次郎塚古墳の南西約 40 m に位置している古墳である。平成 19・20 年度に実施した太郎塚・次郎塚古墳との関係と、墳形及び規模、築造時期を確認するため、平成 20～23 年度に 1～9 トレンチを設定し、学術発掘調査を実施した（第 22 図）。



第 22 図 鷹塚古墳トレンチ配置図 (1/300)



## 鷹塚 1 トレンチ (第 23・24 図)

1 トレンチは、周溝と盛土の確認のため、当初(平成 20 年(2008) 度)、墳丘の北側に長さ 6.5m、幅 1.0 m で設定した。設定は、トレンチ北端が周溝内、トレンチ南端がテラス部分である事を想定しておこなった。トレンチの地表面の標高は、それぞれ、トレンチ北端が 53.500m、トレンチ南端が 56.000m であり、南端から 1～4m 間には若干の平坦面が認められるが、その比高差は南端から北端にかけて 2.5 m に及ぶ。

盛土の検出までは、葺石もしくは裏込め石と考えられる礫が大量に検出された。特にトレンチ南端では、東西に列石状に並ぶ大き目の礫が検出されており、上下二段の方墳と考えている鷹塚の上段の基底部に対応する内護列石である可能性がある。

明確な遺構としては、南端から 80cm 北の標高 54.500m 以下において、黒褐色土と黄褐色土の互層による盛土が検出されている。盛土の検出を受けて、トレンチを長さ 6.5 m、幅 3.0m に拡張し(平成 21 年(2009) 度)、墳丘の一部と考えられる盛土が検出されたトレンチ西側に長さ 3.0m、幅 1.0m のサブ・トレンチを設定した(第 23 図 C-C' 土層図)。

サブ・トレンチの土層観察から、前述の上段の基底部と考えられる列石から墳端側へ標高 54.500m の高さで 1.5 m 程度のテラス状の平坦面が確認された。このテラス状の平坦面から溝状遺構底面までは、概ね標高差 2 m を測る。

溝状遺構に関しては、溝底であると考えられる地山検出面は、トレンチ西側壁面で標高 52.700 m、東側が 52.550m と、西から東にかけての傾斜が見られる。

土層の堆積状況としては、トレンチ東側(第 23 図 A-A') の 1～3 層は攪乱層、4～9 層に関してはオリーブ褐色～暗黒褐色の自然堆積層、10 層及び 11 層は黄褐色の粘質土で墳丘盛土の再堆積層と考えられ、遺物や小礫を含む。9 層及び 10 層上面には礫が多く含まれる。溝の底には、砂利のような小礫が多数堆積している。この小礫と同じ堆積層からは、須恵器の坏及び高坏が出土し、TK209 併行時期の墳丘である可能性が伺われた。須恵器に関しては、後述する。

サブ・トレンチ内の土層堆積状況(第 23 図 C-C') は、1～5 層は礫を多く含み、中世の土師器片が出土している。6～20 層に関しては、墳丘盛土であると考えられ、6～13 層は砂質のオリーブ褐色～黒褐色の粒子の細かい砂質土の互層、14～20 層に関しては黒色～黒褐色～黄橙色の粒子の粗い粘質土の互層で形成される。この 14～20 層に関しては、石室構築時の基底部である可能性があり、14 層上面のレベル高に関しては、石室構築時の基準となるものと考えられる。14 層上面の高さは、標高 54.7～54.8m を測る。同様の土層は、9 トレンチでも確認されており、粘質土層上面は、標高 54.500m である。

同様の層位は、開口部である 3 トレンチでも確認されている。3 トレンチの羨道部東側側壁で言うと、腰石上面のレベルが 54.000m で、その上に乗る 2 段目の石の上面の標高が 54.7m となる。同じく 3 トレンチの羨道部西側側壁では、天井石を乗せる持ち送り石の上面の標高が 54.8m である。即ち、14 層上面の高さは、ほぼ天井石下面のレベルであることが分かる。

トレンチ西側の土層堆積状況(第 23 図 B-B') は、1～4 層が表土及び攪乱層、5～17 層が周溝への自然堆積層、18～21 層が砂質の強い褐色土で礫を多く含む中世における堆積層、22～25 層が墳丘盛土の再堆積層、26～42 層が黒色～黒褐色～黄橙色の粒子の粗い粘質土の互層で

形成される。

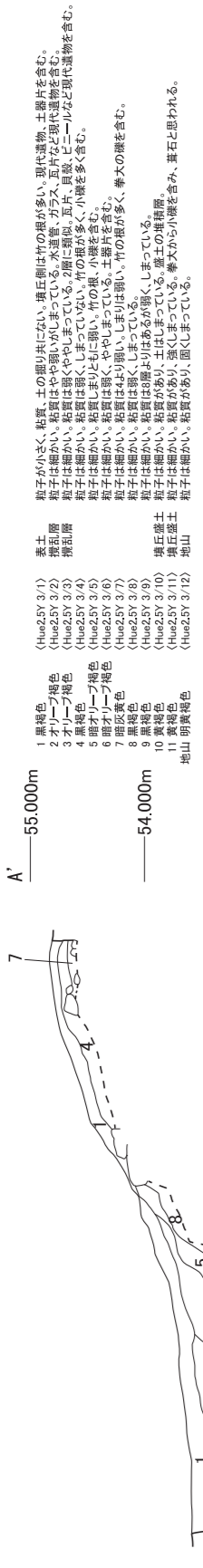
また、上段の基底部に対応すると考えられる列石に関して、依存状況を確認するためにトレンチを南東方向に拡張した（平成22年（2010）度）。検出された列石の続きに関しては、緩やかに南東方向に曲がりつつあったが、列石は墳丘東側で途絶しており、また、石室の一部であると考えられる巨石が露出していることが確認された。

出土遺物については、第24図1～13の須恵器である。1～3・7・9～13は、墳端ライン外側のテラス地山直上よりまとまって検出した一括遺物である。

1・2は坏蓋である。1は口縁部の破片で、残存高2.4cmを測る。口縁端部は短く外反する。外面調整は回転ナデ後、口縁上端部に沈線が1条施されている。内面調整は回転ナデである。色調は外面が黒色、内面が灰色を呈する。2は3の坏身とセットである。復元口径11.6cm、器高3.3cmを測る。器壁は薄く、全体的に丸い形状である。体部中央には沈線が施されている。外面調整は回転ナデ後、ヘラケズリで沈線を施している。内面調整は回転ナデである。色調は外面が暗灰色、内面が褐敗色を呈する。

3～7は坏身である。3は2とセットの坏身である。復元胴径は12.8cm、器高2.5cmを測る。口縁部は内傾し、口唇部は残存しない。受け部はほぼ水平に伸びており、かえりの角度が非常に浅い。外面調整は体部が回転ナデで、底部は回転ヘラケズリである。内面調整は回転ナデである。色調は外面が黒褐色、内面が灰色を呈する。4は、復元口径14.4cm、器高3.65cmを測る。口縁基部は内傾し、口唇部にかけて垂直に立ち上がる。器面調整は内・外面ともに回転ナデである。色調は外面が灰色、内面は黒褐色を呈する。5は、復元口径13cm、胴部径15.4cm、器高3.45cmを測る。口縁部はやや内傾し、返しは隆起している。体部に自然釉が付着しているが、受部から口縁部にかけては自然釉なし。外面調整は体部上側が回転ナデで、体部下側が回転ヘラケズリである。内部調整は回転横ナデである。色調は外面が黄灰色、内面は褐灰色を呈する。6は、復元口径12.2cm、器高2.5cmを測る。残存する体部は器壁が薄い。口縁部は内傾し、外反しながら立ち上がる。受部の稜から体部にかけて降灰がみられる。器面調整は内・外面ともに回転ナデである。色調は外面が黄灰色、内面は灰オリーブ色を呈する。7は、復元口径12.2cm、胴部径15cm、器高3.1cmを測る。口縁部は内傾しつつ立ち上がる。6と同じく、残存する体部は器壁が薄い。器面調整は内・外面ともに回転ナデである。色調は外面が灰白色、内面は暗灰黄色を呈する。

8～13は高坏である。8は坏部の破片で、復元口径11.6cm、胴部径13.8cm、復元器高4.2cmを測る。器面調整は内・外面ともに回転ナデである。色調は外面が黄灰色、内面は灰色を呈する。器壁が厚いのが特徴である。9は、脚部から坏身までの破片で、復元口径14.5cm、復元脚部底径8.5cm、残存器高13.35cmを測る。3方向スカシであるが、脚部端部から2段目スカシまで欠損している。1段目スカシ下端部と2段目スカシ上端部に1条の沈線が施されている。外面調整は回転ナデであるが、坏部体部中央はヘラケズリを施している。内面調整は回転ナデであり、脚部上側にはシボリが確認される。色調は外面が褐灰色、内面は黄灰色を呈する。10は脚部から坏部にかけての破片である。脚部底径18.5cm、脚部高17.8cm、残存高21.7cmを測る。脚部は3方向の2段スカシを有する。脚部と坏部接合部から坏部にかけて、V字のヘラ記号が施されている。1段目スカシ下端部と2段目スカシ上端部、および脚部裾部上端に1条の沈線が施されている。外面調



第 23 図 鷹塚 1 トレンチ平面図・土層断面図 (1/60)

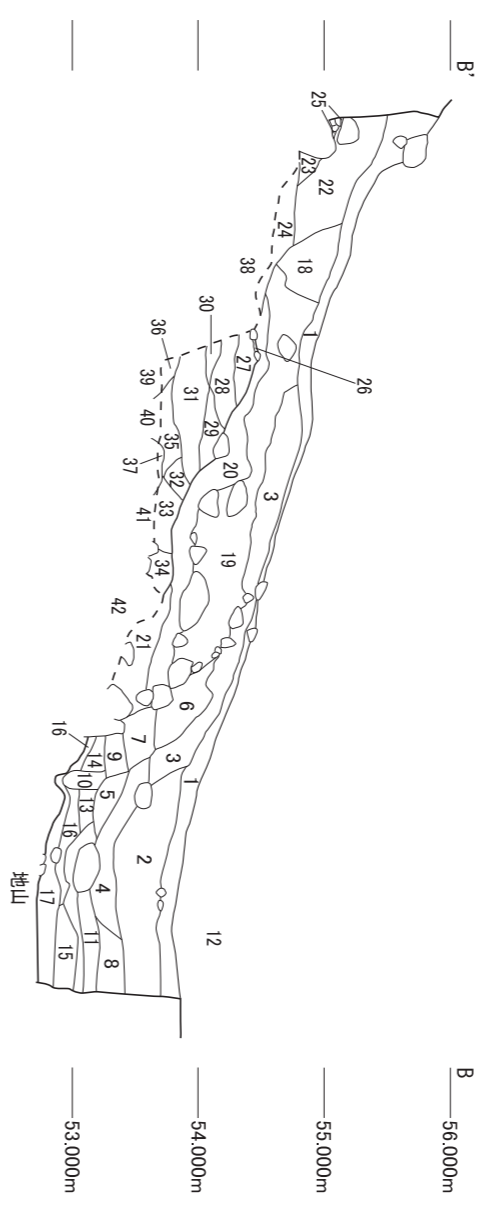


0 2m

1 黒褐色  
2 オリーブ褐色  
3 黒褐色  
4 黒褐色  
5 暗オリーブ褐色  
6 暗オリーブ褐色  
7 暗赤褐色  
8 暗赤褐色  
9 暗赤褐色  
10 暗赤褐色  
11 暗赤褐色  
12 暗赤褐色

山神

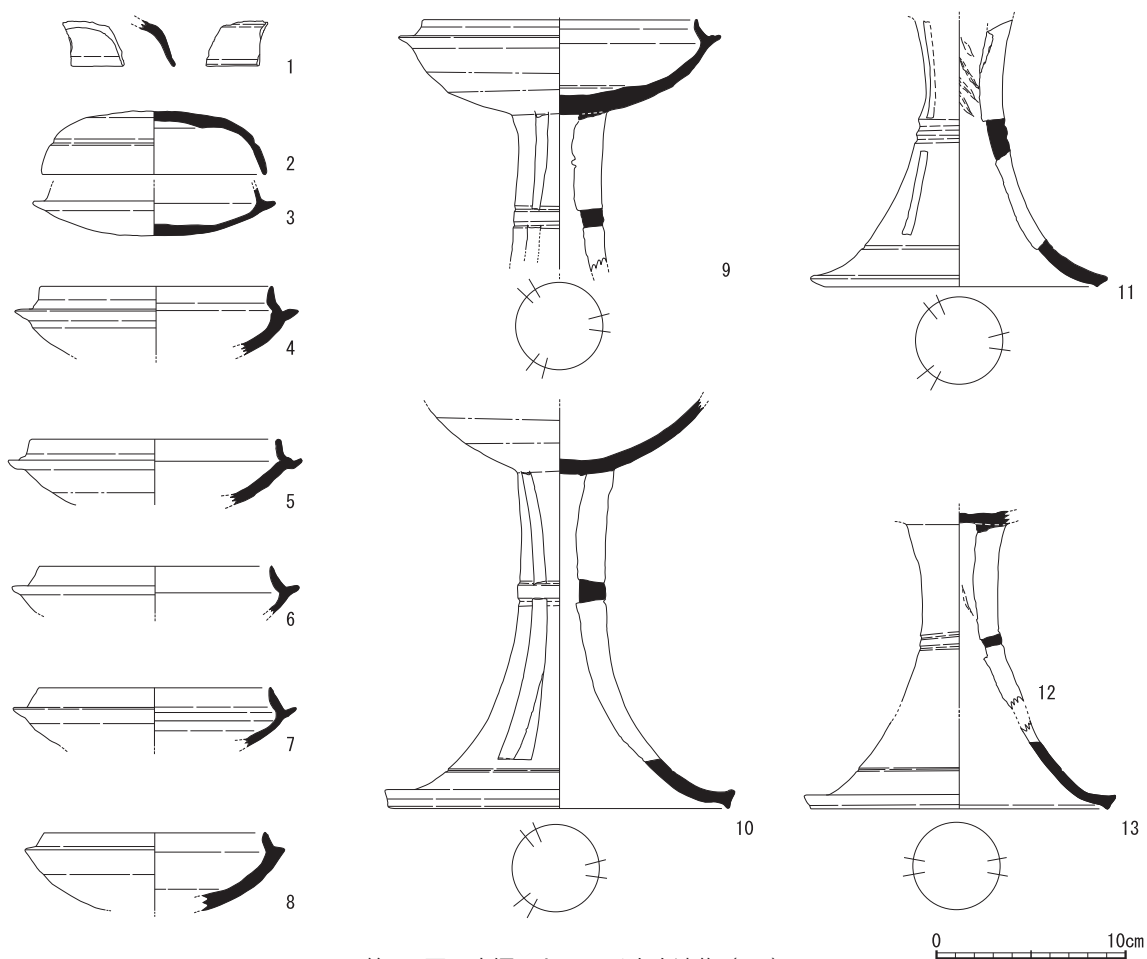
1 黒褐色  
2 オリーブ褐色  
3 黒褐色  
4 黒褐色  
5 暗オリーブ褐色  
6 暗オリーブ褐色  
7 暗赤褐色  
8 暗赤褐色  
9 暗赤褐色  
10 暗赤褐色  
11 暗赤褐色  
12 暗赤褐色



1 黒褐色  
2 オリーブ褐色  
3 黒褐色  
4 黒褐色  
5 暗オリーブ褐色  
6 暗オリーブ褐色  
7 暗赤褐色  
8 暗赤褐色  
9 暗赤褐色  
10 暗赤褐色  
11 暗赤褐色  
12 暗赤褐色

山神

1 黒褐色  
2 オリーブ褐色  
3 黒褐色  
4 黒褐色  
5 暗オリーブ褐色  
6 暗オリーブ褐色  
7 暗赤褐色  
8 暗赤褐色  
9 暗赤褐色  
10 暗赤褐色  
11 暗赤褐色  
12 暗赤褐色



第24図 鷹塚1トレンチ出土遺物 (1/4)

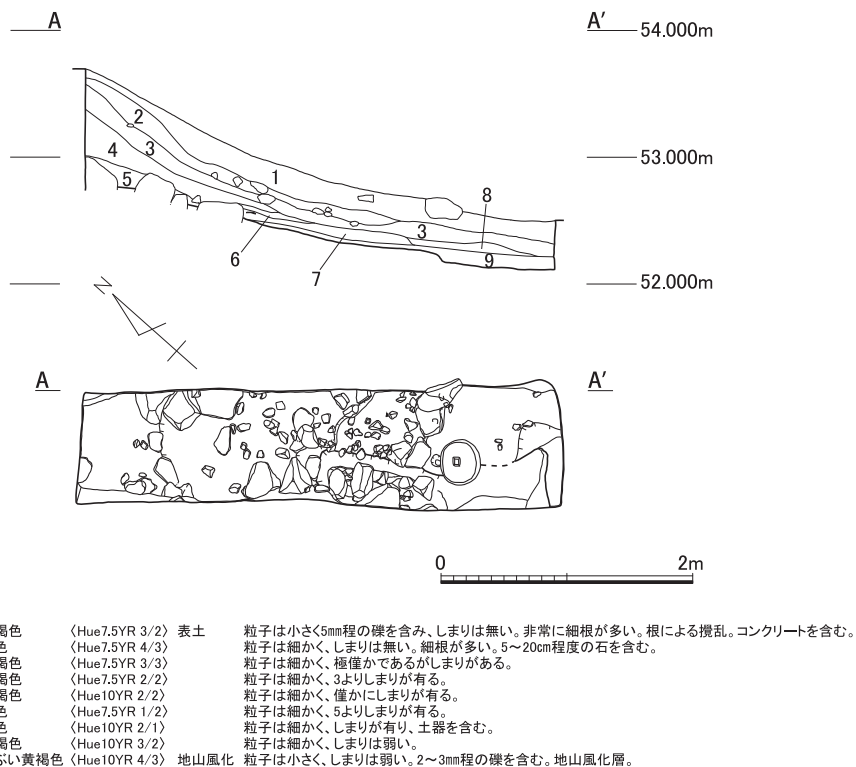
整は坏部上位がヘラケズリ、坏部下位から脚部が回転ナデである。内面調整は回転ナデであり、シボリが確認される。色調は外面が黄灰色、内面は灰黄色を呈する。11は脚部のみ残存で、脚部底径15.75cm、残存高14.1cmを測る。脚部は3方向の2段スカシを有している。1段目スカシと2段目スカシ間に2条の沈線、脚部裾部の上側に1条の沈線が施されている。外面調整は回転ナデである。内面調整は回転ナデであり、脚部上位にシボリが確認される。色調は外面が灰色、内面が黄灰色を呈する。12は高坏脚部上位の破片である。脚部径9.9cm、残存高10.8cmを測る。2方向スカシであるが、脚部端部および坏部は欠損している。1段目スカシ下端と2段目スカシ上端に1条の沈線を施している。13と同一個体である。外面調整は回転ナデである。内面調整は回転ナデであり、脚部上位にシボリが確認される。色調は外面が褐灰色、内面は灰オリーブ色を呈する。13は高坏の脚部端部のみ残存である。復元脚部径16.4cm、残存高4.8cmを測る。12と同一個体である。器面調整は内・外面ともに回転ナデである。色調は外面が褐灰色、内面は黄灰色を呈する。

出土遺物の時期は、一括遺物としてTK209型式の古相の様相を呈している。

## 鷹塚 2 トレンチ (第 25 図)

墳丘の規模・形態の確認のため、墳丘の南斜面から南東に向かって長さ 3.8 m、幅 1.0 m のトレンチを設定した。

地表面から 1.9 m 掘り下げたところで地山を検出し、扁平な列石を確認した。土層の堆積状況は、1～3、8 層は黒褐色～黒色土であり自然堆積層と考えられ、全体的に墳丘側から南東に向けて下降しながら堆積している。4～7 層は黒色～黒褐色土でしまりがあり、墳丘盛土が再堆積したものと推定できる。なお、7 層からは須恵器片が出土している。9 層はにぶい黄褐色の砂質土で地山真上層になるがしまりは弱く、地山の風化層であると考えられる。



第 25 図 鷹塚 2 トレンチ平面図・土層断面図 (1/60)

## 鷹塚 3 トレンチ (第 26～29 図)

第 1 次調査において古墳の南東部に開口部が既に確認されていた。よって第 3 次調査では開口部及び羨道部内の遺存状況の確認を目的として調査区を設定した。

### 天井石の崩落状況

開口部及び推定羨道部上の樹木を伐採後、露出している天井石と開口部の幅及び封土の遺存状況を考慮し調査区を設定した。

トレンチ内にて、封土の検出を行ったが、天井石の崩落に伴い羨道部上面の封土は遺存していないことが確認された為、まず天井石上面の検出を行なった。結果、トレンチ内にて 3 つの天井石を検出した。

天井石の崩落状況は開口部から 1 つ目の天井石が崩落したことにより、左側壁の最上段の石材も一緒に崩落し、天井石が羨道部側に直立に落ち込んでいる。また、2、3 つ目も 1 枚目の天井石の崩落に伴い若干左側に傾斜している。

## A 面

土層の堆積状況は 1～7・16 層は表土である。8～15、17～23 層は盛土の原位置は保たれているが、天井石の崩落に伴い軟化していると考えられる。24 層以下は墳丘盛土である。

24～29 層黒色土、黄褐色土、暗褐色土を含み、29 層のみ締りがある。これらの層は石室側に内傾し積まれている。

30～56 層は 3 枚目天井石上面の盛土にあたり、黒色土、黒褐色土、黄色土、黒色・黄色のブロック土を交互に積む。51 層は天井石と側壁の境にあたり、層の手前には黄橙色の目張り粘土が残存している。51～54 層は非常に締りが固く粘性が強いことから、天井石と側壁の隙間を覆った封土と考えられる。57～59 層黒褐色土、黄褐色土、暗オリーブ色土も石室側に内傾した層群である。60～89 層も黒色土、黒褐色土、黄色土、黒色・黄色のブロック土が標高約 54.850 m のラインで交互且つ水平に積まれている。63・64 層暗褐色土には 20～25cm の礫が含まれている。標高 54.700 m の礫より下層は天井石上部の盛土よりもさらに固い。

## B 面

土層の堆積状況は、90～95 層が表土である。28 層以下は墳丘盛土である。28 層の灰オリーブ色土は A 面の 28 層と対応している。57・59・96～99 層にぶい黄褐色土、褐色土、黒褐色土は 96 層を除いて締りが弱く、石室側に内傾して積まれた層群である。A 面の 57～59 層と対応する。

62・66・67・100～105 層黄色・黒色のブロック土、褐色土、黒褐色土は厚さ 20cm 前後で水平に積まれている。62・67 層の黄色・黒色のブロック土は締りが強い。62・66・100～104 層にかけて幅 50cm 間に 60cm 南へ急傾斜している。68・70・71・106・～118 層の黄色・黒色のブロック土、黄色土、黒色土は、106 層から盛土と流土の境にあたる 110 層上部まで南へ 1.8 m の間はゆるやかに傾斜していることから墳丘 1 段目築造時のテラス面と考えられる。

119 層黄色・黄色のブロック土は非常に硬く、東壁面の下層全体にみられる。この層は古墳築造時、1 段目の基段層と考えられる。120 層の黒色土より下層は A 区東壁面下拡張部においても盛土が確認された為、121 層も盛土と考えられる。

## C 面

トレンチ西側は後世の掘削によって石列の部分が失われており、標高 54.900 m を境に拳大の礫が多量に含まれる。

土層の堆積状況は、1～3・6・7・122～125 層が表土である。トレンチの北端では 72・74・75・77・78・81・84 層で A 面から続く黒褐色土、灰色土が順に重なった盛土が検出された。85 層の黒褐色土は、細かな目張り粘土を含む。85 層以下の 89 層の明黄褐色土、126 層の黒褐色土は盛土である。

## D 面

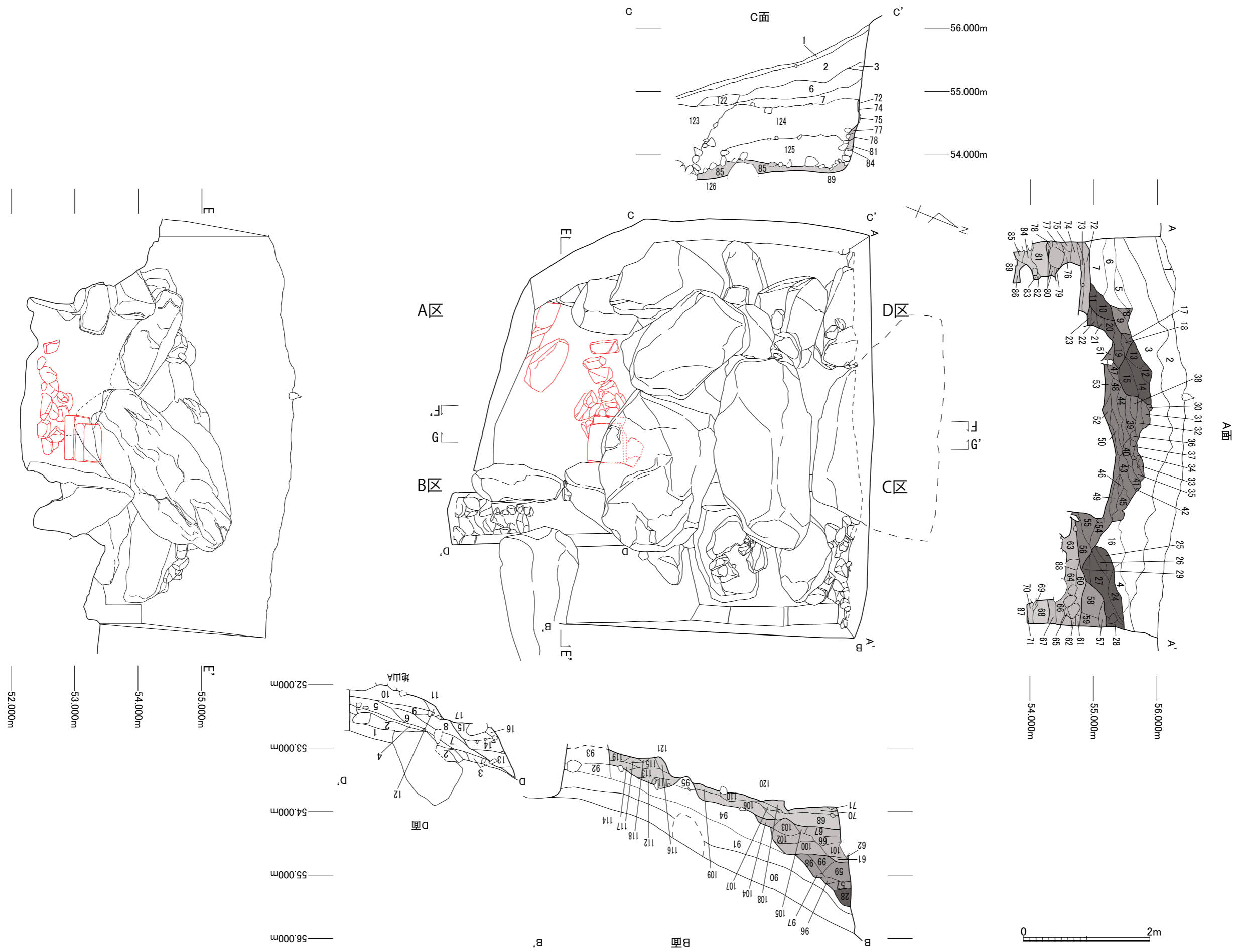
土層の堆積状況は、1～11 層は表土と中世以降の堆積土であり須恵器 2 点、土師器 1 点、宝篋印塔の一部と思われる棺材の一部が出土した。1・2 層は粒子が細かく、締りは弱い盛土とみられる。15・17・120・121 層にぶい黄褐色土、黄褐色土、黄橙色土は全体的に強い盛土とみられる。18 層の黄橙色土はトレンチの下部にあたり、52.800 m の表土層から 0.65 m 掘り下げ

### 鷹塚3トレンチ A~C 面土層

1 暗オリーブ褐色	(Hue25Y 3/3)	表土	しまり 粘性共になし。粒子やや細かい。乾燥が早い。
2 暗オリーブ褐色	(Hue25Y 3/3)	表土	全くしまりなし。粘性なし。粒子やや細かい。乾燥が早い。
3 オリーブ褐色	(Hue25Y 4/4)	表土	全しまりなし。粘性なし。粒子やや細かい。乾燥が早い。
4 黒褐色	(Hue10YR 3/2)	表土	全しまりなし。粘性なし。粒子非常に細かい。乾燥が早い。
5 灰黄褐色	(Hue25Y 4/2)	表土	全しまりなし。粘性なし。粒子細かい。やや根が含む。
6 オリーブ褐色	(Hue25Y 4/4)	表土	しまり 粘性共になし。粒子やや細かい。やや根が多い。
7 暗オリーブ褐色	(Hue25Y 3/3)	表土	しまり 粘性共になし。粒子やや粗い。やや根が多い。
8 暗オリーブ褐色	(Hue5Y 4/3)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子やや粗い。やや根が多い。
9 黒色/暗オリーブ褐色	(Hue25Y 2/1)/(Hue25Y 3/3)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子やや粗い。やや根が多い。
10 黒褐色	(Hue25Y 2/2)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子細かい。やや根が多い。
11 暗灰黄色	(Hue25Y 4/2)	填丘盛土*	全しまりなし。粘性なし。粒子細かい。やや根が多い。
12 黒色/黒褐色	(Hue5Y 2/1)/(Hue25Y 3/1)	填丘盛土*	しまり粘性共になし。粒子やや粗い。
13 暗オリーブ褐色	(Hue25Y 3/3)	填丘盛土*	全しまりなし。粘性なし。粒子細かい。
14 黒褐色	(Hue10YR 2/1)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子細かい。
15 黒色	(Hue25Y 2/1)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子細かい。
16 黒褐色	(Hue10YR 2/2)	表土	全しまりなし。粘性なし。粒子細かい。
17 黒褐色	(Hue10YR 3/2)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子細かい。
18 黒色	(Hue25Y 2/1)	填丘盛土*	ややしまりあり。やや粘性あり。粒子細かい。
19 黒色	(Hue10YR 2/1)	填丘盛土*	しまりあり。やや粘性あり。粒子は細かい。
20 黒褐色	(Hue10YR 3/1)	填丘盛土*	しまりは20と同層。粘性はなし。粒子は20よりも粗い。
21 黒褐色	(Hue25Y 3/1)	填丘盛土*	21よりもしまり強い。やや粘性あり。粒子細かい。
22 黒色	(Hue25Y 2/1)	填丘盛土*	ややしまりあり。やや粘性あり。粒子細かい。
23 黒褐色	(Hue10YR 2/2)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子細かい。
24 暗オリーブ褐色	(Hue5Y 4/4)	填丘盛土*	全しまりがない。粘性なし。粒子は非常に細かい。黒色(Hue N2/)のブロックを含む。
25 オリーブ褐色	(Hue25Y 3/3)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子はやや細かい。暗灰黄色(Hue25Y 4/2)、明黄褐色(Hue25Y 7/6)が混じる。
26 黒色	(Hue10YR 2/1)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子は細かい。黒色(Hue25Y 2/1)をまばらに含む。
27 黄褐色/灰黄色	(Hue25Y 4/2)/(Hue25Y 4/1)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子やや粗い。ややしまりのある黄色(Hue25Y 8/6)をブロック状に含む。
28 暗オリーブ褐色	(Hue5Y 5/3)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子は細かい。
29 黒褐色	(Hue25Y 3/2)	填丘盛土*	しまりあり。粘性なし。粒子は細かい。
30 暗オリーブ褐色	(Hue5Y 4/4)	填丘盛土*	しまりあり。粘性なし。粒子は細かい。
31 黒色/黒色	(HueN 2/)/(Hue25Y 2/1)	填丘盛土*	しまりなし。粘性ややあり。粒子細かい。
32 黒褐色/灰オリーブ褐色	(Hue25Y 3/2)/(Hue5Y 4/2)	填丘盛土*	しまりなし。粘性ややあり。粒子細かい。オリーブ黄色(Hue5Y 6/4)をマール状に含む。
33 オリーブ黒/灰オリーブ褐色	(Hue5Y 3/2)/(Hue5Y 4/2)	填丘盛土*	しまりあり。粘性ややあり。粒子やや粗い。
34 黒色	(Hue25Y 2/1)	填丘盛土*	しまりなし。粘性あり。粒子は細かい。
35 暗灰黄色	(Hue25Y 4/2)	填丘盛土*	しまりなし。粘性ややあり。粒子やや細かい。灰オリーブ褐色(Hue5Y 5/3)が混ざる。
36 黒色	(Hue25Y 2/1)	填丘盛土*	しまりややあり。粘性ややあり。粒子細かい。
37 黒褐色	(Hue25Y 3/2)	填丘盛土*	しまりややあり。粘性はなし。粒子はやや粗い。明黄褐色(Hue25Y 7/6)をブロック状に含む。
38 暗オリーブ黒	(Hue5Y 3/1)	填丘盛土*	しまりあり。粘性ややあり。粒子細かい。オリーブ黒色(Hue5Y 3/2)をブロック状に含む。
39 オリーブ黒/黄色	(Hue5Y 3/2)/(HueN 7/6)	填丘盛土*	しまり弱い。粘性なし。粒子やや細かい。黒色(HueN 7/6)を少量まばらに含む。
40 オリーブ黒	(Hue5Y 3/1)	填丘盛土*	しまりなし。粘性ややあり。粒子やや細かい。淡黄色(Hue5Y 7/4)、黒色(Hue5Y 2/1)をブロック状に含む。
41 黒褐色	(Hue25Y 3/2)	填丘盛土*	しまりあり。粘性ややあり。粒子やや細かい。淡黄色(Hue5Y 7/4)をまばらに含む。
42 オリーブ褐色	(Hue25Y 4/3)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子は細かい。
43 黄色/灰オリーブ褐色	(Hue5Y 7/6)/(Hue5Y 5/2)	填丘盛土*	しまりあり。粘性ややあり。粒子やや細かい。層の中央部に黒色の樹皮痕あり。
44 オリーブ黒/明黄褐色	(Hue5Y 3/1)/(Hue25Y 7/6)	填丘盛土*	しまり非常に強い。粘性なし。粒子やや細かい。黒色(Hue 2/)をまばらに含む。
45 黒色/黒色	(Hue10YR *1.1/1)/(HueN *1.5/1.5)	填丘盛土*	しまりなし。粘性強い。粒子非常に細かい。
46 オリーブ黒	(Hue5Y 3/1)	填丘盛土*	しまり非常に強い。粘性ややあり。粒子やや細かい。
47 黒褐色	(Hue7.5YR 3/1)	填丘盛土*	しまりあり。粘性ややあり。粒子細かい。黄褐色(Hue25Y 5/4)をまばらに含む。
48 黒褐色	(Hue25Y 3/1)	填丘盛土*	しまりあり。粘性ややあり。粒子細かい。黒色(Hue 2/)、黄色(Hue25Y 8/6)を少量まばらに含む。
49 オリーブ黒	(Hue5Y 3/1)	填丘盛土*	ややしまりあり。粘性ややあり。粒子は細かい。淡黄色(Hue5Y 7/4)が混じる。
50 明黄褐色/暗褐色	(Hue25Y 7/6)/(Hue25Y 3/2)	填丘盛土*	しまり非常に強い。粘性なし。粒子は細かい。淡黄色(Hue5Y 2/1)をまばらに含む。
51 黒褐色	(Hue10YR 3/1)	填丘盛土*	しまりあり。粘性ややあり。粒子細かい。
52 オリーブ褐色/黒褐色	(Hue25Y 4/3)/(Hue10YR 3/2)	填丘盛土*	50.5層よりしまりあり。やや粘性あり。粒子はやや粗い。黄褐色(Hue10YR 7/8)をまばらに含む。
53 黄褐色	(Hue7.5YR 3/1)	填丘盛土*	しまりあり。粘性ややあり。粒子は細かい。
54 黒褐色	(Hue10YR 3/3)	填丘盛土*	しまりあり。粘性ややあり。粒子は非常に細かい。
55 暗褐色	(Hue10YR 3/3)	填丘盛土*	全しまりなし。粘性なし。粒子は非常に細かい。階層の塊積土か?
56 暗褐色	(Hue10YR 3/3)	填丘盛土*	ややしまりあり。層の下部には変化したもの更にしまりあり。粘性なし。粒子は細かい。
57 黒褐色	(Hue10YR 3/1)	填丘盛土*	ややしまりあり。粘性なし。粒子は細かい。
58 黒褐色	(Hue25Y 4/2)	填丘盛土*	しまり非常に強い。粘性なし。粒子は非常に細かい。0.02~0.05cmほどの小さな黒色、黄灰色の粒子を含む。
59 暗オリーブ褐色	(Hue25Y 3/3)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子は細かい。シルト土。
60 褐色	(Hue7.5YR 4/3)	填丘盛土*	全しまりがない。粘性なし。粒子は非常に細かい。シルト土。
61 黒褐色	(Hue25Y 3/1)	填丘盛土*	しまりなし。粘性なし。粒子は細かい。シルト土。淡黄色(Hue5Y 8/4)をブロック状に含む。
62 黄褐色/暗オリーブ褐色	(Hue25Y 4/2)/(Hue25Y 3/3)	填丘盛土*	しまり非常に強い。粘性なし。粒子はやや粗い。黒色(Hue N2/)をまばらに含む。
63 暗褐色	(Hue10YR 3/1)	填丘盛土*	ややしまりあり。粘性なし。粒子は細かい。
64 暗褐色	(Hue10YR 3/3)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子は細かい。シルト土。
65 灰黄褐色	(Hue10YR 5/2)	填丘盛土*	ややしまりあり。粘性なし。粒子はやや細かい。淡黄色(Hue5Y 8/4)をブロック状に含む。
66 暗オリーブ褐色/淡黄色	(Hue25Y 3/3)/(Hue5Y 8/4)	填丘盛土*	しまり非常に強い。粘性なし。粒子はやや細かい。シルト土。淡黄色(Hue5Y 8/4)をブロック状のもの全体に混じっている。
67 暗褐色/灰褐色	(Hue25Y 3/2)/(Hue 10YR 5/1)	填丘盛土*	しまりあり。粘性ややあり。粒子は細かい。黄色(Hue25Y 8/6)、灰黄色(Hue25Y 4/1)をブロック状に含む。
68 暗褐色	(Hue25Y 4/1)	填丘盛土*	しまり非常に強い。粘性なし。粒子はやや粗い。淡黄色(Hue25Y 8/4)、黒色(Hue N2/)をマール状に含む。
69 灰白色	(Hue25Y 3/2)	填丘盛土*	ややしまりあり。粘性強い。粒子は非常に細かい。
70 灰白色	(Hue5Y 7/1)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子は細かい。砂質。灰白色(Hue7.5Y 8/1)、褐色(Hue10YR 4/1)をブロック状に含む。
71 黒色	(HueN 2/)	填丘盛土*	しまりなし。粘性ややあり。粒子は細かい。
72 オリーブ褐色	(Hue25Y 4/3)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子は細かい。
73 暗灰黄色	(Hue25Y 4/2)	填丘盛土*	しまりややあり。粘性はなし。粒子はやや細かい。
74 暗褐色	(Hue10YR 3/2)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子はやや細かい。
75 暗褐色	(Hue25Y 4/1)	填丘盛土*	しまり非常に強い。81より強い。粘性はない。粒子はやや粗い。全体の2割程度の明黄褐色(Hue25Y 7/6)を含む。
76 黒褐色	(Hue10YR 3/1)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子はやや細かい。
77 暗褐色	(Hue25Y 3/3)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子は非常に細かい。4cm程度の目振りのブロックを含む。(目振り粘土の風化層か)
78 オリーブ褐色	(Hue25Y 3/3)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子は非常に細かい。3cm前後の塊積土(レンダマ)が出ている。
79 暗褐色	(Hue7.5YR 3/1)	填丘盛土*	全しまりがない。粘性なし。粒子はやや細かい。
80 暗褐色	(Hue10YR 3/1)	填丘盛土*	しまりなし。粘性は弱い。粒子は86よりも粗い。85よりも明るい目振りの土を含む。83に似ている。
81 明黄褐色	(Hue25Y 7/6)	填丘盛土*	しまりは86よりある。粘性はない。粒子はやや粗い。砂粒を含む。黒色(HueN 2/)をまばらに含む。
82 暗褐色	(Hue7.5YR5/6)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子は非常に細かい。目振りの粘土。
83 暗褐色	(Hue10YR 3/1)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子は86よりも粗い。85よりも明るい目振りの粘土を含む。
84 黒褐色	(Hue10YR 3/2)	填丘盛土*	86よりしまりあり。粘性なし。粒子はやや細かい。
85 黒褐色	(Hue10YR 2/1)	填丘盛土*	しまりあり。粘性ややあり。目振りの粘土が微量に混じる
86 暗褐色	(Hue25Y 3/2)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子はやや細かい。
87 暗褐色	(Hue10YR 3/3)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子は細かい。
88 黄褐色	(Hue25Y 7/6)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子は非常に細かい。細かな(0.2~0.5mm)目振りの粘土を含む。
89 明黄褐色	(Hue25Y 7/6)	填丘盛土*	しまりあり。粘性なし。粒子はやや粗い。砂粒を含む。灰白色(Hue25Y 7/1)、黒色(HueN 1.5/)をマール状に含む。
90 暗オリーブ褐色	(Hue25Y 3/3)	表土	またくしまりがない。粘質なし。粒子はやや粗い。乾燥が早い。根(ハチク)等が攪拌されている表土層、針金等の現代遺物を含む。
91 オリーブ褐色	(Hue25Y 4/4)	表土	またくしまりがない。粘質なし。粒子粗い。乾燥が早い。
92 暗褐色	(Hue5YR3/2)	埴土	しまりなく。粘質弱い。粒子細かい。
93 暗赤褐色	(Hue5YR3/2)	埴土	しまりなく。粘質弱い。粒子細かい。
94 暗褐色	(Hue10YR3/3)	埴土	しまり 粘性共になし。粒子は細かい。
95 暗オリーブ褐色	(Hue25Y3/3)	攪乱層	しまりは弱く粘質あり。粒子は細かい。
96 明褐色	(Hue7.5YR5/6)	填丘盛土*	しまりは非常に強い。粘質は弱い。粒子は細かい。
97 ぶい黄褐色	(Hue10YR4/3)	填丘盛土*	しまりなく粘質弱い。粒子は細かい。
98 暗褐色	(Hue7.5YR4/3)	填丘盛土*	しまりなく粘質弱い。粒子はやや粗い。
99 暗褐色	(Hue10YR4/4)	填丘盛土*	しまり弱く粘質弱い。粒子はやや粗い。
100 暗褐色	(Hue10YR 3/4)	填丘盛土*	しまりややあり。粘質ややあり。粒子やや粗い。
101 暗褐色	(Hue25Y 3/1)	填丘盛土*	しまり 粘質共になし。粘質あり。粒子は細かい。シルト土。黄褐色(Hue5Y 8/4)をブロック状に含む。
102 ぶい黄褐色	(Hue10YR 5/4)	填丘盛土*	しまり非常に強い。粘質ややあり。粒子はやや粗い。黒褐色(Hue10YR3/1)を微量に含む。
103 暗褐色	(Hue10YR 3/4)	填丘盛土*	しまりあり粘質ややあり。粒子はやや粗い。
104 ぶい黄褐色	(Hue10YR 4/3)	填丘盛土*	しまり非常に強い。粘質なし。粒子は細かい。黒色(Hue7.5YR*1.1/1)が少量含む。
105 暗灰褐色	(Hue10YR 4/2)	填丘盛土*	しまり非常に強い。粘質あり。粒子は細かい。
106 暗灰黄色	(Hue25Y 2/2)	填丘盛土*	しまり非常に強い。粘質あり。粒子は細かい。黄褐色(Hue25Y 5/3)が一層マール状に含まれる。
107 ぶい黄褐色	(Hue10YR 4/3)	填丘盛土*	しまり非常に強い。粘質なし。粒子は細かい。オリーブ褐色(Hue25Y 4/3)のブロックを含む。
108 暗オリーブ褐色	(Hue25Y 3/3)	填丘盛土*	しまりあり粘質あり。粒子はやや粗い。
109 オリーブ褐色	(Hue25Y 4/4)	填丘盛土*	しまりややあり粘質あり。粒子は細かい。
110 黒褐色	(Hue7.5YR 3/2)	填丘盛土*	しまりなし粘質なし。粒子は細かい。
111 黒褐色	(Hue10YR 3/2)	填丘盛土*	しまりややあり。粘質ややあり。粒子は細かい。⑧の土をブロック状に含む。
112 暗黄褐色	(Hue25Y 6/6)	填丘盛土*	しまりややあり。粘質ややあり。粒子は細かい。
113 暗黄褐色	(Hue10YR 6/6)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子は非常に細かい。黒色(Hue25Y 2/1)をまばらに含む。
114 暗黄褐色	(Hue25Y 5/4)	填丘盛土*	しまりやや弱い。粘質ややあり。粒子は細かい。
115 黒褐色	(Hue10YR 2/2)	填丘盛土*	しまりややあり。粘質ややあり。粒子は細かい。
116 暗黄褐色	(Hue7.5YR 3/2)	填丘盛土*	しまり 粘性共になし。粒子は非常に細かい。明黄褐色(Hue25Y 6/6)をマール状に含む。
117 黒褐色	(Hue10YR 3/1)	填丘盛土*	しまりややあり粘質ややあり。粒子は細かい。
118 暗黄褐色	(Hue10YR 6/6)	填丘盛土*	しまり非常に強い。粘質弱い。粒子は細かい。黒色(Hue10YR*1.1/1)を微量に含む。
119 暗褐色	(HueN*1.5/)	填丘盛土*	しまりやや粗い。粘質ややあり。粒子は細かい。
120 明黄褐色	(Hue10YR 6/6)	埴土	しまり 粘性共になし。粒子粗い。砂質。10~20cm程度の塊を多く含む。
121 黒色	(HueN*1.5/)	攪乱層	しまり 粘性共になし。粒子粗い。砂質。10~20cm程度の塊を多く含む。
122 暗褐色	(Hue25Y 3/3)	攪乱層	しまり 粘性共になし。粒子粗い。砂質。10~20cm程度の塊を多く含む。
123 暗オリーブ褐色	(Hue10YR 3/3)	攪乱層	しまり 粘性共になし。粒子粗い。砂質。10~20cm程度の塊を多く含む。
124 暗灰黄色/暗オリーブ褐色	(Hue25Y 4/3)/(Hue25YR 3/4)	攪乱層	しまり 粘性共になし。粒子は非常に粗い。拳次の塊(10cm前後)を8層より少な含む。
125 黒褐色	(Hue10YR 2/1)	填丘盛土*	しまりなし。粘性ややあり。粒子やや細かい。

### 鷹塚3トレンチ D 面土層

1 黒褐色	(Hue10YR 3/2)	表土	粒子粗い。しまりややある。粘性なし。現代遺物を含む。
2 褐色	(Hue7.5Y 4/3)	表土	粒子きめ細かい。しまりなし。粘性なし。頭土の塊を含む。
3 黄褐色	(Hue25Y 5/4)	表土	粒子きめ細かい。しまりなし。粘性なし。
4 黒褐色	(Hue7.5YR 3/2)	埴土	粒子粗い。しまりなし。粘性ややあり。やや砂質。
5 暗褐色	(Hue7.5YR 3/3)	埴土	粒子粗い。しまりややあり。粘性ややあり。3cm~5cmの塊を含む。
6 暗褐色	(Hue10YR 3/2)	埴土	粒子粗い。しまりあり。粘性ややあり。
7 ぶい黄褐色	(Hue10YR 5/4)	埴土	粒子粗い。しまりややあり。粘性ややあり。
8 ぶい黄褐色	(Hue10YR 6/4)	埴土	粒子きめ細かい。しまりあり。粘性なし。
9 暗灰黄色	(Hue25Y 4/2)	埴土	粒子粗い。しまりあり。粘性ややあり。
10 暗褐色	(Hue10YR 3/2)	埴土	粒子粗い。しまりあり。粘性強い。須磨器2点、土師器1点、宝篋印塔の一部出土。
11 黒色	(Hue10YR 2/1)	埴土	粒子粗い。しまりあり。粘性あり。
12 ぶい褐色	(Hue7.5YR 5/4)	填丘盛土*	粒子きめ細かい。しまりなし。粘性なし。
13 暗褐色	(Hue25Y 5/4)	填丘盛土*	粒子粗い。しまりあり。粘性なし。炭化物を多く含む。
14 暗褐色	(Hue10YR 3/3)	填丘盛土*	粒子粗い。しまりあり。粘性なし。炭化物を含む。3より少ない。
15 ぶい黄色	(Hue25Y 6/4)	填丘盛土*	粒子粗い。しまりあり。粘性なし。5mm程度の炭化物を含む。
16 ぶい黄色	(Hue25Y 6/4)	填丘盛土*	粒子粗い。しまりあり。粘性あり。炭化物をわずかに含む。
17 黄褐色	(Hue10YR 8/6)	填丘盛土*	粒子粗い。しまりあり。やや粘性あり。黒色・黄色のブロック土を含む。
地山 黄褐色	(Hue10YR 8/6)	地山	粒子きめ細かい。しまりあり。粘性あり。拳~頭土の塊を含む。



第 26 図 鷹塚 3 トレンチ平面図・土層断面図 (1/60)



た地点の人頭大の礫を多く含んだ地山を確認した。

#### 土層堆積状況のまとめ

墳丘盛土は黄色土、褐色土、黒色土、黄色・黒色のブロック土が使用されている。基本的に黄色・黒色のブロック土が使用されている部分については、粘性が強く、しまりがあるものが多い。それとは逆に、黄色土、黒色土などの単色土は、粘性があり、しまりが弱い。これら2つの異なる性質の盛土を交互に積み重ねて墳丘が構築されている。

墳丘盛土の状況は以下のようにまとめることができる。

##### I 層群 1 段目の基段

(A 面 88・89 層、B 面 119・121 層)

##### II 層群 1 段目のテラス構築の盛土

(A 面 68～71、81～86 層、B 面 68・70・71・106～119 層、C 面 81・84・85 層)

##### III 層群 天井石と側壁の面合わせ

(A 面 60～67 層、72～80 層、B 面 61・62・66・67・100～104 層、C 面 72・74・75・77・78 層)

##### IV 層群 天井石上部の盛土の流出を防ぐための層

(A 面 57～59 層、B 面 57・59・96～99 層)

##### V 層群 天井石の盛土層

(A 面 30～56 層)

##### VI 層群 墳丘を高くするための石室側に傾斜した層

(A 面 24～29 層、B 面 28 層)

##### VII 層群 本来墳丘を高くするための層で現位置をほとんど保っているが、天井石が動いたことにより軟化した層

(A 面① 17～23、② 12～15、③ 10・11、④ 8・9)

B 面の 119 層で検出された 1 段目基盤層は非常に硬く、基段層を作った時点でテラスの前段階とみられる傾斜を作っている。墳丘 2 段目築造時は石室の左右側壁の高さ(54.800～54.850 m)まで水平に積み、所々に盛土流出を防ぐためと考えられる山形状の盛土を入れている。

側壁を乗せ盛土を積んだ後に、天井石を乗せ側壁と天井石の間に黄橙色の目張りの粘土を詰められている。その後、盛土の流れ込みを防ぐために石室側に向かって傾斜した盛土を積んでいる。天井石と石室を覆うように粘性がある土で硬く締めた盛土を積み、上部の盛土が行われている。

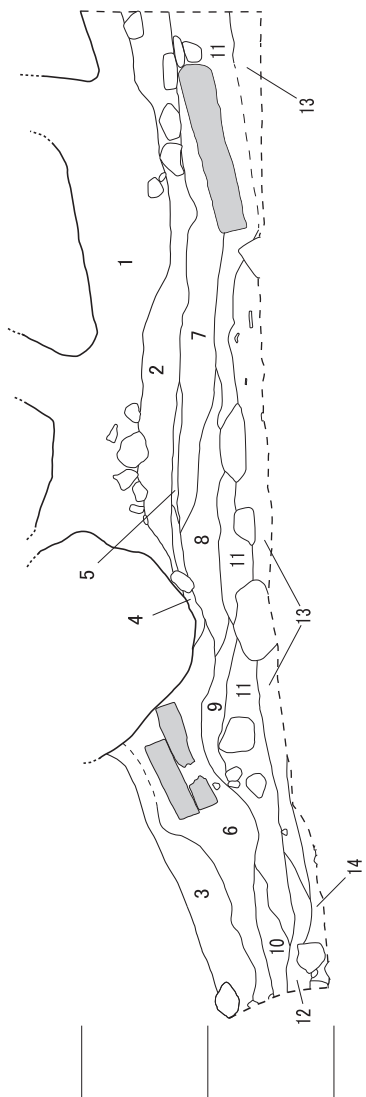
墳丘を高くするための石室側に傾斜した層を先に積んでいることを確認した。IV 層群以降は盛土層があったと考えられるが、風化によって確認することはできなかった。

#### 前庭部及び石室内

石室の主軸を基に 2 区に分け、さらに前庭部側と天井石側とで 2 区に分けた、計 4 区の調査区を設定した。天井石より下段の西側から A 区、東側が B 区、上段の東側が C 区、西側が D 区である。

調査の結果、A・B 区の土層ベルトに 1 次調査で既に確認していた方形に加工された石材が 2

G' 55.000m  
 54.000m  
 53.000m  
 52.000m

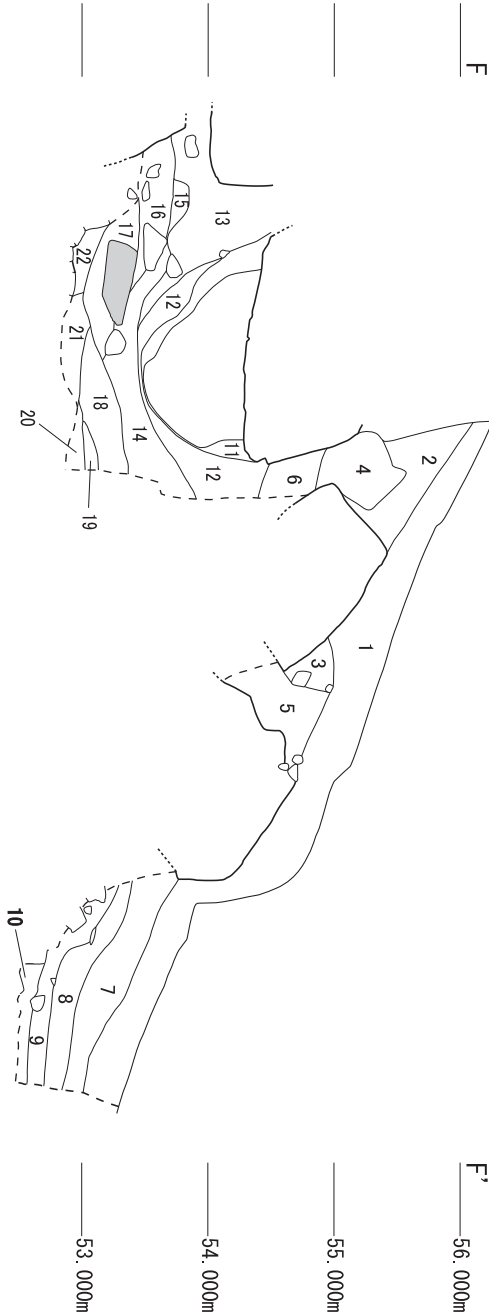


1 黒褐色/黒褐色  
 2 黒褐色/黒褐色  
 3 灰褐色  
 4 黒褐色/黒褐色  
 5 黒褐色/黒褐色  
 6 黒褐色/黒褐色  
 7 黒褐色  
 8 黒褐色/黒褐色  
 9 黒色/黒褐色  
 10 黒褐色  
 11 黒褐色  
 12 黒褐色  
 13 黒褐色  
 14 灰黄褐色/黒褐色

<Hum>5VR 2/3>  
 <Hue>0VR 2/3>/<Hue>0VR 1/3>  
 <Hue>5VR 4/2>  
 <Hue>0VR 1/4>/<Hue>0VR 1/3>  
 <Hue>0VR 1/4>/<Hue>0VR 1/3>  
 <Hue>0VR 1/4>/<Hue>0VR 5/7>  
 <Hue>0VR 1/3>  
 <Hue>5VR 1/4>/<Hue>0VR 1/3>  
 <Hue>0VR 1/2>/<Hue>0VR 1/3>  
 <Hue>0VR 1/2>/<Hue>0VR 3/3>  
 <Hue>0VR 3/2>  
 <Hue>0VR 3/2>  
 <Hue>0VR 1/3>  
 <Hue>0VR 4/2>/<Hue>0VR 4/3>

埋土 しまりはややある。粒子は細かいが、細かい砂利を含む。粘性はある。礫大から人頭大の石を少量含む。  
 表土 しまりは多い。粒子は細かい。粘性は1より弱い。1cm~3cmほどの小石を少量含む。ブロック土を含む。  
 しまりは2より少ない。粒子は細かい。粘性は1より弱い。1cm~3cmほどの小石を少量含む。ブロック土を含む。  
 しまりは2より少ない。粒子は細かい。粘性は1より弱い。1cm~3cmほどの小石を少量含む。ブロック土を含む。  
 しまりは2より少ない。粒子は4より細かい。粘性は1より弱い。1cm~3cmほどの小石を少量含む。ブロック土を含む。  
 しまりは2より少ない。粒子は4より細かい。粘性は1より弱い。1cm~3cmほどの小石を少量含む。ブロック土を含む。  
 しまりは2より少ない。粒子は4より細かい。粘性は1より弱い。1cm~3cmほどの小石を少量含む。ブロック土を含む。  
 しまりは2より少ない。粒子は4より細かい。粘性は1より弱い。1cm~3cmほどの小石を少量含む。ブロック土を含む。  
 しまりは2より少ない。粒子は4より細かい。粘性は1より弱い。1cm~3cmほどの小石を少量含む。ブロック土を含む。  
 中世 しまりは11より多い。粒子は8、10、11より強い。粘性は1より弱い。1cm~3cmほどの小石を少量含む。  
 中世 しまりは11より多い。粒子は8、10、11より強い。粘性は1より弱い。1cm~3cmほどの小石を少量含む。  
 しまりは12と同程度。粒子は細かい。粘性は1より弱い。1cm~3cmほどの小石を少量含む。  
 しまりは12と同程度。粒子は細かい。粘性は1より弱い。1cm~3cmほどの小石を少量含む。

52.000m



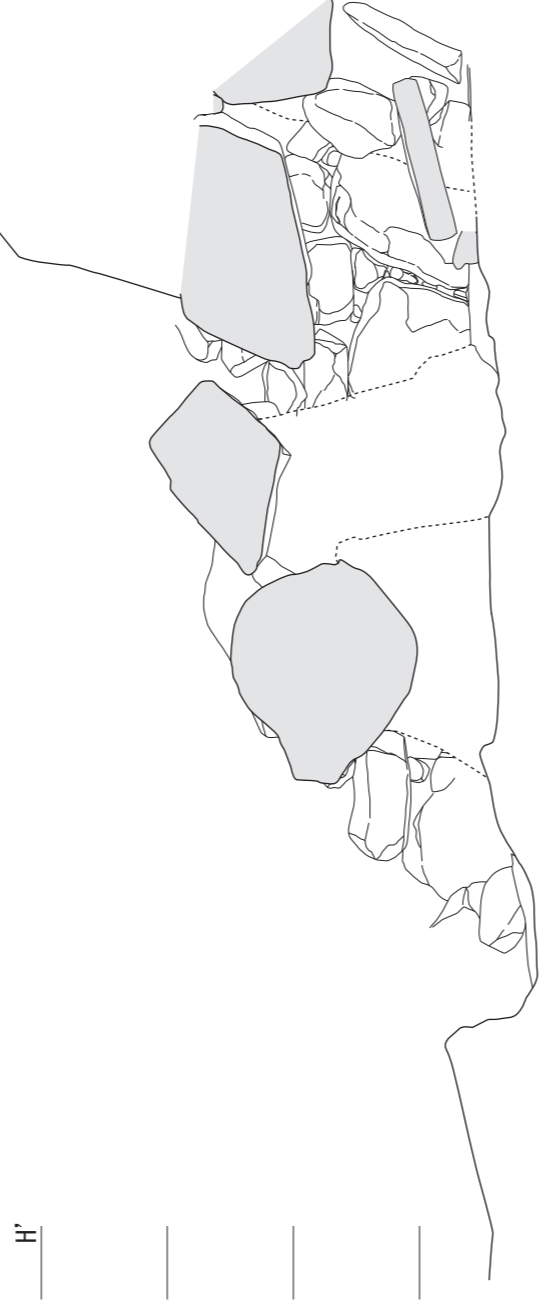
F' 56.000m  
 55.000m  
 54.000m  
 53.000m  
 52.000m



第 27 図 鷹塚 3 トレンチ羨道部内及び天井石土層図 (1/60)

- 1 黒褐色 黒色 <Chae2,5VR 3/2> <Chae2,5VR 2/1>
- 2 黒褐色 黒色 <Chae2,5VR 3/2> <Chae2,5VR 2/1>
- 3 黒褐色 <Chae2,5VR 3/2>
- 4 黒褐色 黒色 <Chae2,5VR 3/2>
- 5 黒褐色 暗褐色 <Chae2,5VR 3/2> <Chae2,5VR 3/3>
- 6 暗褐色 黒褐色 <Chae2,5VR 3/2> <Chae2,5VR 3/3>
- 7 黒褐色 <Chae2,5VR 3/2>
- 8 黒褐色 黒褐色 <Chae2,5VR 3/2> <Chae2,5VR 3/3>
- 9 黒褐色 黒褐色 <Chae2,5VR 3/2> <Chae2,5VR 3/3>
- 10 黒褐色 黒褐色 <Chae2,5VR 3/2> <Chae2,5VR 3/3>
- 11 黒褐色 黒褐色 <Chae2,5VR 3/2> <Chae2,5VR 3/3>
- 12 黒褐色 黒褐色 <Chae2,5VR 3/2> <Chae2,5VR 3/3>
- 13 黒褐色 黒褐色 <Chae2,5VR 3/2> <Chae2,5VR 3/3>
- 14 黒褐色 黒褐色 <Chae2,5VR 3/2> <Chae2,5VR 3/3>
- 15 黒褐色 黒褐色 <Chae2,5VR 3/2> <Chae2,5VR 3/3>
- 16 黒褐色 黒褐色 <Chae2,5VR 3/2> <Chae2,5VR 3/3>
- 17 黒褐色 黒褐色 <Chae2,5VR 3/2> <Chae2,5VR 3/3>
- 18 黒褐色 黒褐色 <Chae2,5VR 3/2> <Chae2,5VR 3/3>
- 19 黒褐色 <Chae2,5VR 3/2>
- 20 黒色 <Chae2,5VR 3/2>
- 21 黒褐色 <Chae2,5VR 3/2>
- 22 黒褐色 <Chae2,5VR 3/1>

- H — 56.000m
- 55.000m
- 54.000m
- 53.000m
- 52.000m



**表土**

層子は横か、しまりは弱く、粘性は非常に強い、10cm程度の層を少量含む。骨や木の根が多い。

層子は12と同一層か、しまりは弱く、粘性は非常に強い、10cm程度の層を少量含む。骨や木の根が多い。

層子は11と同一層か、しまりは弱く、粘性は非常に強い、10cm程度の層を少量含む。骨や木の根が多い。

層子は10と同一層か、しまりは弱く、粘性は非常に強い、10cm程度の層を少量含む。骨や木の根が多い。

層子は9と同一層か、しまりは弱く、粘性は非常に強い、10cm程度の層を少量含む。骨や木の根が多い。

層子は8と同一層か、しまりは弱く、粘性は非常に強い、10cm程度の層を少量含む。骨や木の根が多い。

層子は7と同一層か、しまりは弱く、粘性は非常に強い、10cm程度の層を少量含む。骨や木の根が多い。

層子は6と同一層か、しまりは弱く、粘性は非常に強い、10cm程度の層を少量含む。骨や木の根が多い。

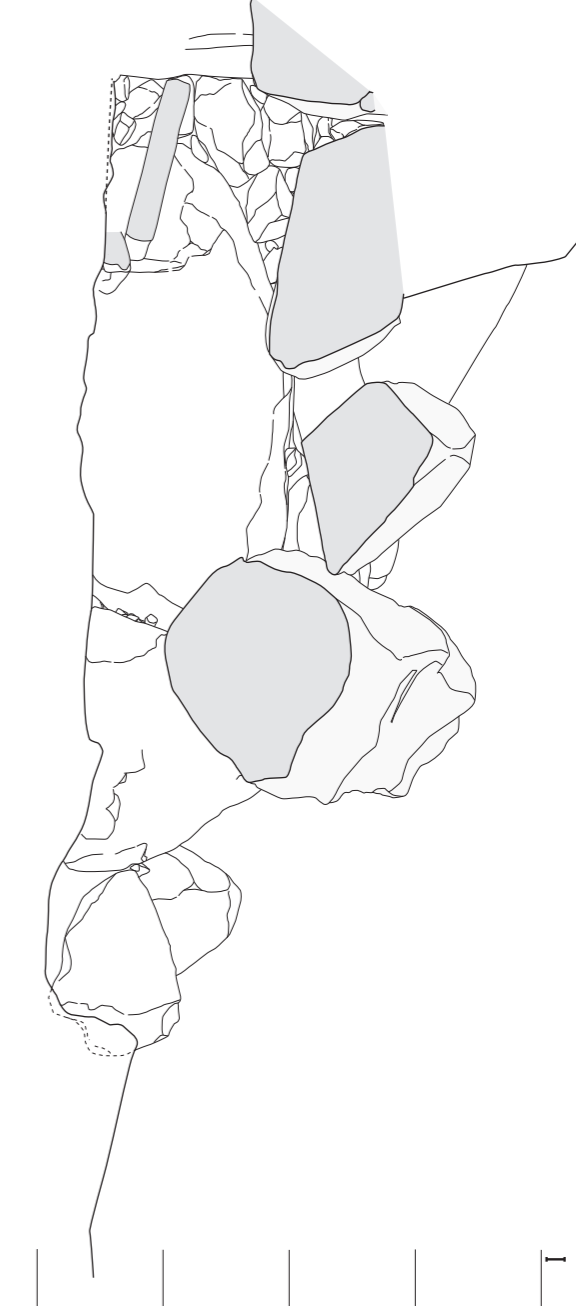
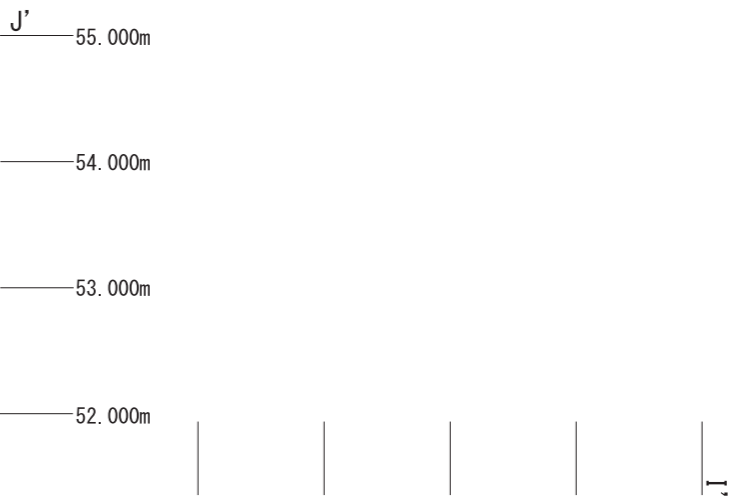
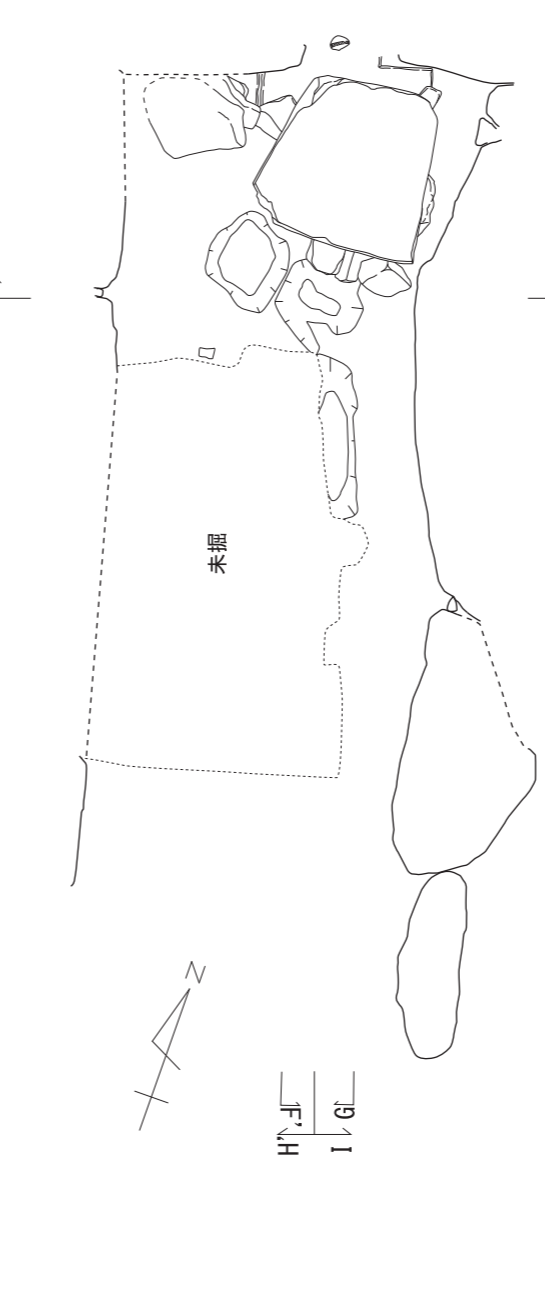
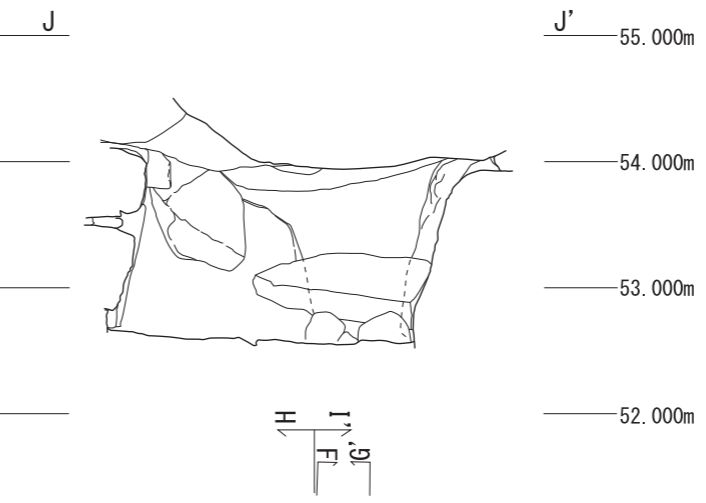
層子は5と同一層か、しまりは弱く、粘性は非常に強い、10cm程度の層を少量含む。骨や木の根が多い。

層子は4と同一層か、しまりは弱く、粘性は非常に強い、10cm程度の層を少量含む。骨や木の根が多い。

層子は3と同一層か、しまりは弱く、粘性は非常に強い、10cm程度の層を少量含む。骨や木の根が多い。

層子は2と同一層か、しまりは弱く、粘性は非常に強い、10cm程度の層を少量含む。骨や木の根が多い。

層子は1と同一層か、しまりは弱く、粘性は非常に強い、10cm程度の層を少量含む。骨や木の根が多い。



第 28 図 鷹塚 3 トレンチ羨道部平面図・断面見通し図 (1/60)

枚重なった状態で検出した。上段の石材は、長さ 63cm、幅 60cm、厚さ 14cm、下段の石材は、長さ 65cm、幅 70cm、厚さ 14cmである。なお、下段の石材については、中心部が円形状に挟られた状態で出土した。

A・B 区の土層の堆積状況は、全体的に崩落した天井石からレンズ状に堆積しているが、3 層の黒褐色土直上で B 区全体に平坦面を形成している。この 3 層については、中世の土師器や銭などが出土していることから、中世の文化層であることがうかがえる。また、この 3 層直上に加工された石材が含まれていることから、少なくとも 2 つの石材は、中世以降に人為的に設置されたものであると考えられる。

A・B 区間に設けた土層ベルトで検出した中世の文化層が石室内のどこまで延びているのかを確認するため、前庭部で設定した土層ベルトを石室内に延長し掘り進めた。

その結果、6～8 層の中世の文化層が 4.5 m 程石室内まで確認することができた。これらの層には、土師器や土鍋、炭化物が含まれており、少なくとも中世の段階では、石室内まで入れたことが確認できた。

#### 羨道部奥

B 区の前庭部を掘り下げた結果、左・右側壁の腰石を検出した。また、石室内を掘り進めると、調査区南壁から前門もしくは玄門と考えられる石が右側壁に沿って立っているのを確認した。この石については、検出した地点と墳丘との位置関係から考えると玄門の石材である可能性が高い。一方、左側の方は天井石と接地しておらず、下部の方が羨道側に押し出されたような状態となっており石材の厚さも 20cm と薄いことから扉石の可能性が高い。これら両石間の床面には、框石と考えられる加工された扁平に石材を検出した。この框石開口部側の床面には、全体の形状は不明であるが、別の加工された床石の一部を検出した。また、この床石の上の玄門手前には、閉塞石と考えられる長さ 1.4m、最大幅 1.35m、最小幅 0.9m、厚さ 20cm の台形状の加工された石材が奥室から押し出された状態で確認した。また、扉石に使用されている石材と、右側の玄門、右側壁や天井石には、塗布された赤色顔料が一部みられる。

#### 羨道部側壁

羨道部の両側壁は、それぞれ石組の構築状況が異なり、右側壁は 2 段で構築されているのに対し、左側壁は 4 段で構築されている。右側壁は、巨石 2 つを腰石としており、開口部側から 1 つ目が長さ 2.0 m、高さ 1.6 m、2 つ目が長さ 3.8 m、高さ 1.6 m を測る。また、2 つ目の腰石の上には、2 段目の石を積んで天井石と接している。

天井石は、開口部から 3 つの巨石を用いており、手前の天井石は、左側壁の一部が石室内に崩落したことにより石室内に落ち込んだ状態となっている。また、この 1 石目の天井石が崩落したことにより、連動して 2 石目も左側に落ち込み傾斜したのと考えられる。

羨道部との区切りとして検出した玄門の石の手前では、両側壁の石積みを確認できる。左側の側壁は、羨道部入口と同じように 3 段で構成されており、比較的表面を調整した石材を用いられている。腰石については、羨道部のものと比較すると、ほぼ同じサイズの石を使用している。一方、右側側壁においては、羨道部でも述べた巨石が腰石として使用されている。この巨石は、玄門に向かって緩やかに傾斜しているため、天井石と水平に接するように玄門との間に石を

4段に積み充填している状況を確認した。

#### 開口部

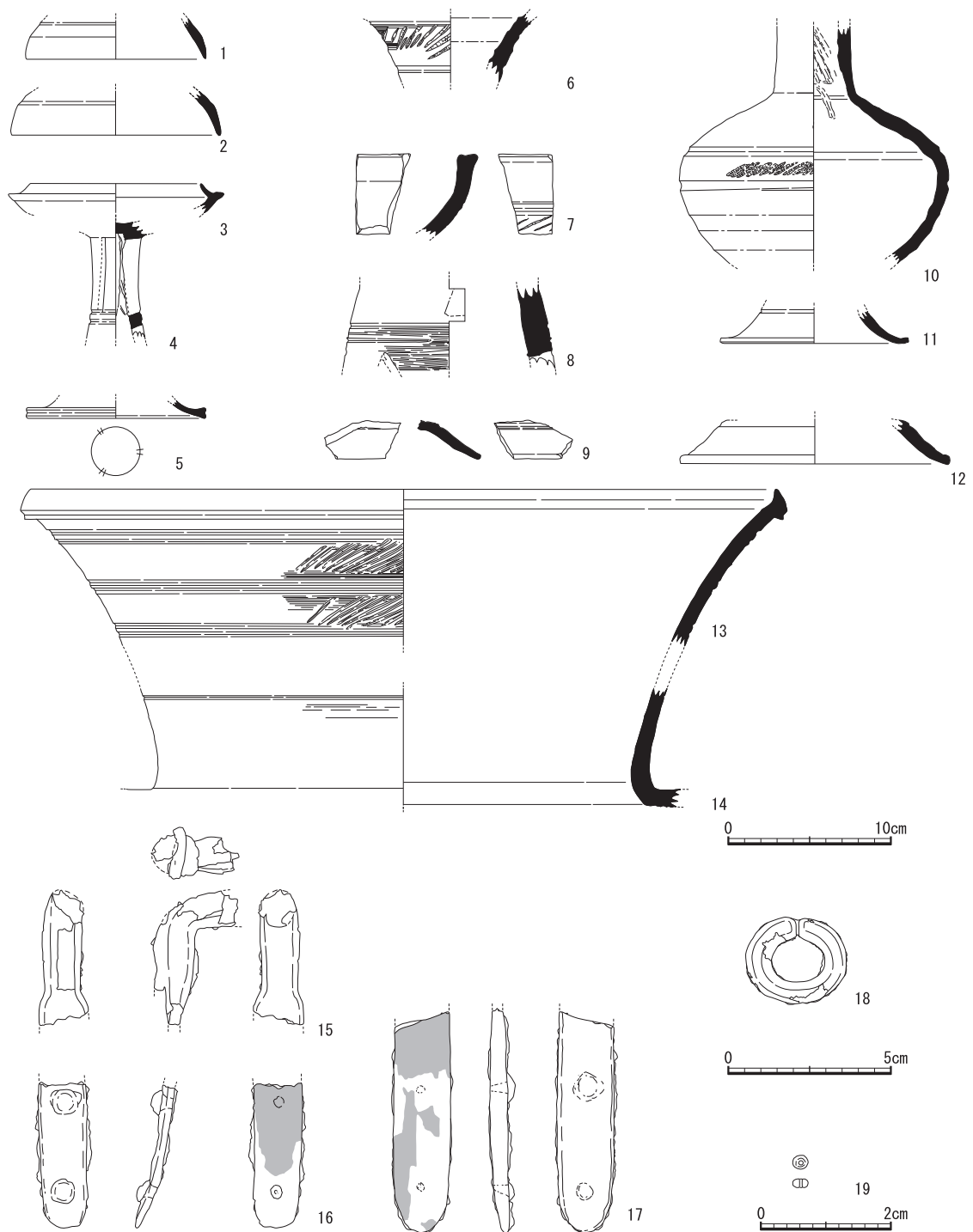
開口部の腰石間は、幅 2.5 m である。左側壁は、3 段構造となっており、2 段目の石が 40cm 程開口部側に押し出された状態になっている。これは、4 トレンチ側の削平により 2 段目の石が押し出された可能性がある。これに対し右側の側壁は、1 石で側壁を構成しているが、天井石が崩落した際に外側に若干押し出されたためか、若干外側に傾斜している。

#### 3 トレンチ羨道部出土遺物 (第 29 図)

3 トレンチ出土遺物として、第 29 図 1～14 は須恵器、15～17 は馬具、18 は耳環、19 はガラス玉である。1・2・13 は天井石検出時、3～12・14・15 は羨道内床面直上、16～20 は羨道内埋土から出土した。

#### 土器

1・2 は坏蓋である。1 は復元口径 12.8cm、復元器高 2.4cm を測る。内面は口縁端部に向かって直線的になっている。2 は復元口径 12.8cm、復元器高 2.7cm、復元最大径 13cm を測る。内外面共に回転ヨコナデによって調整が施されている。3 は高坏の坏部である。復元口径 10.4cm、復元最大径 13.4cm、残存器高 1.8cm を測る。立ち上がりは内傾する。内外面に回転ヨコナデによる調整が認められる。4・5 と同一個体である。4・5 は高坏の脚部である。4 は長脚 2 段の三方向の方形スカシを有する高坏で、最大径 3.2cm、残存高 7.2cm を測る。外面に 2 条の沈線がめぐり、灰かぶりの自然釉が付着、内面にはシボリの跡が認められる。沈線の間には赤色顔料の付着が見受けられる。調整は外面に回転ヨコナデが施されている。5 は高坏の脚端部片で、脚部径 11.0cm、残存高 1.1cm を測る。端部に向かって内外面共にわずかに外反し、端部中央部にはくぼみが見受けられる。4 と同じく一部に赤色顔料が認められ、3～5 は同一個体である。6 は壘頸部である。残存口径 10.0cm、残存高 4.2cm を測る。中央部から上部にかけての幅でカキ目文が 23 本確認できる。調整について外面は、回転ヨコナデ・カキ目紋の後、刺突文と 2 条の沈線、内面は回転ナデが施されている。7 は器台の坏部片であると考えられる。器高は 4.95cm を測る。下部に沈線と工具によるキザミがみられ、上端部には自然釉が確認できる。8 は須恵器の器台片である。残存最大径 13.2cm、残存高 5.3cm を測る。上部と下部に三角スカシが穿孔され、中央部から下部にかけて 3 条の沈線が見受けられる。三角スカシの配置より千鳥足状に複数あると考えられる。9 は長頸壺の脚部であると考えられる。上部に沈線が施されている。10・11 は須恵器の脚付長頸壺の同一個体である。10 は頸部から胴部片で、頸部径 5.2cm、胴部最大径 16.5cm、残存高 11.3cm を測る。内面には、頸部にシボリの跡が見られる。外面には、頸部から肩部まで灰をかぶっている。また、胴部の沈線の間には工具を用いた刺突状文が施されている。外面の調整は、頸部から二つ目の沈線までが回転ヨコナデ、それ以降は回転ヘラケズリ、内面は回転ヨコナデが施されている。11 は脚部で、最大底径 11.6cm、残存高 2.2cm を測る。下端部にかけて外面がわずかに外反する。上部には沈線が認められる。調整は内外面に回転ヨコナデが施されている。12 は須恵器の脚付壺の脚部である。復元口径 16.4cm、残存高 2.7cm を測る。上部に沈線があり、下端部に入る部分にわずかにくぼみがあり、少し膨らんだ形を呈している。調整は内外面に回転ヨコナ



第29図 鷹塚3トレンチ出土遺物 (1-14: 1/4、15-17: 1/2、18: 1/2、19: 1/1)

デが施されている。13は大甕の口縁部片である。外面には2条の沈線により3つの文様帯が形成され、沈線間に工具を跳ね上げた文様が施されている。14と同一個体である。14は須恵器の大甕である。最大頸部径31.3cm、残存高8.1cmを測る。上部に1条の沈線、内面下部にはあて具痕が見られる。胴部に向かう部分は大きく屈曲している。頸部から胴部にかけて灰かぶりと釉が確認できる。外面調整はカキ目後回転ヨコナデ、内面は回転ヨコナデが施されている。13と同一個体である。

出土した須恵器の時期は、TK209 型式の古相を主体であるが、一部 TK217 型式並行のものもみられる。

#### 鉄器

15～17 は木製壺鐙の破片である。16 は端部で、最大長 4.1cm、最大幅 1.5cm、厚さ 1.3cm、重さ 1.16g を測る。端部向かって外側に反っており、鉤が 2 つ確認できる。17 は 16 と同じく端部で、最大長 4.4cm、最大幅 1.75cm、厚さ 0.3cm、重さ 7.03g を測る。16 と比較すると一回り大きい。端部向かって外側に若干反っており、鉤が 2 つ確認できる。上部から中央部にかけて木質部が残る。15 は壺鐙の U 字形金具で、16 と同一個体である。最大長 6.5cm、最大幅 1.8cm、厚さ 0.5cm、重さ 15.08g を測る。

#### 装飾品

18 は銅地銀張の耳環で、最大外径 3.05cm、最小外形 2.61cm、断面最大径 0.875cm、断面大小径 0.77cm、重さ 13.83 g を測る。表面は風化が進み剥離している箇所があるが、銀装が残っている。19 は紺色のガラス小玉で外面に擦痕が見られる。今回は 1 点しか確認できなかったが、本来複数あったものと考えられる。

#### 鷹塚 4 トレンチ (第 30 図)

3 トレンチで、鷹塚古墳の主体部である横穴式石室の開口部分が確認されたため、開口部西側の周溝の確認と周溝と開口部の接続状況を確認することを目的とし、3 Tr 西側に長さ 5.5 m、幅 1.5 m の調査区を設置した。また、調査区西側には、長さ 2.0 m、幅 2.0 m と長さ 3.0 m、幅 2.0 m の 2 箇所調査区を設定した。

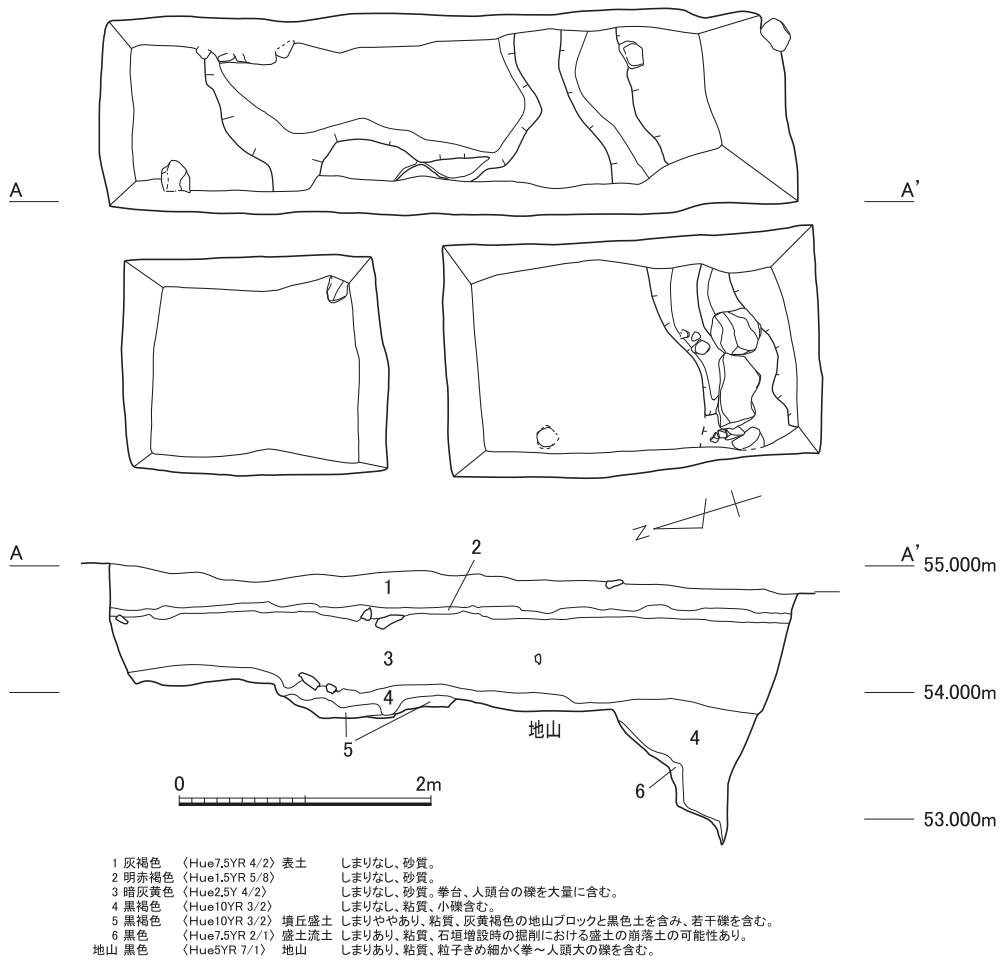
土層の堆積状況として、1～4 層は、掘削が行われた後、整地を行った層であると考えられる。5 層は、しまりがあり、黒褐色だが、灰黄褐色の地山ブロックと黒色土を含み、若干礫を含む。6 層は黒色で、石垣増設時の掘削における盛土の崩落土と思われ、黒色でしまりがある。5 層は、盛土である。地山は、掘削により落ち込んでいるが、トレンチの南端部分まで続くとみられる。

4 トレンチは民家建設の際に掘削され墳丘形態の明確な検出はできなかったが、円墳では考えられない域に盛土が検出されたトレンチである。

#### 鷹塚 5 トレンチ (第 31 図)

周溝及び墳端の確認をするため、墳丘西側平坦面の現況墳丘下端より、長さ 26.9 m、幅 1.5 m のトレンチを設定した。また、当初円墳と想定し調査区をトレンチ設定していたが、想定した位置より墳丘側で墳端を検出したことから、円墳という墳形見直す必要性が生じ、改めて墳形について検討するに至った調査区である。

掘り下げの結果、設定したトレンチ東側から 2.8 m で、墳端と考えられる列石を検出した。この列石は、2～3 段以上で積まれた状態で確認し、列石基底部の標高は 54.0 m であった。また、列石より外側には、周溝と考えられる溝状遺構を検出した。この遺構の溝底部の幅は 8.8 m 程で、外側の立ち上がりについては削平を受けている。さらに、溝内の土層堆積状況を確認するため、トレンチ南側壁面に沿って、長さ 7.4 m、幅 0.6 m のサブトレンチを設定した。



第30図 鷹塚4トレンチ平面図・土層断面図 (1/60)

トレンチ北壁面 (D-D') の土層堆積状況は、1～2層は別府市が行った調査時の埋戻し土であり、3～6層に関しても、コンクリートブロックなどを含む現代の攪乱層である。10・11層については、墳丘からの盛土の流土であると考えられ、石列直上に堆積している。12～16層は、中世以降の整地土であると考えられる。17～21層は、溝状遺構の埋土で、18層については須恵器片が含まれている。

トレンチ南壁面 (C-C') についての土層堆積状況については、基本的に北側壁面と同じ様相を呈す。1～3層は現代の攪乱で、表土が堆積した後に掘られ、1・3層にいたっては中世以降の整地層をまで削平している。7層は多くの拳大の礫と土が堆積し、礫については40cm程堆積していることから、天地返しによる堆積であると思われる。

9～13層は、硬質と軟質の土壌を交互に入れられた中世以降の整地層である。15～20層は墳丘の反対から流れ込んだ自然堆積土でレンズ状に堆積している。

21～24層は墳丘側から堆積した墳丘盛土の再堆積土層で、21・22層については、土器片を含む包含層である。



27・29・30・31層は、墳丘の盛土の再堆積土層と思われる。

26・32～34層については、32層については列石直下の層で、小礫を含むよくしまった層である。33層については溝底まで続いていることから、墳丘築造時に一旦地山まで掘り込んだ後、フラットな面を形成するための盛土層であると考えられる。26層はよくしまった層で、墳丘の盛土が流れないための土止めの層であると思われる。

以上より、墳端より外側で検出した溝については、幅が広く、1トレンチで対岸の立ち上がりを確認できなかったことや、一旦掘り込んだ後整地していることから、尾根から墳丘基底部分を方形に削り出すための遺構であると考えられる。

#### 鷹塚 6トレンチ (第32図)

墳丘の規模、平面形態、周溝の確認を目的として、墳丘の北側に長さ6.6m、幅1.5mのトレンチを設定した。

調査の結果、トレンチ墳丘側は、土抗、現代の攪乱層などによって葺石の確認はできなかった。しかし、近世の石組の水路に上部が一部切られているもののトレンチ北側で東西に直線的に伸びる墳端の列石が確認された。この列石は7トレンチ、8トレンチにおいても検出された。

土層の堆積状況は、1～5・8～10層は表土及び攪乱層である。11層は暗褐色土の近世の整地層である。

12～18黒色・黒褐色層は近世の溝（水路）の埋土である。19～22層は拳～人頭大の礫を含んだ中世の整地層である。21層のにぶい黄褐色土を除いて暗褐色でしまりが無くシルト質の土が堆積している。23層は10～15cmの礫を含んだ黒色層で墳丘盛土の再堆積土とみられる。同じく24～26層も23層と同様に墳丘盛土の再堆積層である。27～28層の黒褐色層は墳丘盛土と考えられ、29層の極暗褐色土は、墳端の列石の下に潜り込んでいることから、墳丘築造時の盛土であると考えられる。

#### 鷹塚 7トレンチ (第33・34図)

墳丘の平面形態や周溝確認を目的として、墳丘西北側に長さ10.8m、幅1.5mのトレンチを設定した。

調査の結果、トレンチ西側の墳丘部分は、一部近世以降に削平及び整地されていたが、トレンチ中央よりやや西側では南北に走る墳端の列石と溝状遺構を検出した。

土層の堆積状況は、1～4層は表土及び攪乱層である。5～9層は溝の埋土で、全体的にしまりはなく、シルト質の土が堆積する。自然堆積で底には若干砂が堆積していたため、水路として利用したものと考えられる。水路の底から13cの白磁、近世陶磁器が出土した。10・11・13・14層は中世の整地層で4・10・13・14・15層の上面は、中世の遺構検出面である。14層のみ締りが強い。15層は黒褐色で礫を多く含む。16層及び19・20層上面は中世の文化面である。いずれも列石以東に堆積する。19層のみ黒褐色で他は黒色を呈する。20層はレンズ状に堆積する。2～5cm程度の小石を敷き詰め、固く締まり道の様相を呈す。19層から鎌倉時代以降の遺物が出土している。17層黒色土、18層黒褐色土は墳丘盛土の再堆積土層である、22層は、にぶ

- 1 黒色 (Hue7.5YR1,7/1)
- 2 黒色/灰黄褐色 (Hue10YR2/1)/(Hue10YR4/2)
- 3 オリーブ黒色/オリーブ褐色 (Hue7.5Y2/2)/(Hue2.5Y4/3)
- 4 黒褐色 (Hue10YR2/2)
- 5 黒色 (Hue7.5YR2/1)
- 6 黒色 (Hue10YR2/1)
- 7 黒褐色 (Hue10YR3/2)
- 8 黒色 (Hue7.5YR2/1)
- 9 黒色 (Hue7.5YR1,7/1)
- 10 黒色/黒色 (Hue10YR1,7/1)/(Hue10YR2/1)
- 11 黒褐色 (Hue10YR2/2)
- 12 黒色 (HueN1.5/0)
- 13 黒色 (HueN1.5/0)
- 14 黒色 (Hue10YR1,7/1)
- 15 黒褐色/黄褐色 (Hue7.5YR2/2)/(Hue10YR5/6)
- 16 黒褐色 (Hue7.5YR2/2)
- 17 黒褐色 (Hue10YR2/2)
- 18 黒色 (Hue7.5YR1,7/1)
- 19 黒褐色/黄褐色 (Hue5YR1,7/1)/(Hue10YR5/6)
- 20 黒色 (Hue10YR1,7/1)
- 21 暗褐色 (Hue10YR3/3)
- 22 黒褐色 (Hue10YR2/2)
- 23 にふい黄褐色 (Hue10YR4/3)
- 24 黒褐色 (Hue10YR3/2)
- 25 暗褐色 (Hue10YR3/3)
- 26 黒褐色 (Hue10YR3/2)
- 27 黒色 (HueN1.5/0)
- 28 黒褐色 (Hue7.5YR2/2)
- 29 黒色 (Hue10YR1,7/1)
- 30 黒褐色 (Hue10YR2/2)
- 31 黒褐色 (Hue10YR2/3)
- 32 暗褐色 (Hue10YR3/3)
- 33 黒褐色/灰黄褐色 (Hue10YR3/2)/(Hue10YR4/2)
- 34 にふい暗褐色 (Hue10YR3/3)
- 地山A 黒褐色 (Hue2.5Y3/2)
- 地山B にふい黄褐色/黒褐色 (Hue10YR4/3)/(Hue7.5YR2/2)

表土 軟質。あまりしまりがなく、粘質。現代の攪乱。礫大から人頭大までの礫を含む。ビニールやゴミ、ブロック、竹や炭化物を含む。

中世整地層 粘質。やや粘質。ややしまっている。中世に埋められた層が近世に削られ、そこに土が堆積した層。

黒色土 (Hue10YR1,7/1)は軟質、粘質、しまっている。黒色土 (Hue10YR2/1)は硬質、砂質、しまっていない。小さな礫を含む。

中世整地層 軟質、粘質、しまっている。12-13の層より少し明るい。中世に埋められた層が近世に削られ、そこに土が堆積した層。

硬質、粘質、しまっている。12より硬質。植物の根のような白い繊維を含む。中世に古墳の墳丘を削平して埋立られた耕作土。

中世整地層 軟質、粘質、しまっている。中世に古墳の墳丘を削平して埋められた層。客土。

軟質、粘質、しまっている。5cm程度の礫を含んでいる。自然堆積の層。中世に削平されている。

硬質、粘質、しまっている。地山の土をきんんでいる。墳丘の反対側から流れ込んだ自然堆積の層。3の攪乱で削られている。

軟質、粘質、しまっていない。小さな礫を含む砂堆積層。墳丘の反対側から流れ込んだ自然堆積の層。3の攪乱で削られている。

やや硬質、粘質、しまっている。墳丘の反対側から流れ込んだ自然堆積の層。3の攪乱で削られている。

硬質、粘質、しまっている。植物の根のような白い繊維を含む。土器を含む。墳丘の反対側から流れ込んだ自然堆積の層。窪んだ部分は岩があったと考えられる。3の攪乱で削られている。

やや軟質、粘質、しまっている。小石を含む。墳丘側から流れ込んだ自然堆積の層。中世に削平されている。

硬質、粘質、しまっている。土器を含む。墳丘の反対側から流れ込んだ自然堆積の層。

軟質、粘質、しまっている。土器を含む。墳丘側から流れ込んだ自然堆積の層。

軟質、やや砂質、しまっている。墳丘側から流れ込んだ自然堆積の層。

軟質、粘質、しまっている。地山のブロック。盛土が少し混じっている。墳丘側から流れ込んだ自然堆積の層。

軟質、粘質、しまっている。地山のブロックを少量含む。墳丘の反対側から流れ込んだ自然堆積の層。窪んだ部分は岩があったと思われるので、堆積が乱れている。

やや軟質、粘質、しまっている。地山のブロックを少量含む。礫大の礫を一つ含む。墳丘の盛土が流れないための土止めだと思われる。

盛土流土 軟質、粘質、しまっている。

墳丘盛土 軟質、粘質、しまっている。27よりもやや明るい。土器を含む。

盛土流土 軟質、粘質、しまっている。

盛土流土 軟質、粘質、しまっている。所々にしまっていない部分がある。

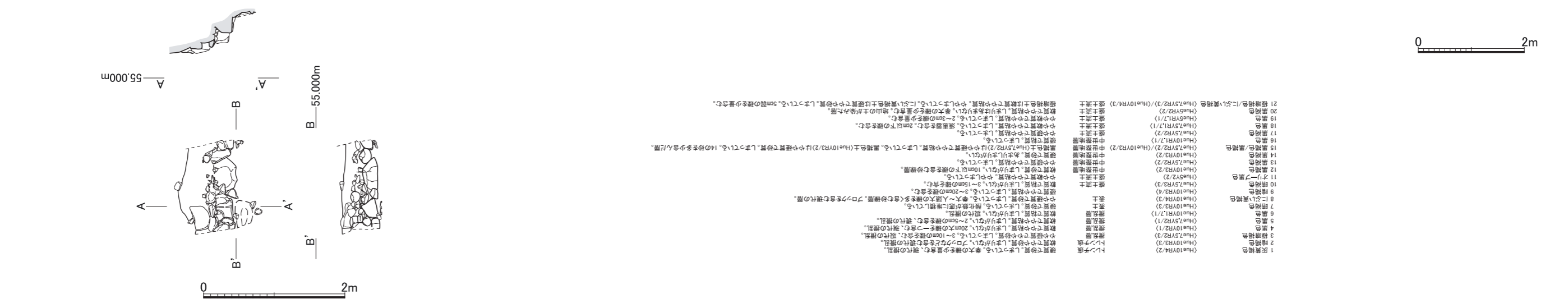
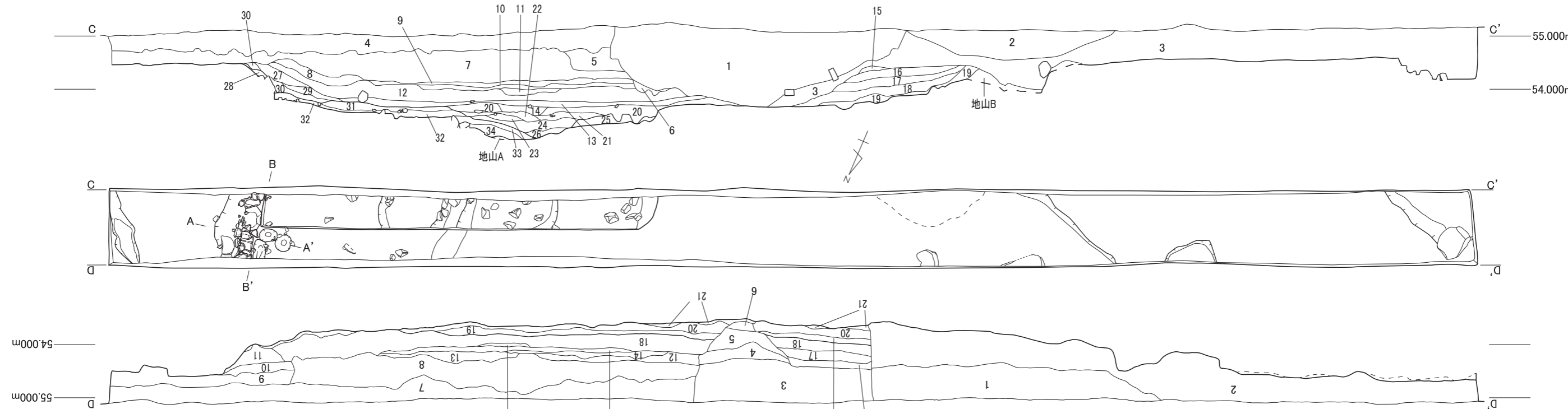
築造時盛土 軟質、やや砂質、しまっている。墳丘側は、5cm-10cm程度の礫を多く含む。土器を含む。墳丘側は列石が落ちないよう、礫を入れて叩きしめてある。

黒褐色土はやや硬質、やや砂質、しまっており、全体的に多い。灰黄褐色土は硬質、やや砂質、しまっており部分的にある。盛土が流れないよう、溝の底まで層が続く。

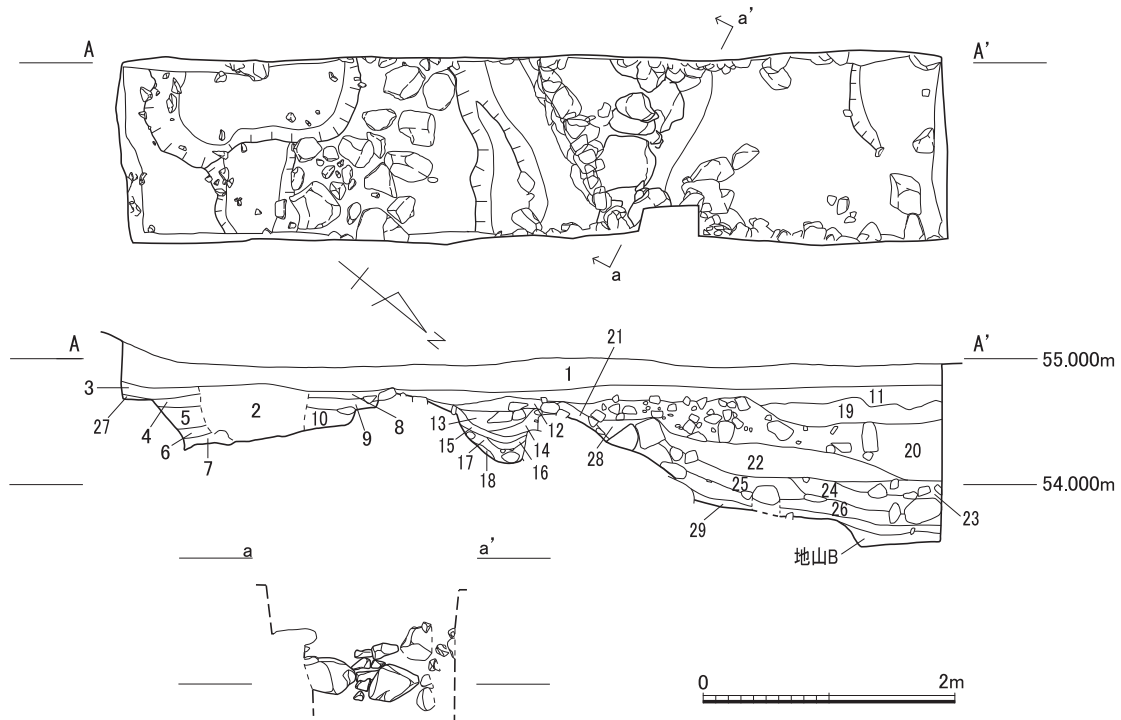
築造時盛土 硬質、やや砂質、しまっている。礫大の礫を含む。地山直上の盛土。

地山 やや硬質、やや砂質、しまっている。

地山 軟質、にふい黄褐色土はややしまっている。黒褐色土は粘質。3の攪乱によって黒土が混じった地山の層。



第 31 図 鷹塚 5 トレンチ平面図・土層断面図 (1/60・1/80)



1 黒褐色	(Hue5YR 2/1)	表土	しまり有り。粒子は細かい。シルト土。針金や袋等の現代遺物を含む。
2 黒色	(Hue7.5YR 2/1)	攪乱	しまり無し。粒子は細かい。シルト土。電柱による現代の攪乱。
3 暗褐色	(Hue10YR 3/4)		しまり表土よりしまり無し。粒子は細かい。シルト土。黄色いブロックを多く含む。土坑内の埋土。
4 明黄褐色	(Hue10YR 6/6)		23よりややしまり有り。粒子は細かい。シルト土。黄色いブロックが一部に集中してある。土坑内の埋土。
5 黒褐色	(Hue10YR 3/1)	表土	しまり有り。粒子は細かい。シルト土。少量の黄色いブロックを含む。土坑内の埋土。
6 黒褐色	(Hue10YR 3/1)		しまり無し。粒子は細かい。シルト土。1cm程のブロックを含む。土坑内の埋土。
7 黒色	(Hue10YR 3/1)	墳丘盛土	しまり有り。粒子は細かい。礫は含まず。土坑の底となる。墳丘盛土の可能性。
8 黒褐色	(Hue7.5YR 3/1)		表土と同じくらいしまり有り。粒子は細かいシルト土。黄色いブロックを含む。10~20cm程の礫を含む。土坑(石捨場)による埋土層と思われる。
9 黒褐色	(Hue10YR 3/1)		しまり有り。粒子は細かい。シルト土。黄色いブロックを含む。10~20cm程の礫を含む。
10 にぶい黄褐色	(Hue10YR 7/4)		しまり有り。粒子は細かい。20よりも黄色いブロックを含む。10~20cmの礫を含む。
11 暗赤褐色	(Hue7.5YR 3/2)		赤土の層。1よりもしまり有り。やや粗い粒子。シルト土。近世の整地によって堆積した層。近世の陶磁器を含み、全体的にマンガンを含む。
12 黒褐色	(Hue7.5YR 3/2)		しまり有り。細かい粒子のシルト土。細かい粒子のシルト土。20cm弱の礫を含む。溝内の埋土。
13 黒褐色	(Hue7.5YR 3/1)		12よりもややしまり無し。細かい粒子のシルト土。25cm程の礫を含む。溝内の埋土。
14 黒褐色	(Hue7.5YR 2/2)		12よりもややしまり有り。細かい粒子のシルト土。土器を含む。溝内の埋土。
15 黒褐色	(Hue10YR 2/2)		12よりもしまり無し。細かい粒子のシルト土。近世の陶磁器を含む。
16 黒色	(Hue7.5YR 2/1)		12よりもしまり無し。細かい粒子のシルト土。5~15cm程の礫を含む。溝内の埋土。
17 黒色	(Hue7.5YR 2/1)		12よりもしまり無し。粒子は粗い砂質土。溝の壁に当たる部分。2cm程の黄色いブロックを含む。
18 褐灰色	(Hue7.5YR 6/1)		12よりもしまり無し。粒子は細かい。シルト土。
19 暗褐色	(Hue7.5YR 3/3)		しまりは1より無く、細かい。シルト土。中世の整地層。
20 暗褐色	(Hue10YR 3/3)	中世整地層	1よりややしまり無し。細かい粒子のシルト土。拳丈~人頭大の礫を多く含む。中世の整地層。
21 にぶい黄褐色	(Hue10YR 6/4)	中世整地層	1よりややしまり無し。細かい粒子のシルト土。
22 黒色	(Hue10YR 1.7/1)	中世整地層	しまり無し。細かい粒子のシルト土。中世の整地層。
23 黒色	(Hue7.5YR 2/1)	盛土流土	しまり無し。細かい粒子のシルト土。10~15cm程度の礫を含む。
24 黒色	(Hue5YR 1.7/1)	盛土流土	しまり無し。細かい粒子のシルト土。2~5cm程度の礫を含む。白い粒子が30cm程度の幅で集中的に見られる。
25 黒褐色	(Hue5YR 2/1)	盛土流土	しまり無し。細かい粒子のシルト土。墳丘から流れた自然堆積層。
26 黒褐色	(Hue7.5YR 2/2)	盛土流土	ややしまり有り。細かい粒子のシルト土。人頭大の礫を少数と土器を含む。
27 にぶい黄褐色	(Hue10YR 6/4)	墳丘盛土	しまり無し。粒子は細かい。シルト土。盛土の可能性あり。
28 黒褐色	(Hue7.5YR 2/2)	墳丘盛土	1よりしまり無し。細かい粒子のシルト土。墳丘盛土。
29 極暗褐色	(Hue7.5YR 2/3)	築造時盛土	しまり有り。粒子はやや粗い。シルト土。
地山 褐色	(Hue10YR 4/4)	地山	しまり有り。粒子はやや粗い。やや砂質。2~3cm程度の礫を含む。

第32図 鷹塚6トレンチ平面図・土層断面図 (1/60)

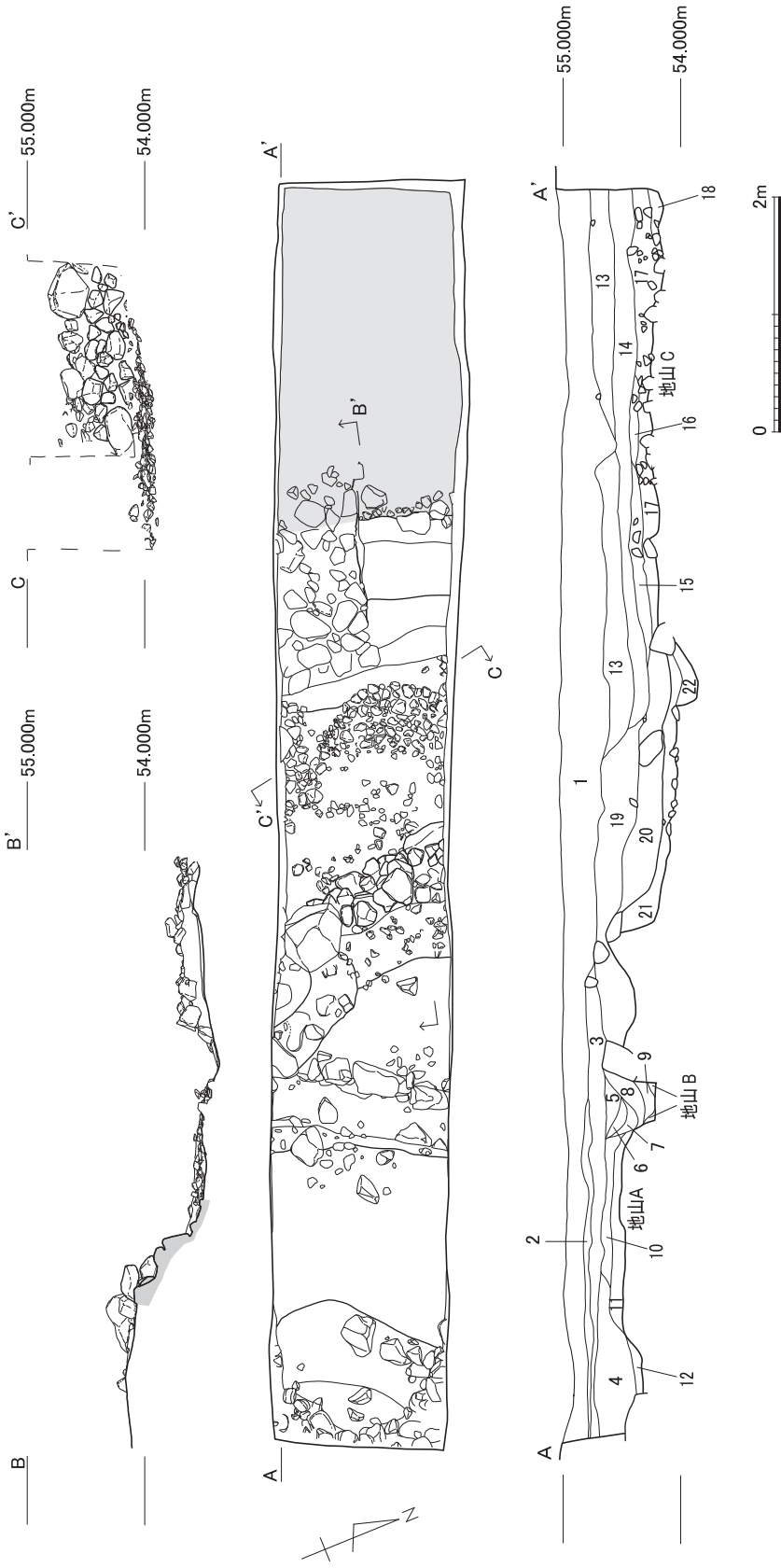
い黄橙色土および黒色土の混和土である。

出土遺物は、第34図1の土師器杯の口縁から体部までの破片のみである。やや内湾した口縁から体部にむけて丸みを帯びる。調整は内外面ともミガキを施す。赤褐色をしており、焼成は良好である。

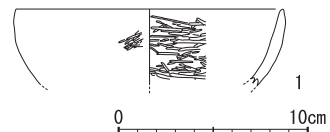
### 鷹塚 8トレンチ (第35図)

6・7トレンチで検出した墳端の列石が、どのように接続するかを確認するため、両トレンチの間に上辺2.25m、幅2.9m、下辺3.75mの台形のトレンチを西北方向に設定し調査を実施した。

調査の結果、トレンチ南東側から1.8mの地点で、30~50cm程度の石を並べた墳端の列石を検出した。この列石は、6トレンチと同様に東西に走っているが、南方向に若干丸みを帯びている。さらに、7トレンチでは南北に走る列石が検出されていることから、8トレンチの南側から0.7m付近が墳丘北西側の角になると考えられる。また、列石下の床面は、北西に向かって緩やかに



第33図 鷹塚7トレンチ平面図・土層断面図 (1/60)



第34図 鷹塚7トレンチ出土遺物 (1/4)

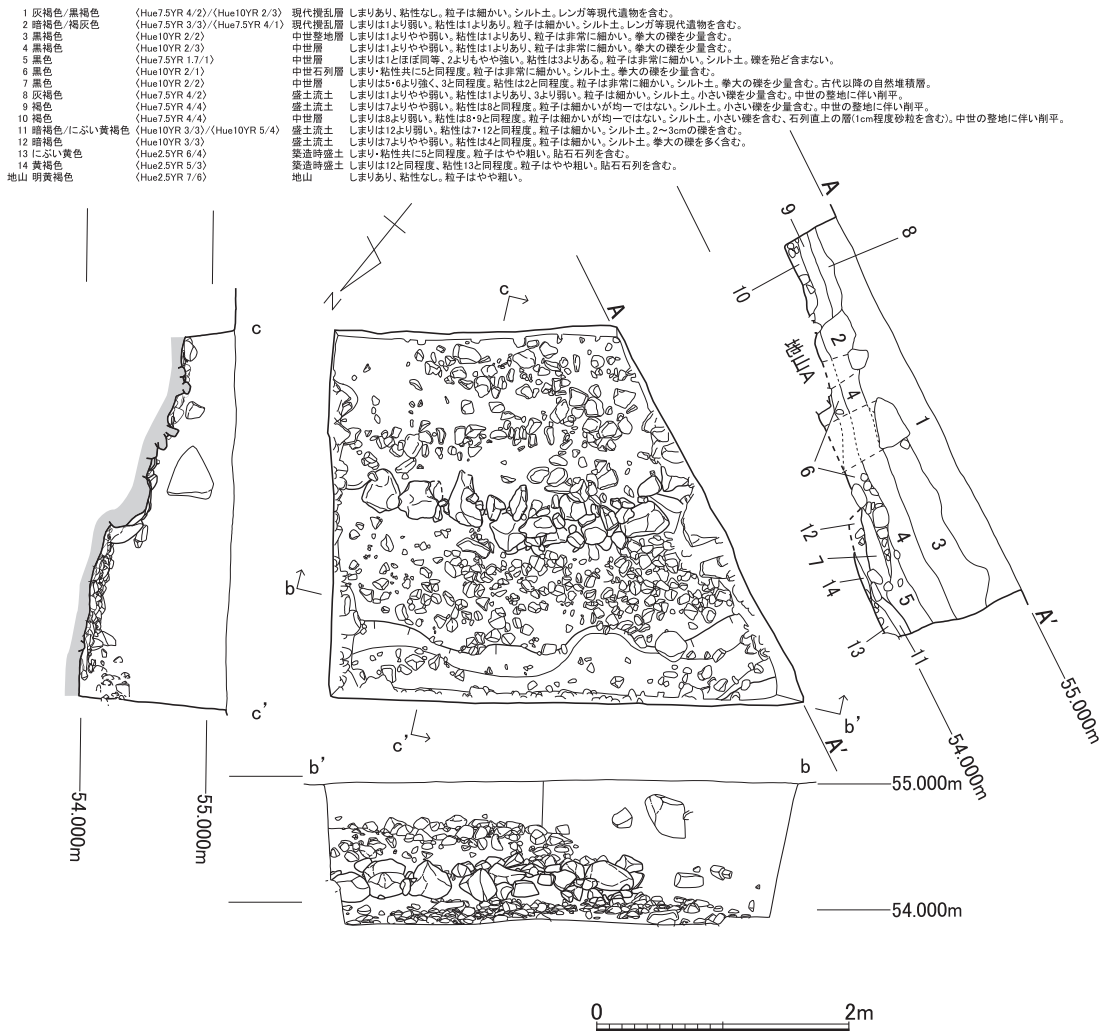
表土  
江土 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。石が多く、粘りが細かい。  
2 黒褐色 (Hue5YR 3/1)  
3 暗赤褐色 (Hue5YR 3/4)  
4 黒色 (Hue10YR 2/1)  
5 黒色 (Hue10YR 2/1)  
6 黒色 (Hue10YR 2/1)  
7 黒色 (Hue10YR 2/1)  
8 黒褐色 (Hue5YR 1.7/1)  
9 黒色 (Hue7.5YR 1.7/1)  
10 黒色 (Hue10YR 1.7/1)  
11 暗褐色 (Hue10YR 2/1)  
12 に近い黄褐色 (Hue10YR 2/1)  
13 黒色 (Hue10YR 2/1)  
14 黒褐色 (Hue10YR 2/1)  
15 黒褐色 (Hue10YR 2/1)  
16 黒色 (Hue10YR 2/1)  
17 黒色 (Hue10YR 2/1)  
18 灰黒褐色 (Hue10YR 4/2)  
19 黒褐色 (Hue10YR 2/1)  
20 黒色 (Hue10YR 1.7/1)  
21 黒褐色 (Hue10YR 3/2)  
22 黒褐色 (Hue10YR 6.4/4) (Hue7.5YR 2/1)  
地山A に近い黄褐色 (Hue10YR 6.4/4) (Hue7.5YR 2/1)  
地山B に近い黄褐色 黒色 (Hue2.5YR 6/6)

土層  
1 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。石が多く、粘りが細かい。  
2 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。一部赤色土層を含む。  
3 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。やや粘りが細かい。  
4 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
5 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
6 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
7 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
8 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
9 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
10 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
11 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
12 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
13 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
14 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
15 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
16 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
17 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
18 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
19 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
20 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
21 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
22 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。

地山  
地山A 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。石が多く、粘りが細かい。  
地山B 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。  
地山C 粘り有り、粘性若干なし、シルト土。粘りが細かい。

傾斜し、傾斜部分に拳大の石を敷き詰められていた。

土層堆積状況としては、1層の褐灰色/暗赤褐色/暗褐色、2層の極暗褐色は、レンガ等を含む現代攪乱層（6トレンチで確認された近世の整地層は7、8トレンチでは確認されていないことから現代の削平によって消滅か）、3層は、黒褐色の中世整地層であり、しまりは強い。3層のみ拳大の石を少量含む。4・5・6層は、黒色の中世層で礫が少ないことから中世の文化面である。4層では7トレンチから続く中世の道を検出した。7層は、黒褐色で古代以降自然堆積層であると考えられる。9層は、にぶい黄褐色で墳丘盛土流れ込みの層である。10層は、褐色で墳丘端の石列直上であるが、中世の整地に伴ない削平されている。11・12層は、暗褐色のシルト土で、墳丘盛土の流れ込みの層である。13層のにぶい黄褐色と、14層の黄褐色は、小礫を含む層で、墳丘築造時の整地土である。15は明黄褐色の拳～人頭大の石を含む地山である。



第35図 鷹塚8トレンチ平面図・土層断面図 (1/60)

### 鷹塚 9トレンチ (第36・37図)

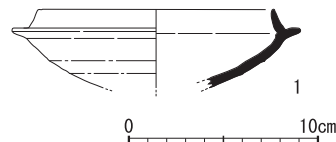
墳丘の平面形態と立体構造を確認するため、古墳の石室開口部から軸線上で対になる北側墳丘部分に長さ7.0m、幅1.0mの調査区を設定した。

調査の結果、9トレンチでは2段の列石が確認された。1段目の列石は、トレンチ北側から2.3mの所で検出された墳端の列石である。2段目は、トレンチ南端で検出した列石で、列石より北側に幅1.8mのテラスが確認できることから、段築の基底部の列石となると考えられる。この1段目から2段目までの立ち上がりに関しては、後にサブトレンチを設けて堆積状況を確認した。

2段目列石墳丘側の土層の堆積状況について南壁面(D-D')土層図から、列石より上部は、締めりはなく粘質も弱い。1層目には拳大の礫も混ざっていることから、列石より上層は墳丘盛土の流れ込みであると考えられる。列石より下層については、黄褐色の土でしまりが強い。東壁面(A-A')土層の1～4層と、西壁面(B-B')の1～4層までは、表土及び攪乱層で、A-A'壁面5・6・8・9層、B-B'壁面5・6・7層は墳丘盛土の流れ込みである。墳端の列石より下層(A-A'の10層、B-B'の17・19・20層)は、強い締めりもあり墳丘築造の際の盛土と考えられる。また、2段の列石は平行関係にあり、墳丘北側の平面形態を知ることができる。

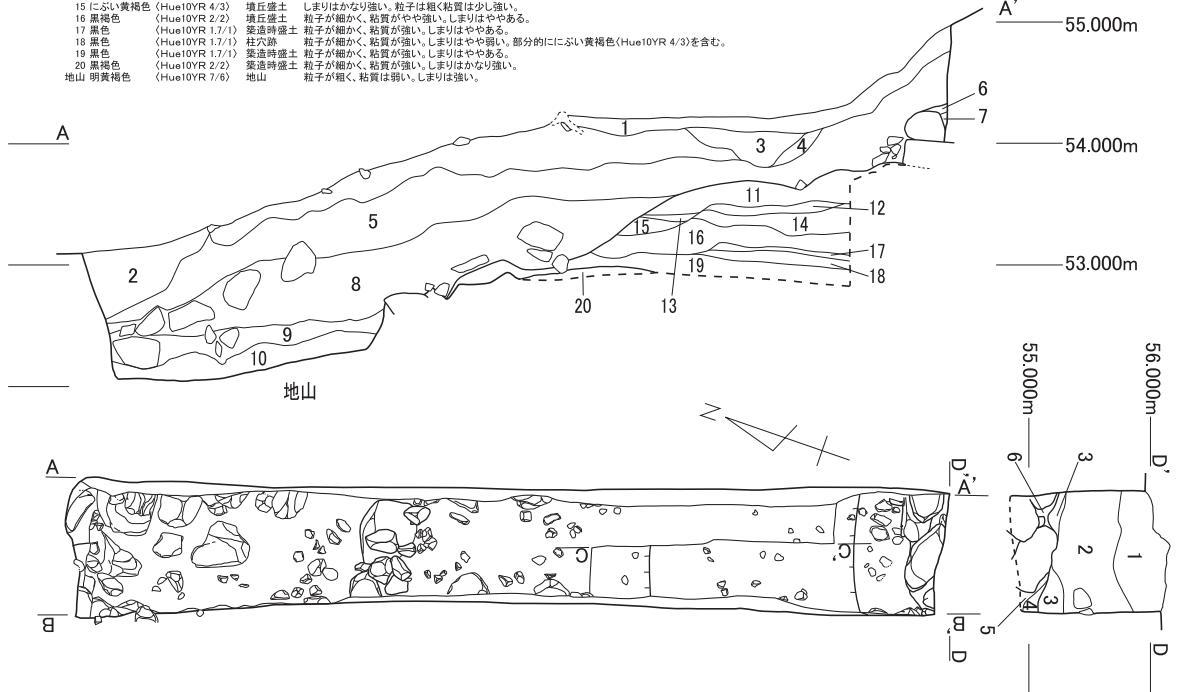
また、列石1段目から2段目にかけての立ち上がり部分の構築状況を確認するため、墳丘に、長さ2.0m、幅0.5mのサブトレンチを設け、墳丘の積み土状況を観察した(C-C'土層)。土層の堆積状況は、全体的にほぼ平行に堆積している。7層の強く締まった盛土が確認され、2段目列石以降も続くとみられる。上層から1にぶい黄色土、2層の黒褐色土、3層の黒褐色土(部分的に4層の褐色土を含む)、4層の褐色土、5層の黒褐色土(にぶい黄褐色土含む)、6層の黒褐色土となり、いずれも締めりが強い。このほぼ平行に堆積している層群が1段目の段築のテラス部分になると考えられる。

出土遺物は、第36図1にある須恵器杯身の口縁から体部までの破片である。口縁の立ち上がりは短く、端部は段がなく丸い。外面調整は、口縁部から体部上位にかけて回転ナデを施し、体部下位は回転ヘラケズリの後ナデを施す。内面調整は、回転ナデである。褐灰色をしており、焼成は良好である。時期は、TK43型式並行期であると考えられる。

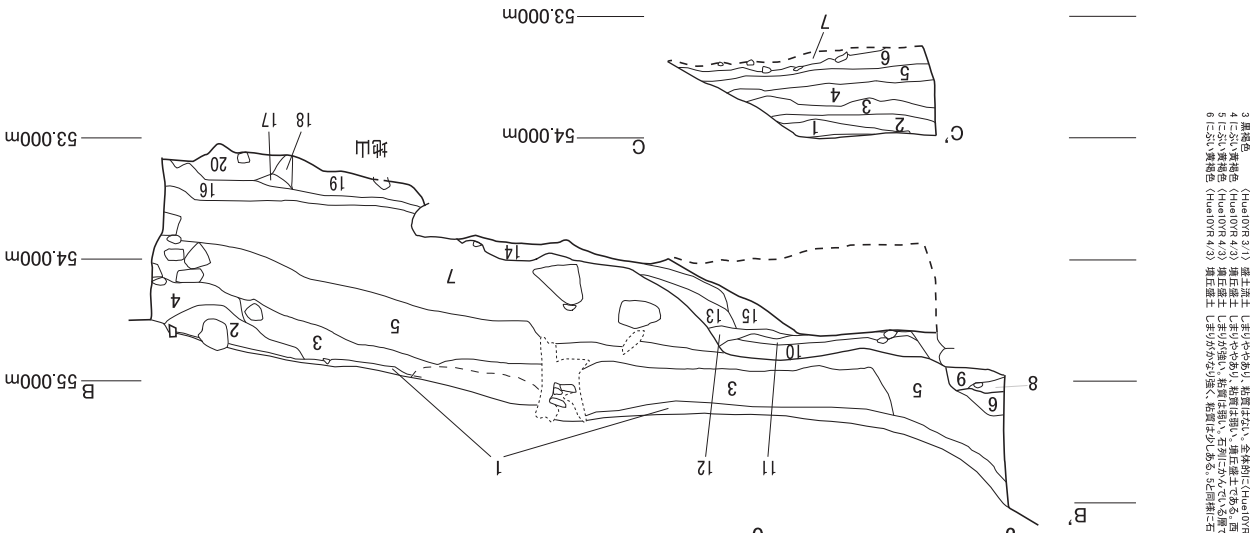


第36図 鷹塚9トレンチ出土遺物(1/4)

- 1 黒褐色 (Hue10YR 2/2) 表土層 粒子は細かい、しまりはなく、少し粘質あり。
- 2 黒褐色 (Hue7.5YR 3/2) 攪乱層 粒子は粗く、しまりもない。竹の根が入り込んでいる。粘質も弱い。こぶし丈の礫が多い。
- 3 黒褐色 (Hue10YR 3/2) 攪乱層
- 4 暗褐色 (Hue10YR 3/2) 盛土流土 粒子は細かい、粘質は弱い。大きい礫を含む。
- 5 黒褐色 (Hue10YR 3/1) 盛土流土 しまりややあり、粘質はない。全体的にふい黄褐色(Hue10YR4/3)を含む層で黄褐色土は固く粘質はない。南側壁面土層図の31に対応。
- 6 黒褐色 (Hue10YR 2/2) 盛土流土 粒子が細かく、粘質は強い。しまりも強い。
- 7 黒褐色 (Hue10YR 4/3) 填丘盛土 しまりややあり、粘質は弱い。填丘盛土である。南側壁面土層図の41に対応。
- 8 にふい黄褐色 (Hue10YR 4/3) 填丘盛土 しまりが強い。粘質は弱い。石列にかんている層で、填丘盛土である。版築の始まりの層と考えられる。南側壁面土層図の51に対応。
- 9 黒褐色 (Hue10YR 5/4) 填丘盛土 粒子が細く、粘質は強い。しまりも強い。
- 10 にふい黄褐色 (Hue10YR 4/3) 填丘盛土 粒子は粗く、粘質は弱い。しまりは強い。
- 11 黒褐色 (Hue10YR 2/2) 填丘盛土 粒子は、7より細かいが、しまりが弱く、粘質も弱い。
- 12 黒褐色 (Hue10YR 3/2) 填丘盛土 粒子が細かく、粘質は弱い。しまりもあるが少し強い。
- 13 黒褐色 (Hue10YR 2/3) 填丘盛土 しまりはやや強い。粘質はやや強い。粒子は固く小礫を含む。
- 14 にふい黄褐色 (Hue10YR 4/3) 填丘盛土 しまりはかなり強い。粒子は粗く粘質は少し強い。
- 15 黒褐色 (Hue10YR 2/2) 填丘盛土 粒子が細かく、粘質がやや強い。しまりはややある。
- 16 黒色 (Hue10YR 1/1) 築造時盛土 粒子が細かく、粘質が強い。しまりはややある。
- 17 黒色 (Hue10YR 1/1) 雑土層 粒子が粗く、粘質が強い。しまりはややある。部分的ににふい黄褐色(Hue10YR 4/3)を含む。
- 18 黒色 (Hue10YR 1/1) 築造時盛土 粒子が細かく、粘質が強い。しまりはややある。
- 19 黒褐色 (Hue10YR 2/2) 築造時盛土 粒子が細かく、粘質が強い。しまりはかなり強い。
- 20 地山 明黄褐色 (Hue10YR 7/6) 地山 粒子が粗く、粘質は弱い。しまりは強い。

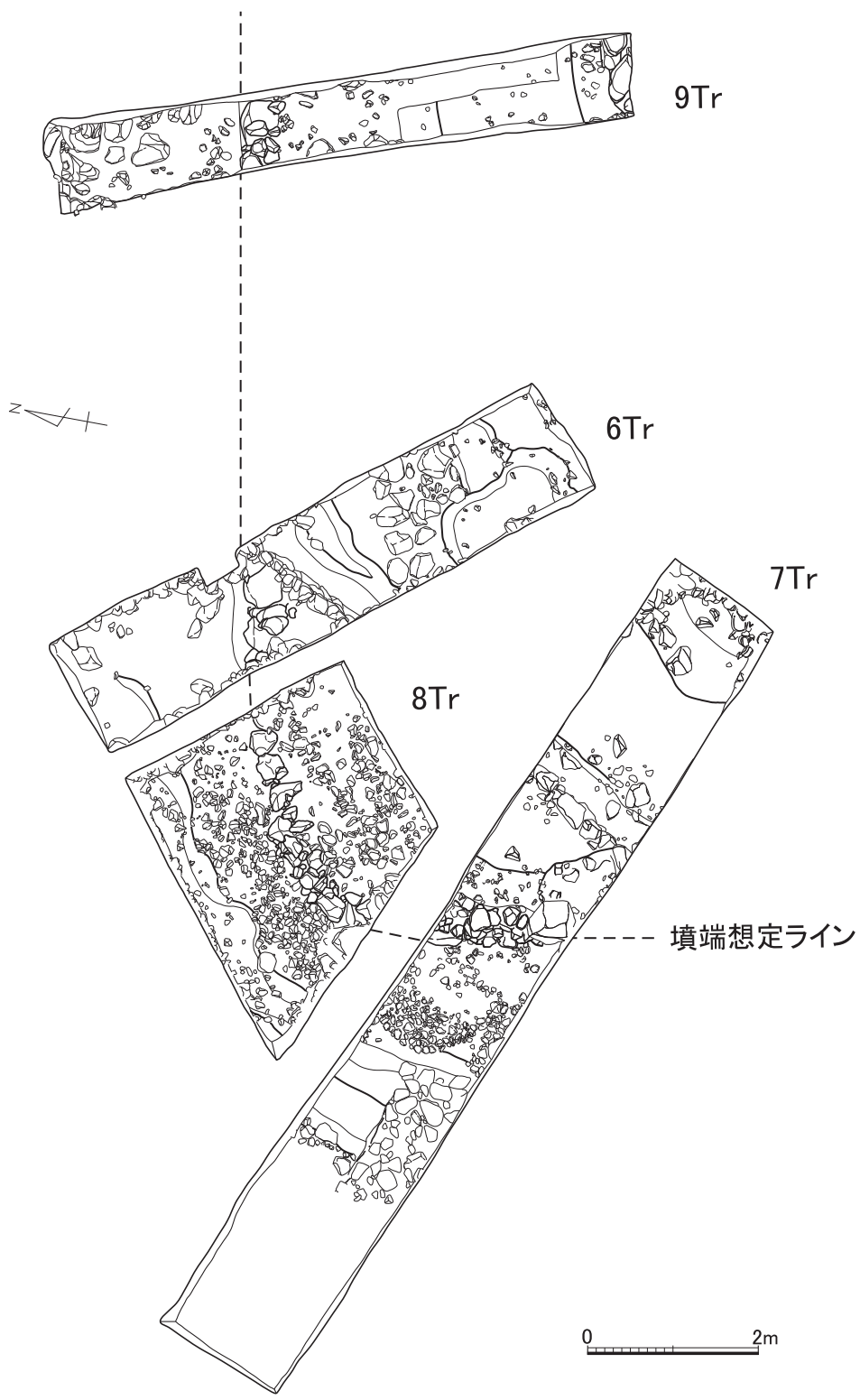


- 1 にふい黄褐色 (Hue10YR 4/3) 填丘盛土 粒子は粗く、粘質は弱い。しまりは強い。
- 2 黒褐色 (Hue10YR 3/1) 盛土流土 粒子は細かい、粘質は弱い。大きい礫を含む。
- 3 黒褐色 (Hue7.5YR 3/2) 攪乱層 粒子は粗く、しまりもない。竹の根が入り込んでいる。粘質も弱い。こぶし丈の礫が多い。
- 4 にふい黄褐色 (Hue10YR 4/3) 填丘盛土 しまりが強い。粘質は弱い。石列にかんている層で、填丘盛土である。版築の始まりの層と考えられる。南側壁面土層図の51に対応。
- 5 黒褐色 (Hue10YR 3/2) 盛土流土 粒子は細かい、粘質は弱い。大きい礫を含む。
- 6 黒褐色 (Hue10YR 2/2) 盛土流土 粒子が細かく、粘質は強い。しまりも強い。
- 7 にふい黄褐色 (Hue10YR 4/3) 填丘盛土 しまりややあり、粘質はない。全体的ににふい黄褐色(Hue10YR4/3)を含む層で黄褐色土は固く粘質はない。南側壁面土層図の31に対応。
- 8 暗褐色 (Hue10YR 3/2) 盛土流土 粒子は細かい、粘質は弱い。大きい礫を含む。
- 9 黒褐色 (Hue10YR 3/1) 盛土流土 粒子が細かく、粘質は強い。しまりも強い。
- 10 にふい黄褐色 (Hue10YR 4/3) 填丘盛土 しまりが強い。粘質は弱い。石列にかんている層で、填丘盛土である。版築の始まりの層と考えられる。南側壁面土層図の51に対応。
- 11 黒褐色 (Hue10YR 5/4) 填丘盛土 粒子が細く、粘質は強い。しまりも強い。
- 12 黒褐色 (Hue10YR 2/2) 填丘盛土 粒子は粗く、粘質は弱い。しまりは強い。
- 13 黒褐色 (Hue10YR 2/3) 填丘盛土 しまりはやや強い。粘質はやや強い。粒子は固く小礫を含む。
- 14 にふい黄褐色 (Hue10YR 4/3) 填丘盛土 しまりはかなり強い。粒子は粗く粘質は少し強い。
- 15 黒褐色 (Hue10YR 2/2) 填丘盛土 粒子が細かく、粘質がやや強い。しまりはややある。
- 16 黒色 (Hue10YR 1/1) 築造時盛土 粒子が細かく、粘質が強い。しまりはややある。
- 17 黒色 (Hue10YR 1/1) 雑土層 粒子が粗く、粘質が強い。しまりはややある。部分的ににふい黄褐色(Hue10YR 4/3)を含む。
- 18 黒色 (Hue10YR 1/1) 築造時盛土 粒子が細かく、粘質が強い。しまりはややある。
- 19 黒褐色 (Hue10YR 2/2) 築造時盛土 粒子が細かく、粘質が強い。しまりはかなり強い。
- 20 地山 明黄褐色 (Hue10YR 7/6) 地山 粒子が粗く、粘質は弱い。しまりは強い。



- 1 黒褐色 (Hue7.5YR 3/2) 表土層 しまりはなく、粘質もなし、水以順に雑質は算られなく。
- 2 攪乱層 土中に二〜三、針葉あり。
- 3 攪乱層 土にしまりはなく、粘質もなし、水以順に雑質は算られなく。
- 4 にふい黄褐色 (Hue10YR 4/3) 填丘盛土 しまりもあるが、粘質はない。部分的に強(しまり)つたところがある。
- 5 黒褐色 (Hue10YR 2/2) 盛土流土 しまりがあるが、粘質は少しある。5と6の間に石列にかんている層であるが、5より若干厚い層を占めている。南側壁面土層図の31に対応。
- 6 黒褐色 (Hue10YR 3/1) 盛土流土 しまりややあり、粘質はない。全体的ににふい黄褐色(Hue10YR4/3)を含む層で黄褐色土は固く粘質はない。南側壁面土層図の31に対応。
- 7 にふい黄褐色 (Hue10YR 4/3) 填丘盛土 しまりが強い。粘質は弱い。石列にかんている層で、填丘盛土である。版築の始まりの層と考えられる。南側壁面土層図の51に対応。
- 8 暗褐色 (Hue10YR 3/2) 盛土流土 粒子は細かい、粘質は弱い。大きい礫を含む。
- 9 黒褐色 (Hue10YR 3/2) 盛土流土 粒子が細かく、粘質は弱い。しまりもあるが少し強い。
- 10 にふい黄褐色 (Hue10YR 4/3) 填丘盛土 しまりが強い。粘質は弱い。石列にかんている層で、填丘盛土である。版築の始まりの層と考えられる。南側壁面土層図の51に対応。
- 11 黒褐色 (Hue10YR 2/2) 填丘盛土 粒子は粗く、粘質は弱い。しまりは強い。
- 12 黒褐色 (Hue10YR 3/2) 填丘盛土 粒子は、7より細かいが、しまりが弱く、粘質も弱い。
- 13 黒褐色 (Hue10YR 2/3) 填丘盛土 粒子が細かく、粘質は弱い。しまりもあるが少し強い。
- 14 にふい黄褐色 (Hue10YR 4/3) 填丘盛土 しまりはかなり強い。粒子は粗く粘質は少し強い。
- 15 黒褐色 (Hue10YR 2/2) 填丘盛土 粒子が細かく、粘質がやや強い。しまりはややある。
- 16 黒褐色 (Hue10YR 4/3) 填丘盛土 粒子が細かく、粘質がやや強い。しまりはややある。
- 17 黒褐色 (Hue10YR 2/2) 填丘盛土 粒子が細かく、粘質が強い。しまりはややある。部分的ににふい黄褐色(Hue10YR 4/3)を含む。
- 18 黒褐色 (Hue10YR 2/2) 填丘盛土 粒子が細かく、粘質が強い。しまりはかなり強い。
- 19 黒褐色 (Hue10YR 3/1) 盛土流土 粒子は細かい、粘質は弱い。大きい礫を含む。
- 20 地山 明黄褐色 (Hue10YR 7/6) 地山 粒子が粗く、粘質は弱い。しまりは強い。

第 37 図 鷹塚 9 トレンチ平面図・土層断面図 (1/60)



第38図 鷹塚6～9トレンチ配置図(1/80)

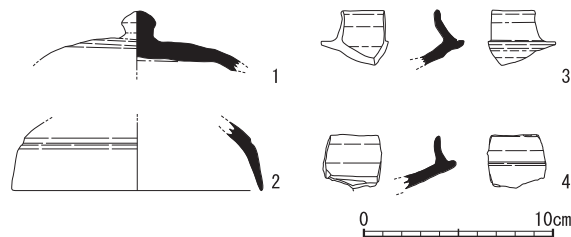


### 鷹塚6～9トレンチのまとめ（第38図）

墳丘北西側に設定した6～9の調査区より、それぞれ墳端が確認された。検出した墳端と各墳端を結ぶ想定ラインとを結ぶと（第38図）、8トレンチ付近で直角とはならないが鈍角の隅角を呈しており、方墳であることがわかる。また、墳端外側の周溝については、対岸の立ち上がりが確認できなかった。対岸の立ち上がりが唯一確認できた5トレンチでも、墳端から7m以上外側であるため、鷹塚古墳の周溝については、尾根から墳丘基底を削りだすための遺構という性格の方が強いと考えられる。

### 鷹塚表採遺物（第39図）

第39図1～4は鷹塚古墳表採遺物である。1は杯蓋である。ツマミを有する天井部のみ残存する。調整は内外面とも回転ナデを施し、外面には自然釉が付着する。外面は灰黄褐色、内面は褐灰色をしており、焼成は良好である。2は杯蓋である。天井部を欠く。口縁端部は段がなく、丸い。外面調整は、口縁部に回転ナデを施した後、上位に沈線を1条施す。沈線より上はヘラケズリを施している。内面調整は、回転ナデである。内外面とも褐灰色で、焼成は良好である。3は杯身である。口縁部から体部上位までの小片である。口縁部は立ち上がりが長い。口縁端部は段がなく、丸い。調整は、内外面とも回転ナデである。外面は褐灰色、内面は灰色で、焼成は良好である。4は杯身である。口縁部から体部上位までの小片である。口縁端部は段がなく、丸い。受け部の突出が弱く、厚い。調整は内外面とも回転ナデが施してあり、外面の受け端部から体部にかけて自然釉がある。



第39図 鷹塚古墳表採遺物 (1/4)

表3 鷹塚古墳出土土器観察表

挿図番号	調査区名	遺構	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
					口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第24図1	TTK 1Tr		須恵	坏蓋				2.4	回転ナデ・沈線	回転ナデ	B	良好	黒色	灰色	
第24図2	TTK 1Tr	北側6層、8層、14層	須恵	坏蓋	(11.6)			3.3	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	B	良好	暗灰色	褐灰色	
第24図3	TTK 1Tr	最下層 石列下トレンチ北東	須恵	坏身		(12.8)		2.5	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	B	良好	黒褐色	灰色	
第24図4	TTK 1Tr		須恵	坏身	(14.4)			3.65	回転ナデ	回転ナデ	BD	良好	灰色	黒褐色	
第24図5	TTK 1Tr		須恵	坏身	(13)	(15.4)		3.45	ヘラケズリ回転ナデ	回転ナデ	B	良好	黄灰色	褐灰色	
第24図6	TTK 1Tr	テラス部一括/	須恵	坏身	(12.2)			2.5	回転ナデ	回転ナデ	B	良好	黄灰色	灰オリーブ色	
第24図7	TTK 1Tr	テラス面	須恵	坏身	(12.2)	(15)		3.1	回転ナデ	回転ナデ	B	良好	灰白色	暗灰黄色	
第24図8	TTK 1Tr		須恵	高坏	(11.6)	(13.8)		4.2	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	B	良好	黄灰色	灰色	
第24図9	TTK 1Tr		須恵	高坏	(14.5)		(8.5)	13.3	回転ナデ・ケズリ・沈線	回転ナデ・シボリ	BE	良好	褐灰色	黄灰色	3方向2段スカシ
第24図10	TTK 1Tr		須恵	高坏			18.5	21.7	回転ナデ・ヘラケズリ・ヘラ記号・沈線	回転ナデ・シボリ	BE	良好	黄灰色	灰黄色	3方向2段スカシ
第24図11	TTK 1Tr		須恵	高坏			15.75	14.1	回転ナデ	回転ナデ	BE	良好	灰色	黄灰色	3方向2段スカシ
第24図12	TTK 1Tr		須恵	高坏	(6.5)		(9.9)	10.4	回転ナデ・沈線	回転ナデ・シボリ	BE	良好	褐灰	灰オリーブ色	2方向2段スカシ
第24図13	TTK 1Tr		須恵	高坏			(17.6)	1.95	回転ナデ	回転ナデ	BEI	良好	褐灰色	黄灰色	2方向2段スカシ
第29図1	TTK 3Tr	表土(天井石直上)	須恵	坏蓋	(11)			2.4	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	EF	良好	灰黄褐色	灰黄褐色	
第29図2	TTK 3Tr	表土(天井石直上)	須恵	坏蓋	(12.8)	(13)		2.7	回転ナデ	回転ナデ	B	良好	褐灰色	褐灰色	
第29図3	TTK 3Tr	羨道内	須恵	高坏	(5.2)	(13.4)		1.8	回転ナデ	回転ナデ	E	良好	暗灰黄色	褐灰色	
第29図4	TTK 3Tr	羨道内	須恵	高坏		(3.1)		6	回転ナデ・沈線・スカシ	シボリ	CE	良好	暗灰色	暗灰色	3方向2段スカシ 一部に赤色顔料
第29図5	TTK 3Tr	羨道内	須恵	高坏			(11)	1.1	回転ナデ	回転ナデ	E	良好	褐灰色	褐灰色	一部に赤色顔料
第29図6	TTK 3Tr	羨道部	須恵	罎	(10)			4.2	回転ナデ・カキ目後刺突文・沈線	回転ナデ	E	良好	黄灰色	黄灰色	外面に 掻目文
第29図7	TTK 3Tr	羨道部	須恵	器台				4.9	回転ココナデ・刺突文・沈線	回転ナデ	B	良好	褐灰色	褐灰色	
第29図8	TTK 3Tr	羨道内	須恵	器台		(13.2)		5.3	回転ナデ・カキ目後沈線	回転ナデ	BE	良好	褐灰色	灰色	三角スカシ
第29図9	TTK 3Tr	羨道内	須恵	脚付長頸壺					回転ナデ・沈線	回転ナデ	ABE	良好	褐灰色	黄灰色	
第29図10	TTK 3Tr	羨道内	須恵	脚付長頸壺	(5.2)			5.8	回転ナデ・沈線・刺突文	回転ナデ・シボリ	BCE	良好	灰色	灰色	
第29図11	TTK 3Tr	羨道内	須恵	脚付長頸壺	(5.2)	(16.5)		11.3	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ・シボリ	BCE	良好	灰色	灰色	
第29図12	TTK 3Tr	羨道内	須恵	脚付長頸壺		(11.6)		2.2	回転ナデ・沈線	回転ナデ	BCE	良好	灰色	灰色	
第29図13	TTK 3Tr	検出時	須恵	大甕	(46)		(16.4)	9.6	回転ナデ・沈線	回転ナデ	AE	良好	黄灰色	褐灰色	
第29図14	TTK 3Tr	検出時	須恵	大甕		(34.8)		7.2	カキ目後ナデ	カキ目後ナデ アテ具痕	BCE	良好	灰色	褐灰色	
第34図1	TTK 7Tr		土師		(17.2)	(17.4)		4	ミガキ	ミガキ	AB	良好	にぶい赤褐色	赤褐色	
第36図1	TTK 9Tr	盛土ブロック土(周溝部)	須恵	坏身	(12.5)			4.2	回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	BE	良好	褐灰色	褐灰色	
第39図1	TTK表探		須恵	坏蓋					回転ナデ	回転ナデ	CE	良好	灰黄褐色	褐灰色	
第39図2	TTK表探		須恵	坏蓋	(13.2)			3.6	回転ナデ・ヘラケズリ・沈線	回転ナデ	B	良好	褐灰色	褐灰色	
第39図3	TTK表探		須恵	坏身					回転ナデ	回転ナデ	E	良好	褐灰色	灰色	
第39図4	TTK表探		須恵	坏身				2.8	回転ナデ	回転ナデ	B	良好	褐色	褐灰色	

法量の単位はcm。( )書きは、残存と復原を表す。  
胎土:A角閃石 B石英 C長石 D白色粒子 E黒色粒子 F輝石

表4 鷹塚古墳出土土馬具観察表

挿図番号	調査区名	遺構	器種	作り	法量			
					全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
第29図15	TTK 3Tr	検出時	木製壺鈴		4.1	1.5	1.3	1.16
第29図16	TTK 3Tr	検出時	木製壺鈴		4.4	1.75	0.3	7.03
第29図17	TTK 3Tr	検出時	壺鈴	鉄具	6.5	1.8	0.5	15.08

表5 鷹塚古墳出土装身具観察表①

挿図番号	調査区名	遺構	器種	作り	外径(cm)	断面径(cm)	重量(g)
第29図18	TTK 3Tr	検出時	耳環	銅地銀張	3.05 × 2.61	0.875 × 0.77	13.83

表6 鷹塚古墳出土装身具観察表②

挿図番号	調査区	遺構	種類	材質	法量			
					長径(cm)	短径(cm)	孔径(cm)	重量(g)
第29図19	TTK 3Tr	石室内埋土中	小玉	ガラス	0.35	0.15	0.1	0.03

## 小結（第 40 図）

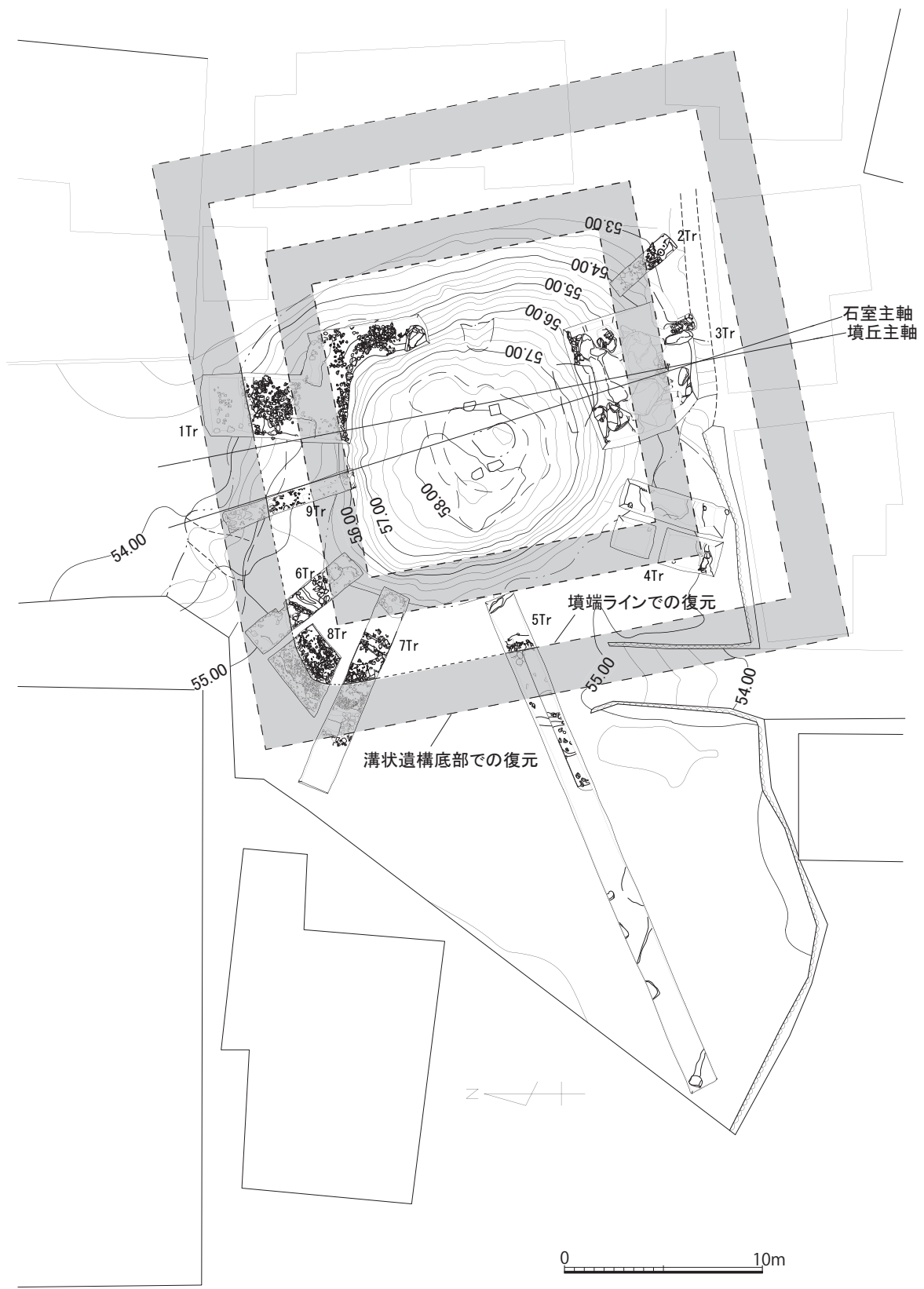
鷹塚古墳の調査については、当初円墳として調査区を設定し実施してきたが、5 トレンチと 7 トレンチで検出した墳端の列石どうしを結ぶと直線状になることから、方墳の可能性を視野に入れた調査区の設定に変更した。その結果、5・6・7・8・9 トレンチより墳端の列石を確認した。また、5 トレンチでは、列石よりも外側に溝状遺構を検出した。この溝状遺構は、他のトレンチで確認できていないが、5 トレンチの状況より、墳端から 4.8 m 外側に溝底部があることから、尾根から墳丘基底部を方形に削り出すためのものであると考えられる。

各調査区で確認した墳端について見ていきたい（第 40 図）。1 トレンチでは、調査区の墳丘側から 5.6 m 程外側で墳丘の立上りを検出した。この墳丘の立上りが墳端となる。5 トレンチでは、墳丘側から約 3 m 外側で、墳端の列石を確認した。この墳端より外側については、溝の底部までは緩やかに下降している。6 トレンチでは、調査区墳丘側より約 4.4 m 外側に墳端の列石を検出した。また、7 トレンチでも、調査区墳丘側より約 5 m 外側で、8 トレンチでは、約 1.8 m 外側で墳端の列石を確認した。9 トレンチでは、調査区の墳丘側から約 4.6 m 外側で墳端の列石を確認した。なお、6～8 トレンチの墳端は、隅丸状コーナーとなっていることから、鷹塚古墳が方墳であると決定づけた調査区である。これら、墳端の列石を結び、主軸上で反転させると 1 辺が 25 m 程の方形となる。しかし、方墳の 1 コーナーしか検出していないため、推測の域は出ないが、第 40 図のように最低でも墳長が 1 辺 25 m × 25 m の方墳になると想定できる。また、5 トレンチで検出した墳端より外側で検出した溝状遺構の墳丘側底部から墳丘主軸までを単純に反転すると、1 辺が 30 m 以上の規模となる。しかし、検出した調査区が 1 ヶ所で墳丘東側の調査を実施していない状況から定かではない。

次に 1・9 トレンチで検出した段築のテラスについて考えたい。すでに想定した墳端ラインを基に、9 トレンチで確認した段築の基底石と、3 トレンチの石室開口部より 2 つ目と 3 つ目の天井石が接する箇所をつなぎ、墳丘主軸で反転復元すると、1 辺が 15 m、幅 2.0 m 程のテラスとなる。

3 トレンチで検出した石室開口部についてみると、羨道部は、側壁の石積みの状況から、西側の側壁が入口側に向かって斜めに積まれていることや、対岸の東側の側壁が同様に斜めに加工されていることから、石室入り口は、これらを結ぶ調査区の墳丘外側から 1.2 m のラインが入口であろう。また、東側の側壁の外側に、1.4 m 程の石材が確認されており、この石材も側壁の一部であると考え、羨道部の長さが 7.9 m となる。しかし、この石材は、後世に動いた状況が確認されていることや、西側の側壁の外側に石材が確認できなかったことから、羨道の開口部側の端である可能性は低いものの否定できない。つまり、羨道の規模としては、少なくとも長さ 6.5 m（最大長 7.9 m）、幅 2.5 m（最大幅 2.8 m）、入口側の高さ 2.2 m、玄門側の高さ 1.6 m を測ることが今回の調査であきらかになり、大分県内最大の規模を有する羨道部であることが確認された。また、石室主軸については、羨道部の実測図（第 28 図）より、墳丘主軸と同じではなく、墳丘主軸より 6.5° 西側に振っていることを確認した。

築造時期については、1 トレンチで検出した一括遺物より、TK209 型式の古相である。



第40図 鷹塚古墳墳丘復元図 (1/300)



鷹塚古墳1 トレンチ全景



鷹塚古墳1 トレンチ高環出土状況



鷹塚古墳2 トレンチ全景



鷹塚古墳2 トレンチ土層堆積状況



鷹塚古墳3 トレンチ天井石検出状況



鷹塚古墳3 トレンチ完掘状況



鷹塚古墳3 トレンチ羨道付近石材出土状況



鷹塚古墳3 トレンチ羨道部内土層堆積状況



鷹塚古墳3 トレンチ羨道内玄門付近



鷹塚古墳3 トレンチ羨道内玄門前閉塞石付近



鷹塚古墳3 トレンチ羨道内左側壁石積状況



鷹塚古墳3 トレンチ A 面天井石付近土層堆積状況



鷹塚古墳3 トレンチ B 面土層堆積状況



鷹塚古墳4 トレンチ全景



鷹塚古墳4 トレンチ東側完掘状況



鷹塚古墳 5 トレンチ全景



鷹塚古墳 5 トレンチ完掘状況



鷹塚古墳 5 トレンチ墳端根石検出状況



鷹塚古墳 7 トレンチ全景



鷹塚古墳 6～8 トレンチ完掘状況



鷹塚古墳 1・9 トレンチ完掘状況



鷹塚古墳 9 トレンチ段築テラス墳丘側列石検出状況

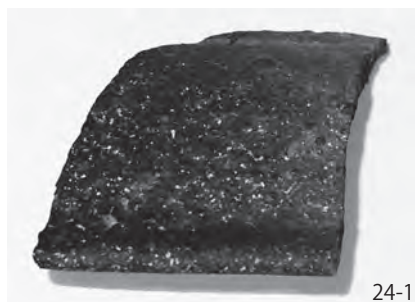


鷹塚古墳 9 トレンチ墳端根石検出状況



鷹塚古墳 9 トレンチ完掘状況





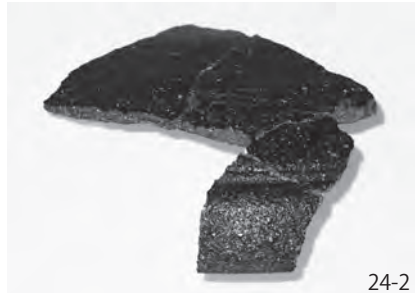
24-1



24-7



24-13



24-2



24-8



29-1



24-3



24-9



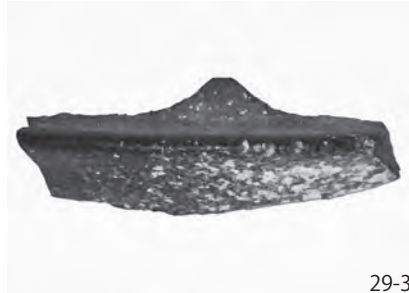
29-2



24-4



24-10



29-3



24-5



24-11



29-4



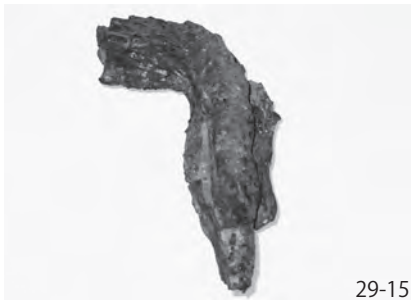
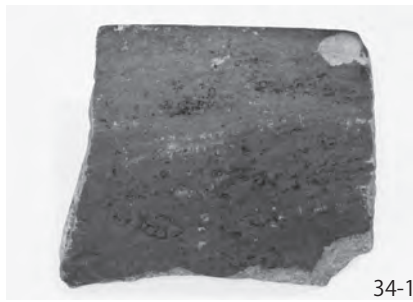
24-6



24-12



29-5



てんじんぼた  
天神畑古墳の調査



写真3 天神畑古墳

所在地：別府市大字北石垣字天神畑

調査の情報

調査機関：別府市教育委員会

調査期間：平成2年（1990）7月9日～8月2日

調査担当者：高橋徹（大分県教育委員会文化課 調査当時）

報告書情報：1991『天神畑古墳』別府市教育委員会

報告書担当者：永野康洋（別府市教育委員会社会教育課 報告当時）

再報告担当者：秦 広之（別府市教育委員会生涯学習課）

第3章第1節3で報告する天神畑古墳の発掘調査の結果は、平成2年度に行われた別府市教育委員会による調査成果を基に、実相寺古墳群調査検討委員会での検討を経て、今回再報告を行うものである。

### 3 天神畑古墳の調査

実相寺古墳群内に所在する太郎塚古墳・次郎塚古墳・鷹塚古墳は、江戸時代から知られていたのに対し、天神畑古墳は平成2年（1990）の開発計画に先立ち行われた確認調査で始めてその存在が明らかとなった。



第 41 図 天神畑古墳位置図 (1/800)

### (1) 調査の経緯

平成2年(1990)5月20日に対象地の遺跡の照会が市社会教育課(当時)にあり、実相寺春木遺跡に含まれ、隣接地には鷹塚古墳や太郎塚古墳・次郎塚古墳などの古墳が点在していることや分布調査の結果、弥生土器が確認されたことなどから遺跡の存在が想定され、確認調査を実施することになった。

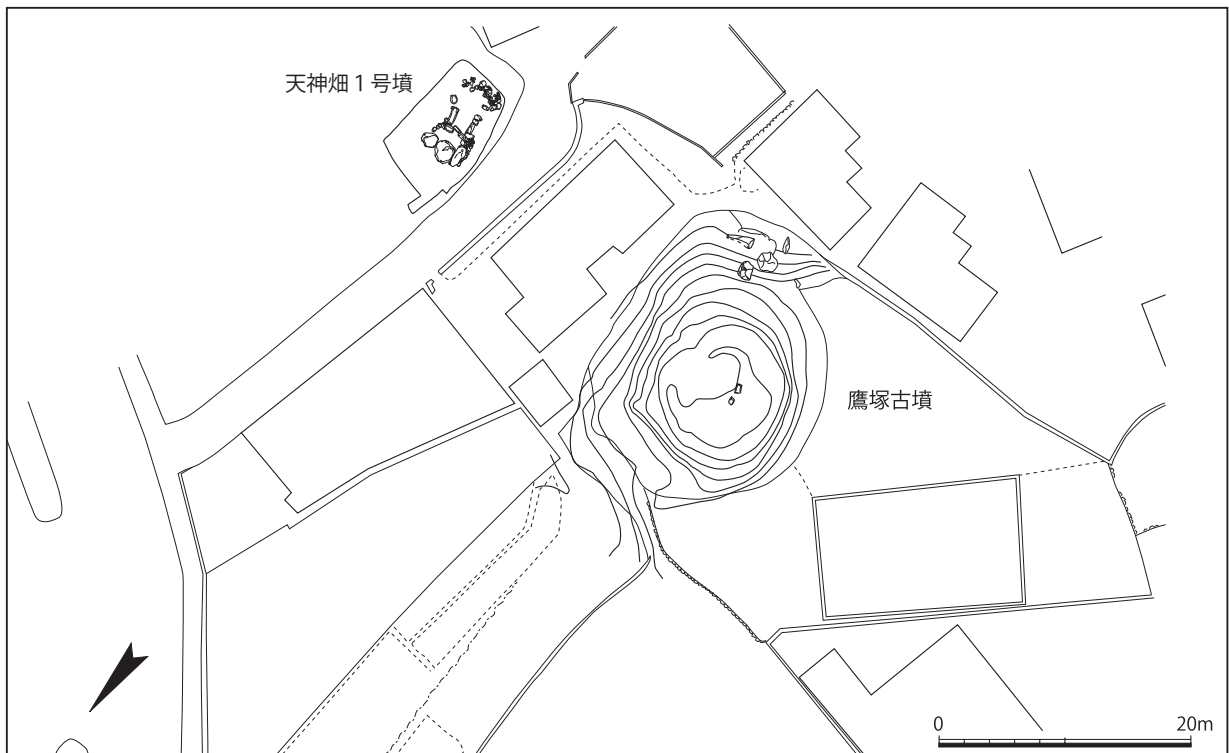
確認調査は、平成2年6月7日に大分県教育委員会文化課の協力を得て実施した。調査の結果、横穴式石室の一部と思われる巨石を確認することができ、須恵器などの遺物が出土したことから、開発事業者との協議の結果、本発掘調査を実施することとなった。

本発掘調査は、平成2年7月9日から8月2日まで実施し、別府市教育委員会が調査主体となったが、専門調査員が配属されていなかったため、大分県教育委員会に調査員の派遣を依頼し、県文化課の職員が調査を担当した。確認調査で古墳の石室を確認した150㎡を調査範囲として調査区を設定し、別府大学学生の協力を得ながら実施した。

本発掘調査の結果、単室構造の横穴式石室の基底部を確認し、6世紀後半から7世紀初頭頃の須恵器とともに馬具の一部と思われる鉄器などの遺物が出土した。

調査終了後、横穴式石室は実相寺古代遺跡公園へ移設し展示されており、内部構造の不明な点が多い実相寺古墳群において貴重な実物資料を提供している。

天神畑古墳の周辺では、近年新たに石室の奥壁及び側壁と考えられる石材が確認されている。このため、平成2年に調査が行われ、今回報告する古墳を天神畑1号墳とし、1号墳の東側20mの位置にある石室が露出する古墳を天神畑2号墳と呼称する(第41図)。



第42図 調査区位置図(1/600)

## (2) 調査の成果

天神畑1号墳の墳丘上部は、後世の開発により削平を受けており調査を行うことはできなかった。確認された石室は、玄室の下部（腰石）および羨道の一部が残存する状態であった。残存する石室の全長は、東壁の羨道から玄室まで4.3mを測り、横穴式石室の中軸は南西方向に開口する。石材はいずれも古墳周辺で算出される安山岩（角閃石安山岩）が利用されている。

### 玄室

玄室の残存状況は、西側の腰石に関して現位置を保った状態で検出されたものの、奥壁及び東壁については、斜めに倒れた状態で確認された。このため、玄室の正確な規模については判然としない部分もあるが、奥壁及び東壁の掘り込み端をその発端とすると、長さ（玄門－奥壁）2.0m、幅1.6mと長方形になる。比較的状态の良い西壁は、2つの腰石が確認され奥側が長さ1.8m、高さ1.1mと大きいものに対して、入口側の腰石は長さ0.5m、高さ0.8mと小さい石が組み込まれている。東壁の腰石は奥側の石が外側に斜傾し、入口側の石は確認することができなかった。奥壁はひとつの石により形成され、内側に斜傾して検出された。

床面には5～20cm程の円礫が密に敷かれている状態で出土し、玄門付近で須恵器が纏まって出土したほか馬具の破片等が出土した。

### 羨道

羨道は玄門に近い部分のみが残存していた。西壁は比較的垂直に立つが、東壁はやや内側に斜傾する状態であった。いずれも一段目のみ残存し、それ以上については不明である。羨道幅は1.2mと玄室幅よりもやや狭く造られている。床面には5～20cm程の円礫が玄室同様に密に敷かれている状態であった。須恵器の碗や高坏などが出土した。

### 玄門

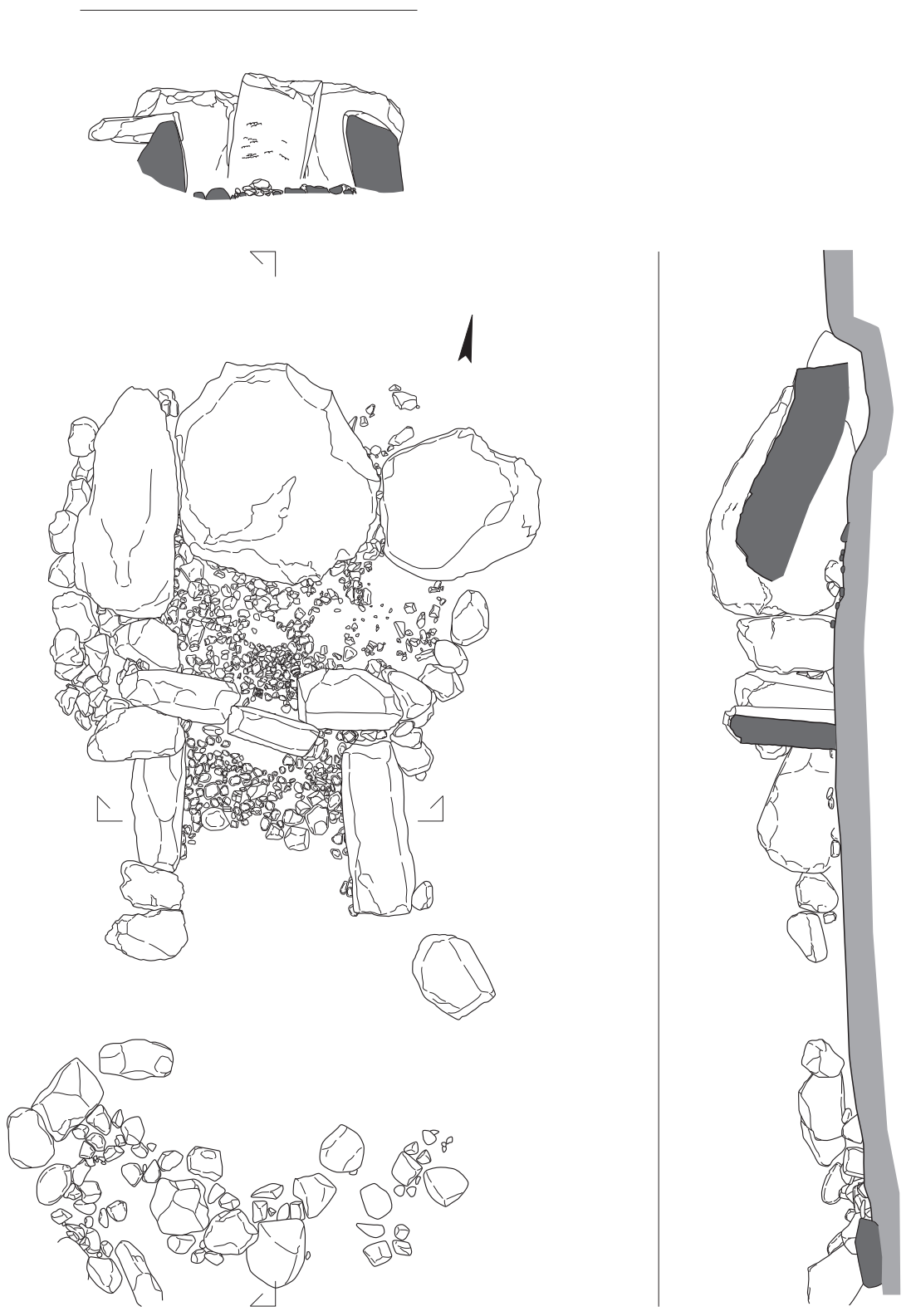
玄門部は、左右の袖石及び玄門を塞ぐ現位置を保った状態で検出されている。左右の袖石は概ね同じ規模の石が使われ側面には加工の痕跡が残っている。玄門の空間は0.5mで、羨道側に閉塞石が立てられていた。閉塞石の側面はノミ状のもので加工された痕跡が残り、横幅は0.6m、高さ1.0mを測る。

### 出土遺物

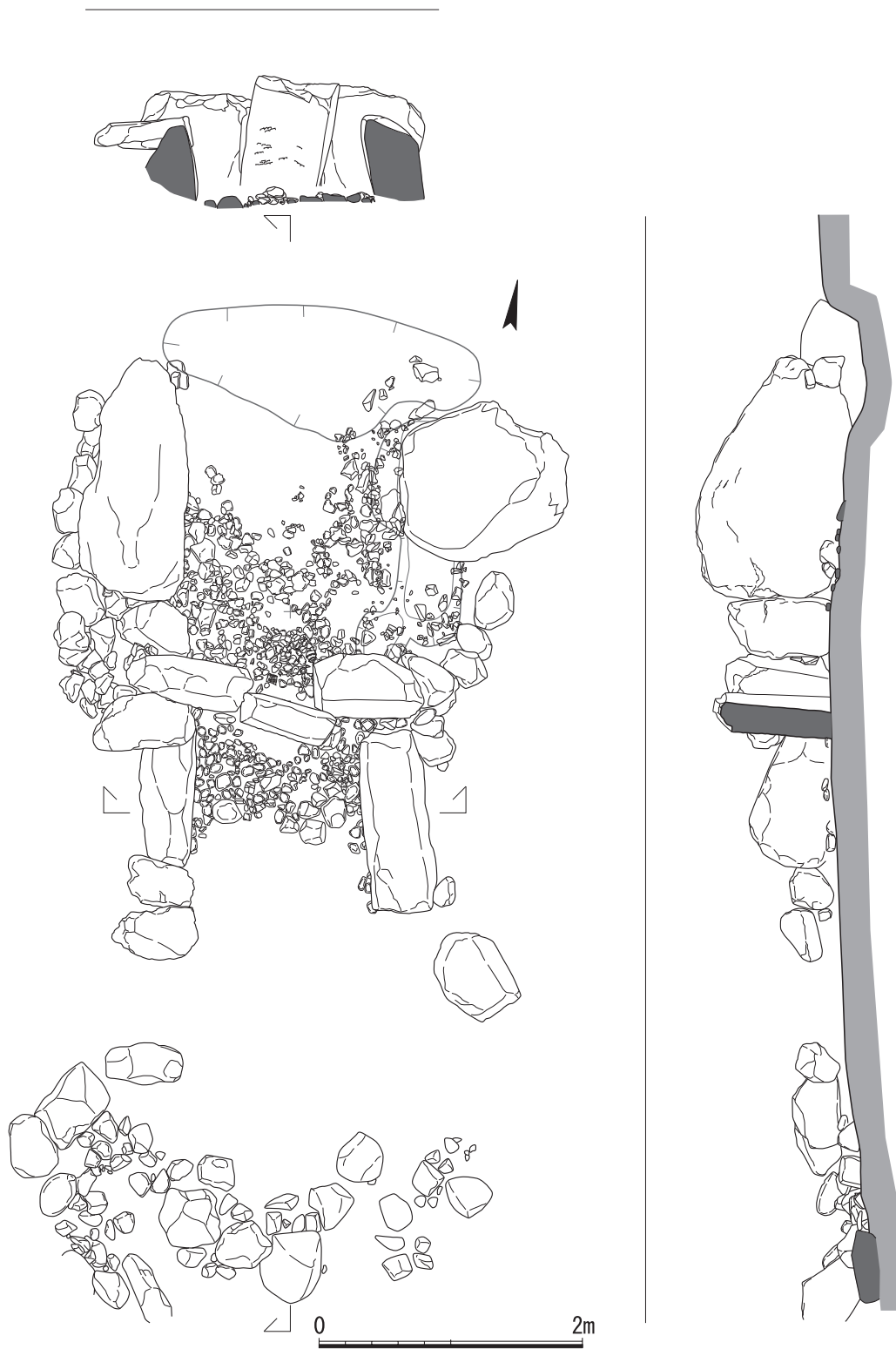
墳丘は削平を受けており、石室も底部のみ残存している状態であったため遺物の依存状態は良くない。しかし比較的大きめの破片は、玄室の入口付近で多く認められた。また、馬具と考えられる鉄器片が2点出土した。

1は脚付甕の脚部である。復元底径8.0cmを測り、内外面ともに回転ナデ調整である。

2・3・4は長頸壺のものと思われる脚部である。2と3は同一個体で3の復元底径は14.2cmを測る。

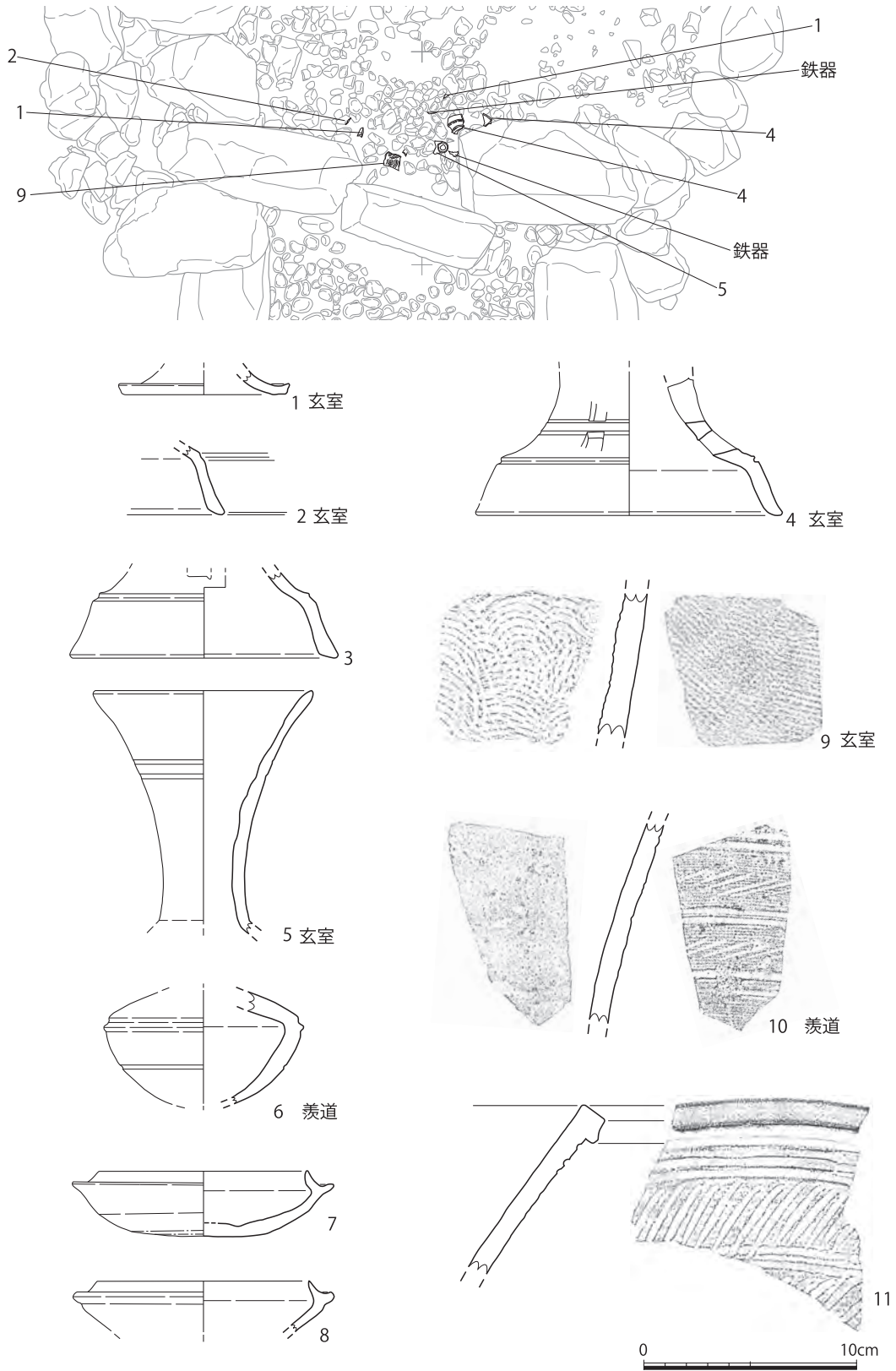


第43图 石室平面图·断面图 (1/50)



第44図 石室平面図・断面図【奥壁除去後】(1/50)





第 45 図 出土遺物 (1/3)

5は長頸壺である。頸部は外反気味に立ちあがり、中間部やや上に2条の描線を引く。口縁端部は丸く調整されている。

6は甕であり、胴部上位に肩部を持つ。肩部に2条の沈線および胴部下半に1条の沈線を廻らす。1と同一個体になるものと考えられる。

7・8は坏身である。7は復元口径は9.9cm、器高は3.0cmを測る。底部はやや扁平で、口縁部のかえり短く内傾し、口縁部端部に段を持たない。8は復元口径10.0cmを測り、7と同様にやや扁平な器形になるものと思われる。

9～11は甕である。9・10は、タタキにより成型され外面にはカキメが施される。11はわずかに外反しながら口縁部に向かって立ち上がり、口縁端部は肥厚させる。

## 小結

天神畑古墳は、平成2年の発掘調査を契機に発見された新たな古墳であり、太郎塚古墳・次郎塚古墳・鷹塚古墳とともに実相寺古墳群を構成するものである。

古墳発見の契機になった確認調査の段階において、墳丘はすでに削片されていたが、主体部である横穴式石室の基底部が残存しており、横穴式石室の実態が明らかとなっていない実相寺古墳群にあって、その特徴を知る貴重な成果が提供されている。なお、墳丘の規模や墳形に関しては確認されておらず不明である。

玄室規模は、奥壁が石室内側に倒れ込んでいたため正確な数値は不明であるが、その抜取痕から長さ2.0m幅1.6mを測る小型の長方形プランであることが確認された。

石材は安山岩の成型されたものも持ちいれられ、表面にはノミで加工した痕跡も明瞭に残る。また、石材には赤色の顔料が塗布されているが、明確な装飾は確認されていない。

遺物は、石室内および周囲から須恵器の甕や高坏などが出土したほか、馬具と考えられる鉄器片も出土した。須恵器の坏身口径は10cm程度のものが多く認められ、TK209からTK217型式期の須恵器が出土した。



石室全景（東から）



石室全景（北から）



調査前（東から）



玄室遺物出土状況（北から）



玄室西側彩色（北から）



玄門（南から）



## 地中レーダー（GPR）・電気・電磁探査



写真4 地中レーダー探査

### 調査の概要

調査主体：別府市教育委員会

調査機関：奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室

現地調査期間：平成 27 年（2015）1 月 26 日から 1 月 30 日

現地調査：金田明大（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）

石松智子（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）

ナワビ矢麻（早稲田大学大学院修士課程）

分 析：金田明大（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）

石松智子（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）

八尾純子（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）

ナワビ矢麻（早稲田大学大学院修士課程）

第 3 章第 1 節 4 で報告する実相寺古墳群の地中レーダー（GPR）・電気・電磁探査は、別府市教育委員会が独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所に委託した調査成果を掲載するものである。

## 4 地中レーダー（GPR）・電気・電磁探査

### (1) 調査の経緯

実相寺古墳群は大分県別府市に所在する古墳時代後期と考えられる群集墳である。太郎塚、次郎塚、鷹塚の三古墳が現存しており、前二者は史跡公園として保存されている。墳丘周辺の発掘調査成果や現況の観察より両古墳ともに墳丘は大きく改変を受けており、残存する墳丘の表面に石材が露出している状態であるが、その性格や内部主体の遺存状況については詳細な情報を有しておらず、その情報取得が遺跡の更なる研究の深化と適切な保存に向けて必要とされた。また、鷹塚古墳については別府大学文学部による発掘調査がおこなわれ、崩落した大型の横穴式石室の存在が明らかになっているが、崩落による主体部の詳細な情報を得る必要を有している。

また、隣接する天神畑遺跡の調査においては、天神畑古墳が発掘調査で確認され、実相寺古墳群を構成する一基であることが明らかとなった。周辺には更なる未発見古墳の可能性もあり、これらの存在の可能性を検討する情報を得ることも必要となった。

前年度に、別府市教育委員会は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所と連携し、史跡の保全を目的として鬼ノ岩屋古墳の非破壊調査を実施し、横穴式石室および墳丘に関連する情報の取得をおこなった。この結果、石室の保全に関連する情報の取得が可能であることが明らかとなった。このため、本年度については、上述した実相寺古墳群の非破壊的手法による情報収集を目的として、両社の連携の下、調査を実施した。

### (2) 調査手法の選択

地中に埋没している遺構の状況を非破壊的な手段で把握する方法のひとつとして、物理的手法を用いた遺跡探査があげられる。これらは埋蔵物の物理的な特性の違いを計測することを通じて地中の状況を知るものである。これらの手法としていくつかの方法が開発され、改良がおこなわれてきた。本調査では、これらの方法を活用し、遺跡の概要を把握することを非破壊的な手段で把握することを目的としている。

本遺跡においては、対象が古墳であること、発掘調査などによる既知の情報により対象となる深度がある程度限定されることから地中レーダー探査、電気探査を主に用いることとし、また新たに浅層部分に限られるが電気探査と同様の成果が迅速に得られる電磁（EM）探査を試みに使用することとした。

以下に、調査手法の概略について述べる。

### (3) 手法の概要

#### (3) - 1 地中レーダー（GPR）探査

地中レーダー（GPR、以下略号を使用）探査は、電磁波を地中に対して発信し、その反射波を受信することによって、地中の異常部をとらえることにより、地中の埋没物や地層の境界を明らかにする物理的探査手法である。測線方向に対しての情報量が多く、また反射時間の際に応じた断面の状況を非破壊的に把握することが可能であり、幅広い分野で利用がおこなわれている。こ

の断面を時間単位で切り出して測線間の情報を内挿により補間することで、深度毎の平面状況を把握する方法である Time-Slice 法も開発されており、形状からの考古学的知見による解析に活用されている。

使用するアンテナの周波数により、探査可能な深度と解像力に違いがあり、文化財探査においては中心周波数 70～900MHz のアンテナが多く使用されている。本調査においては墳丘残存高などより、探査に必要な深度が深くても 5 m 程度であること、対象が石室といった大型の主体部を想定していることから、中心周波数 270MHz のアンテナを主に使用することとした。

### (3) - 2 電気探査

電気探査は、地中の比抵抗を測定することにより、遺構などの地下の異常を捉える方法である。この方法には多様な手法が存在するが今回電気探査として述べるのは直流電気探査法の中の比抵抗法によるものである。これは、接地した電極を用いて、地中に電流を流し、その電位（抵抗）を測定するものである。電流および電位電極の配置に応じて複数の方法がある。今回の探査では wenner 法を用いた。

### (3) - 3 電磁探査

電磁探査は、ループコイルによる電磁波を地下に発信し、地中の異常部が発生させる二次磁場の計測により、地下に存在する異常部の導電率や帯磁率を明らかにする方法である。導電率は電気抵抗の逆数であり、電気探査と同様の利用が可能である。従来は青銅製品といった非鉄金属の探査に用いられてきたが、複数のセンサーで同時に異なる深さの探査を可能とする機器などが開発され、電極の打設を必要とする電気探査に代わるものとしての有効性を現在検討している。

## (4) 作業の概要

### (4) - 1 地区の設定

今回の探査地区は主に太郎塚・次郎塚、鷹塚、天神畑の3つの地区である。この内、太郎塚・次郎塚および天神畑の2地区については、RTK-GPS による基準点測量を実施した。座標はいずれも世界測地系である。鷹塚については任意の座標で計測をおこなっている。

### (4) - 2 使用機器

本調査で使用した機器は以下の通りである。

#### GPR 探査

レーダー探査機 米 GSSI 社 SIR—3000

レーダーアンテナ 米 GSSI 社 270MHz シールドアンテナ（中心周波数 270MHz）

米 GSSI 社 400MHz シールドアンテナ（中心周波数 400MHz）

アンテナ付属品 米 GSSI 社 400MHz シールドアンテナ用そり（天神畑古墳にて使用）マーカー  
スイッチ

解析は GPR-SLICE（Dean Goodman 氏作成）によりおこなった。

## 電気探査

OYO 社 HandyARM

解析は OYO 社 ElecImager 2 D-Lite によりおこなった。

## 電磁探査

GF Instruments 社 CMD-Explorer

解析は CMD Converter および Surfer12 によりおこなった。

### (5) 各地点の成果

#### (5) - 1 太郎塚・次郎塚古墳

##### (5) - 1 - 1 GPR 探査

GPR 探査は、広域を中心周波数 400MHz のアンテナで探査をおこない、検討の後、太郎塚、次郎塚を個別に中心周波数 270MHz のアンテナで探査することとした。これは、現況でのアンテナの走査可能範囲が植栽や段差などで限定され、大きなアンテナの可探範囲が限定されることによる。

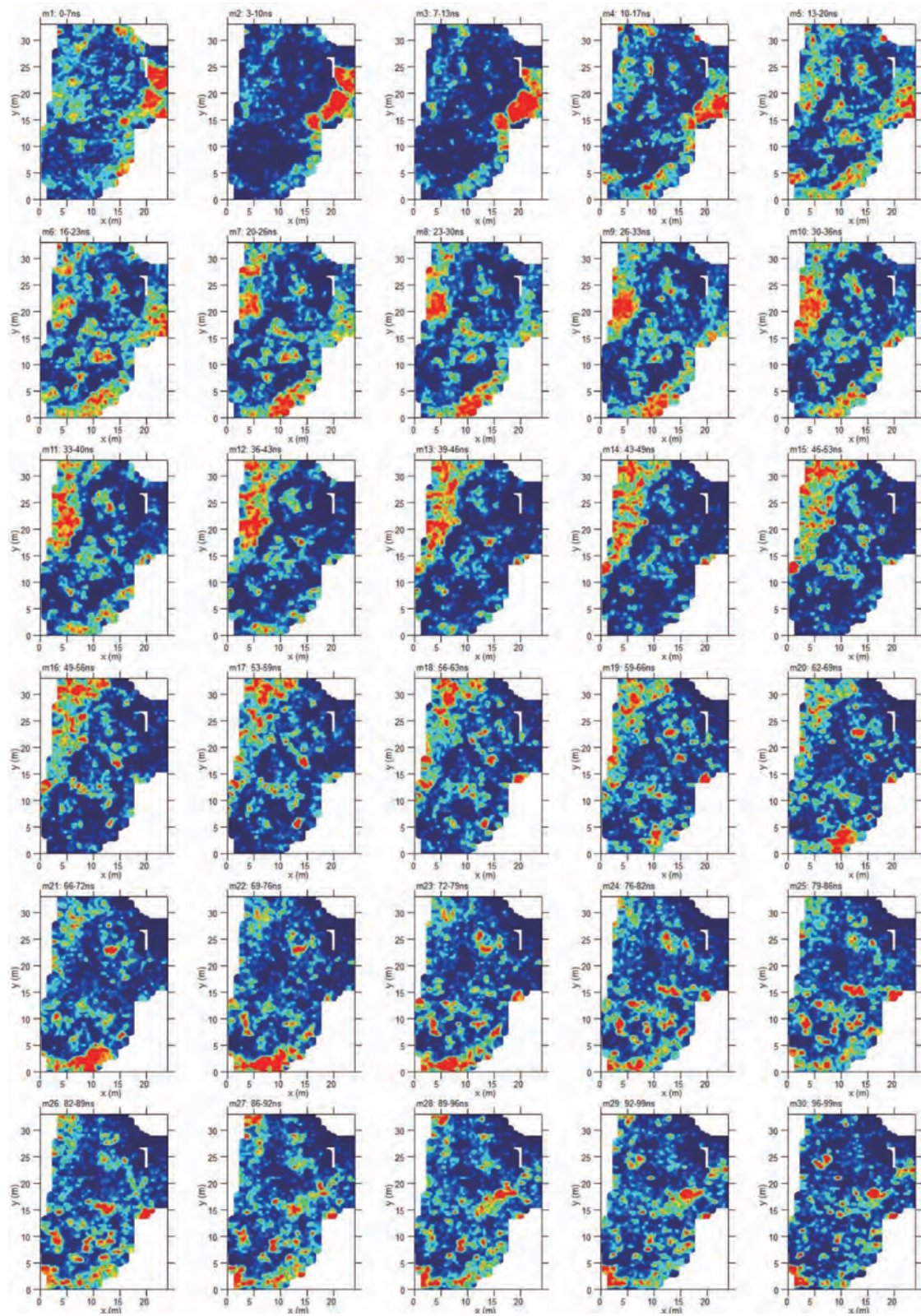
400MHz の成果では、17ns までの浅い部分に発掘調査区の反応が、明瞭に残っている。13-23ns では、墳丘周辺をとりまく円形の反射と、その内部に楕円形の線上の反射が存在する。円形の反射は発掘成果より周壕である可能性が指摘できる。楕円形の部分は、現状の残存墳丘に起因する偽像の可能性も考えられるが、墳丘内に構築時に設定された構造物が存在する可能性もある。

太郎塚では、墳丘中央よりやや北側の X=12 m、Y=13m 付近で 16ns 以下に強い反射があり、下にいくに従って幅広の長方形の異常部をみることができる。これは、軸を西をやや北にふった角度で存在する。しかしながら、明瞭に形状を想定できるかは十分ではない。反射に強弱があることから、石室などであれば改変を受けていることも考えられよう。

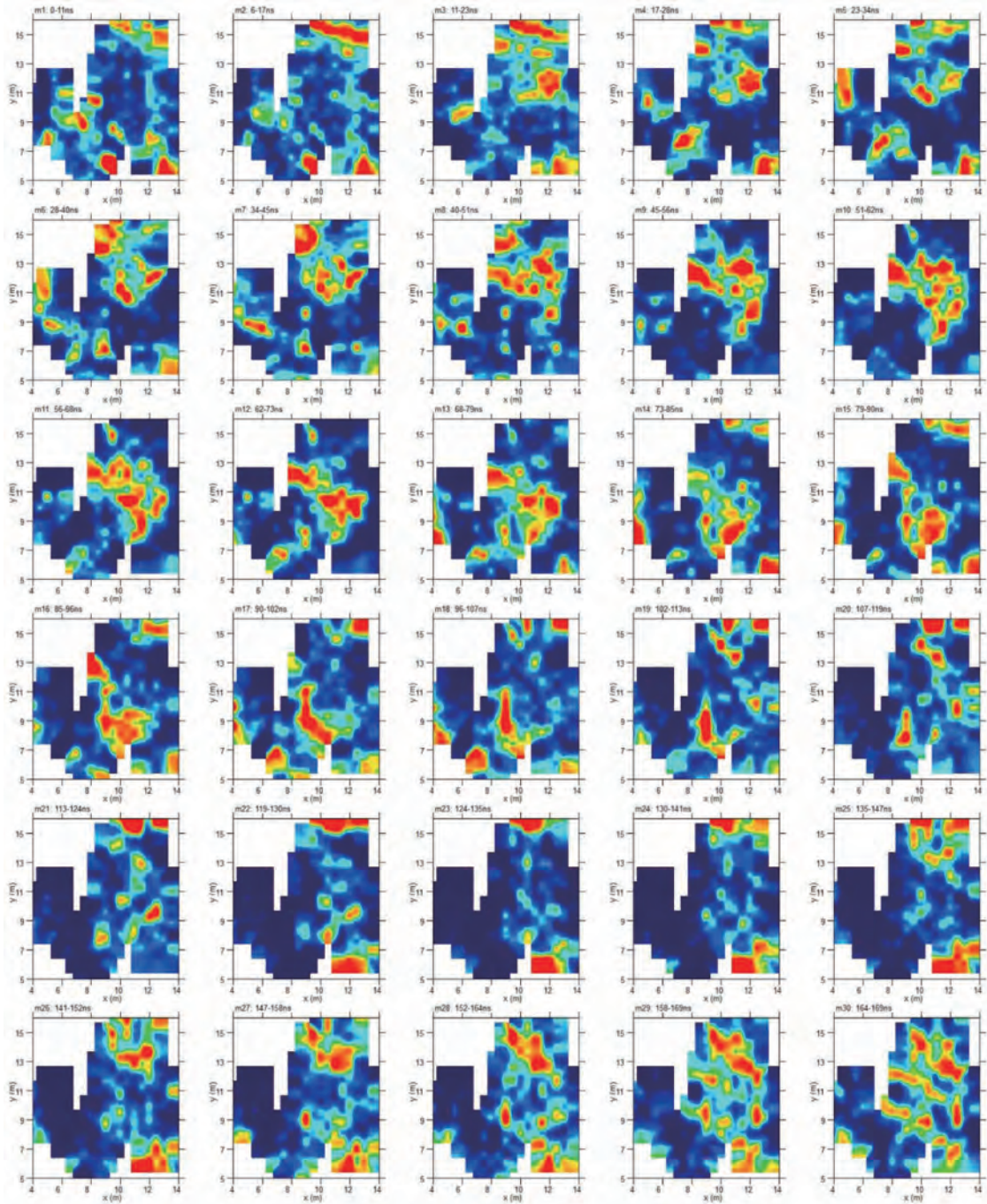
次郎塚では、墳丘中央部に相当する X=14 m、Y=25 m 付近で深さ 13ns 付近よりみられる反射が主体部に関連する可能性がある。こちらは北でやや西に振れる角度のものとする。33-43ns では方形の反射部分と考えることができるため、北西部分を奥壁とした横穴式石室を想定したい。この想定では 53-63ns では、X=10 m、Y=20 m で直角に曲がる線状の構造を横穴式石室の南側の側壁と考える、その下部で反射するのを床面の可能性を考える。

270MHz の成果では、太郎塚、次郎塚共に 400MHz でもとらえた方形の反射が確認できる。ここでも明確にまとまりを有する構造としては把握ができない。

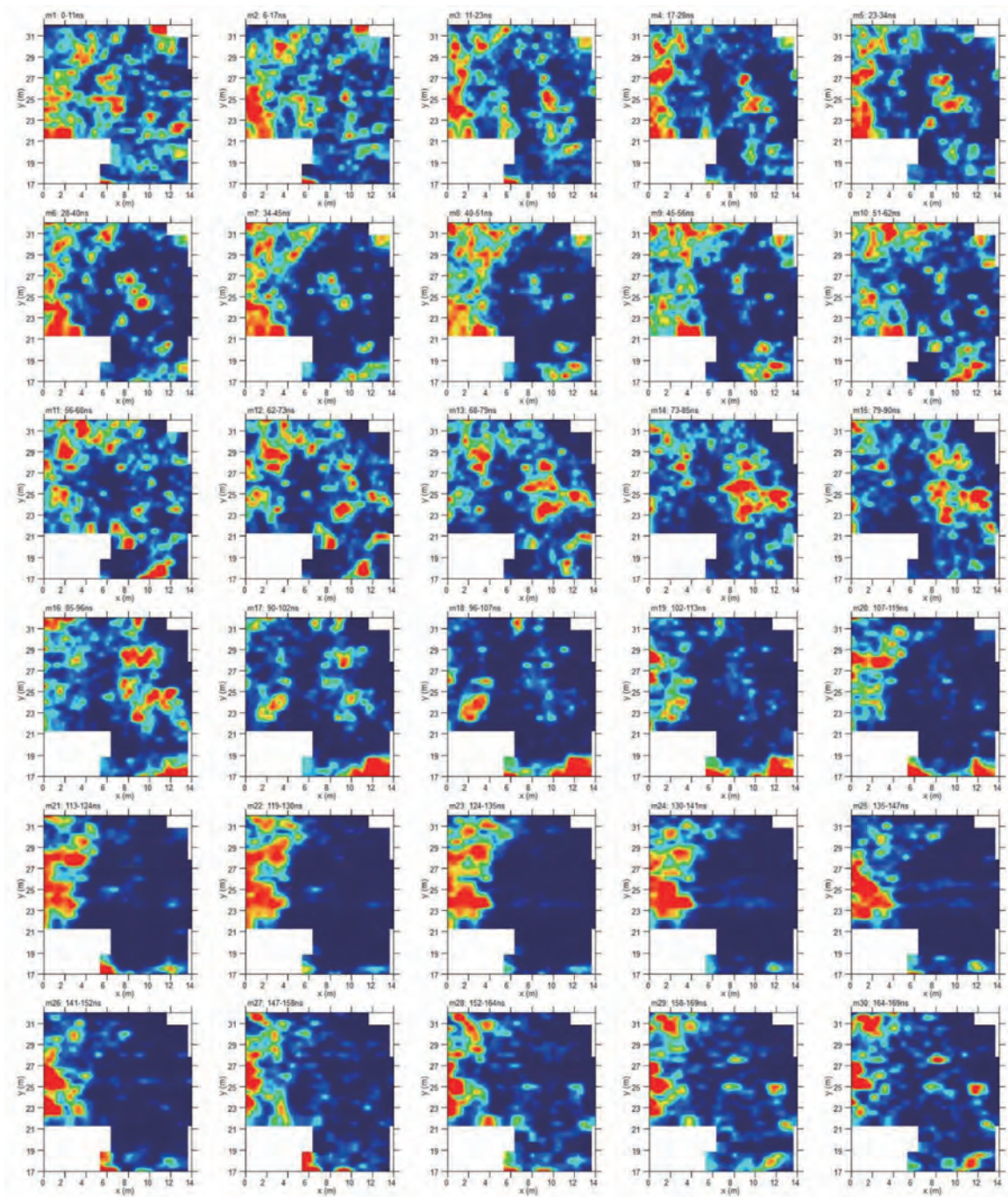




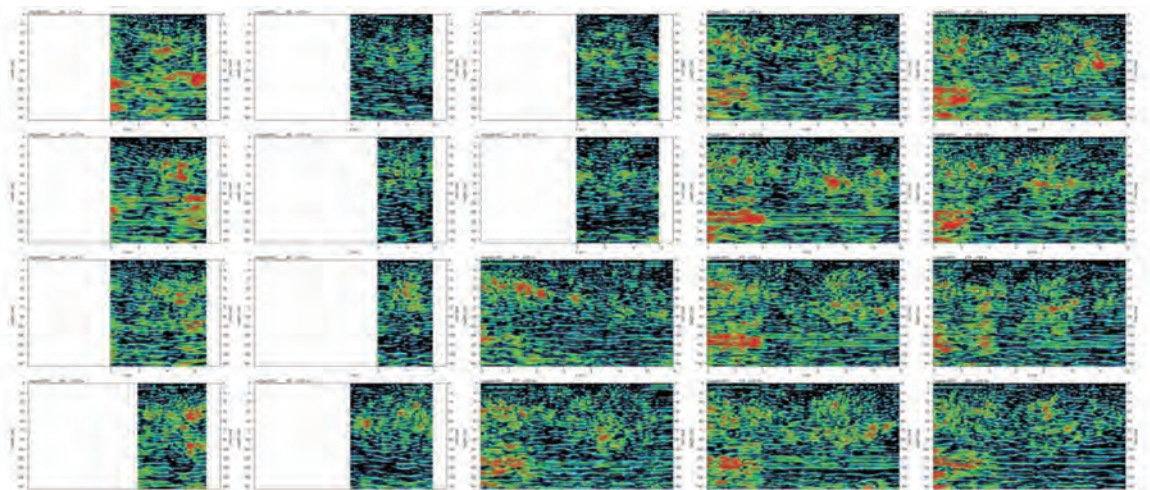
第 46 図 太郎塚古墳・次郎塚古墳 GPR 探査平面図 (400MHz)



第 47 図 太郎塚古墳 GPR 探査平面図 (270MHz)



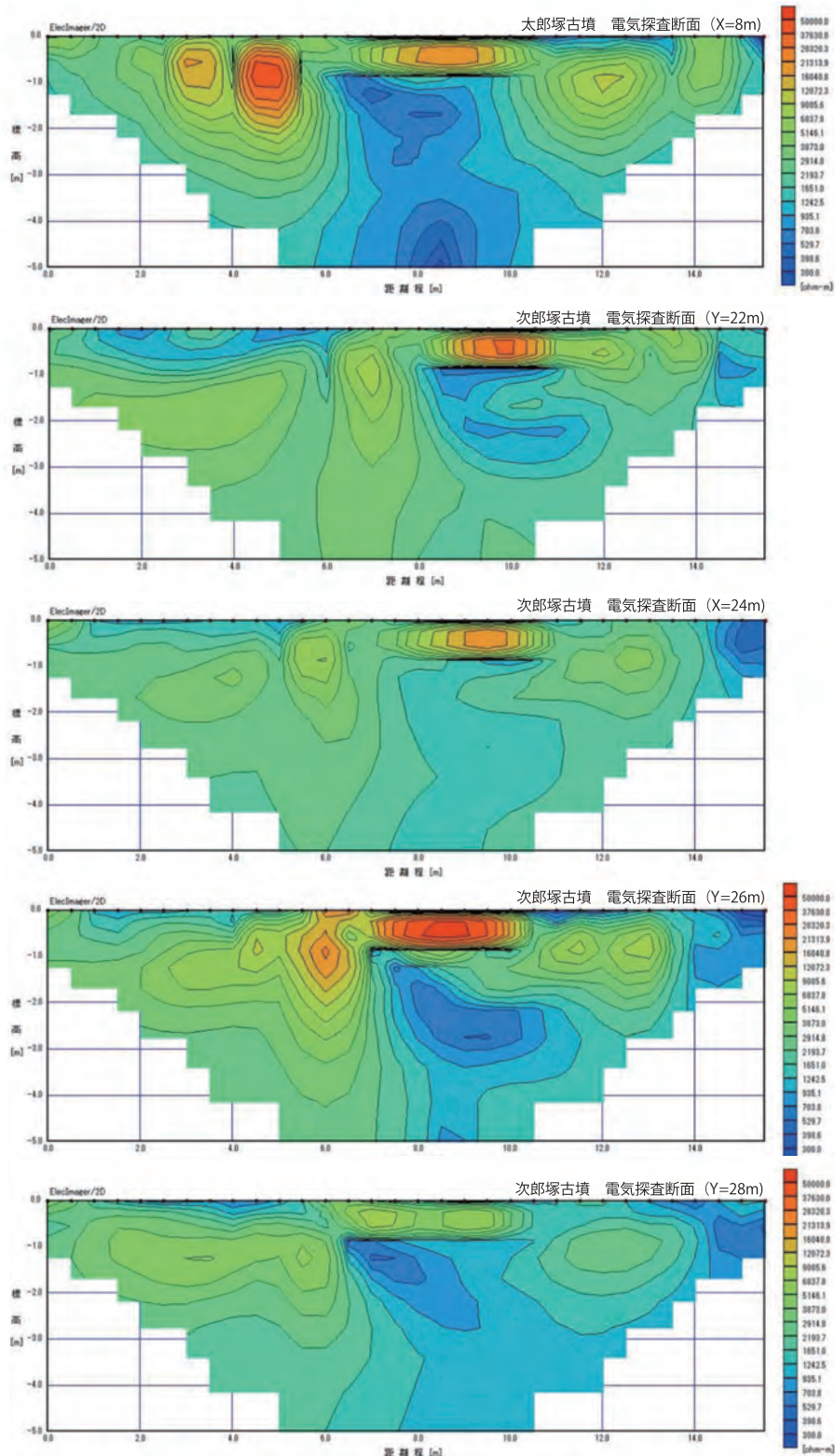
第 48 图 次郎塚古墳 GPR 探查平面图 (270MHz)



第 49 图 次郎塚古墳 GPR 探查断面图 (270MHz)

(5) - 1 - 2 電気探査

電気探査は太郎塚古墳で1測線、次郎塚で4測線を計測した。地形補正などができていないため、成果を考えるのは慎重にしなければならないが、墳丘外の部分においては抵抗値が高く表れており、墳丘内は低い。これは表層において非常に高い抵抗を示しており、これに影響されている可能性がある。



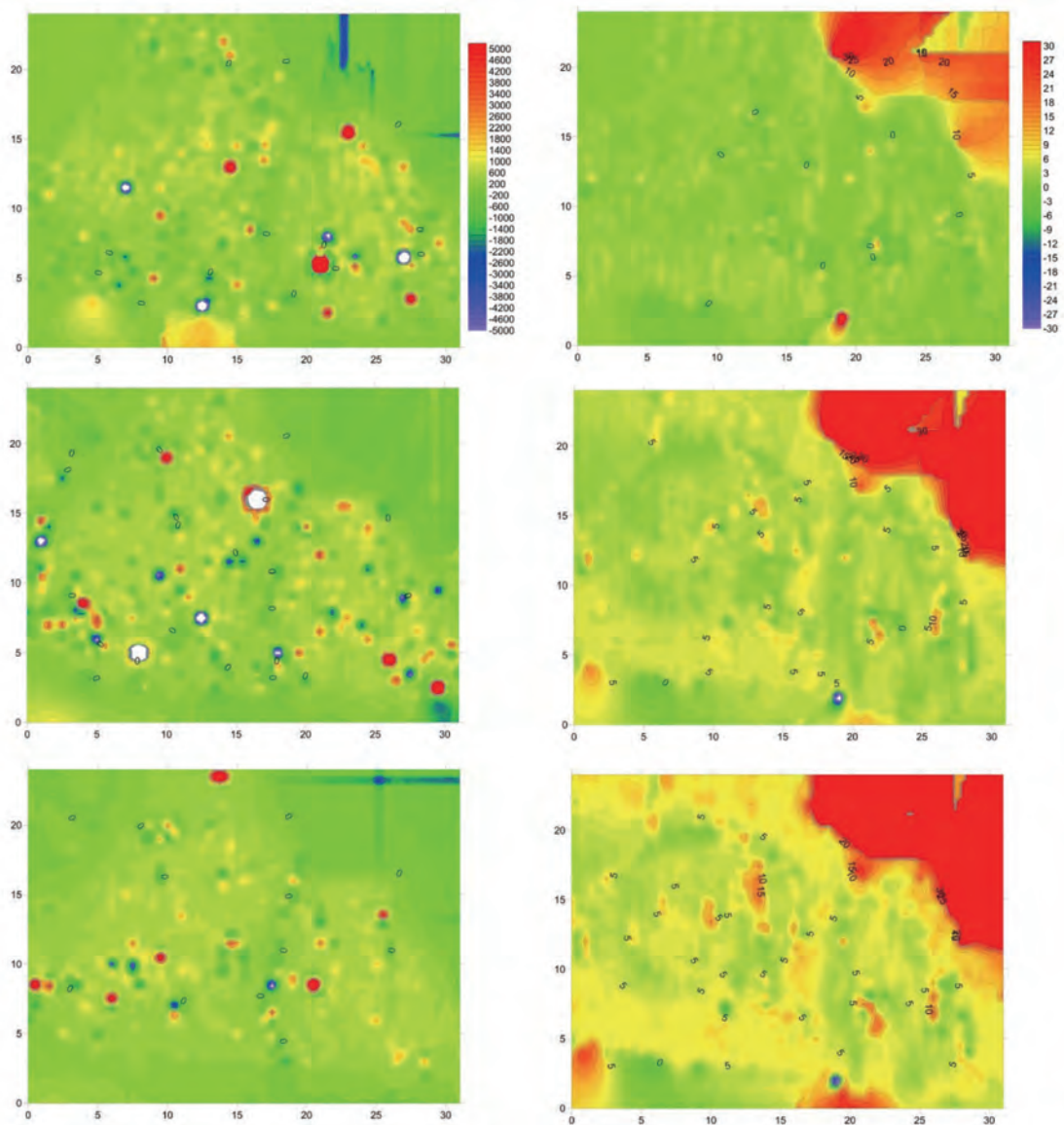
第 50 図 次郎塚古墳 電気探査断面

(5) - 1 - 3 電磁探査

電磁探査では深さ 0.5、1.0、1.8 m の 3 深度の計測が可能である。Conductivity（導電率）による比抵抗値測定と inphase による帯磁率測定を同時に行った。Conductivity は機器付属ソフトウェアである CMD Data Transfer によって見かけ比抵抗として換算した。

機器の計測順序の都合上、計測成果は他の計測成果が南西隅を原点としているのが、本成果のみは北西隅を原点としている。

1 m および 1.8 m の成果では、墳丘部分と周辺との差が両成果においても明瞭にみることができ。内部についても GPR の成果と比較することで異常部の性格を考える参考になると考えるが、検討は今後の課題である。



(左：比抵抗、右：inphase、上：0.5m、中：1.0m、下：1.8m)

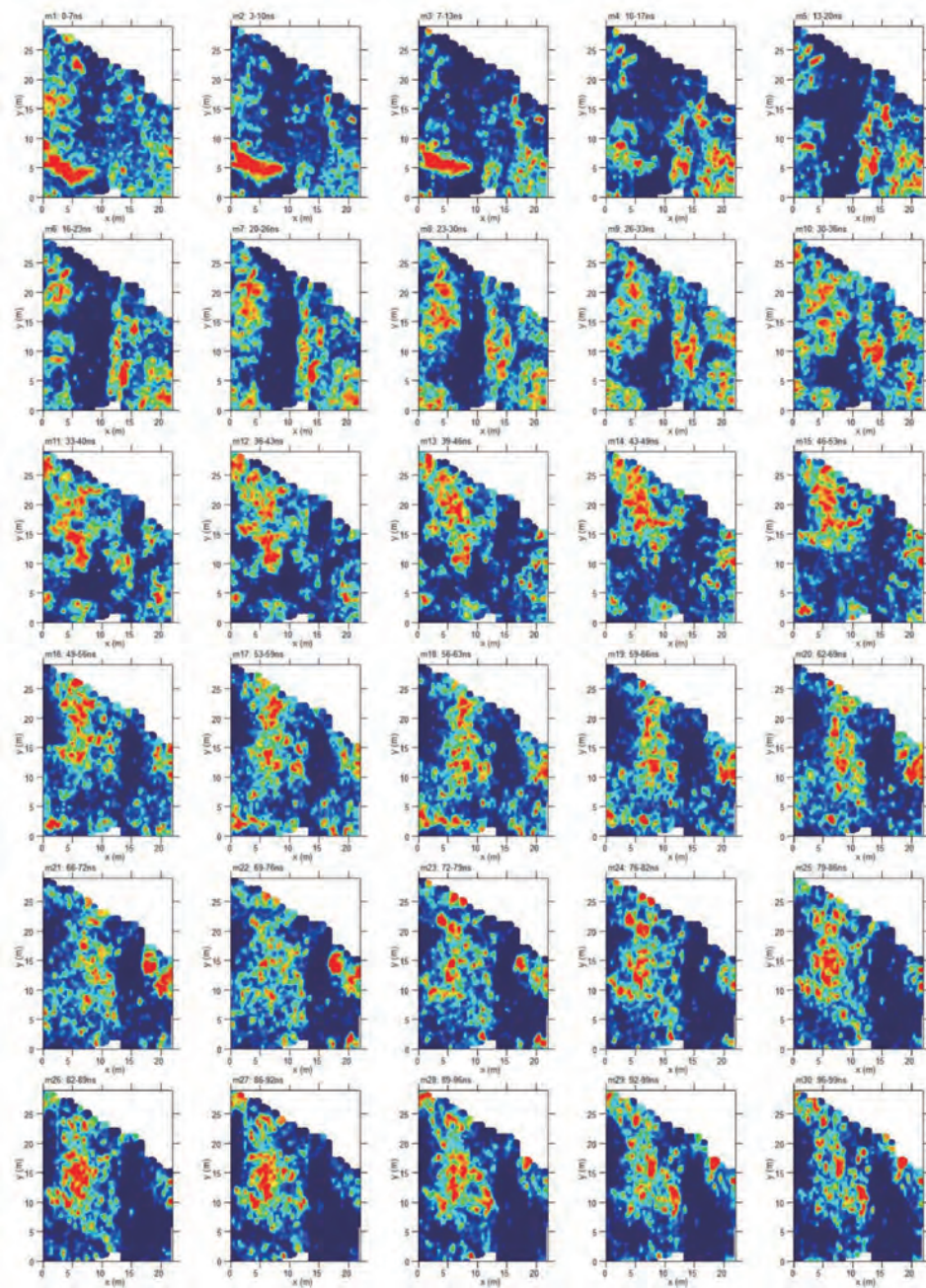
第 51 図 太郎塚古墳・次郎塚古墳 電磁探査平面図

(5) - 2 天神畑古墳・遺跡

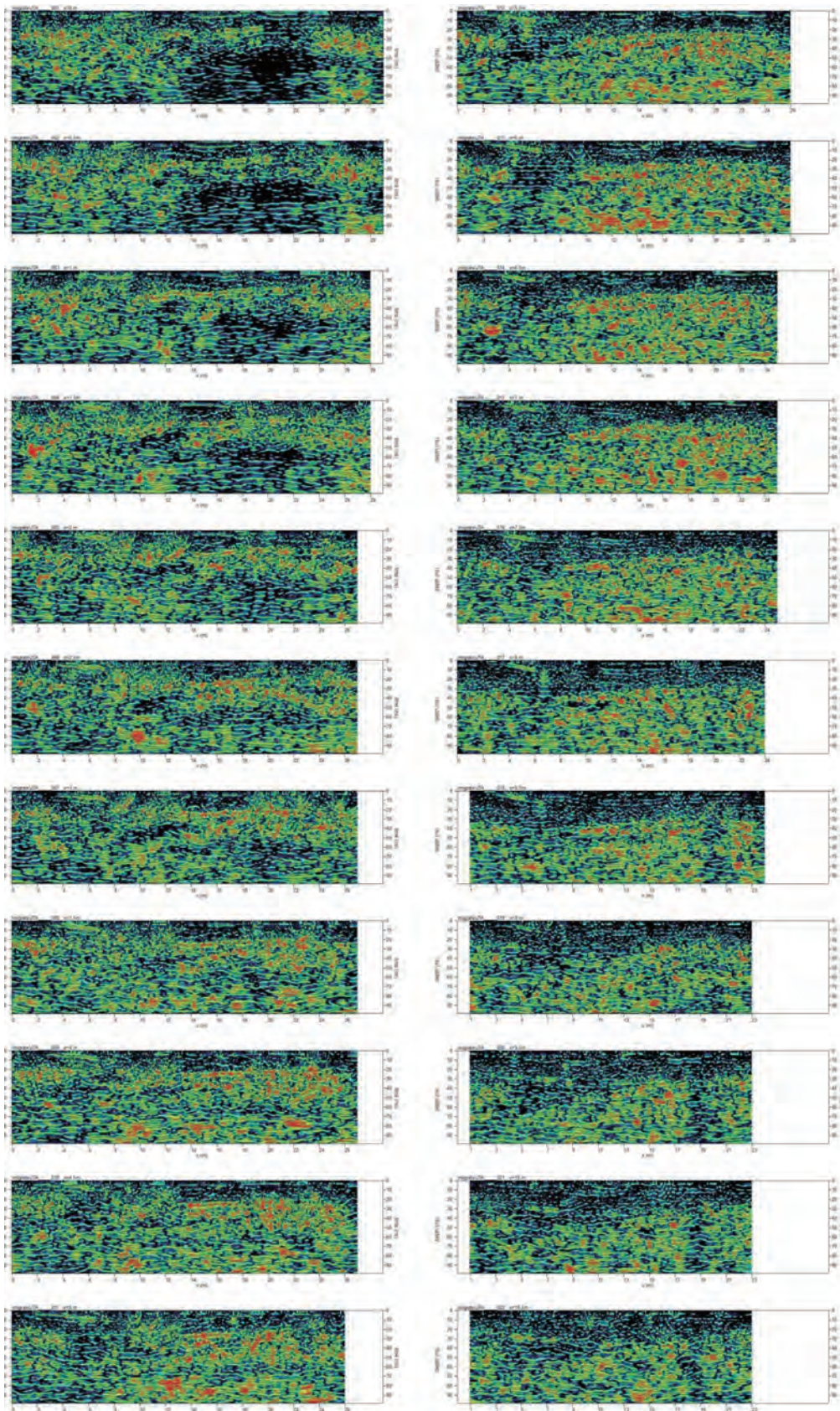
(5) - 2 - 1 GPR 探査

天神畑古墳・遺跡では GPR 探査は中心周波数 400MHz のアンテナを用いた。

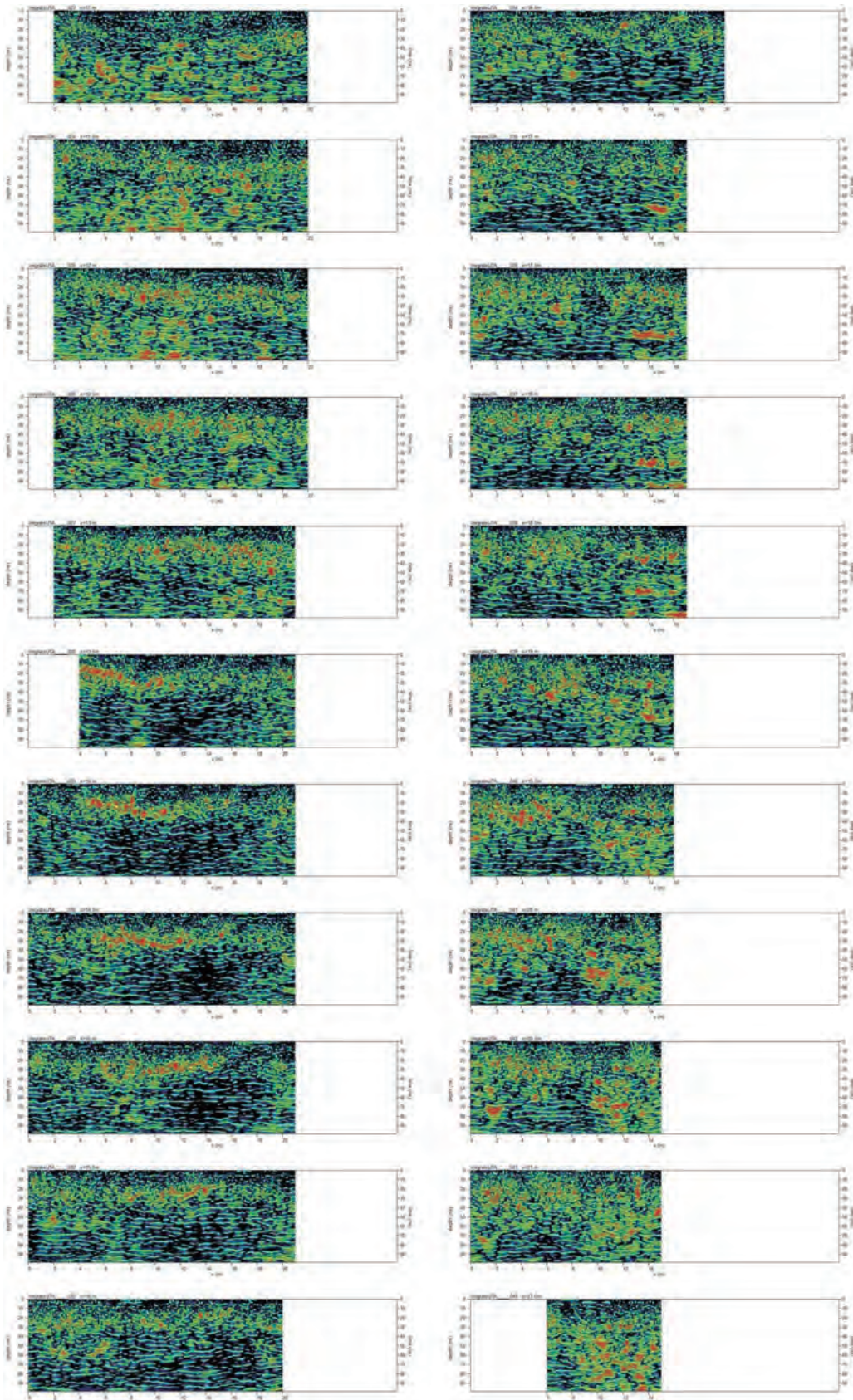
深さ 20-33ns で X=3 m、Y = 15 m 付近を中心とする円形の反射、同じ深さで X=22m、Y=4 m 付近の同様の反射については古墳の存在の可能性を指摘することが可能である。また、地境に打設された鉄製のポールの影響で明瞭ではないが、23-30ns で X=13m、Y=10m 付近を中心とする反射も古墳の可能性が指摘できる。いずれも試掘などによる確認作業が今後必要と考える。



第 52 図 天神畑古墳 GPR 探査平面図 (400MHz)



第 53 图 天神畑古墳 GPR 探查断面图 1 (400MHz)



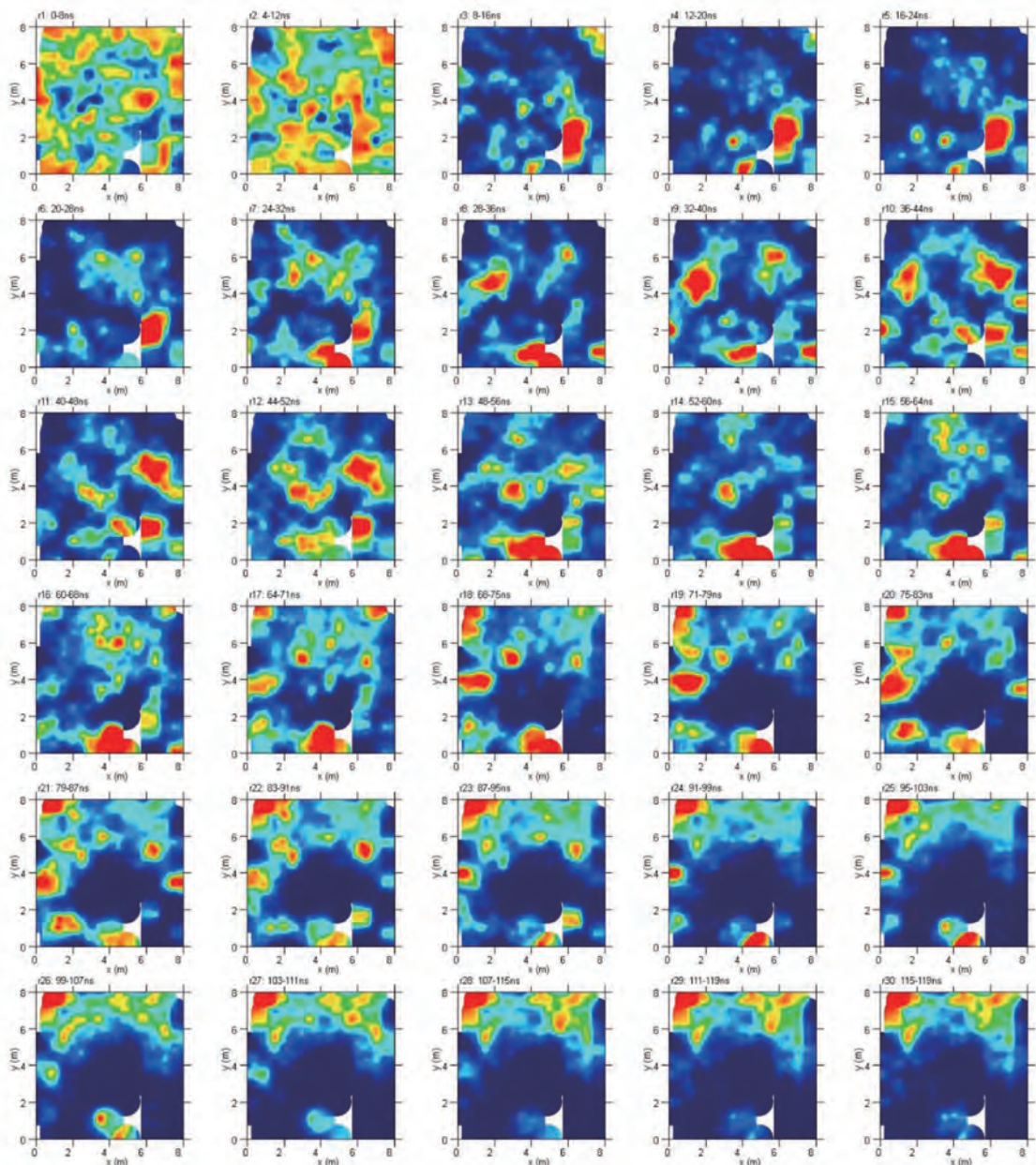
第 54 图 天神畑古墳 GPR 探查断面图 2 (400MHz)



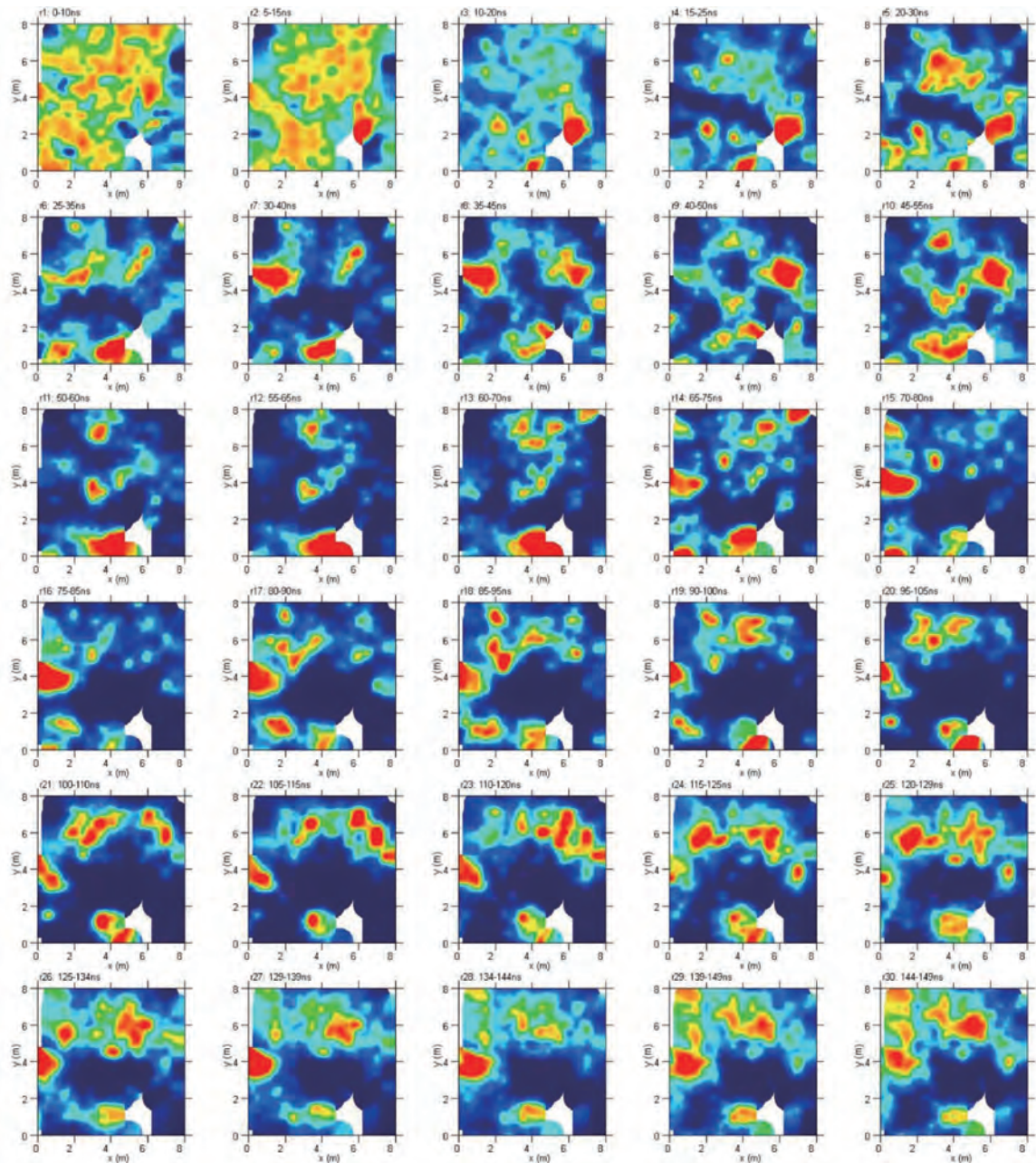
(5) - 3 鷹塚古墳

(5) - 3 - 1 GPR 探査

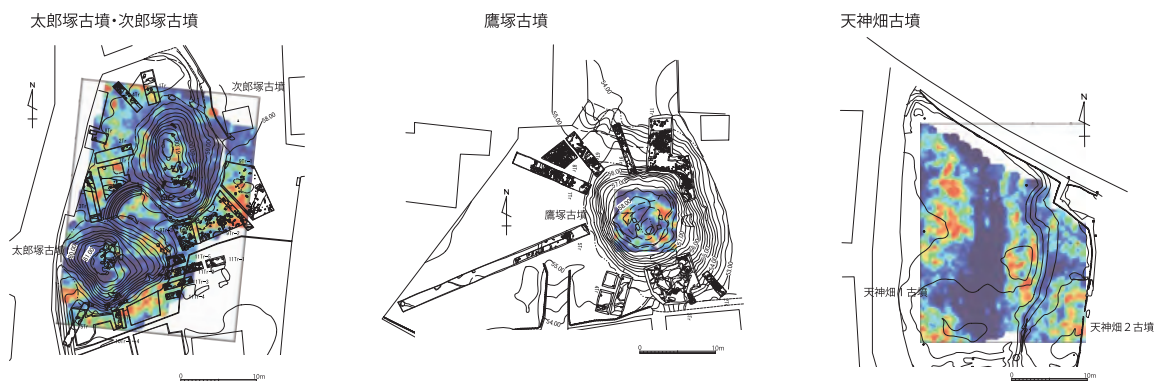
鷹塚古墳は墳丘の削平による段差が大きく、また墳頂部に石造物などが存在することから探査範囲が限定されている。既存の発掘調査における石室の開口部が  $X=8m, Y=2m$  付近であることを勘案すると、石室は 32-52ns にみえるものにあたる可能性が高い。この想定が正しい場合、r 10 (36-44ns) をみると  $X=5m, Y=1 m$  付近および  $X=7m, Y=6m$  付近に袖部、 $X=1m, Y=4.5 m$  付近および  $X=4m, Y=7 m$  付近に奥壁をもつ横穴式石室となる。複室の可能性など、詳細は今回の成果からみることが難しい。



第 55 図 鷹塚古墳 GPR 探査平面図 (400MHz)



第56a图 鷹塚古墳 GPR 探查平面図(270MHz)



第56b图 実相寺古墳群 GPR 探查成果平面図(別府市教育委員会作成)(1/1000)

おにのいわや  
鬼ノ岩屋1号墳の調査



写真5 鬼ノ岩屋古墳群全景

所在地：別府市大字北石垣字塚原

調査の情報

調査機関：別府市教育委員会

調査期間：平成21年（2009）5月26日から6月27日

平成22年（2010）7月21日から10月22日

調査担当者：大嶋健司（別府市教育庁生涯学習課 調査当時）

岸田優子（別府市教育庁生涯学習課 調査当時）

下森弘之（別府市教育庁生涯学習課 調査当時）

報告書情報：2016『市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7』

別府市教育委員会

報告書担当者：秦 広之（別府市教育庁生涯学習課）

第3章第2節1で報告する鬼ノ岩屋1号墳の発掘調査の結果は、平成21年（2009）度及び平成22年（2010）度に行われた別府市教育委員会による調査成果（2016『市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7』）を掲載するものである。掲載にあたり本書の体裁にあわせるため若干の修正を加えている。

## 第2節 鬼ノ岩屋古墳群の調査

### 1 鬼ノ岩屋1号墳の調査

#### 調査の概要（第57図）

鬼ノ岩屋1号墳の範囲確認調査は、平成21年（2009）度・22年（2010）度の2カ年にかけて行った。平成21年度は古墳の西側と北側に3箇所の調査区を設定し、平成22年度は古墳の南西側と南東側に2箇所の調査区を設定して調査を実施した。合計5箇所の調査区で、調査面積は136.6㎡。

別府市教育委員会による範囲確認調査と並行して、平成21年度に別府大学文化財研究所により墳丘測量調査が行われている。また、平成21年度から3カ年にわたり石室内部の測量調査も実施した。

古墳が所在する地域は、鶴見連山に起源を持つ大小の角閃石安山岩が土層中に堆積しており、古墳に伴う遺構との判別に苦慮したが、土層の検討から暗灰褐色粘質土の地山を確認し、その上層にある淡黒色土が古墳時代の表土という認識にたち、これを手掛かりに調査を行った。

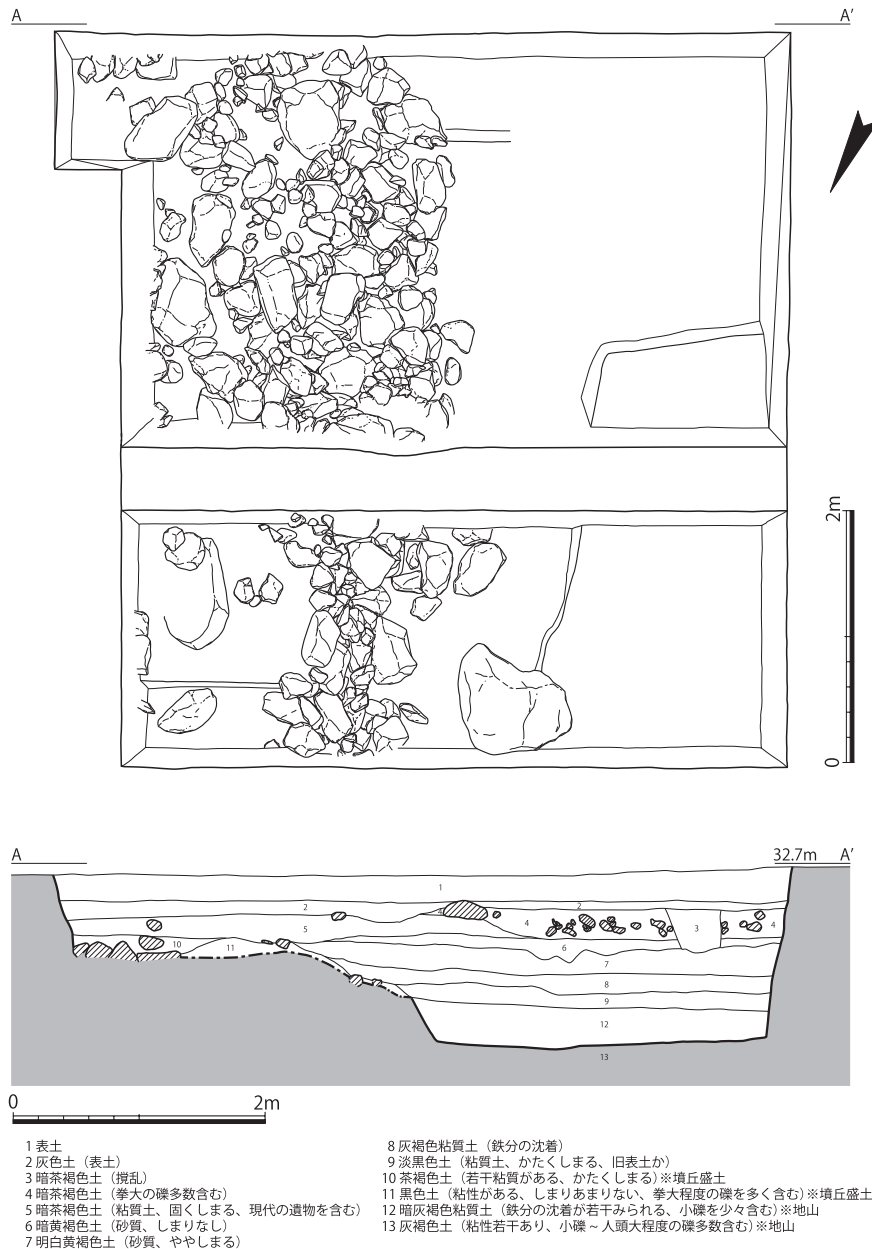


第57図 鬼ノ岩屋1号墳調査区位置図（1/300）

古墳に伴う遺構が確認されたのは、古墳西側に設定した第1・5調査区及び古墳北側の第3調査区であり、このうち第1調査区及び第3調査区で比較的良好な古墳の端部と考えられる礫群を検出した。第2調査区は全面的に後世の攪乱を受けており古墳の遺構を確認することは出来なかった。第4調査区は大部分が後世の攪乱を受けていたものの中央部付近で古墳の遺構の可能性のある礫群を確認した。

### 第1調査区（第58図）

古墳の西側に5.5m×6mのほぼ正方形の調査区を設定した。調査区西側は攪乱による削平が激しく、土層の堆積状況が確認できたのは南側壁面のみであった。10層（茶褐色土）及び11層（黒色土）は墳丘の盛土と考えられる。12層の暗灰褐色粘質土は地山と考えられ、墳丘端部と考えられる列石は、この層の上に設置されていた。墳丘端部の地山の標高は31.6mであり、周溝は確認することは出来なかった。遺物は須恵器片が少量出土した。



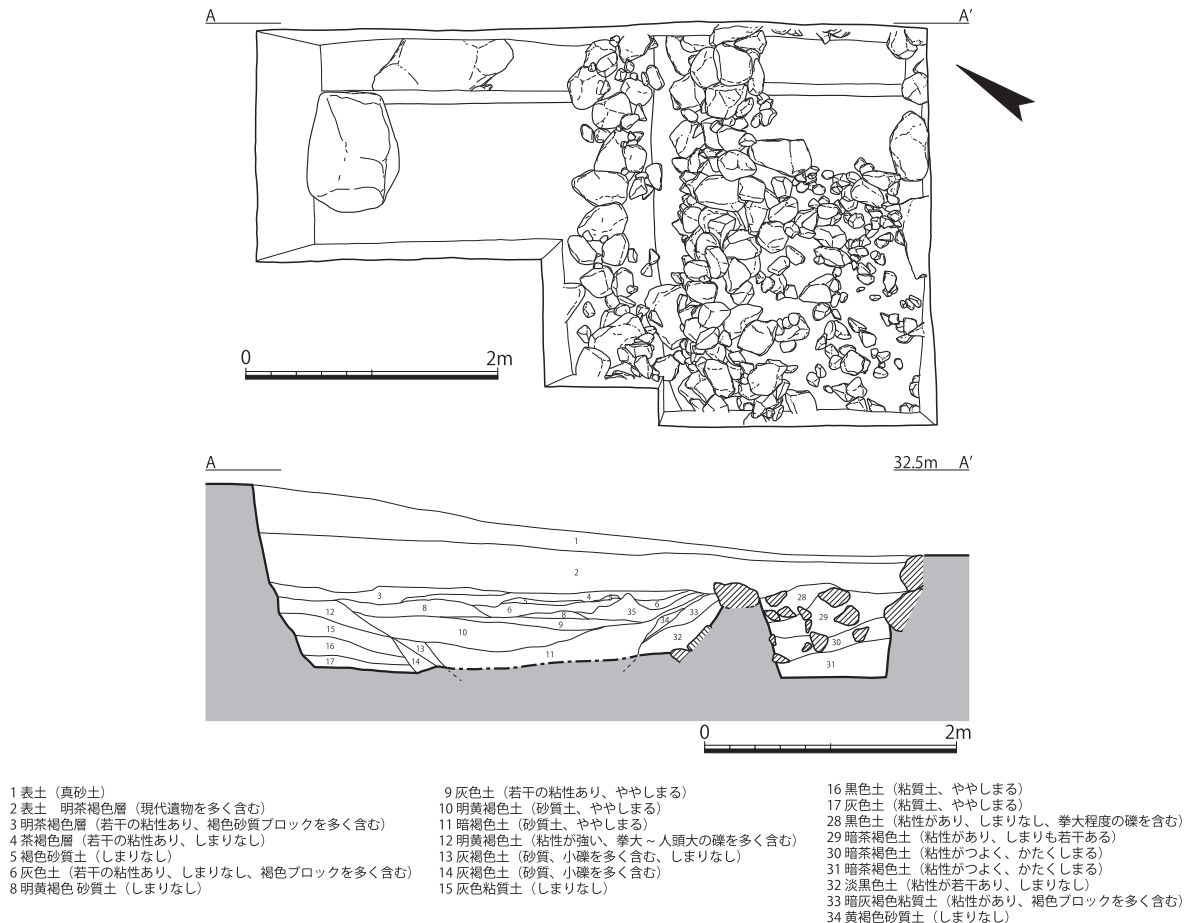
第58図 第1調査区平面図・土層断面図（1/60）

## 第2調査区 (第57図)

古墳の北西側に4m×7mの調査区を設定した。第1調査区の北隣に位置する調査区であり墳形を確認するために設定したものであるが、上面は全面にわたり攪乱を受けており今回の調査では古墳の遺構を確認することは出来なかった。

## 第3調査区 (第59図)

墳丘北側に2m×5.5mの調査区を設定し、遺構の検出状況を確認したうえで調査区の西側及び北側を拡張して調査を行った。後世の水路による攪乱も認められるが、調査区の中央部から墳丘端部と考えられる列石を確認した。列石は暗灰褐色粘質土の地山の上に設置されており、列石を覆う黒色土など第1調査区と同様な状況が伺えた。周溝の有無を確認するため第3調査区の北側から2m離れた地点に2m×2.5mの拡張調査区を設定した。ほぼ同じ標高で地山(暗灰褐色粘質土)を検出し、地形上の変異が確認出来ないことから墳丘の北側においては、周溝が存在しない可能性が高いものと考えられる。礫群を覆う黒色土層より須恵器が出土した。



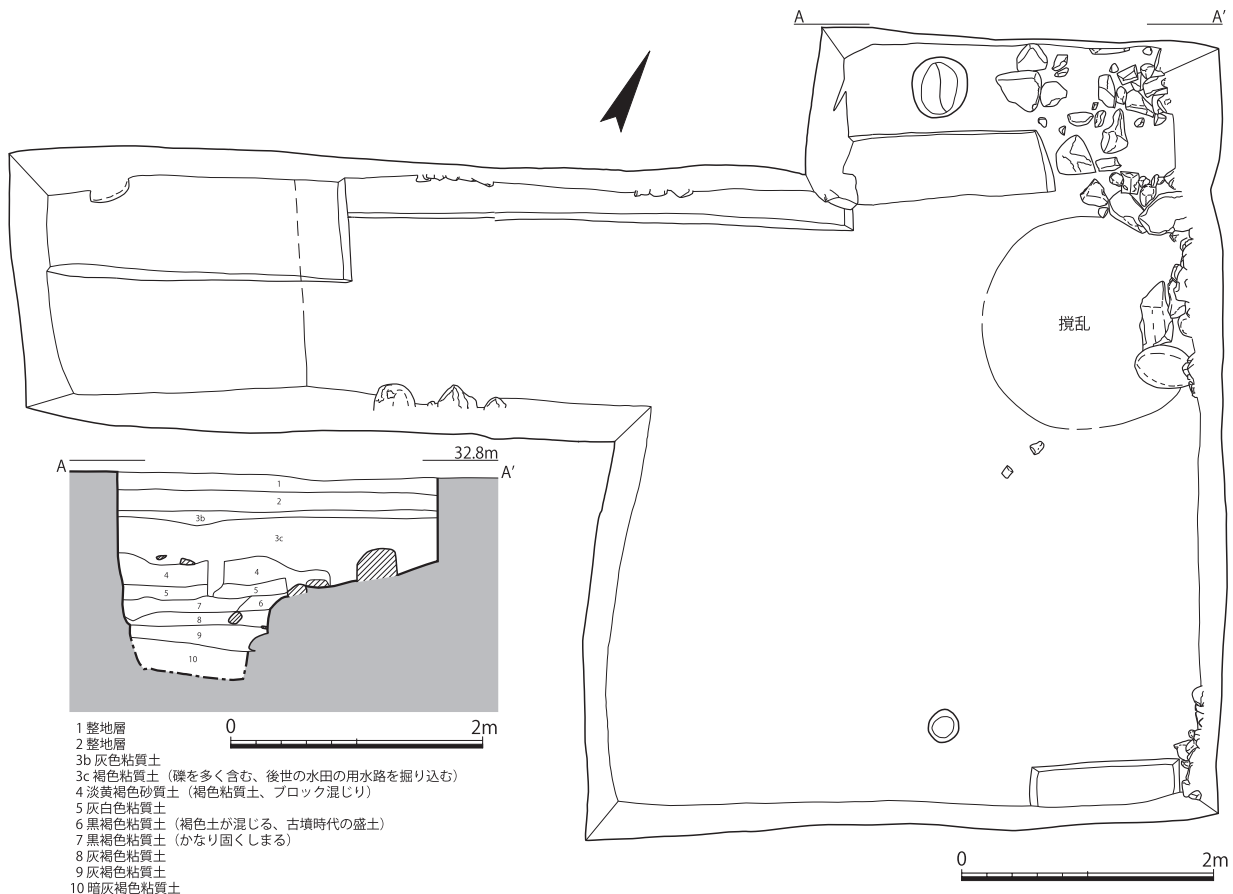
第59図 第3調査区平面図・土層断面図 (1/60)

## 第4調査区 (第57図)

墳丘南東側に2m×7.5mの調査区を設定した。墳丘側及び東側が後世の攪乱を受けていた。調査区の中央部(調査区西端から約4m～5m)で、第1調査区及び第5調査区と同様の黒褐色土を確認し、礫群も検出した。遺物は少量の須恵器片が後世の攪乱を受けた部分より出土した。

## 第5調査区（第60図）

平成21年度に調査を行った第1調査区の南側に6.4m×9.7mの調査区を設定した。調査区の北東隅で、第1調査区で検出した墳丘端部と考えられる列石の続きを確認した。しかし調査区北東隅で検出された列石の延長は、調査区東壁付近で後世の攪乱を受けており南側へと延びる墳丘端部の確認までには至らなかった。周溝については、西側に長くトレンチ状の調査区を設定したものの地山まで攪乱を受けた状態であり、確認することは出来なかった。



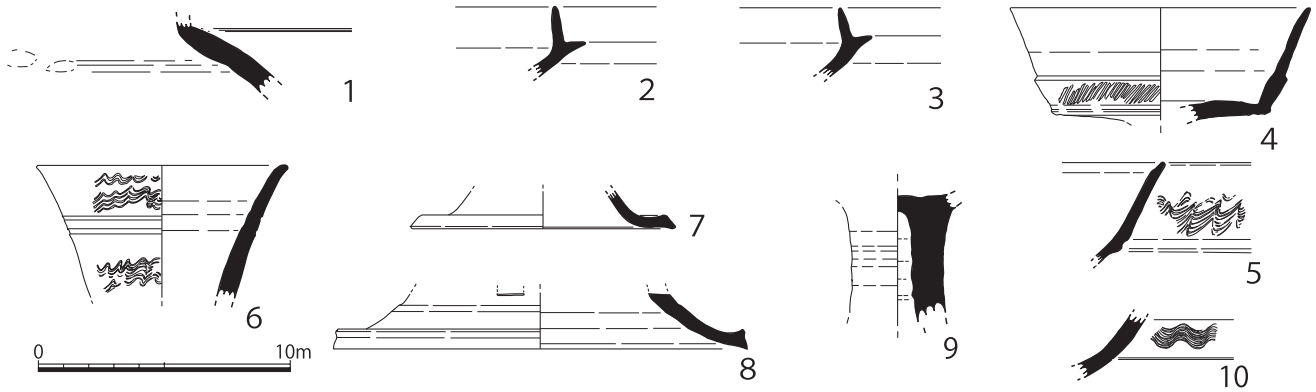
第60図 第5調査区平面図・土層断面図（1/60）

## 出土遺物（第61図）

1は第1調査区から出土した須恵器。短頸壺か。外面はナデ、内面は回転ナデが施される。

2～9は第3調査区から出土した須恵器。2・3は坏の口縁部片で、立ち上がりは直線的に内傾し、口縁端部に段をもたない。4は高坏で、復元口径12.0cmを測る。直線的に立ち上がる口縁部の下部を肥厚させ斜行線文を施す。口縁部と坏部底面の坏部底面側の境付近に沈線を1条施文する。外面・内面ともに回転ナデが観察される。5は甗で、頸部と口縁部の境界に段を設け、口縁部は直線的に立ち上がる。口縁端部には緩やかな段を設ける。口縁部には櫛描波状文を施す。色調は外・内面ともに白色を呈する。6は甗の口縁部であると考えられ、復元口径10.0cmを測る。口縁部は外反気味に立ち上がる。頸部に2条の沈線を施し、下部にも沈線が1条確認される。口縁部から頸部にかけて櫛描波状文を施文する。5と同様に色調は白色を呈する。7・8は高坏の

脚。7の復元底径は10.5cmで、外面・内面ともに回転ナデ。8の復元底径は16.4cmで2条が1セットとなった沈線を施文する。脚部は内湾し端部を鋭く仕上げる。透かしの端部が観察される。9は高坏の坏部と脚部の接合部。脚部は3方向の透かしを持つものになると想定される。10は第4調査区で出土した須恵器。



第61図 出土遺物 (1/3)

#### 小結

##### 遺物について

図示可能な遺物は第1・3・4調査区より出土した。いずれの調査区も後世の攪乱を受けている部分があるため良好な出土状況ではないが、第3調査区で古墳の礫群を覆う黒色土より須恵器が出土している。概ねTK209型式期に相当するものと考えられる。

##### 墳丘について

第1・3・4・5調査区において古墳に伴う遺構を確認した。これら遺構が確認された調査区では、暗灰褐色粘質土の土層が確認でき地山と考えられる。古墳の墳丘端部にあたる列石はこの暗灰褐色粘質土の上に設置している傾向を確認することが出来た。周溝に関しては、第3調査区及び第5調査区において拡張部を設けて検出を試みたが、明瞭な地形変化を確認することは出来ず、現時点においては、周溝は伴わなかった可能性が高いものと考えられる。

墳形に関しては、第5調査区より古墳南西部の隅を確認しており円墳となる可能性が高いものと考えられる。墳丘規模に関しては、第1・3・4・5調査区で確認された墳丘端部を基に検討すると直径約31.0mと復元される。

発掘調査の結果、これまで直径約24mの円墳と考えられてきた鬼ノ岩屋1号墳の墳形及び墳丘規模は、直径約31mの円墳であることが判明した。また、TK209型式期の須恵器が出土し、古墳の築造時期の参考となる資料を得ることが出来た。





第 62 図 鬼ノ岩屋 1 号墳復元図 (1/300)



第1調査区 (西から)



第1調査区南壁土層



第2調査区 (西から)



第3調査区 (北から)



第3調査区東壁土層



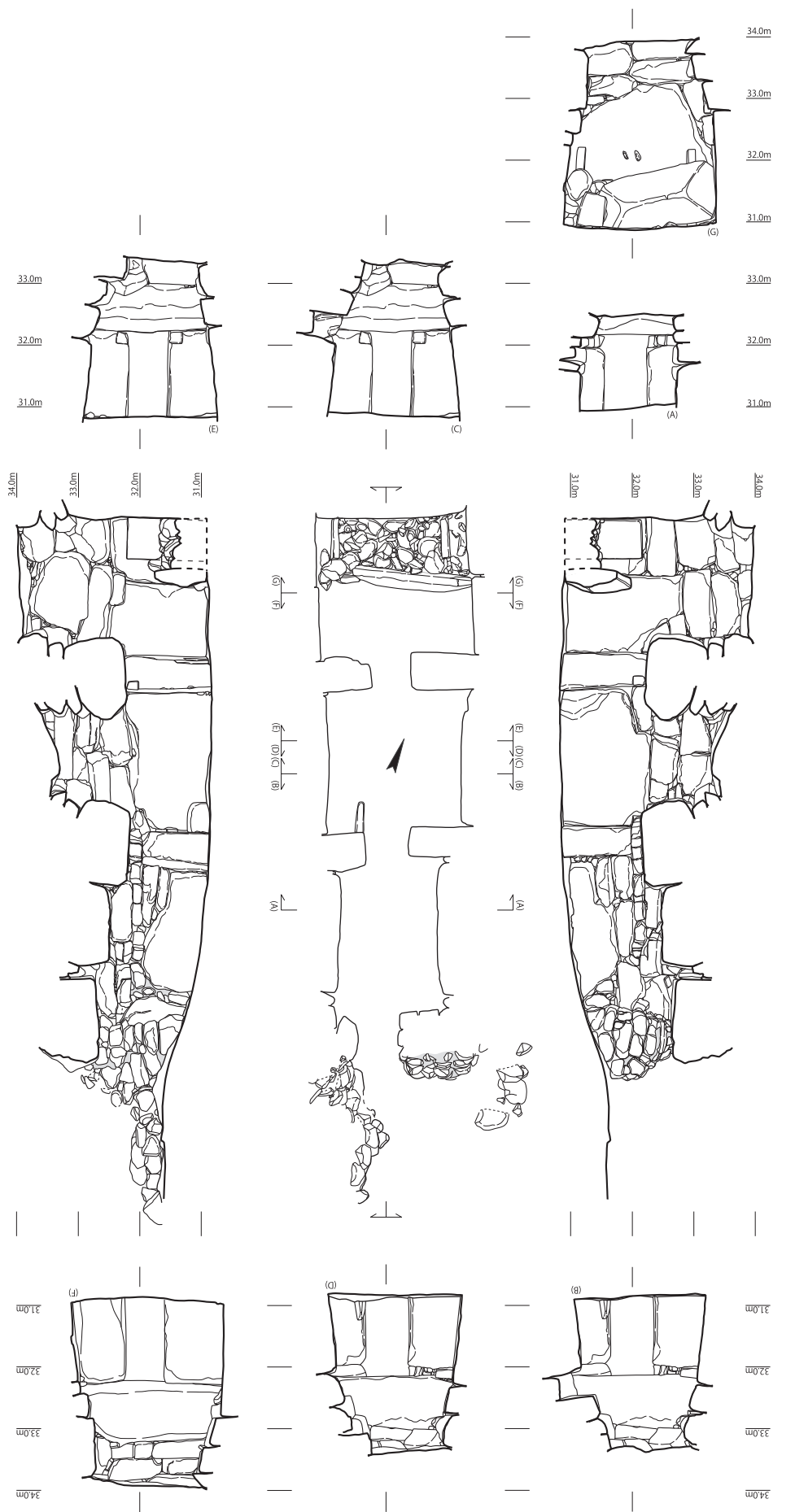
第3調査区 (北から)



第4調査区 (西から)

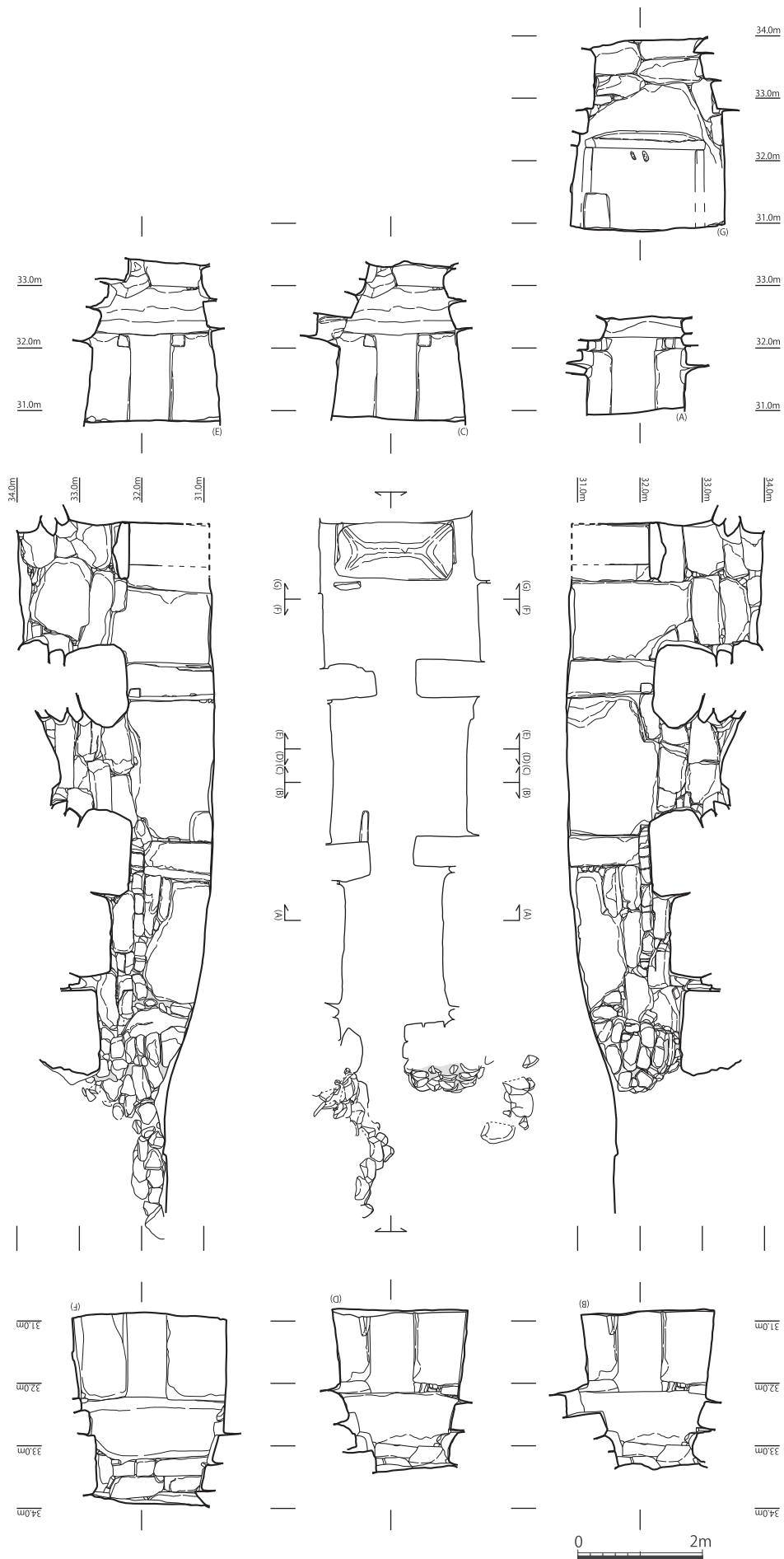


第5調査区 (南から)



第 63 図 鬼ノ岩屋 1 号填石室実測図【現況図】(1/100)





第 64 图 鬼ノ岩屋 1 号墳石室実測図【石室形復元】(1/100)

おにのいわや  
鬼ノ岩屋2号墳の調査



写真6 鬼ノ岩屋2号墳

所在地：別府市大字北石垣字塚原

調査の情報

調査機関：別府市教育委員会

調査期間：平成20年（2008）5月26日から6月27日

11月25日から12月26日

調査担当者：下森弘之（別府市教育庁生涯学習課 調査当時）

報告書情報：2009『市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1』

別府市教育委員会

報告書担当者：下森弘之（別府市教育庁生涯学習課 報告当時）

第3章第2節2で報告する鬼ノ岩屋2号墳の発掘調査の結果は、平成20年度に行われた別府市教育委員会による調査成果（2009『市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1』）を掲載するものである。掲載にあたり本書の体裁にあわせるため若干の修正を加えている。

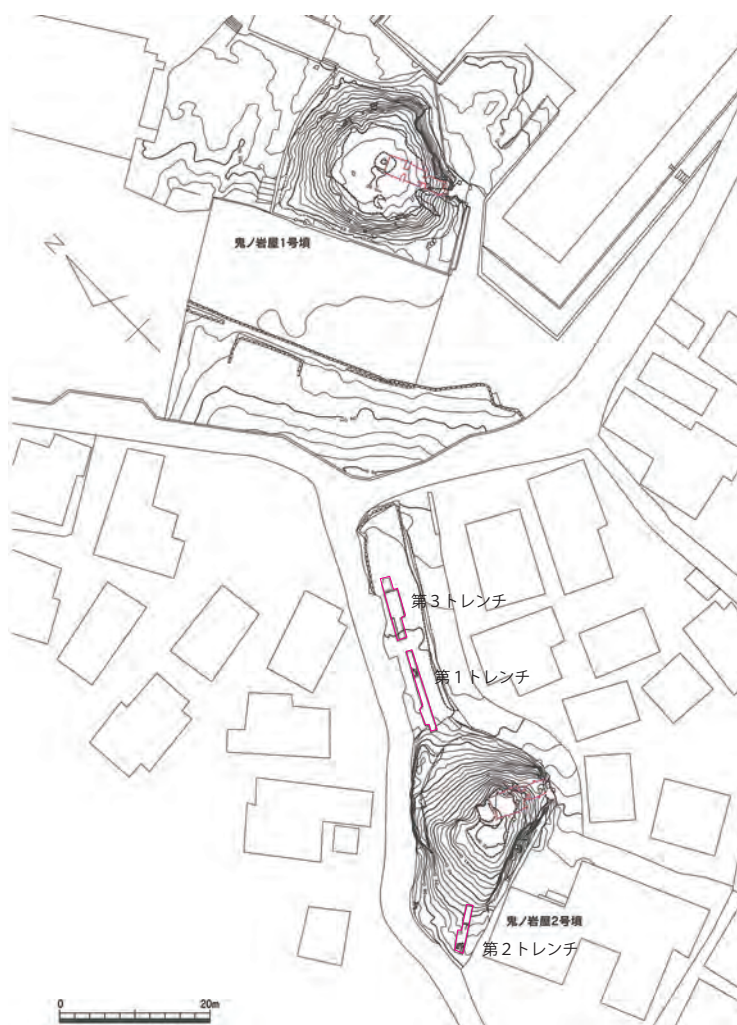
## 2 鬼ノ岩屋 2号墳の調査

### 調査の概要

平成 20 年度前期の調査では、墳丘端部及び周溝等の遺構検出に努めるため、史跡範囲内に 2ヶ所の調査区を設定し、墳丘範囲の確認調査を実施した。両調査区ともに墳端と考えられる根石を検出し、墳丘規模の確定に至った。調査期間は、5月26日から6月27日までの約1ヶ月間実施した。調査成果をもとに8月23日に現地説明会を行い、同時に1号墳及び2号墳の石室の開放、1号墳西側より出土した須恵器類などを一般公開した。雨天にもかかわらず説明会には、約40名の方々が訪れた。

調査終了後、真砂土及び土嚢により遺構の保存措置をした後、人力により埋め戻し、9月10日に調査の前期日程を終了した。

前期の調査成果を受け、第1トレンチで検出した墳端部分の位置から、周溝の確認が必要であるとの見解に至り、第1トレンチ北側での追加調査を実施した。調査期間は11月25日から12月26日までの間に約3週間実施した。調査終了後、前期調査と同様に真砂土により遺構の保存措置をした後、人力により埋め戻し、12月26日に平成20年度調査の全日程を終了した。



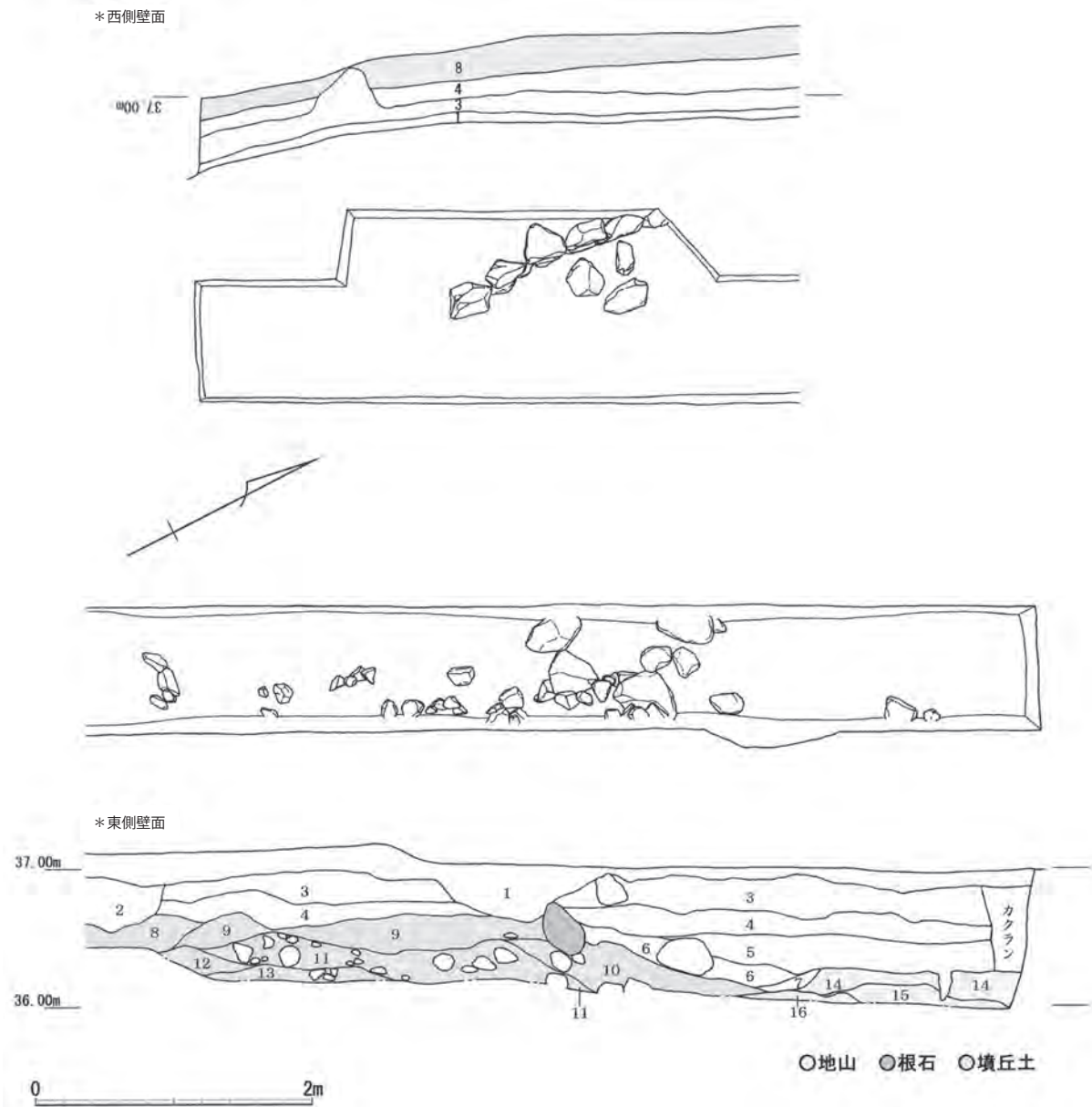
第 65 図 鬼ノ岩屋古墳位置図 (1/1000)

## 第1トレンチ

第1トレンチは、墳丘端部及び周溝確認のため墳丘北東側に11.5 m×1 mの調査区を設定し遺構の検出に努めた。

調査の結果、調査区南側から近現代に比定される石垣を検出し、北側から墳丘端部と考えられる根石を検出した。

近現代の石垣（標高約36.60 m）は墳丘北側を一部削平し、平坦面を作出することにより造られている。攪乱により古墳に伴う葺石は検出できなかったが、人頭大程度の根石（標高約36.50 m）



- 1 茶褐色(表土。) 2 明茶褐色(粘性あり。しまりなし。) 3 暗茶褐色(粘性あり。しまりなくバサバサ。近現代のゴミ含む。) 4 茶褐色(粘性あり。ややしまる。) 5 茶褐色(粘性あり。かたくしまる。4より暗い。) 6 黒色(粘性・若干のしまりがあり。) 7 黒色(若干の粘性あり。14層ブロックを含む。) 8 淡茶褐色(粘性があり、かたくしまる。) 9 暗灰褐色(粘性があり、かたくしまる。褐色ブロック若干含む。) 10 暗茶褐色(粘性あり。かたくしまる。拳大礫若干含む。) 11 茶褐色(粘性があり、かたくしまる。拳大礫多く含む。) 12 茶褐色(粘性あり。かたくしまる。褐色ブロック含む。) 13 淡明茶褐色(砂質。かたくしまる。礫含む。) 14 明茶褐色(砂質。ややしまる。) 15 淡黒色(砂質。ややしまる。小砂利を含む。) 16 明茶褐色(砂質。かたくしまる。礫含む。)

第66図 第1トレンチ平面図・土層断面図 (1/50)

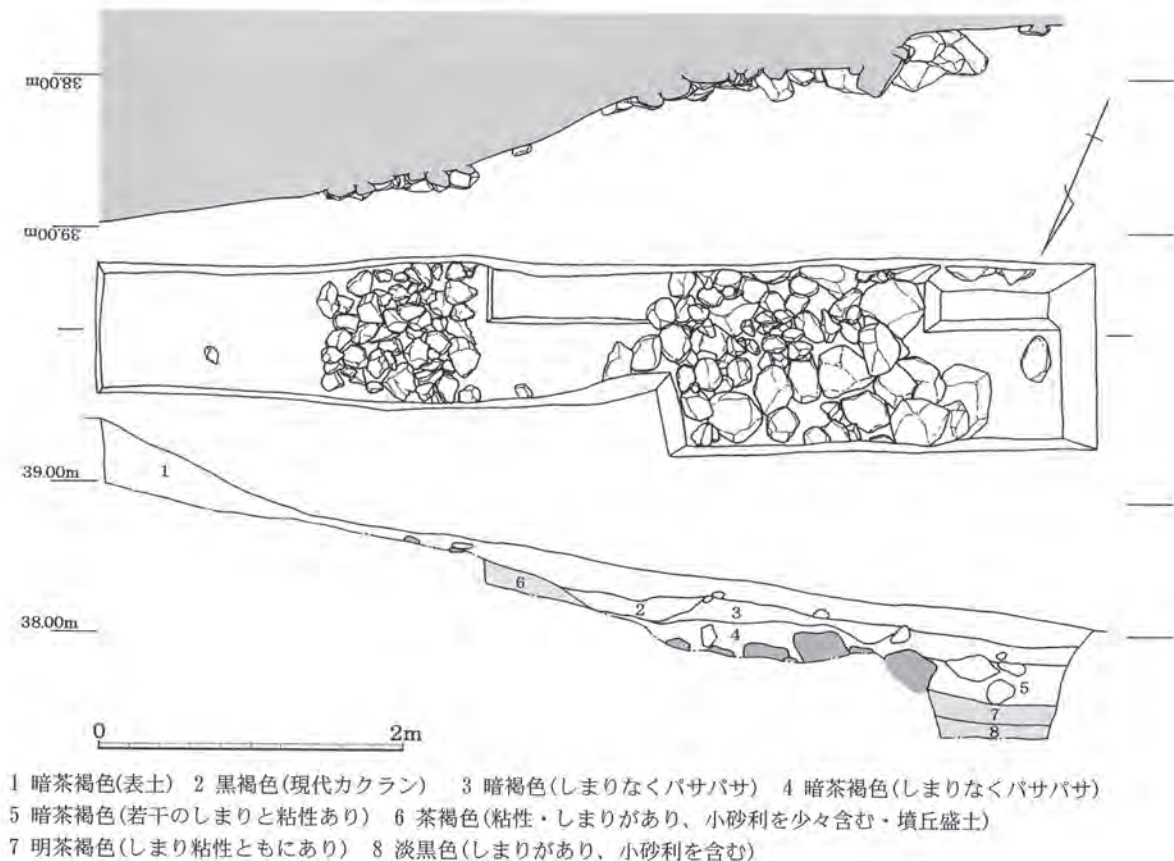
は下部を第 10 層に包含されている状態で検出した。当初、調査範囲からは明瞭な周溝の検出はできなかったが、第 3 トレンチの調査成果から、第 14 層でみられる浅い土層の立ち上がりが周溝になる可能性が考えられる。

土層堆積状況から、畑地作出のため墳丘盛土部分を削平し平坦面を築いていることが窺える。このことにより、石垣底面のレベルで墳丘北側が整えられたことにより、葺石は全て取り除かれ、若干レベルの下がる根石は頭が出た状態で残存したものと考えられる。

## 第 2 トレンチ

第 2 トレンチは、墳丘端部確認のため墳丘南西側に 6.5 m × 1 m の調査区を設定し検出に努めた。調査の結果、1 段目及び 2 段目の平坦面を検出した。1 段目平坦面（標高約 38.00 m）は、根石及び葺石を検出し、これにより墳丘端部を確認した。根石は、若干現位置を留めていない可能性のある礫もあるが、人頭大程度の自然石を使用し、第 1 トレンチ同様に第 7 層に下部を包含される。葺石は拳大から人頭大に近い大きさのものまで幅をもち、平坦面は葺石サイズの違いからかなりの凹凸面を呈する。2 段目平坦面（標高約 38.70 m）からは葺石を検出した。葺石は、拳大の自然石を敷き詰める。1 段目平坦面から 2 段目平坦面に至る傾斜面では、傾斜面最下段の 1 列で他の葺石より一回り大きな扁平の自然石を約 25 度の角度で設置している。2 段目平坦面から上の傾斜面では、残存している葺石は検出できなかった。

根石西側に設定したサブトレンチでの土層堆積状況から、旧地表土の上に盛土（整地土層）をおこない、根石を設置していることが窺える。



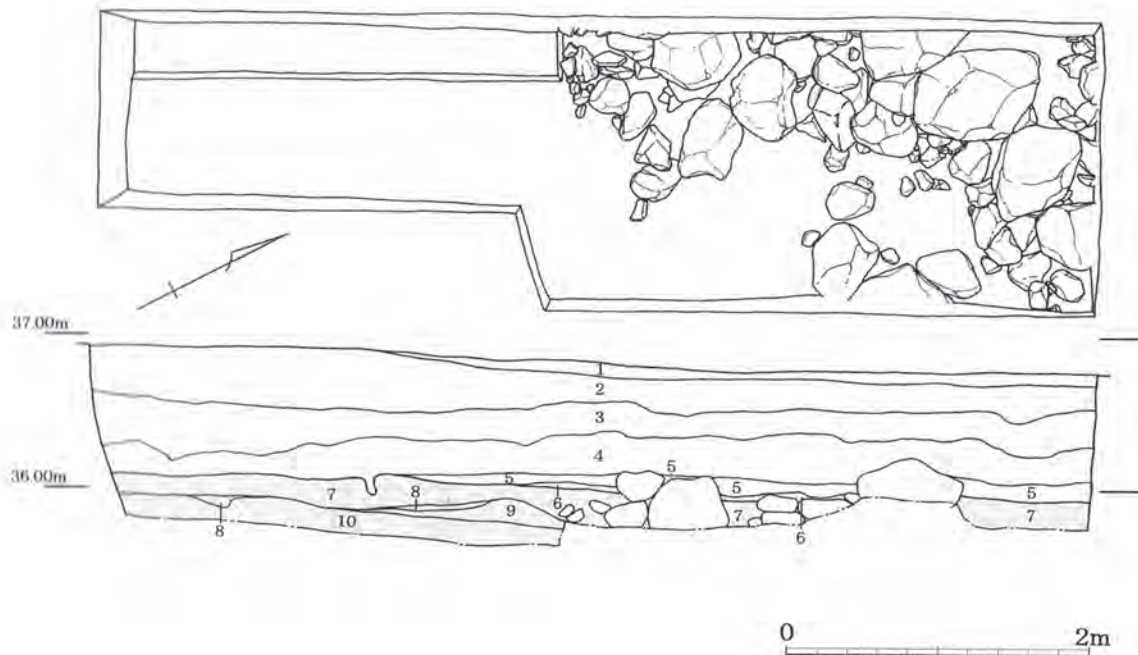
第 67 図 第 2 トレンチ平面図・土層断面図 (1/50)



### 第3トレンチ

第3トレンチは、第1トレンチで検出した根石部分から北側において、周溝及び地山確認のため墳丘（第1トレンチ）北東側に11m×1mの調査区を設定し遺構の検出に努めた。

調査の結果、トレンチ北側で多くの礫を検出した。傾斜方向に沿う礫の検出状況や砂層の土層堆積状況などから、土石流により低地に溜まった状況が窺える。遺物は、実測には堪えないが第5層から須恵器胴部片が1点出土した。



- 1 明黄褐色(表土) 2 暗灰色(表土) 3 茶褐色(粘性あり。近現代のゴミ含む。) 4 明茶褐色(粘性あり。)  
5 淡黒色(粘性あり。ややしまる。6・7層ブロック含む。) 6 黄褐色(砂質。しまりなし。小砂利ブロック含む。7層ブロック含む。)  
7 淡茶褐色(砂質。ややしまる。) 8 明灰白色(粘質土。かたくしまる。黄褐色ブロック含む。)  
9 灰白色(砂質。かたくしまる。小砂利を含む。) 10 淡黒色(砂質。かたくしまる。小砂利を含む。)

第68図 第3トレンチ平面図・土層断面図(1/50)

### 小結

#### 墳丘について

これまで鬼ノ岩屋2号墳は、墳丘規模約30mの円墳とされてきた。今回2ヶ所のトレンチから墳端と考えられる根石等を検出し、その成果を基に墳丘を復元すると、37.5mの墳丘規模が考えられる。墳丘の復元ラインについては、第1・2トレンチの根石を結び円を描くと、中心点が石室奥壁上に位置する。墳丘の高さについては、現状約4mの高さが確認できるが、第2トレンチの傾斜角や、石室の状況などから築造当時は現在より1～2m程度高かった可能性が考えられる。第2トレンチ1段目及び2段目の平坦面のレベルや緩やかな傾斜角から、墳丘は3段築成と考えられる。しかし、第1・2トレンチで検出した根石のレベル差(第1トレンチ36.5m・第2トレンチ37.8m)から、西方から東方に向けて傾斜する地形にあわせ1段の段差をつけて築造していたものと考えられる。

## 周溝について

第1トレンチで検出した根石より北側約2mの地点で砂質土層（14層）の立ち上がりを確認した。当初、14層は地山にしては締りがなく、下方から黒色を呈する土層を検出したことなどから、地山としては認識していなかった。しかし、第3トレンチの調査成果から当該砂質土層が古墳築造当時の地山である可能性が高いと考えられ、14層の立ち上がりを周溝と認識した。一方、第2トレンチでは、根石東側の土層（7層）はほぼ水平堆積をなし、第1トレンチとの差異を感じる結果となった。今回一ヶ所での不明瞭な検出なので、今後の周辺調査による資料の増加が必要と考えられる。



第 69 図 鬼ノ岩屋 2 号墳墳丘復元図想定図 (1/300)



第1トレンチ全景（北から）



第1トレンチ土層堆積状況（東から）



第1トレンチ土層堆積状況（東から）



第1トレンチ土層堆積状況（東から）



第1トレンチ遺構検出状況（北から）



第1トレンチ南側石積検出状況（東から）



第2トレンチ全景（西から）



第2トレンチ1段目平坦面葺石検出状況（西から）



第2トレンチ2段目平坦面葺石検出状況（西から）



第2トレンチ土層堆積状況（北から）



第3トレンチ全景（南から）



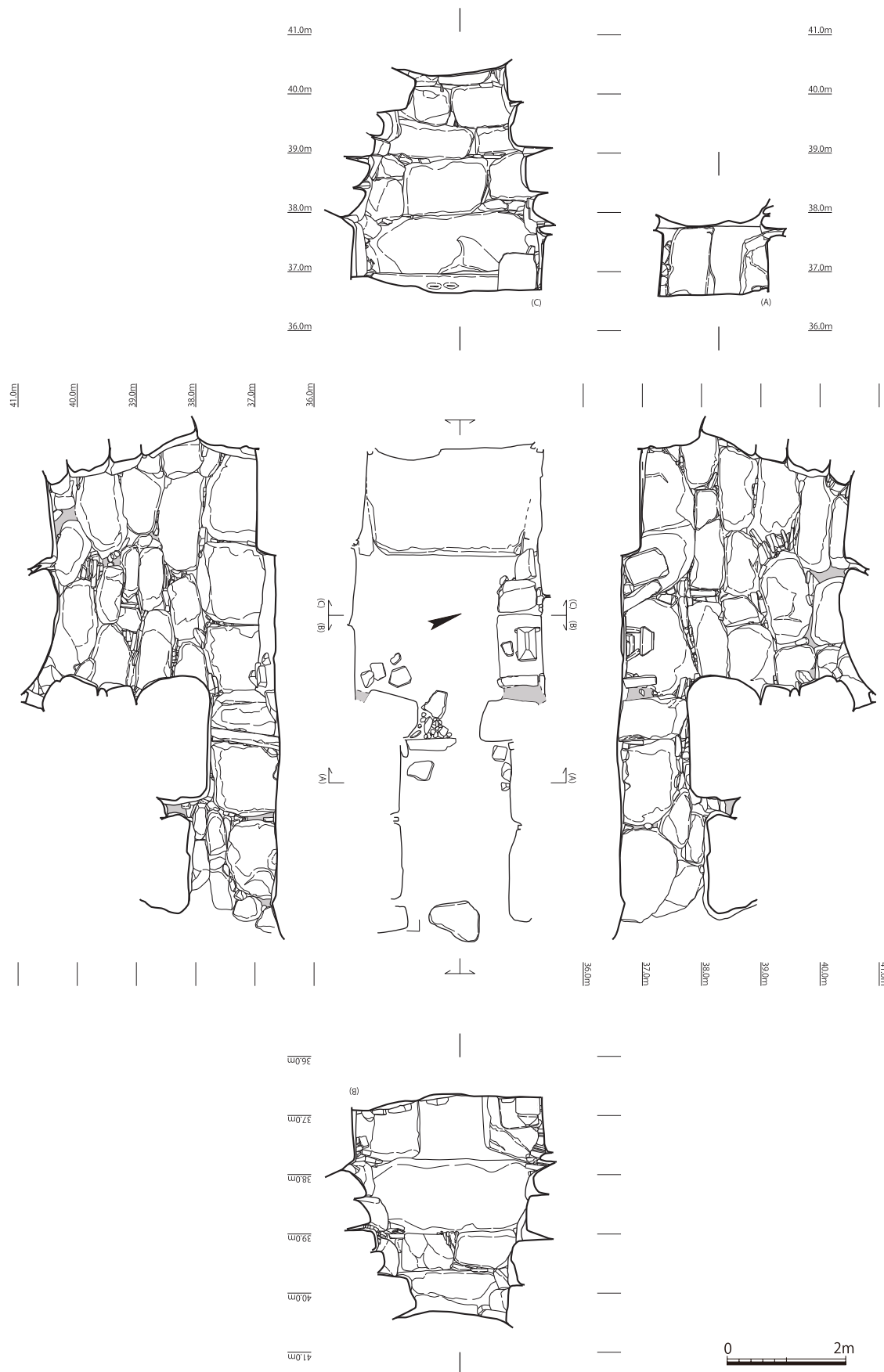
第3トレンチ土層堆積状況（東から）



第3トレンチ土層堆積状況（東から）



第3トレンチ礫検出状況（東から）

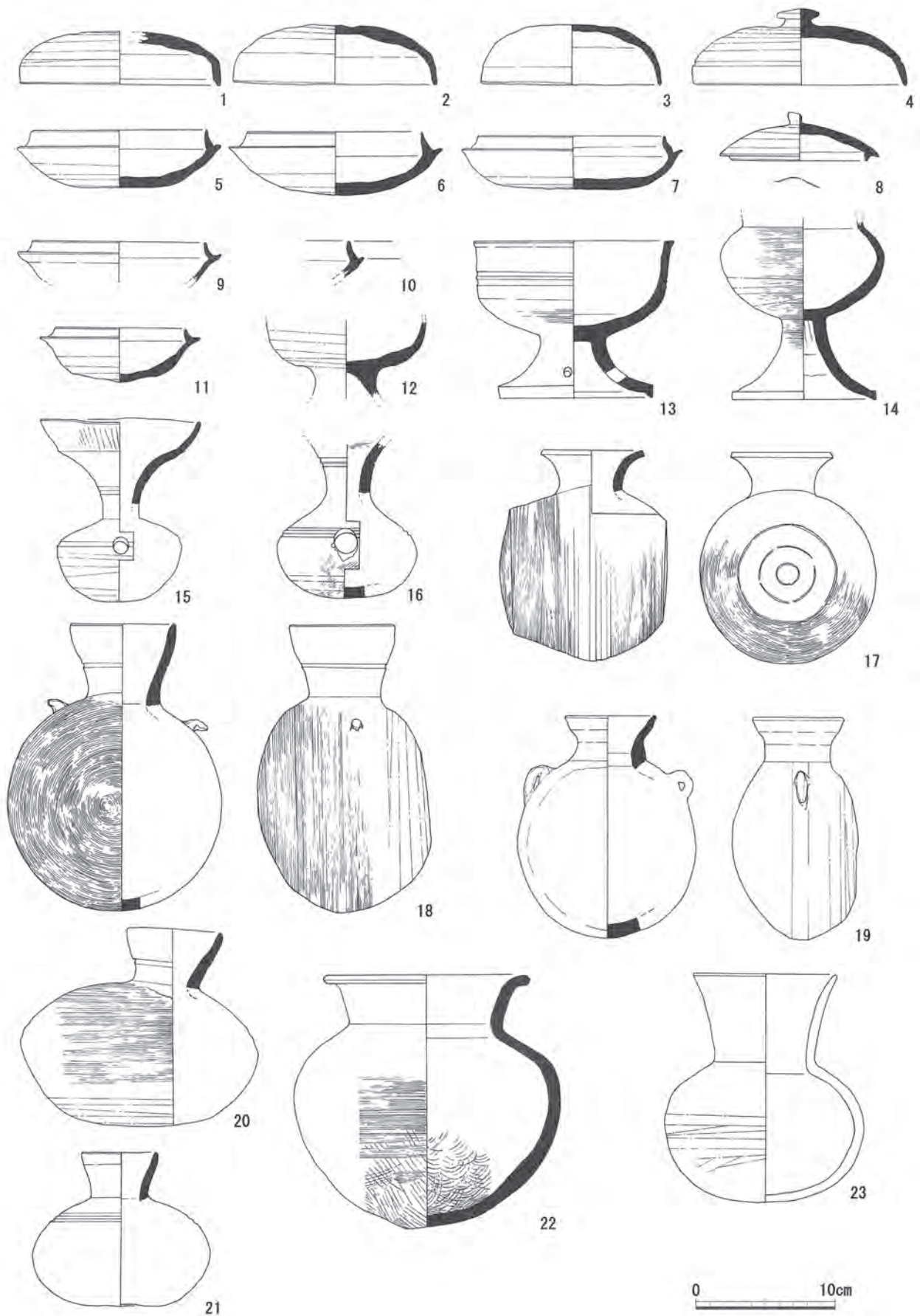


第70図 鬼ノ岩屋2号墳石室実測図 (1/100)

## 塚原出土遺物（鬼ノ岩屋 1 号墳西）

遺物は、昭和 33 年に鬼ノ岩屋 1 号墳の約 50 m 西側から、耕地整理の際に発見された一連の出土遺物である。鬼ノ岩屋古墳群関連遺物であり、当該古墳を正確に理解するために必要な遺物として今回提示した。

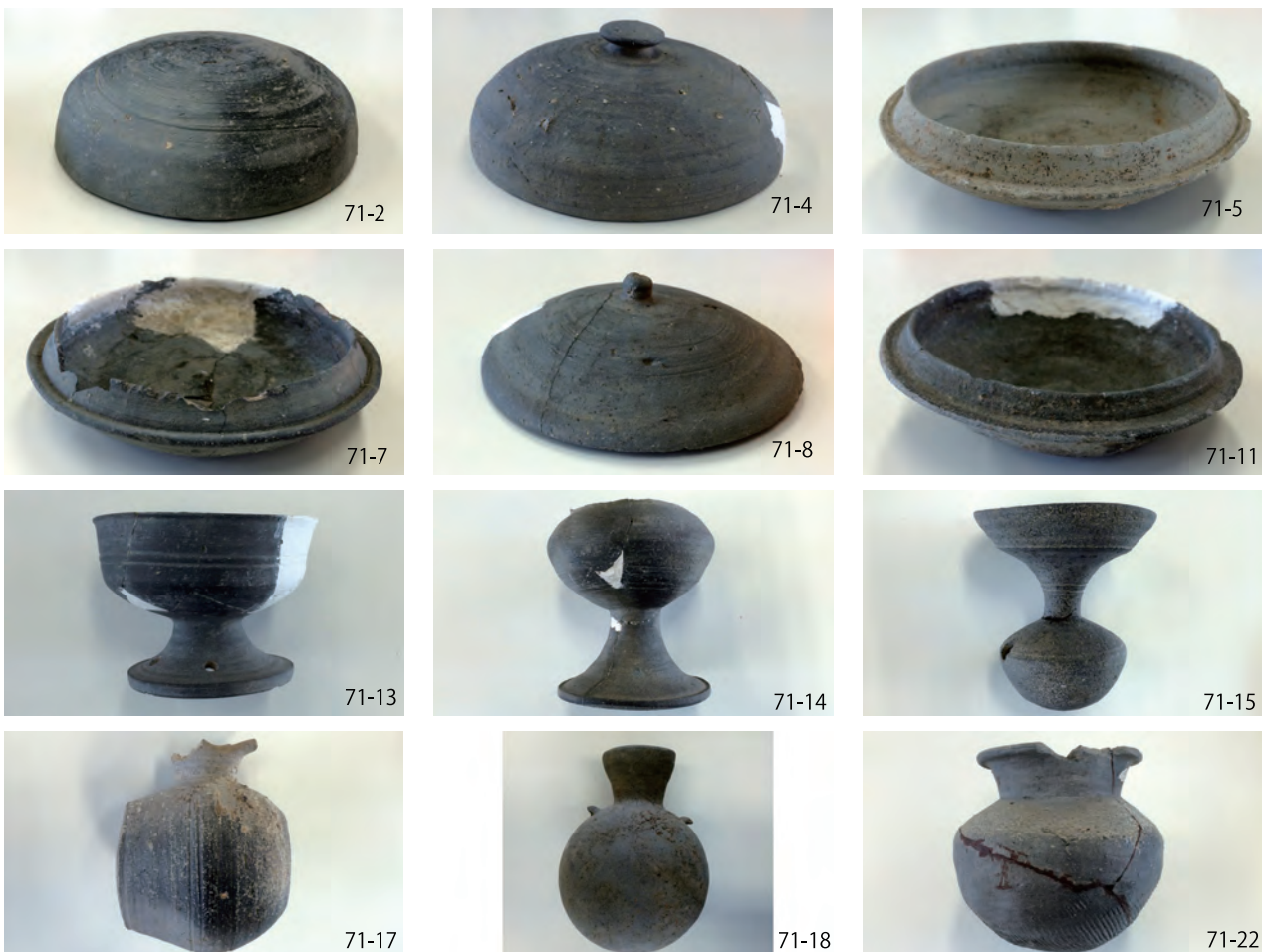
1 は須恵器坏蓋である。法量は復元口径 14.4cm、器高 3.8cm を測る。天井部には回転ヘラケズリ、側面には回転ナデが施される。2 は須恵器坏蓋である。法量は口径 14.7cm、器高 4.2cm を測る。天井部でやや粗い回転ヘラケズリ、側面には回転ナデが施される。内面天井部には一部ユビオサエの痕跡が確認できる。3 は須恵器坏蓋である。法量は口径 13cm、器高 4.3cm を測る。焼成が悪く、全体的にしまりがなく脆い。4 は須恵器坏蓋である。法量は口径 15.6cm、器高 5.4cm を測る。天井部には、やや中央部の膨らむ摘みを有する。天井部は回転ヘラケズリ、胴部は回転ナデを施す。天井部内面で一部ユビオサエがみられる。天井部から胴部に至る中ほどで 1 条の沈線を有する。5 は須恵器坏身である。法量は口径 14.6cm、器高 4cm を測る。外面底部は回転ヘラケズリが施され、底面は平坦に整形されている。カエリは内側にやや傾斜する。内面に一部粘土溜まりが付着している。やや大きめの石英、白色粒子、砂粒などの胎土が目立つ。6 は須恵器坏身である。法量は口径 15.3cm、器高 4.5cm を測る。底部外面はやや雑な回転ヘラケズリを施し、全体的に丸みをもつ形を呈する。カエリは内側にやや傾斜する。7 は須恵器坏身である。法量は口径 15.8cm、器高 3.8cm を測る。底部外面は回転ヘラケズリを施し、底部は平坦に整形されている。カエリは内側に傾斜する。8 は須恵器坏蓋である。法量は口径 11.4cm、器高 3.5cm を測る。天井部には乳頭状の摘みを有し、回転ヘラケズリを施す。天井部内面に「へ」の字状のヘラ記号を有す。9 は須恵器坏身である。法量は残存口径 14.6cm を測る。器壁はやや薄く、内面にやや傾斜するカエリを有する。10 は須恵器坏身である。内面にやや傾斜するカエリを有し、断面にカエリ接合時の粘土接合痕が確認できる。11 は須恵器坏身である。法量は口径 11.9cm、器高 3.8cm を測る。底部外面は雑な回転ヘラケズリを施し、器形はヘラケズリにより作出された陵が目立つ。12 は須恵器高坏と考えられる。坏部器面は軽めの回転ヘラケズリを施し、口縁部に向かい直で立ち上がる。13 は須恵器高坏である。法量は口径 14.4cm、器高 11.2cm、脚端部径 11.1cm を測る。脚部には 3ヶ所の円形透かしを有し、それぞれの穿孔が均等に配置されずに二等辺三角形の配置をなす。坏低部付近には一部カキメが施され、胴部中央には 2 条の沈線が巡る。口縁部はやや外方に膨らみ、口唇部は平坦面を形成している。14 は須恵器脚付壺である。法量は、脚端部径 10.3cm、胴部最大径 11.2cm を測る。胴部下方は回転ヘラケズリで整形し、その後脚部上方から壺胴部にかけてカキメを施す。頸部から口縁部にかけては欠損しているが、ほぼ直に立ち上がるものと考えられる。15 は須恵器甕である。法量は口径 11.5cm、器高 13cm、胴部最大径 9cm を測る。胴部下方に回転ヘラケズリを施し、胴部中央に 1 条の沈線、頸部中央に 2 条の沈線が廻る。口縁部には等間隔に線刻が施されるが、一部で粗い刻みとなる。16 は須恵器甕である。法量は胴部最大径 10cm を測る。胴部下方には回転ヘラケズリを施し、胴部中央及び頸部に 2 条の沈線が廻る。焼成はやや不良。内部に穿孔を施したときの円盤状の粘土塊と考えられる欠片が内包されている。17 は須恵器横瓶と考えられる。法量は口径 7.5cm、器高 15cm、胴部最大径 12cm(12.6cm) を測る。樽型甕に類似の器形を呈するが、穿孔は無い。全面にカキメを施



第 71 图 塚原出土遺物実測図 (1/4)

す。胴部上方では一部に自然釉が付着する。18は須恵器提瓶である。法量は口径7.7cm、器高20.5cm、胴部最大径15.4cmを測る。体部の半面をカキメ、残り半面をヘラケズリにより調整されている。頸部には1条の沈線が廻る。肩部の摘みは鍵状を呈す。19は須恵器提瓶である。法量は口径6.6cm、器高15.8cm、胴部最大径12.8cmを測る。体部の半面はナデ、残り半面をヘラケズリにより調整されている。胴部側面には一部接合時についたと思われるカキメが残存している。肩部の摘みは輪状を呈す。20は須恵器平瓶である。法量は口径6.9cm、器高14cm、胴部最大径17cmを測る。胴部下方は回転ヘラケズリ、上方はカキメを施す。頸部に1条の沈線が廻る。胴部上方には頸部接合時の粘土溜まりが確認できる。胴部最大張部には、接合の痕跡と考えられる窪みが器面に廻る。21は須恵器直口壺である。法量は口径5.5cm、器高11cm、胴部最大径12.7cmを測る。全面を回転ヨコナデにより整形し、一部には粗いヘラケズリが施される。胴部上方には2条の沈線が廻る。底部は若干ではあるが窪む。22は須恵器壺である。法量は口径14.8cm、器高18cm、胴部最大径19cmを測る。胴部全面にタタキ、後に中から上方にかけカキメを施す。胴部上方から口縁部にかけてはヨコナデを施す。全体的に形が歪で、底部付近では歪みが目立つ。23は土師器長頸壺である。法量は口径10.3cm、器高16.2cm、胴部最大径14.3cmを測る。全面をナデにより整形し、胴部中ほどに軽いヘラケズリを施す。各個体の色調はほぼ青灰色から灰色をなすが、3は灰褐色、16は一部焼成不良による淡灰褐色、23は白色を呈する。

写真図版 17





はる き よしもと ふるでら  
春木芳元遺跡古寺地区の調査



写真7 春木芳元1号石棺

所在地：別府市大字北石垣字塚原

調査の情報

調査主体：別府市教育委員会

調査期間：平成18年（2006）2月13日から3月11日

調査担当者：永野康洋（別府市教育庁生涯学習課 調査当時）

報告書情報：2007『春木芳元遺跡古寺地区』別府市教育委員会

報告書担当者：下森弘之（別府市教育庁生涯学習課 報告当時）

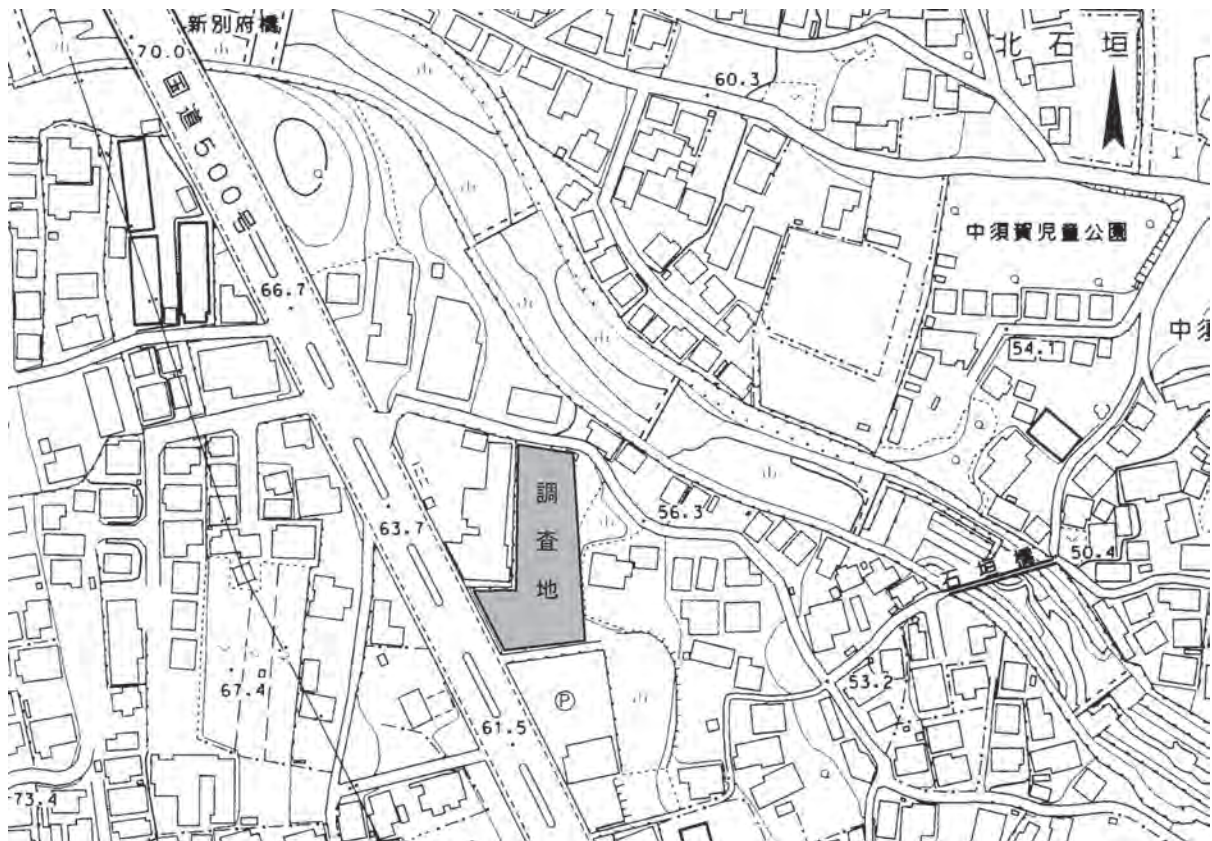
第3章第3節1で報告する春木芳元遺跡古寺地区の発掘調査の結果は、平成17年度に行われた別府市教育委員会による調査成果（2007『春木芳元遺跡古寺地区』）を掲載するものである。掲載にあたり本書の体裁にあわせるため若干の修正を加えている。

### 第3節 関連遺跡の調査

#### 1 春木芳元遺跡古寺地区

##### 調査の概要

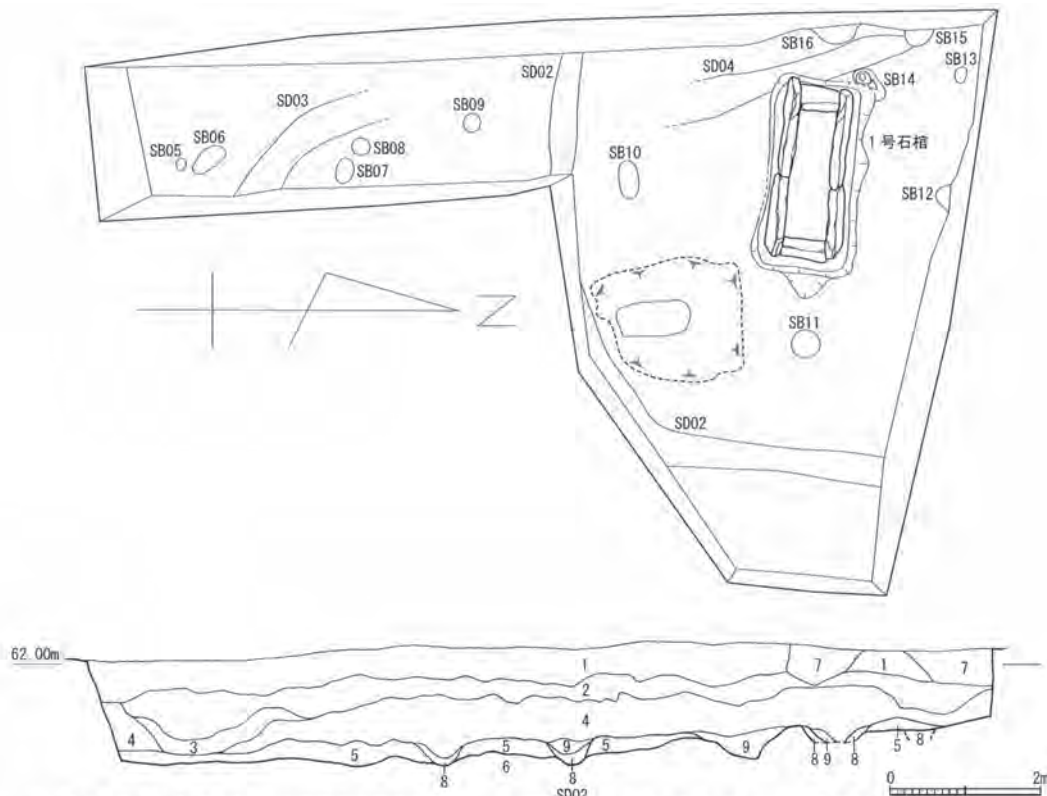
調査区は、春木芳元遺跡の一部、標高 60 メートルほどの春木川と国道 500 号線の間位置する。西側を通る国道からは、2 メートルほど低くなっており、すでに削平されている。調査はまず重機により既存建物を避け 4 箇所の特レンチを設定し掘り下げを行った。その結果第 1 トレンチと第 2 トレンチの表土下 1 メートルほどのところから箱式石棺を検出し、さらに第 1 トレンチの周辺からは周溝と弥生後期の包含層を確認した。周溝と箱式石棺に共伴すると考えられる須恵器等から第 1 トレンチの箱式石棺は 5 世紀後半に営まれた径 6 メートルほどの古墳の主体部と考えられた。従来別府市域の古墳は 6 世紀末から 7 世紀初頭のものだけが知られており、この時期の古墳は初めて確認された。石棺内部からは、鉄刀、鉄剣、鉄斧、小玉などの副葬品が検出されているが、これらの所見は、次項以降で述べることにする。調査区には、まだ石棺がある可能性があるが、本土木工事が駐車場建設のため、ほとんどが盛土工事となるため、基本的に遺跡自体を埋土保存することとした。しかし、当該石棺は別府市域における古墳時代中期の遺構としては極めて貴重な発見であるため、石棺が検出された区域を中心に特レンチを拡張し、別府大学文化財研究所に委託し石棺及びその周辺の実測を行った。実測終了後 2 基の石棺を実相寺古代遺跡公園内に仮移設し現場での調査を終了した。



第 72 図 調査地域図



第73図 調査区配置図 (1/300)



1. 表土
2. 黒褐色土（硬く締まる。1cm前後の小石を含む）
3. 黒褐色土（キメ細かく軟らかい。明黄褐色ブロックを含む）
4. 黒色土（古墳時代遺物包含層。キメ細かく軟らかい）
5. 暗茶褐色粘質土（古墳時代地山。キメ細かく締まりが強い）
6. 明黄褐色砂質土（キメ細かく締まりが強い）
7. 黒褐色土（カクラン）
8. 暗茶褐色粘質土（キメ細かく軟らかい。黄褐色ブロック含む）
9. 黒褐色粘質土（キメ細かく軟らかい）

第74図 第1調査区遺構配置図（1/100）

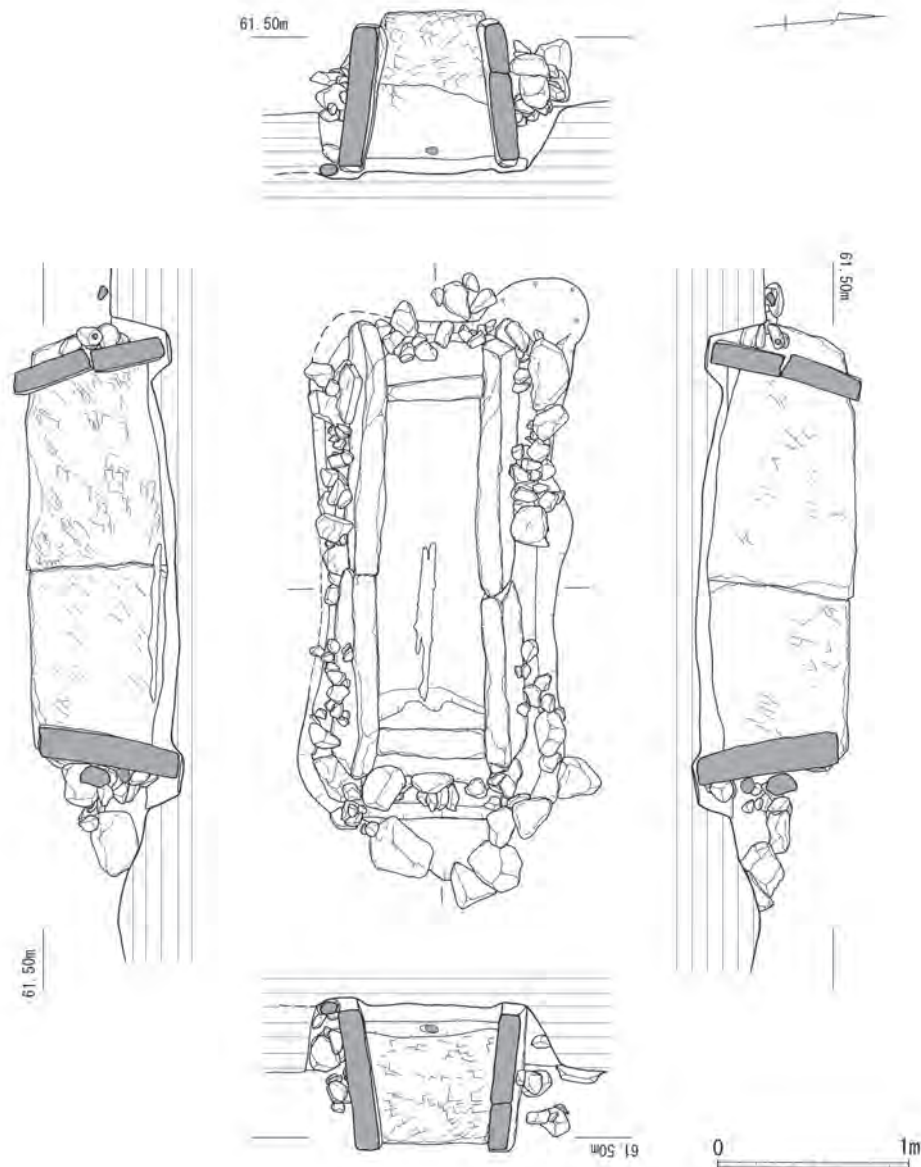
## 遺構と遺物

### （1）第1調査区

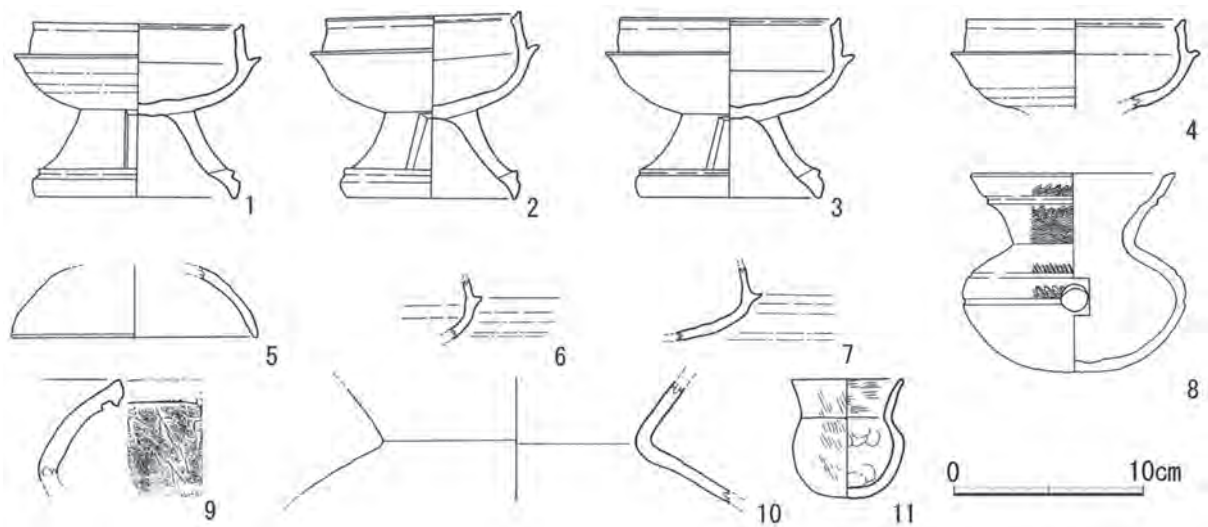
調査の結果、第1調査区からは組み合わせ式の箱式石棺、周溝、柱穴を検出した。周溝は、1号石棺に伴うと思われるSD-02の他に2本検出した。SD-03は調査区南側から北東方向に巡る。SD-04は調査区西側壁面から一部石棺西側と切り合う状況で検出したが、1号石棺との時期的な前後関係を明確にすることはできなかった。

### （2）1号石棺

主体部は、主軸をN-95-Wに向けた組み合わせの箱式石棺である。法量は長軸2.3m、短軸1.0m、高さ0.8mを測り、西位から東位に向かい若干広がる。棺は、6枚の約0.1mを測る肉厚な凝灰岩質安山岩を使用した板状の割石を壁側に2枚ずつ、両小口壁に1枚ずつ立て並べている。石棺の蓋は、検出時にすでに無く、棺内部に腐植土が流入している。棺材は、壁材、小口材共に若干内側に傾斜するように立てられ、拳大から人頭大の礫により裏込めがなされている。壁面棺材は長方形を呈し、それぞれの小口側では先端部上下両端共に打ち欠きを行い、略三角形に成形している。小口棺材は、壁面棺材の傾斜に合わせてように台形を呈している。各板材同士は、粘土目張りで隙間を埋められた様子はなく、裏込めに石棺材の剥片などが混じっていたこ



第75图 1号石棺 (1/40)



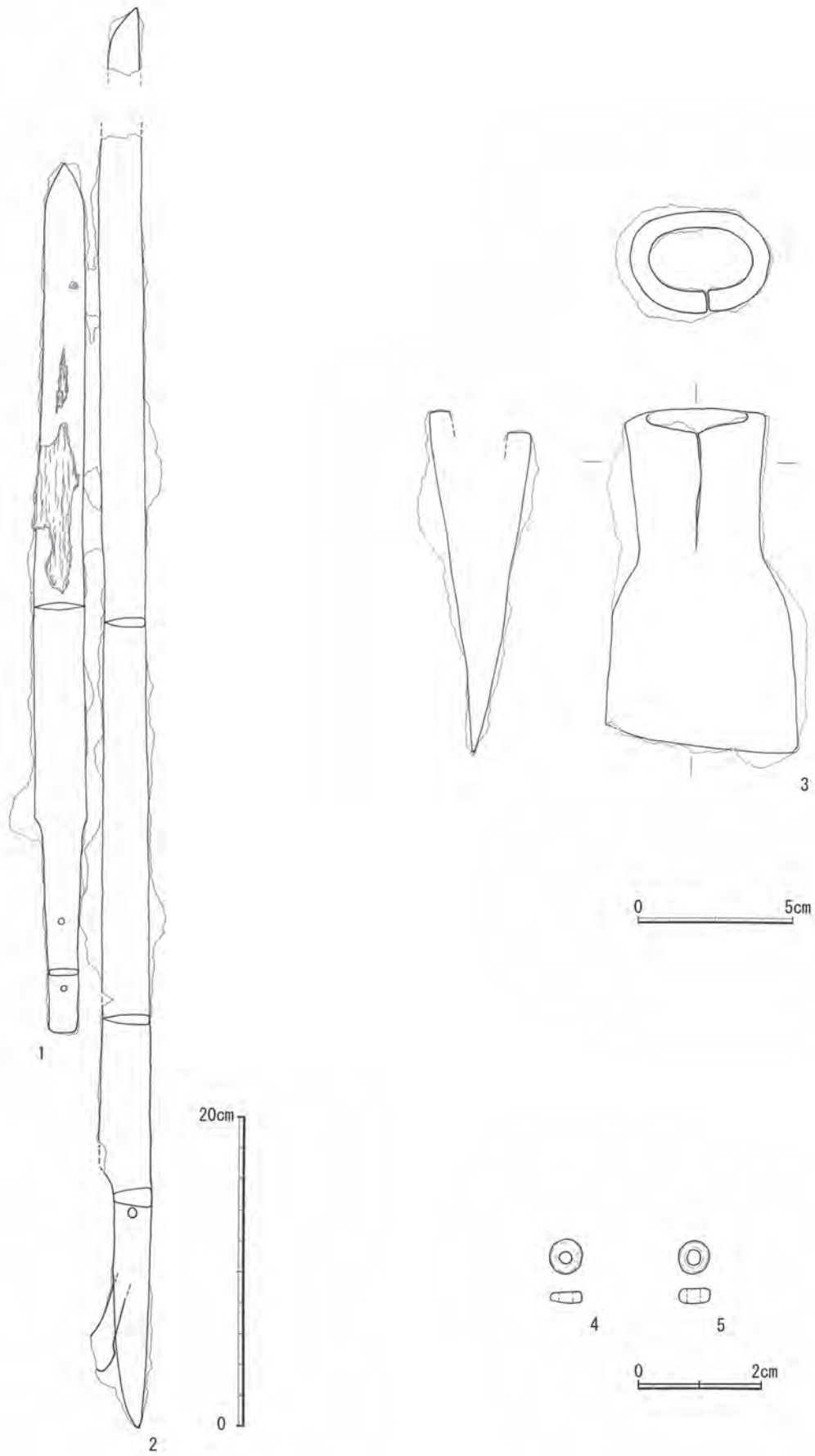
第76图 1号石棺周边部出土遗物 (1/4)

となどから、現地で最終調整を行い、石材を組み合わせていたと考えられる。棺内部は、赤色顔料が塗布されている。床面には、粘質土が敷き詰められ、東側に枕状の若干の高まりが確認できる。石棺墓抗は長方形を呈し、長軸 2.6m、短軸 1.3m を測る。壁面は垂直に掘り込まれず、下方にいくにしたがい内面に傾斜をする。底面は周囲に若干の窪みを有し、棺材の下受けを形成する。

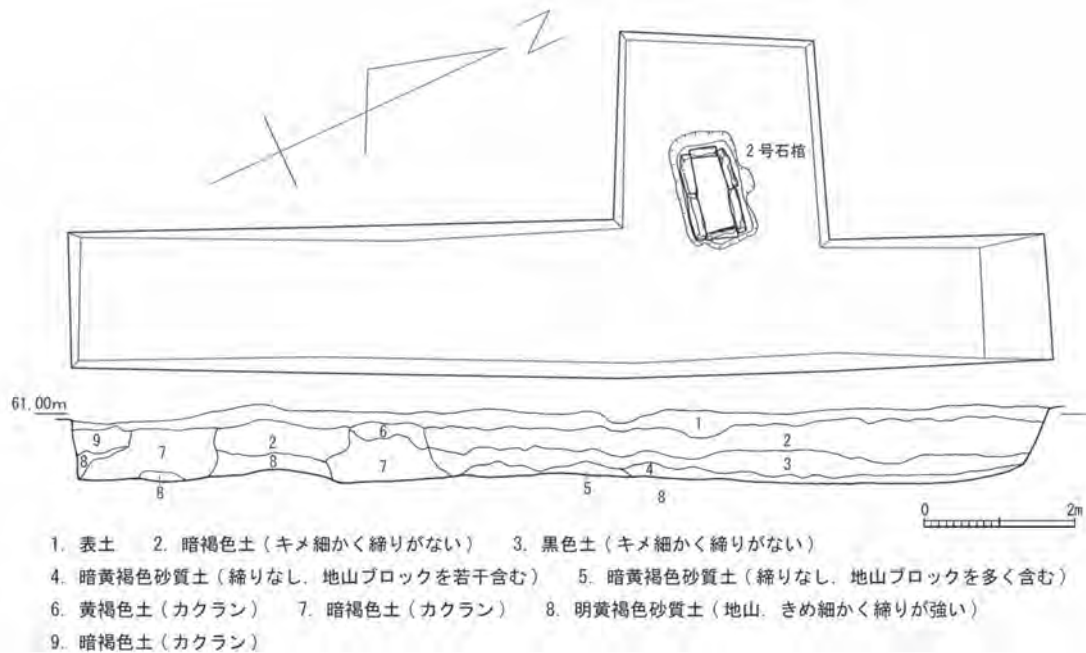
周溝 (SD - 02) は、石棺から約 3m 離れた位置で検出し、石棺を囲むように隅丸方形を呈す。周溝断面は逆台形を呈す。全体の半分以上が調査区外まで伸びるため、全容は知りえない。

出土遺物は、狭小な調査面積のため数は少ないが、坏身、坏蓋、高坏、甕、甕、埴などを確認した。大部分は SD - 02 周溝付近から出土し、7 のみ石棺内上層からの出土である。第 76 図 1 ~ 4 は高坏である。1 は口径 13.0cm、高さ 9.3cm、脚端部径 9.4cm を測る。カエリは直立し、口唇部直前で若干外反する。口唇部内面は段を有す。脚部は 3 つの方形透かしを有す。坏部は内外面ともに回転ナデを、外面は中ほどまで回転ヘラケズリを施す。2 は口径 13.0cm、高さ 9.7cm、脚端部径 9.2cm を測る。カエリは直立し、口唇部直前で若干外反する。口唇部内面は段を有す。脚部は 3 つの方形透かしを有す。坏部は内外ともに回転ナデを、外面は不明瞭であるが、中ほどまで回転ヘラケズリを施す。3 は口径 12.8cm、高さ 9.1cm、脚端部径は復元で 10.5cm を測る。カエリは直立し、口唇部直前で若干外反する。口唇部内面は段を有す。脚部は 3 つの方形透かしを有す。坏部は内外ともに回転ナデを、外面は不明瞭であるが、中ほどまで回転ヘラケズリを施す。4 は坏部しか現存していないが、口径 13.0cm を測る。カエリは直立し、口唇部直前で若干外反する。口唇部内面は段を有す。坏部は内外ともに回転ナデを施し、外面は不明瞭であるが、中ほどまで回転ヘラケズリを施す。5 は坏蓋である。復元口径は 12.9cm を測る。内外面ともに回転ナデにより整形を行う。6・7 は坏身である。カエリは、ともにほぼ直立するが先端部を欠損する。6・7 ともに回転ナデで整形が行われ、外面は中ほどまで回転ヘラケズリが施される。8 は甕である。8 は口径 10.8cm、高さ 10.5cm、胴部最大径は 11.8cm を測る。ラッパ状に開く口縁を有し、底部は丸底を呈す。口縁部は二重口縁を呈し、上方、下方ともに細かな波状文を有す。体部には 2 条の沈線を巡らせ、その間に波状文と穿孔を有す。調整は内外面ともに回転ナデにより整形されている。底部と頸部に明瞭な接合の痕跡がうかがえる。9 は壺の口縁部と思われる。口唇部を肥厚させ、その下方に、やや幅広の沈線を、さらに下方に波状文を巡らせる。調整は内外面ともに回転ナデにより整形されている。10 は甕頸部である。頸部径は復元で 14cm を測る。全面をナデにより整形し、胴部は不明瞭であるが、叩きを施す。11 は埴である。口径 5.9cm、高さ 6.2cm を測る。口縁部は、ほぼ直立するが、若干外方に傾く。底部は若干の面を有すが、ほぼ丸底を呈す。外面はタテハケ後ナデ、口縁部内面はヨコハケ、胴部内面はナデが施される。

第 77 図 1 ~ 5 は石棺内出土遺物である。1 は鉄剣である。全長 56.0cm、頭部長 42.0cm、茎長 14.0cm、刃幅 3.4cm、茎幅 2.0cm、刃部幅 0.4cm を測る。茎部には 2 箇所が目釘穴を持つ。剣身の断面は不明瞭ではあるが、凸レンズ状を呈す。表面には部分的に木質が残る。2 は大刀である。鋒直前で欠損し接合しないが、残存全長 84.0cm 以上、刃幅 3.2cm、刃部厚 0.6cm を測る。剣身は直刀で反りはなく、茎部には 1 箇所が目釘穴が確認できるが、錆の付着がひどく、残りの部分での目釘穴は確認できない。関部は若干欠損しているが、形状はほぼ想定できる。部分



第 77 图 1 号石棺内出土遺物 (1・2 : 1/4、3 : 1/2、4・5 : 1/1)



第78図 第2調査区遺構配置図（1/100）

的に木質を確認することができ、茎部には人骨が付着し埋葬時の様相を想定することができる。X線撮影による確認を行ったが、象嵌等は確認できなかった。3は鍛造の袋状鉄斧である。全長11.2cm、刃部幅6.2cm、袋部の直径3.3cmを測る。袋部は楕円形を呈し、刃部に至る肩部が張る。刃部は使い減りのためか、若干斜めになる。4・5は滑石製の小玉である。4は直径0.5cm、孔径0.2cm、最大厚0.2cm、重量0.05gを測る。全体的に扁平であり、2面で顕著な平坦面がみられる。5は直径0.5cm、孔径0.2cm、最大厚0.25cm、重量0.05gを測る。全体的に丸みを帯びた形状を呈す。色調はともに灰白色を呈する。2点ともに石棺内部から持ち出した埋土を精査し、確認したものであり、正確な出土位置は不明である。

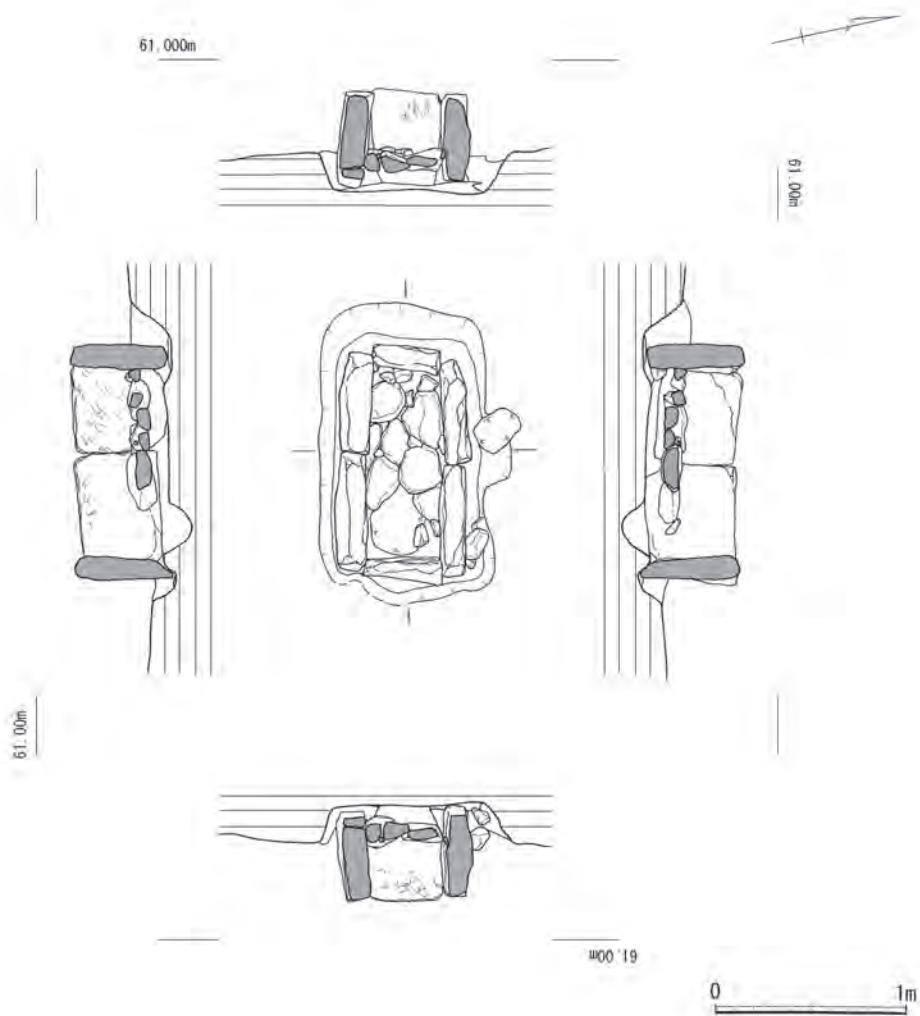
### （3）第2調査区

調査の結果、第2調査区からは小児用と考えられる組み合わせ式の箱式石棺を検出した。その他周溝等の外部施設は検出することができなかった。

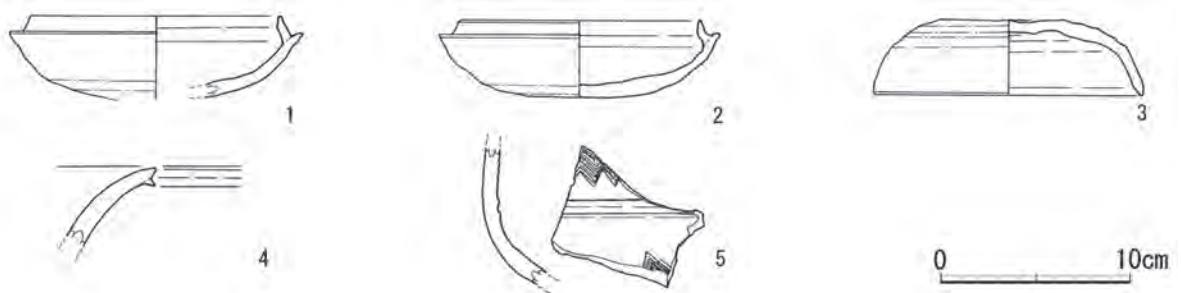
### （4）2号石棺

主体部は、主軸をN-103-Wに向けた組み合わせの箱式石棺である。法量は長軸1.2m、短軸0.7m、高さ0.5mを測り、頭位に向かい若干広がる。棺は6枚の約0.1mを測る肉厚な凝灰岩質安山岩を使用した板状の割石を壁側に2枚ずつ、両小口壁に1枚ずつ立て並べている。石棺の蓋は、1号石棺と同様に検出時にすでに無く、棺内部に腐植土が流入している。棺材は、ほぼ垂直に立てられる。壁面棺材は長方形を呈す。両小口棺材は逆台形を呈し、下方では壁面棺材との隙間が目立つ。1号石棺と同様に粘土目張りなどの隙間埋めは確認されない。棺内部は、赤色顔料が塗布され、床面には、拳大から人頭大の扁平な礫を敷き詰める。一部木の根による攪乱を受け、敷石が跳ね上がり元位置の確認はできない。





第79図 2号石棺 (1/40)



第80図 第2調査区出土遺物 (1/4)

石棺墓抗は長方形を呈し、長軸 1.6m、短軸 0.7m を測る。壁面は垂直に掘り込まれず、下方にいくにしたがい内面に傾斜する。底面は両小口部に窪みを有し、棺材の下受けを形成する。石棺に付随する周溝等の検出はできず、外部施設の有無は不明である。

出土遺物は第 80 図 1～3 まだが石棺内から出土した。しかし、石棺内部の木の根による攪乱を受けた場所からの出土なので、元位置の確認はできなかった。

第 80 図 1・2 は坏身である。1 は口径 15.6cm、高さ 4.5cm、2 は口径 15.0cm、高さ 4.1cm を測る。1・2 ともに、若干内側に傾斜するカエリを有し、受部は上向きに引き出される。調整は内外面ともに回転ナデで整形し、外面中ほどまで回転ヘラケズリを施す。3 は坏蓋である。口径 14.2cm、高さ 4.0cm を測る。口縁端部は丸みをおびる。調整は回転ナデ後に外面中ほどまで回転ヘラケズリを施す。4 は甕の口縁であると思われる。破片なので法量は不明である。口縁端部は三角形を呈し、下位に三角突帯が 1 条巡る。5 は破片なので器種、法量は不明である。中位に小さな突帯が 2 条巡り、その上下にヘラ描きの波状文を施す。

## 小結

これまで春木芳元遺跡は、縄文時代から奈良時代までの複合遺跡として認識され、多くの遺構・遺物が出土してきた。今回の調査では、これまで別府市内で類例をみない 5 世紀後半から 6 世紀中頃に比定される石棺と、それに伴う遺物が出土し、別府市古墳時代の空白期を埋める資料となった。

1 号石棺は、長軸 2.3m、短軸 1.0m を測り、頭位を東側に向ける。頭位には枕状の高まりがあり、棺内部からは鉄剣、鉄刀、鉄斧、小玉が出土した。鉄剣には人骨が付着し、出土位置と合わせて埋葬当時の状況が考えられる。一方、2 号石棺は長軸 1.2m、短軸 0.7m を測り、頭位を東側に向ける。平面形は 1 号石棺の約半分程度であり、木の根による攪乱を受けているため元位置の確定はできないが、棺内部から、坏身、坏蓋が出土している。両石棺ともマウントは確認できなかったが、1 号石棺の方からは隅丸方形の周溝を検出し、古墳の形状を類推することができると思われる。

1 号石棺が比定される時期は、周溝付近で出土した須恵器から 5 世紀後半と考えられ、2 号石棺は若干の不安要素はあるが、石棺内から出土した須恵器から 6 世紀中頃に位置付けられると考えられる。1 号石棺と 2 号石棺を比較すると、規模の他、棺内床面や壁側棺材端部の形状、比定される時期などの差異がある。1 号石棺では、床面は粘質土を敷き詰め、壁側棺材端部を打ち欠いているのに対し、2 号石棺では、床面に人頭大の扁平石を敷き詰め、壁側棺材は方形に加工されている。2 号石棺の小口については、逆台形を呈し、石棺墓抗には掘り戻されたような乱れもないことから、築造当初から上下逆に設置していたものと考えられる。しかし、それに類する検出例は見当たらず、石棺下方では壁面棺材との隙間も目立つ設置方法となり理解に苦しむ。石棺の石材や厚さ、全面ににわたり確認できるノミ痕、方位等は両石棺とも、ほぼ同様であり類似点も多く、同一志向のもとで築造されたことがうかがえる。

棺材に使用されている石材は肉眼観察ではあるが、両石棺ともに凝灰岩質安山岩と考えられ、整形や調整が容易にできる石材を使用している。石切場等は不明であるが、実相寺山で同質の石の露頭がみられることや、遺跡からの距離等を考えると、実相寺山近辺で切り出し、整形を行い、

現地まで運び最終調整を施し設置したものと考えられる。

また、第1調査区からは、その他の溝も検出しており、周辺部に複数の同様な遺構が存在する可能性が高く、今後の調査に期待が持たれる。

表7 春木芳元遺跡古寺地区遺物観察表

(単位: cm, g)

挿図番号	遺物番号	種別	器種	口径	器高	底径	裾径	天井部径	色調	胎土	備考
76	1	須恵器	高坏	13.0	9.3		9.4		灰色	石英・長石	
76	2	須恵器	高坏	13.0	9.7		9.2		灰色	石英・長石	
76	3	須恵器	高坏	12.8	9.1		(10.5)		灰色	石英・長石	
76	4	須恵器	高坏	13.0					灰色	石英・長石	
76	5	須恵器	坏蓋	(12.9)					灰色	長石	
76	6	須恵器	坏身						灰色	長石	
76	7	須恵器	坏身						灰色	長石	
76	8	須恵器	甕	10.8	10.5				灰色	石英・長石	外面に波状文
76	9	須恵器	壺						灰色	長石	外面に波状文
76	10	須恵器	甕						灰色	長石	
76	11	土師器	埴	5.9	6.2				茶褐色	長石・角閃石	
80	1	須恵器	坏身	(15.6)					灰色	石英・長石	
80	2	須恵器	坏身	15.0	4.1	5.4			青灰色	石英・長石	
80	3	須恵器	坏蓋	14.2	4.0			5.6	青灰色	石英・長石	
80	4	須恵器	甕						灰色	極小の砂粒	
80	5	須恵器							灰色	長石	外面に波状文

挿図番号	遺物番号	器種	全長	頭部長	刃幅	茎幅	刃部厚	備考
77	1	鉄剣	56.0	42.0	3.4	2.0	0.4	1号石棺内出土 X線により目釘穴2箇所確認
77	2	鉄刀	84.0以上		3.2		0.6	1号石棺内出土 X線により目釘穴1箇所確認 骨付着
77	3	鉄斧	11.2	6.2				1号石棺内出土

挿図番号	遺物番号	石材	器種	最大径	孔径	最大厚	重量	備考
77	4	滑石	小玉	0.5	0.2	0.2	0.05	1号石棺内出土
77	5	滑石	小玉	0.5	0.2	0.25	0.05	1号石棺内出土



第1調査区全景（北から）



1号石棺（北から）



1号石棺（西から）



第1調査区北壁（南から）



1号石棺鉄器出土状況



第2調査区全景（北から）



2号石棺（西から）



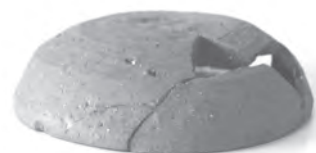
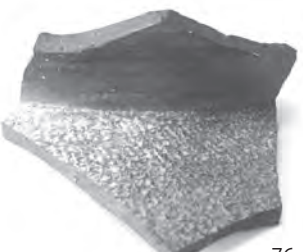
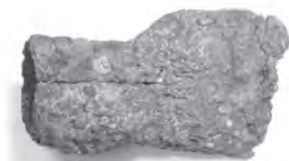
2号石棺完掘状況（北から）



2号石棺北側土層（東から）



1号石棺取り上げ状況



## 第4章 各論

### 第1節 須恵器からみる別府市内の古墳時代の様相

玉川剛司（別府大学文化財研究所）

#### 1 はじめに

別府市には、実相寺古墳群や鬼ノ岩屋古墳群など、古墳時代中期～後期の古墳が存在し、これまでの発掘調査で多くの須恵器が出土している。これら出土した須恵器は、古墳の築造時期や使用期間を考える上で重要な遺物である。出土した須恵器には「築造開始時」のものから「築造完了時」、「追葬時」、または「儀礼時」のものなど多くの可能性が内包することが指摘されている（土生田 1993）。そこで、本論では、出土須恵器の編年を試み、古い型式のものから新しい型式のものまでの期間を示すことによって、築造から追葬・儀礼までを含む古墳の使用期間を提示し、別府市内の様相について考察していきたい。本論で取り扱う遺物は、別府市内の実相寺古墳群の春木芳元遺跡古寺地区1・2号石棺、太郎塚古墳・次郎塚古墳、鷹塚古墳、天神畑古墳と、北石垣遺跡で出土地点が確認できる須恵器である。

まず、古墳・遺跡ごとに出土した須恵器についてみていきたい。

#### 2 出土須恵器の分類及び編年について

##### (1) 春木芳元遺跡古寺地区（第81図）

春木芳元遺跡古寺地区は、2基の箱式石棺が確認されている遺跡で、2号石棺は1号石棺から45m北側に位置している。

第81図1～6が一括で検出され、2号石棺では、棺内の床石直上から7～9が出土している。1の坏身及び、2～4の高坏は、底部が丸みを帯びている点や、立上がりの角度及び、口縁端部が沈線状の段になりきれず、内傾した形状からTK23型式並行であろう。高坏の脚部の透かしについては、全て3方向である。6は、2～4の高坏の坏部と比較して立上がりの内傾が強く、口縁端部に明確な段を有し、回転ヘラケズリの位置が低いことから、TK47型式並行であろう。5の甕は、胴部最大径より口縁径の方が小さく、胴部最大径の位置が頸部と底部の間となっていることからTK23型式並行であろう。なお、1～5の口縁部には、打ち欠いた痕跡がみられることから葬送儀礼で使用されたと考えられる。7は口縁端部の段がなく、立上がり角度が高く、径が大きいことから、TK10型式並行である。8・9はセットで、9の立上がり内傾が高く、8の回転ヘラ削りがまだ高い位置まで認められることからMT85型式並行であろう。

以上まとめると、1号石棺については、TK47型式の様相を示す遺物が含まれるものの、TK23型式並行期の築造であると考えられる。また、2号石棺については、MT85型式並行のセットがあるものの、TK10型式並行の築造である。

##### (2) 太郎塚・次郎塚古墳（第82・83図）

太郎塚・次郎塚古墳は、現状で2.5mしか離れておらずかなり近接して立地している円墳2基である。第82図は、各調査区から出土した須恵器である。器種については、坏蓋、坏身、高坏、

	春木 1 号	春木 2 号
TK23		
TK47		
MT15		
TK10		
MT85		

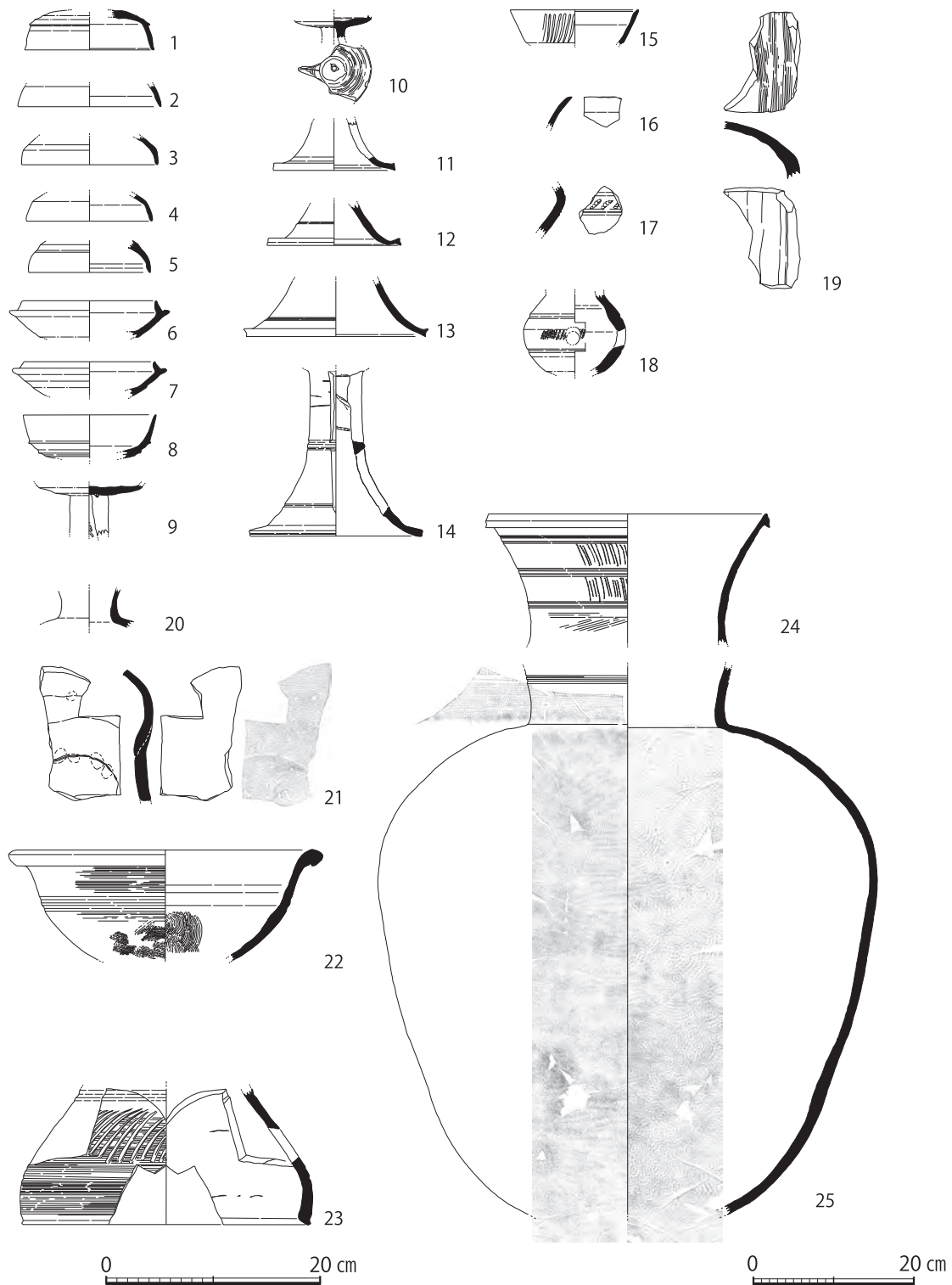
0 20 cm

第 81 図 春木芳元遺跡出土須恵器編年図(1/6)

甕、提瓶、横瓶、器台、大甕などがみられる。これらの中からピックアップし、型式別に並べたものが第 83 図である。

第 83 図 2・5・8 は次郎塚、9 は太郎塚、それ以外の 10・14・15・19～25 は両古墳の間に設定された 7 トレンチで検出された太郎塚に伴う周溝底から一括で出土したものである。須恵器の出土状況より、両古墳の築造時期を細分することは、困難である。しかし、両古墳が近接して築造されていることや、次郎塚古墳の周溝が太郎塚の周溝と切りあっていない点、また、太郎塚古墳の周溝が北側では 7 トレンチその先の石階段の下までと南側では 11 トレンチから 9 トレ

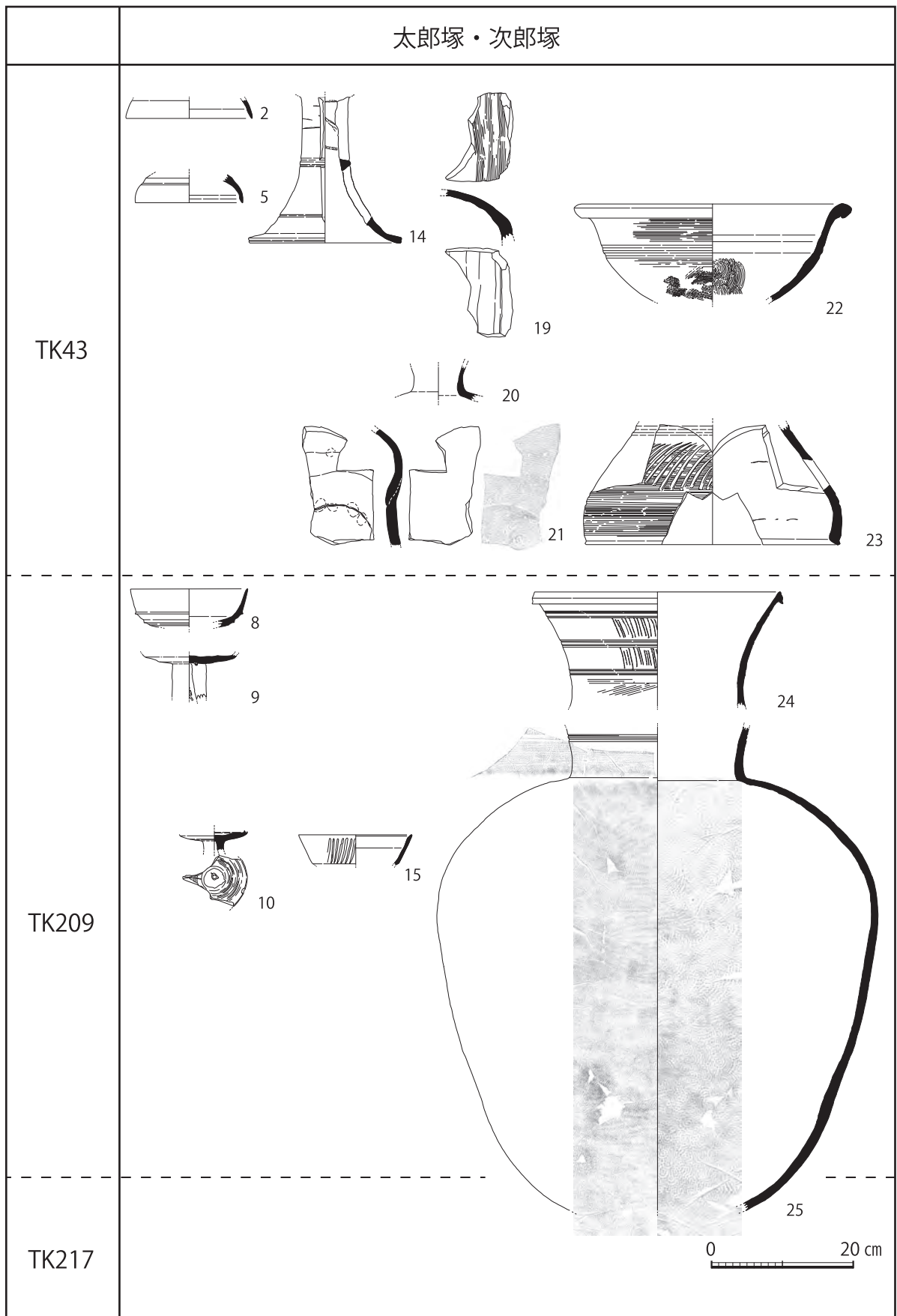




第82図 太郎塚古墳・次郎塚古墳出土須恵器 (25：1/8, その他：1/6)

ンチ2区の次郎塚古墳の入口であると考えられる付近で一部確認されていることから、設計段階では太郎塚古墳が先行し使用開始時期については同時期であった可能性が高いと考えられる。

第83図の2・5は坏蓋で口縁端部の段が見られず、低く口縁部上位の沈線が不明瞭であることからTK43型式並行であろう。14は長脚二段の三方向方形透かしの高坏脚部で、基部の径が広いことからTK43型式並行である。19は横瓶、20・21は同一個体であると考えられる提瓶で



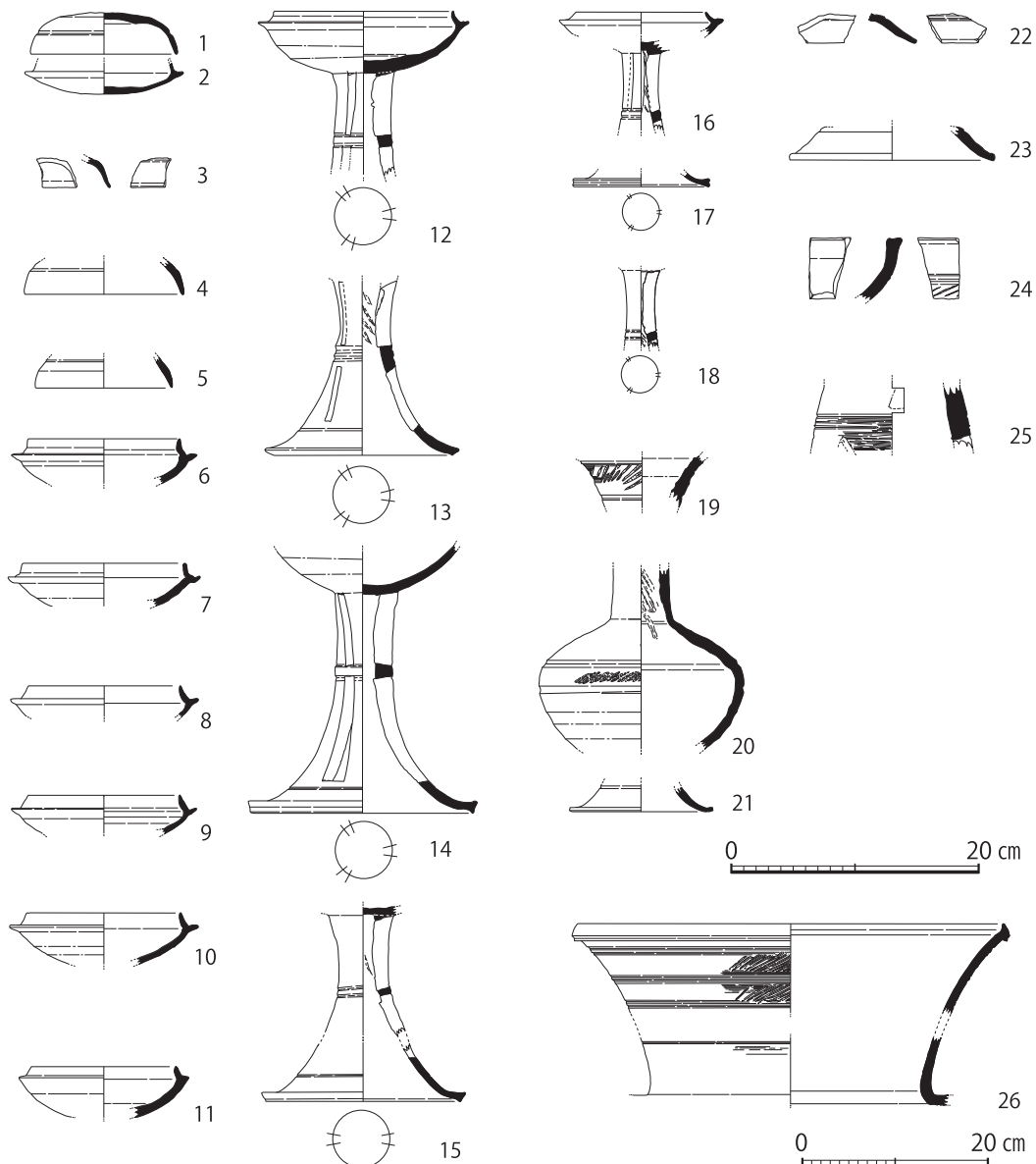
0 20 cm

0 20 cm

第 83 図 太郎塚古墳・次郎塚古墳出土須恵器編年図 (25 : 1/8、その他 : 1/6)

ある。また、22・23は同一個体の器台である。これらはTK43型式並行であると考えられる。8・9は無蓋高坏で8は底部付近に二重の稜線をもつが、脚部に向けての屈曲が緩く丸みを帯びている。9についても基部から坏部の口縁に向って屈曲する箇所が短く基部の径が短いことから両者ともTK209型式並行であると考えられる。10は小型の無蓋高坏で、器壁が薄くカキ目がシャープで、外面が一部赤褐色を呈するという特徴から、八女産須恵器であると考えられる（木村2013）。15は甕の口縁部で口縁端部に向けての傾きや長さ、口縁径よりTK209型式並行であろう。24・25は同一個体の大甕である。口縁部から頸部にかけて内傾しつつもほぼ直高していることからTK209型式並行であると考えられる。

以上から、次郎塚古墳は、TK43～TK209型式並行、両古墳間の周溝床面から一括出土した7トレンチの遺物についてもTK43とTK209が混在することから、TK43段階で太郎塚・次郎塚古墳が使用され始め、TK209まで継続することまでが伺える。なお、第82図1は、次郎塚古墳北側に設定した1トレンチの石室築造段階の整地土から出土したMT15型式並行の坏蓋であるこ

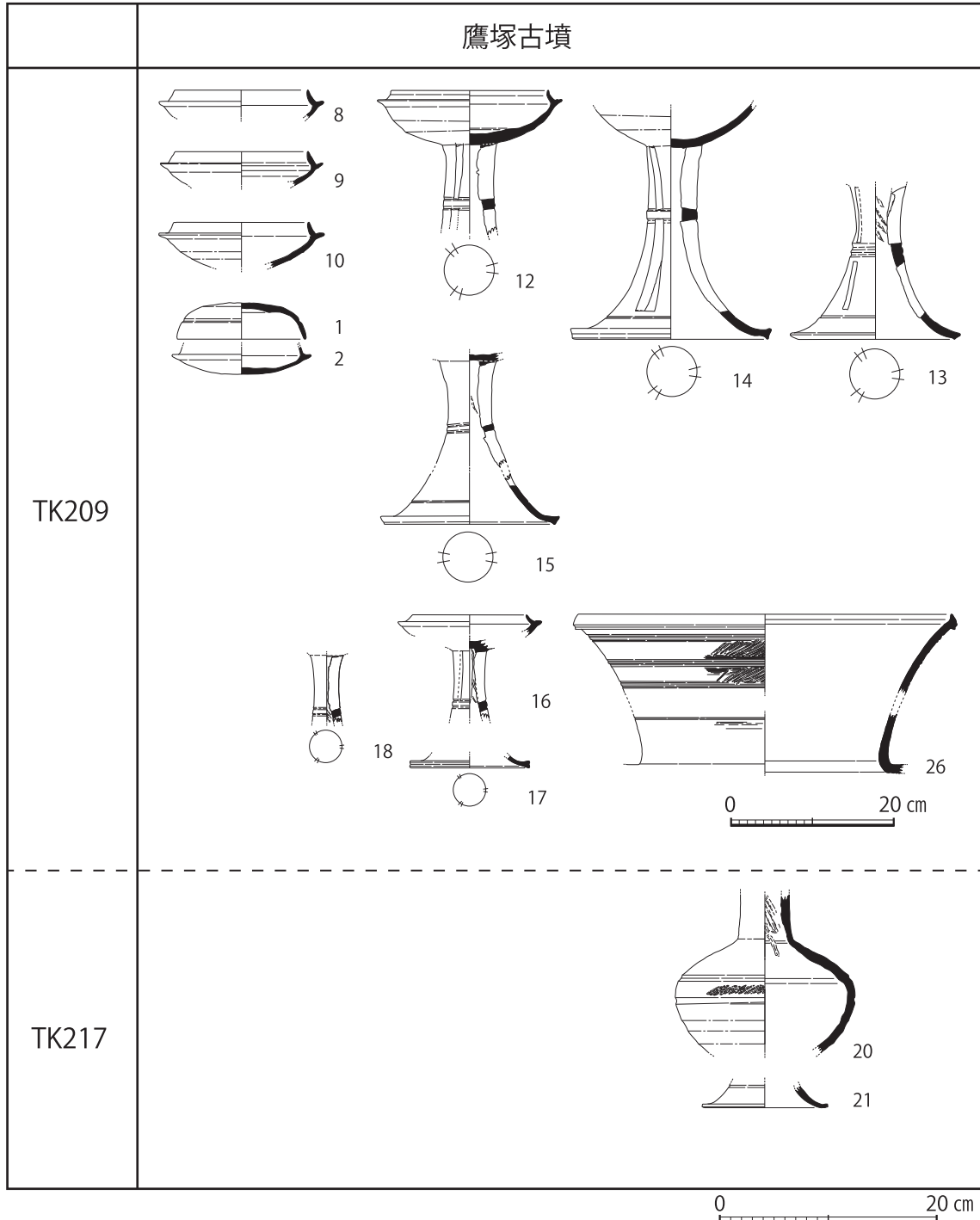


第84図 鷹塚古墳出土須恵器 (26:1/8、その他:1/6)

とから、次郎塚古墳に先行する何かしらの遺構（住居址・古墳）が北側に存在していた可能性がある。

(3) 鷹塚古墳（第 84・85 図）

鷹塚古墳は、実相寺古墳群で横穴式石室を主体部とする高塚墳の中で唯一の方墳であり、石室規模が大分県内最大級である重要な古墳である。本古墳からは、各調査区から多くの須恵器出土しており、これらをまとめたものが第 84 図である。この中からピックアップし、型式ごとに並

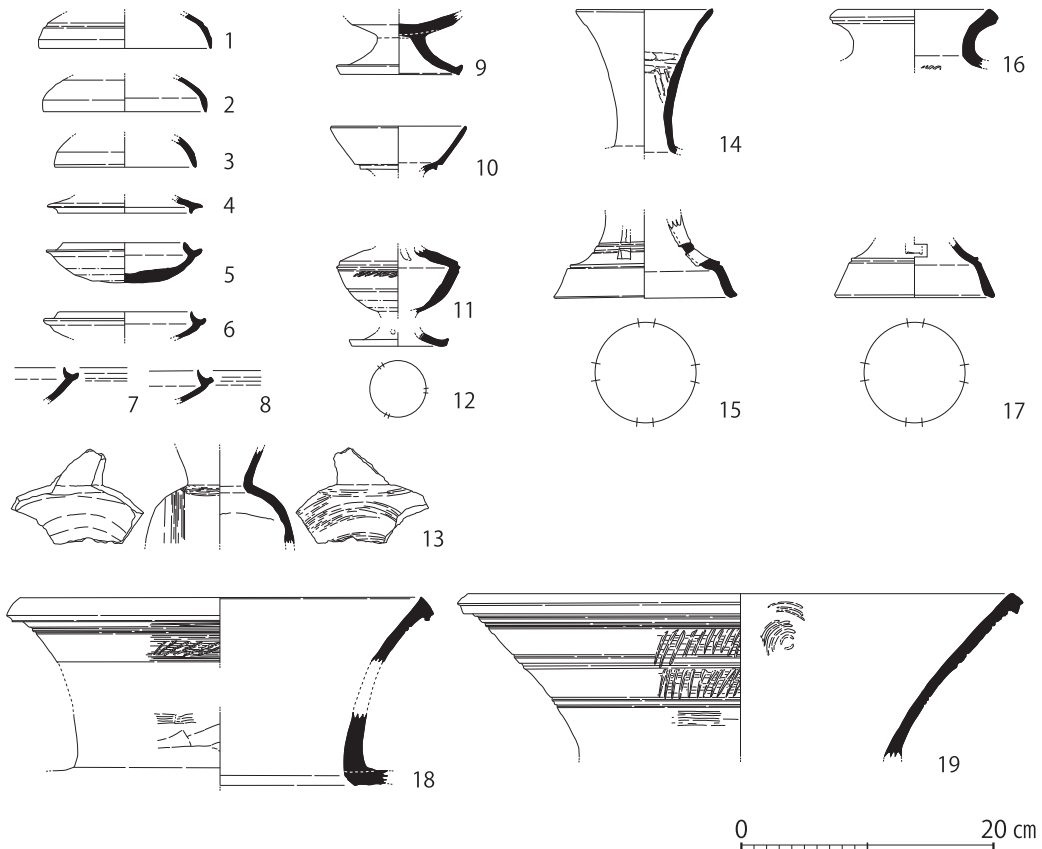


第 85 図 鷹塚古墳出土須恵器編年図 (26:1/8、その他 :1/6)

び替えたのが第 85 図である。

第 85 図については、1・2・8・10・12～15 は、1 トレンチで検出した墳端外側のテラス床面から一括で出土した須恵器である。9 は 1 トレンチから続く同テラスの床面から出土。16～18・20・21・26 は 3 トレンチの羨道床面から出土した須恵器である。また、20 については、玄門付近の床面で出土している。第 85 図 8・9・10・2 は坏身で、立上りが高いものの径も小さく器高も低いことから TK209 型式の古相であると考えられる。また、12～15 の高坏は、焼成、色調、器形とも奈良県の牧野古墳のものと類例が指摘されている高坏である。12～14 は長脚二段の三方向方形透かしで、15 は長脚二段の二方向の方形透かしである。この 15 の時期は、二方向透かしであることから TK209 型式の古相である。つまり、8・10・1・2・12～15 は同レベルで一括で出土していることから、TK209 型式の古相の良好な一括遺物であるといえる。16・17 は同一の個体であると考えられる二段の三方向透かしの高坏で、立上りの高さや坏部の器高が低いことから TK209 型式並行の特徴を持つ。26 は、頸部から口縁部までが外反しつつも頸部付近では立ち気味あることから TK209 型式新相～TK217 型式並行であると考えられる。20・21 脚付長頸壺で胴部最大径の箇所が丸みを帯び、頸部から上位がほぼ真直ぐ伸びている点、脚部が段を有さない形態であることから TK217 型式並行であると考えられる。

以上から、鷹塚古墳は、TK209 型式古相～新相の須恵器が中心で、一部 TK217 型式並行のものが含まれることが確認できた。つまり、築造時期は TK209 型式古相で、TK209 新相～TK217

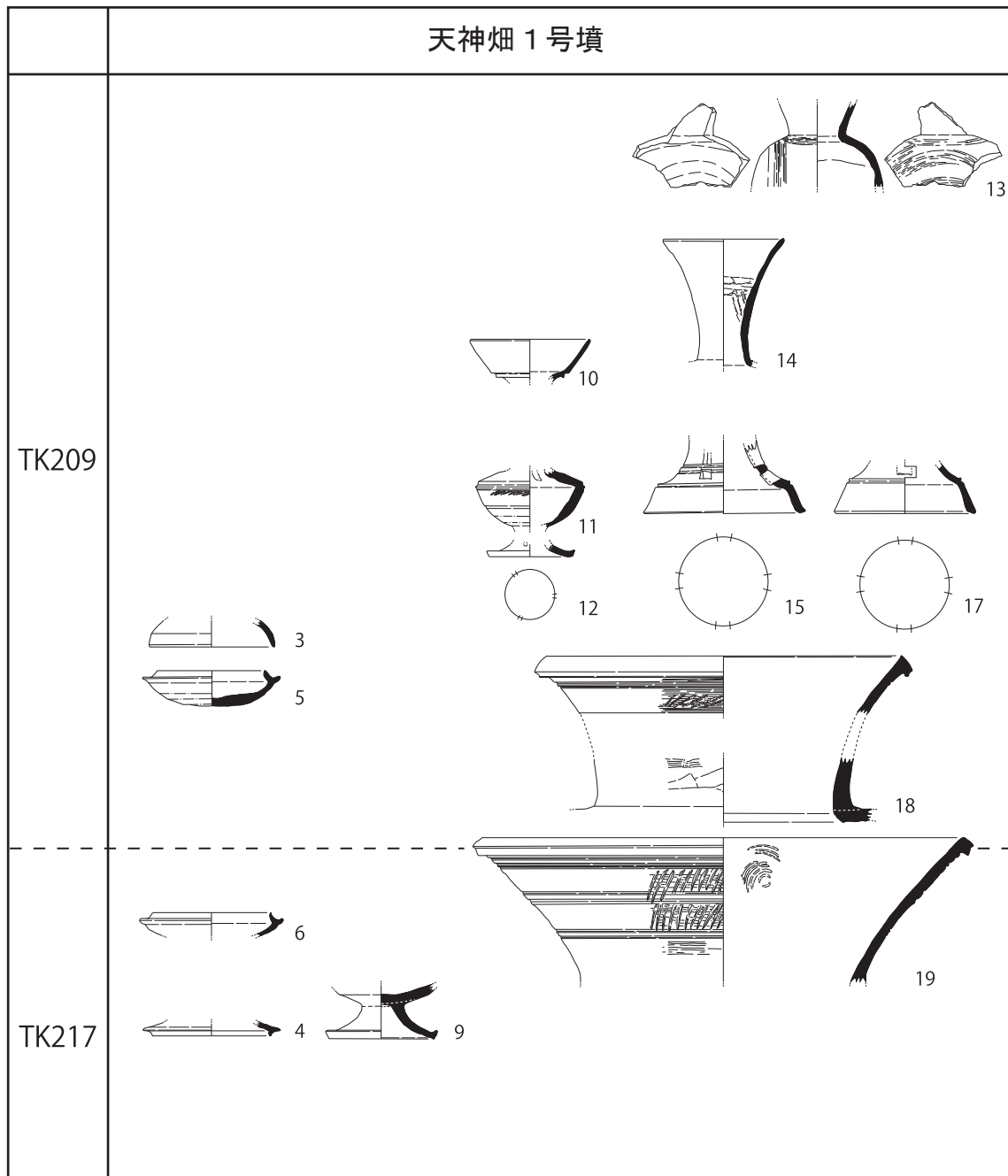


第 86 図 天神畑 1 号墳出土須恵器 (1/6)

型式並行で追葬が行われた可能性が考えられる。

(4) 天神畑1号墳 (第86・87図)

天神畑1号墳は、鷹塚古墳から約10m東側の道路端の平地に、確認調査で発見された単室構造の横穴式石室である。出土遺物は、第86図1～4は坏蓋、5～8坏身、9は無蓋高坏の脚部、10は甕の口縁部、11・12は同一個体の脚付甕、14・15・17は脚付長頸壺、16は壺口縁部、13は横瓶、18・19は大甕である。これらの遺物の中から、出土地点を確認できるものを中心に、石室構造から当て嵌まらないものや時期区分が困難なものを除外したものが第87図である。



第87図 天神畑1号墳出土須恵器編年図(1/6) 0 20 cm

第 87 図、12・15・14・17・18・19 が玄室内の玄門付近からまとまって出土しており、9・11・13・18 は羨道から出土した須恵器である。各須恵器を詳細にみていくと、3 は、口縁径が小さく、5 は立上りがかなり内傾しているものの高さがあることから、TK209 型式でも新しい様相を呈している。13 は、頸部径が狭いことから TK209 型式並行でとえられる。10 については口縁端部から屈曲部までの長さが高いことから TK209 型式であると想定できる。11・12 は出土地点が違うものの同一個体であることから、葬送儀礼祭祀に伴う内欠き又は追葬時の掃き出しのいずれかの要因によるものであると考えられる。ともに TK209 型式平行である。14・15・17 については、脚台付長頸壺の口縁部と脚台部である。脚台部に屈曲がある形態から TK209 型式並行であろう。18・19 の大甕については、TK209 ～ TK217 型式のものであると考えられる。6 は受部から立上りの高さで器高が共に低いことから TK217 型式並行である。4 は、受部から立上りが逆転し、かえりが高いことから TK217 型式でも新しい様相を呈している。9 は基部から脚端部までが低く全体的に小さいことから TK217 の無蓋高坏であろう。

以上から、天神畑古墳は、TK209 形式並行の遺物が主体であるが、TK217 形式並行も含まれ事から築造時期が TK209 型式で、追葬等で TK217 型式並行まで使用されていたと考えられる。また、第 86 図 1・2 は TK43 型式並行であるが、石室構造からみても符合しないことから別遺構からの流れ込みであると考えられる。

#### (5) 北石垣遺跡 (第 88 図)

北石垣遺跡は、実相寺古墳群北側の春木川の対岸の石垣八幡宮の北側を中心に西は別府大学構内の円通寺遺跡に接するように広がり、弥生時代後期～平安時代まで続く複合遺跡で、速見郡衙の推定地とされている。1997 年には、宅地造成に伴う発掘調査を別府市教育委員会が実施。その結果、弥生時代後期～古墳時代、平安時代までの土器が多く出土した。この中から須恵器をピックアップし編年を試みたのが第 88 図である。3・17・18・20～22・24 は坏蓋、1・2・4～6・8～14 は坏身、23・25 は高台付坏身、7・15・16 は高坏脚部、19 は高坏の坏部である。型式ごとにそれぞれの特徴についてみていきたい。

第 88 図 1・2 は、受部径と立上りの角度と高さより MT85 型式並行であると考えられる。3 は、口縁端部付近の外面に右上から左下方向に櫛描状文が施されており、行橋の竹並横穴墓群出土のものに類例が認められる。4～7 は、径が大きく、立上りが口縁端部に向けて内傾気味に立っていることから、TK43 型式並行であろう。8～13 は、一般的な TK209 型式に比べ全体的に最大径が若干大きいが、立上りの内傾が強く、高さが低いことから TK209 型式でも古相のものであると考えられる。14 は、径が小さく、立上りの高さが低いことから TK209 型式でも新相であると考えられる。16 は二段の二方向透かしの高坏脚部であることから、TK209 型式並行である。次の TK217 型式段階になると、破片も含め若干認められるものの、かえりを持つ坏蓋等が少ない。また、TK46・TK48 型式並行の須恵器は、破片も含めほとんどみられなくなるという傾向が認められる。MT21 型式 (飛鳥 V、平城 I・II) 並行になると、20～23 のようにかえりが消失した坏蓋や高台付の坏身の破片が多く確認できるようになる。26 は、さらに時代が経って 9 世紀末～10 世紀初頭のものであると考えられる緑釉陶器の高台付坏身である。素地は須恵質で外面にはヘラ

北石垣遺跡	
MT85	
TK43	
TK209	
TK217	
TK46 (飛鳥IV)	
TK48 (飛鳥IV・V)	
MT21 (飛鳥V) (平城I・II)	
(平城III)	

第 88 図 北石垣遺跡出土須恵器等編年図 (1/6)

0 20 cm



ケズリが見られ、内外面全体に灰緑色釉をかけている。

以上から、北石垣遺跡では、MT85～TK217 型式並行までの遺物を確認できるが、これ以降破片も含め、MT21 型式並行まで須恵器がほとんどみられなかった。

### 3 まとめ—各古墳の築造及び使用期間について—

表 1 は今回取り扱った古墳・遺跡の築造時期や追葬時期までを含んだ使用時期をあらわした表である。実相寺古墳群では TK23 型式並行で古寺地区の 1 号石棺が出現し、TK10～MT85 型式になると 2 号石棺が築造される。次の段階になると太郎塚・次郎塚古墳が TK43～TK209 型式並行から使用されはじめ、TK209 型式の新相まで使用されていることが確認できた。さらに両古墳の時期差をみると、TK43 型式並行段階で太郎塚古墳が築造段階で先行し、使用開始につい

表 8 別府市内における古墳・集落別の須恵器型式一覧

須恵器編年案		春木芳元遺跡古寺地区		太郎塚・次郎塚古墳		鷹塚古墳	天神畑 1号墳	鬼ノ岩屋古墳群		北石垣遺跡
田辺編年		1号石棺	2号石棺	太郎塚古墳	次郎塚古墳			1号墳	2号墳	
TK208										
TK23										
TK47										
MT15										
TK10										
MT85										
TK43	西弘海 飛鳥編年									
TK209	飛鳥 I									
TK217	飛鳥 II									
	飛鳥 III									
TK46	飛鳥 IV									
TK48	西弘海 平城宮 編年									
MT21	飛鳥 V	平城 I								
		平城 II								
( )		平城 III								
( )										

ては、両古墳ともほぼ同時期であると考えられる。また、東側の鷹塚古墳が TK209 型式の古相で築造され、TK217 段階に追葬又は墓前祭祀があった痕跡が確認された。さらに、東側の天神畑 1 号墳では、TK209 新相で築造され、鷹塚古墳と同様に出土状況から TK217 段階に追葬又は墓前祭祀があったものと考えられる。一方、春木川より北側約 1km 先には、鬼ノ岩屋古墳 1・2 号墳が存在する。両古墳とも横穴式石室を内部主体する装飾古墳である。石室構造等については、後で述べるが、実相寺古墳群との比較をする上でも重要な古墳である。両古墳においては確認調査が墳丘周辺で実施されている。その際、須恵器が数点出土しているが、古墳周辺からの流れ込んだ須恵器片しか出土していないことから、現段階では遺物より築造時期を判断することができない。そこで、石室構造から想定すると、2 号墳は TK43 型式並行、1 号墳については TK209 型式並行の時期が考えられる。

つまり、実相寺古墳群では、TK23 型式の春木芳元 1 号石棺、TK10～MT85 型式の 2 号石棺が築造される。その後春木川北側の鬼ノ岩屋古墳群では、2 号墳が TK43 型式並行で築造される。同 TK43 型式の若干下った時期に、実相寺古墳群では、太郎塚古墳、次郎塚古墳がほぼ同時期に築造される。その後、TK209 型式になると、古相の段階で鷹塚古墳、鬼ノ岩屋古墳 1 号墳が築造され、TK209 型式の新相段階になると、実相寺古墳群の天神畑古墳が築造されるという状況が窺える。つまり、実相寺古墳群と鬼ノ岩屋古墳の 2ヶ所の墓域は、半径 500 m ほどの空間にほぼ同時期に存在するという非常に興味深い現象であることが窺える。北石垣遺跡諏訪元地区では、これらの墓域での古墳の築造時期と重なるように、春木芳元 2 号石棺の使用期間である MT85 型式から鷹塚古墳・天神畑古墳の追葬時期であろう TK217 型式まで生活の痕跡が認められる。TK217 型式並行以降の北石垣遺跡諏訪元地区では、須恵器の出土例が極端に減少し、MT21 形式並行以降になると多く確認されるようになる。さらに 9 世紀末～10 世紀初頭の緑釉陶器が出土していることから、官衙的要素が強い遺跡であることが指摘できる。今後遺物だけでなく遺構も含めた発掘調査研究を進める必要がある。

本稿をまとめるにあたり、上野淳也氏、田中裕介氏、柳沢一男氏、木村龍生氏、長直信氏らに有益なご助言を賜った、また図版作成に際しては、安部和城、井大樹、藤川貴久、塩見恭平、高木慎太郎（別府大学院生・学生）らに協力いただいた。記して感謝の意を記したい。

#### 【引用・参考文献】

- 木村龍生 2013 「須恵器からみた地域間交流の様相―特に八女産須恵器・宇城産須恵器を中心に―」  
『第 16 回九州前方後円墳研究会 古墳時代の地域間交流 1』発表要旨・資料集
- 佐藤隆 2005 「7・8 世紀陶器編年の再構築と都城出土資料の様相」『須恵器生産の成立と展開』  
(財) 大阪府文化財センター・近つ飛鳥博物館共同研究発表会
- 白石耕治 「陶器窯跡群 6 世紀の須恵器生産について」『須恵器生産の成立と展開』(財) 大阪府文化財センター・近つ飛鳥博物館共同研究発表会
- 田辺昭三 1966 『陶器窯址群 I』平安学園創立 90 周年記念 研究論集第 10 号 平安学園
- 中村浩他 1980 『陶器 II』大阪府文化財調査報告書第 29 輯 財団法人大阪文化財センター
- 土生田純之 1993 「古墳の築造年について」『古文化談叢』第 30 集下
- 長直信 2008 「東九州（豊前・豊後）における後期古墳の再検討」『第 11 回九州前方後円墳研究会 後期古墳の再検討』発表要旨・資料集
- 長直信 2013 「須恵器からみた地域間交流―豊前・豊後地域を対照に―」『第 16 回九州前方後円墳研究会 古墳時代の地域間交流 1』発表要旨・資料集
- 宮崎泰史・福永正明編 2006 『年代のものさし―陶器の須恵器―』大阪府近つ飛鳥博物館図録 40 大阪府立近つ飛鳥博物館
- 吉田寛・原田昭一編 1999 『大分県埋蔵文化財年報』7 平成 9 (1997) 年度版 大分県教育委員会
- 宮内克己・村上久和 1988 「豊前南部及び豊後出土の緑釉陶器」『古文化談叢』第 20 集 発刊記念論集(上) 九州古文化研究会
- 高橋照彦 2001 「山彩・緑釉陶器と地方官衙」『考古学ジャーナル 7』No. 475, 2001 7 月 ニューサイエンス社
- 山本信夫 2001 「九州の官衙遺跡関係出土、鉛釉山彩・緑釉の検討」『考古学ジャーナル 7』No. 475, 2001 7 月 ニューサイエンス社

## 第2節 別府市内の横穴式石室

玉川剛司（別府大学文化財研究所）

### 1 はじめに

別府市内には、横穴式石室の構造が確認できる古墳が、鬼ノ岩屋古墳群1・2号墳、鷹塚古墳、天神畑1号墳の計4基存在する。これら4基の古墳が立地する地点は、直線距離で約1km離れており、2ヶ所の墓域を形成している。南側が実相寺古墳群で、北側が鬼ノ岩屋古墳群である。それぞれの石室構造についてみていきたい。

### 2 各古墳における横穴式石の構造について

#### (1) 鬼ノ岩屋2号墳（第89・90図、表9）

本古墳は、石室全体に赤色顔料で彩色を施し、奥壁側に屍床を有し、その屍床部分と玄門に装飾が施文されている単室構造の横穴式石室である。石室の規模については、玄室の長さ4.1m、幅3.2m、高さ3.7m、腰石の高さ1.2mで、両側壁とも5段、奥壁4段の石積みで構築されている。羨道部については、長さ3.2m、幅1.9m、高さ1.5m、腰石の高さ1.0mで、両側壁とも2段で構築されている。石材は安山岩が用いられ、石材間の空間には、扁平に剥離する安山岩を重ねて充填している。また、屍床や玄門前の扉石は角閃石安山岩である。墳丘の復元案と石室入口との位置関係をみると、石室入口と復元案のライン間が9.0m程度の間隔がある。これは、築造当初、羨道の石材がもう少し外側にまで組み込まれていた可能性と、日田市に所在する同時期のガランドヤ古墳群1号墳の例と同様に羨道部の石材から墳丘復元ラインとの間に前庭部として区画を設け墳端に接続する可能性（矢羽田ほか2010）がある。現段階では、前庭部の可能性の方が高いが、今後検討する必要がある。築造時期については、遺物が出土していないため不明である。しかし、石室構造（第89図）より、①腰石の高さと腰石から天井石までの比率及び石積みの段、②面調整をしていない石材を使用している等から、TK209型式まで下らず、TK10～MT85まで上がらない、TK43型式並行が妥当であろう。

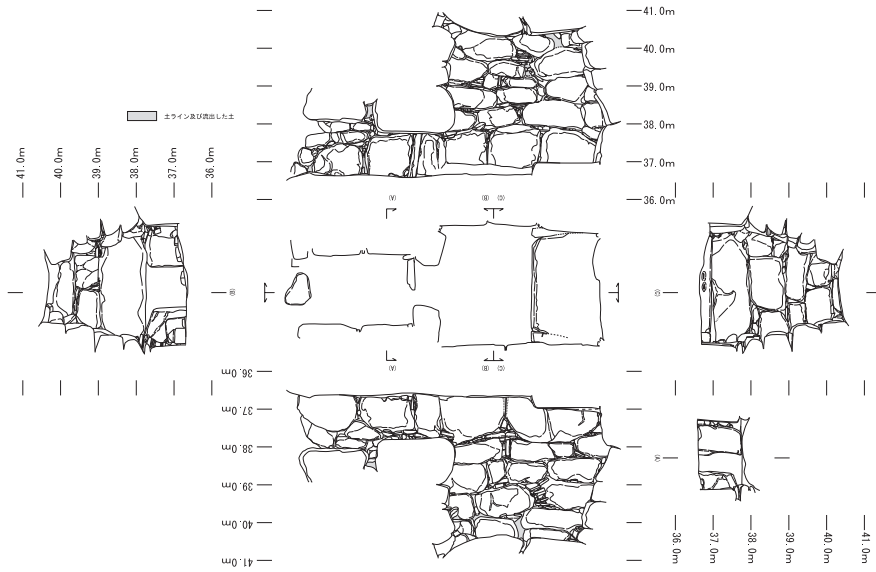
#### (2) 鷹塚古墳（第89・90図、表9）

鷹塚古墳の石室は、石室入口から2石目までの天井石の架構がはずれ羨道部内部に落込んでいたため、羨道部のみを発掘調査で確認した。その結果、羨道部（第89図）については、東側壁（以降「右側壁」とする）の石積みの状況から、本来入口側と玄門側で60cmほどの段差があり、入口側の方が高いことがわかった。また、石室開口部の端については、西側壁（以降「左側

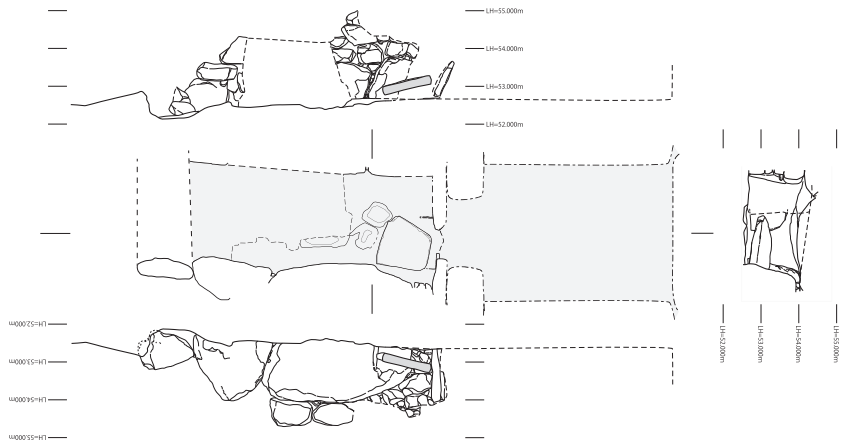
NO.	古墳名	所在	墳形	時期	石室構造	玄室平面 プラン	全長	玄室				前室				羨道			
								長さ	幅	高さ	腰石高	長さ	幅	高さ	腰石高	長さ	幅	高さ	腰石高
1	鬼ノ岩屋古墳2号墳	大分県別府市	円墳	TK43	単室	長方形	8.0	4.1	3.2	3.7	1.2	-	-	-	-	3.2	1.9	1.5	1.0
2	甲塚方墳	福岡県みやこ町	方墳	TK43	複室	長方形	15.4	4.0	3.7	4.5	2.0	2.1	2.9	-	1.8	7.5	2.2	-	0.6
3	ガランドヤ1号墳	大分県日田市	円墳	TK43	複室	長方形	11.9	4.2	3.0	3.2	0.8	2.1	2.0	2.7	1.0	3.5	1.5	-	-
4	上御倉古墳	熊本県阿蘇市	円墳	TK43-TK209	複室	長方形	10.2	3.6	3.2	3.7	2.2	2.4	2.5	2.3	0.8	3.0	1.5	1.5	0.8
5	鷹塚古墳	大分県別府市	方墳	TK209	単室?	長方形?	(12.9(14.2))	(5.0)	(4.0)	-	-	-	-	-	-	6.5(7.9)	2.5, 2.8	2.2	1.6, 1.2
6	橋塚古墳	福岡県みやこ町	方墳	TK209	複室	長方形	16.3	4.0	3.2	3.8	2.6	3.0	2.0	3.2	2.4	6.5	2.1, 3.3	2.8	1.5, 0.8
7	鬼ノ岩屋古墳1号墳	大分県別府市	円墳	TK209	複室	方形	9.0	2.3	2.5	3.1	2.0	2.2	2.2	2.5	1.5	2.5	1.5	(1.9)	(1.0)
8	天神畑古墳	大分県別府市	不明	TK209	単室	長方形	4.3	2.0	1.6	-	1.1	-	-	-	-	1.9	1.2	-	-
9	千代丸古墳	大分県大分市	円墳	TK209	単室	長方形	8.6	3.6	2.0	2.8	1.2	-	-	-	-	4.3	2.0	2.0	1.7
10	鬼塚古墳	大分県玖珠町	円墳	TK209	複室	長方形	-	2.8	2.0	(3.0)	(1.0)	1.4	1.8	(2.6)	(0.8)	-	-	-	-
11	伊美鬼塚古墳	大分県国東市	円墳	TK209	単室	長方形	8.2	3.2	2.4	2.0	1.6	-	-	-	-	4.6	0.8	1.4	0.8
12	穴観音古墳	大分県日田市	円墳	TK209	複室	長方形	6.9	3.2	3.0	2.6	1.0	2.4	3.0	2.0	0.8	-	-	-	-
13	丑殿古墳	大分県大分市	円墳	TK217	単室	長方形	7.9	3.0	2.8	1.9	1.3	-	-	-	-	4.0	1.6	1.4	1.1
14	弘法穴古墳	大分県大分市	円墳	TK217	単室	長方形	6.9	3.0	2.0	2.2	1.5	-	-	-	-	3.0	1.3	1.2	1.0
15	縁塚古墳	福岡県みやこ町	円墳	TK217	複室	方形	19.0	3.5	3.5	3.6	3.7	2.2	2.2	3.5	1.5	12.0	2.2, 2.9	2.2	0.7

表9 別府市周辺主要横穴式石室の規模比較一覧

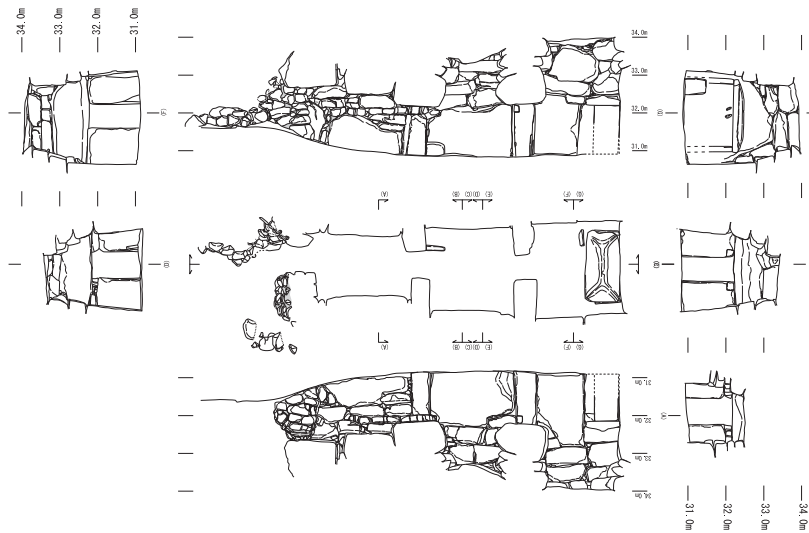
鬼ノ岩屋古墳 2号墳



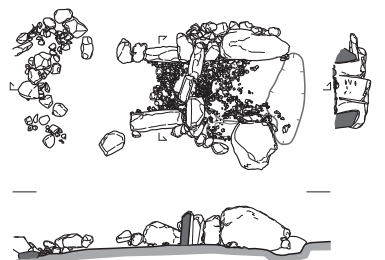
鷹塚古墳



鬼ノ岩屋古墳 1号墳



天神畑古墳



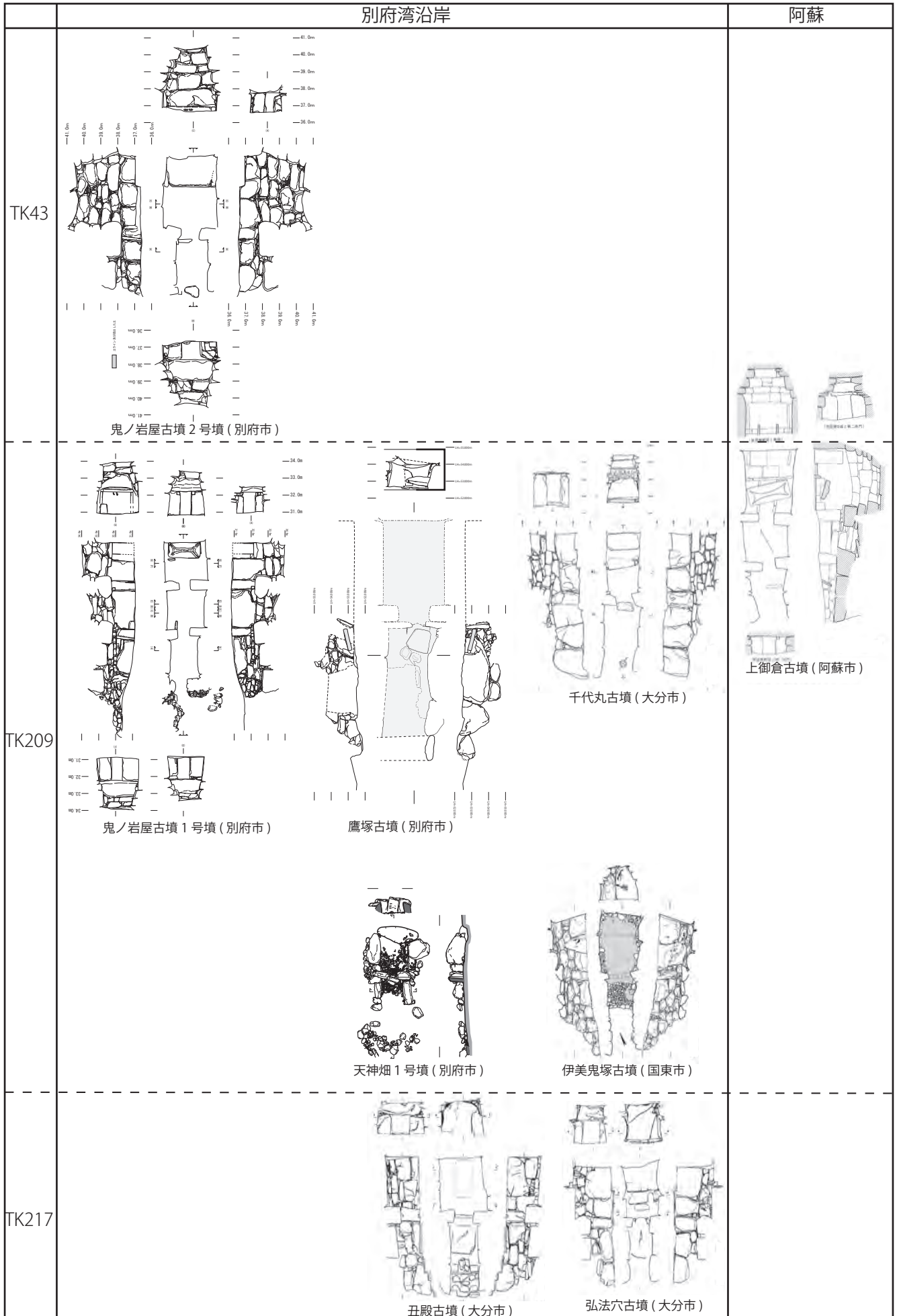
0 10m

第89図 別府市内の横穴式石室実測図(1/200)

壁」とする)の石積み状況が入口側に向かって斜めに積まれていることや、対岸の右側壁が同様に斜めに加工されていることから、これらをつなぐラインが入口であると考えられ、羨道部の長さは6.7 mとなる。しかし、東側壁の外側に、1.4 m程の石材が確認されており、この石材も側壁の一部であると考え、羨道部の長さが7.9 mとなる可能性がある。つまり羨道の規模としては、長さ6.5 m(最大長7.9 m)、幅2.5 m(最大幅2.8 m)、入口側の高さ2.2 m、玄門側の高さ1.6 mを測ることから、大分県内最大の規模を有する羨道部である。羨道部側壁の構造は、左側と右側とで積石の状況が異なり、左側は3段であるのに対し、右側は2段である。この要因は、右側の手前から2つ目の石材が、現状で確認できる限り長さ3.8 m、幅1.3 m、高さ1.6 m以上測る巨石であることから、この巨石を基準に2段目や左側壁を構築していったものと考えられる。また、側壁や天井石に使用されている石材は安山岩で、石材表面には赤色顔料による彩色の痕跡が見られることから石室内全体に塗布されていたものと思われる。玄門の前には、長さ1.4m、最大幅1.35m、最小幅0.9m、厚さ20cmの台形状の角閃石安山岩の板石が、最大幅の方を入口側に向けた状態で検出された。これは、閉塞石として玄門前に立ててあったものが、玄室からの土砂の流入で倒れたものと推測される。さらにその奥の、左側の玄門前には、扉石と思われる石材が見られる。玄室については、崩壊の危険性から発掘調査で確認できなかった。しかし、玄室内部が陥没したため形成されたと考えられる墳頂部の円形の窪みや、地中レーダ探査の結果等を参考にすると、最低でも長さ5.0 m、幅4.0 mを測る玄室規模である可能性が高い。以上から石室の規模を想定すると、石室の全長が12.9 m(最大14.2 m)以上、玄室が長さ5.0 m、幅4.0 m、羨道部が長さ6.5 m(最大7.9 m)、幅2.5 m、高さ2.2 mを測る単室構造の横穴式石室であると考えられることから、大分県内最大の横穴式石室であると言える。築造時期については、出土須恵器よりTK209型式の古相である。

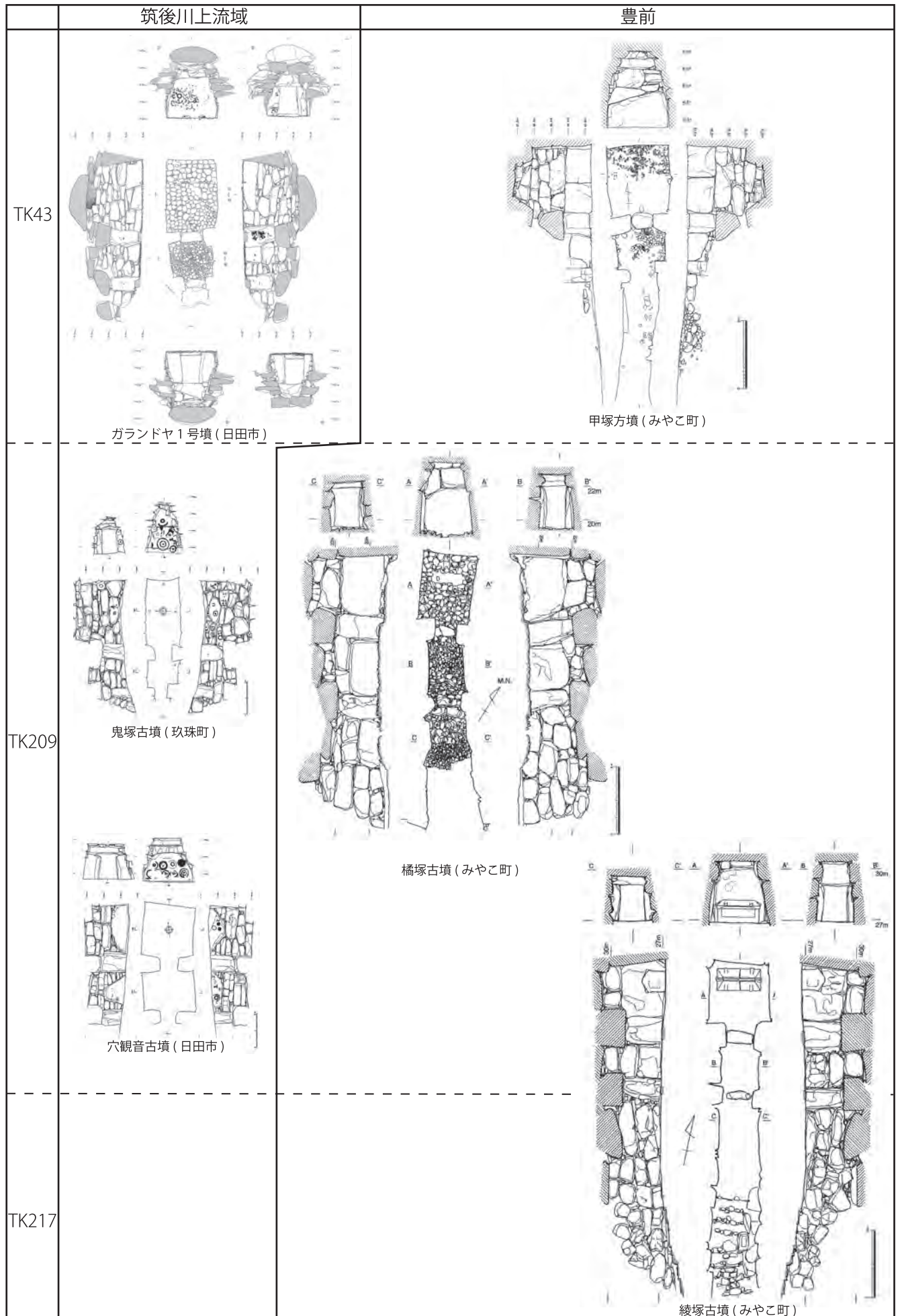
### (3) 鬼ノ岩古墳1号墳(第89・90図、表9)

本古墳は、別府市内唯一の複室構造で、玄室の奥壁側には石屋形が設けられ、石室内は円文などが描かれている装飾古墳である。石室に使用されている石材は、ほとんどが角閃石安山岩である。側壁の石積みの構築方法についてみると、左側壁は玄室が3段、前室が4段、羨道部が3段で、右側壁については玄室が4段、前室が3段、羨道部が4段で構築されている。つまり、互い違いに石積みの段を変えて構築していることがわかる。また、石材構築については、羨道部の側の両側壁と、前室の右側壁の玄門側と、玄室の左側壁の中央のそれぞれ腰石が、石材として水平の面が取れない部分割貫き、別の方形に加工した石を嵌め込むことで面を揃えている。玄門の前室側では、楣石の直下の両玄門に方形の割貫きが施されている。これは、桂川王塚古墳、童男山古墳群1号墳や上御倉古墳でも見られるように、方形の石材を嵌め込み架構し、小窓としていた痕跡であろう。ただし、この小窓については、時代が下がるにつれて玄室側を覗ける窓としての機能から、架構するという技法としての機能へと変化していったものと考えられる。つまり、上御倉古墳や鬼ノ岩屋古墳1号墳のものは、後者の方である。また、羨門の楣石との間には、厚さ20cm程の石材を羨門の形に合わせてT字状に加工した石材が、一部前室と羨道部の側壁に組み込まれているという特徴がある。平面プランや複室構造、石屋形の採用などから、阿蘇市の上御倉古墳が類例として挙げられるが、鬼ノ岩屋古墳1号墳と比較すると、上御倉古墳の方が玄室が長方形プランである分規模が大きい(第90図、表9)。発掘調査で時期を特定できる遺物が



第 90 図 別府湾沿岸・阿蘇地域の横穴式石室編年図 (1/300)

0 10m



第 91 図 筑後川上流域・豊前地域の横穴式石室編年図 (1/300)

0 10m

出土していないが、石室構造より①玄室の平面プランが方形、②石材の面加工、③床面から腰石の高さと腰石から天井石までの高さの比率及び石積みの段より、TK209 型式の枠に当て嵌められよう。

#### (4) 天神畑古墳 (第 80・90 図、表 9)

天神畑古墳は、南側の墓域である実相寺古墳群の古墳である。鷹塚古墳から約 10 m 東側の道路端の平地に、確認調査で発見された単室構造の横穴式石室である。幅 70cm、厚さ 20cm、高さ 1 m 以上の閉塞石を玄門に立掛けるという特徴をもち、玄室は鏡石が削平の際に石室内側に倒れていたため正確な規模は不明であるが、抜取痕より 2.0 m 幅 1.6 m を測る小型の長方形プランであることが確認された。玄室及び羨道部の床面には、小礫が敷き詰められている。また、腰石と閉塞石の上面については後世の削平により斫られており、上位構造が消失している。築造時期については、出土須恵器より TK209 型式新相である。

### 3 構築技術からみる各古墳の性格について (第 89～91 図、表 9)

まず、石室構造から両墓域を考えていきたい。両墓域では、TK209 型式の段階で、鷹塚古墳と鬼ノ岩屋 1 号墳とがほぼ同時期の築造であると考えられることから、首長墳クラスが両墓域に同時期に存在することが窺える。また、実相寺古墳群と鬼ノ岩屋古墳群の 2ヶ所の墓域は、石室構造等でそれぞれ性格が異なる。鬼ノ岩屋 2 号墳のように、屍床を玄室に設置した装飾古墳や、1 号墳のように複室構造で奥室に石室形を設置した装飾古墳など、九州島内でも肥後地域で多く見られる石室形態を採用した北側の墓域と、方墳を採用した鷹塚古墳や家形石棺が出土したとされる天神畑 2 号墳など畿内色が強い墓制を採用する南側の墓域が半径 500 m ほどの空間にほぼ同時期に存在することになるため、非常に興味深い。両墓域の被葬者像を考える上で、重要な要素であると考えられる。次に、方墳という墳形を採用した鷹塚古墳についてみていきたい。九州島内の方墳で羨道がほぼ同程度の規模のものをみると、大分県内にはなく、福岡県みやこ町に所在する甲塚方墳や橘塚古墳が類例として挙げられる (第 91 図、表 9)。両古墳は、複室構造となっている分、全長が長いものの、鷹塚古墳の玄室の想定規模と羨道の規模はほぼ同じである。また、出土遺物より築造時期をみると、甲塚方墳は TK43 型式並行、橘塚古墳は鷹塚古墳と同じく TK209 型式の古相であると考えられる。つまり、甲塚方墳で始まる九州島内の方墳が、次の段階では、豊前地域と豊後地域にそれぞれ築造されるということになる。方墳という墳形を採用し、かつ内部に規模の大きい横穴式石室を採用していることは、一般的な首長墳として採用したと考えるよりも、築造に関する畿内政権の政治的意図が内包していると考えられる。今後、鷹塚古墳の発掘調査や研究の進展に期待したい。

#### 【引用・参考文献】

- 辛島眞治・井上信隆 2009 『みやこ町内遺跡群Ⅲ—福岡県京都郡みやこ町勝山地区所在の遺跡の調査—』みやこ町文化財調査報告第 4 集 みやこ町教育委員会  
高木正文 1980 『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告 68 熊本県教育委員会  
長直信 2008 「東九州 (豊前・豊後) における後期古墳の再検討」『第 11 回九州前方後円墳研究会 後期古墳の再検討』発表要旨・資料集  
長直信 2013 「須恵器からみた地域間交流—豊前・豊後地域を対照に—」『第 16 回九州前方後円墳研究会 古墳時代の地域間交流 1』発表要旨・資料集  
長嶺正秀・末永弥義 1994 『甲塚方墳』豊津町文化財調査報告書 13 豊津町教育委員会  
秦広之 2016 『別府市内内遺跡確認調査報告書—鬼ノ岩屋古墳 1 号墳発掘調査の概要報告書・平成 26 年度市内遺跡確認調査の記録—』市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 7 別府市教育委員会  
宮崎泰史・福永正明編 2006 『年代のものさし—陶器の須恵器—』大阪府近つ飛鳥博物館図録 40 大阪府立近つ飛鳥博物館  
矢羽田幸宏ほか 2010 『史跡ガランドヤ古墳—史跡ガランドヤ古墳の保存整備に伴う調査報告書—』日田市教育委員会



### 第3節 墳丘について

上野淳也（別府大学）

#### 1 はじめに

実相寺古墳群に関しては、太郎塚・次郎塚古墳が直径23～24m程度の円墳で、天神畑1号墳・2号墳に関しても同規模であると考えられる。この古墳群の中で、墳丘の発掘調査を実施したのは鷹塚古墳のみである。ここでは、鷹塚古墳の墳丘構築と、九州島内における同時代・同規模の方墳の分布に関して述べる。

#### 2 鷹塚古墳の墳丘築造について

鷹塚古墳の墳形については、調査開始当初は直径30メートル弱の円墳を想定していた。しかし、5トレンチにおいて、墳端と考えられる列石及び周溝が想定より近い位置で検出されたことにより疑念が生まれ、6・7・8トレンチを設定したところ、南北に走る列石が東に曲がる事実が確認されたことにより方墳であると確信するに至った。そこで、地権者に許可された調査面積内において、1つの隅角部と2本の直線で形成される墳端を確認する事とした。まず、方墳であることを証明する為に、9トレンチを設定した。

- ① 1・9・7トレンチにおける直線状の北側墳端の検出及び確認
- ② 5・6・8トレンチにおける直線状の西側墳端の検出及び確認
- ③ 6・8トレンチにおける古墳の隅角部の検出及び確認

①～③を確認することにより、鷹塚古墳が方墳である可能性が極めて高いことを証明した。

上記の調査により、鷹塚古墳が方墳であることは、ほぼ間違いないが、他の隅角部の検出には至っていない為、一辺の長さに関しては課題を残している。最下段における方墳の一辺に関しては、列石を基準にすると一辺が25m余り、5トレンチにおける周溝内の溝状遺構の最底面を基準にすると一辺30m弱と推定できる。

また、鷹塚古墳を含む実相寺古墳群は、高所から低所へ、太郎塚・次郎塚古墳～鷹塚古墳～天神畑1号墳・2号墳と続く尾根筋上に形成されており、鷹塚古墳は、この尾根から削り出すようにして墳丘基底を構築したものと考えられる。同様の構築法は、九州では、京都郡みやこ町勝山の綾塚古墳に代表されるもので、群集墳が隆盛した時代の構築法である。事実、鷹塚古墳は、現状の地表面高でも西側が標高55.0mで、東側の53.0mより2m程度高く、羨道部の床面も52.500m程度である。これらのことから、一般的に「山寄せの方墳」と呼ばれるものであることが分かる。この方墳に関しては、主軸が若干長くなる傾向にあることが分かっている。

周溝底面の標高も、墳丘西側～北側の5・6・7・8・9トレンチが53.000～53.500m、1トレンチが52.500mであるので墳丘東側の周溝の底では確実に1m以上の高低差が生じることが分かっている。5トレンチの周溝内の溝状遺構に関しては、土層の観察から、一度53.000mまで掘り、整形した後に標高54.000mまで埋められたような状況が把握されている。

ところで二段築成と考えられる墳丘の構築順序を考えるに当たって、重要なレベル（標高）が4つある。標高 52.500m と 54.000m と 54.700m、そして 55.300m である。整理すると、以下の通りである。

- a. 標高 52.500 ～ 53.000m 羨道開口部床面  
墳丘北側周溝底面  
墳丘西側周溝内溝状遺構最底面（5 トレンチ）
- b. 標高 53.900 ～ 54.000m 羨道部腰石上面（上端部）  
墳丘西側（下段墳端）列石基底部（5・6・7・8 トレンチ）
- c. 標高 54.700 ～ 54.900m 羨道側壁 2 段目上面  
墳丘北側（上段墳端）列石基底部（1・9 トレンチ）  
墳丘西側（上段墳端）列石上面（上端部）  
墳丘北西側残存盛り土上面（6 トレンチ）  
上段下段間テラス上面（7・9 トレンチ）
- d. 標高 55.300m 玄室前羨道部天井石上面（上端部）

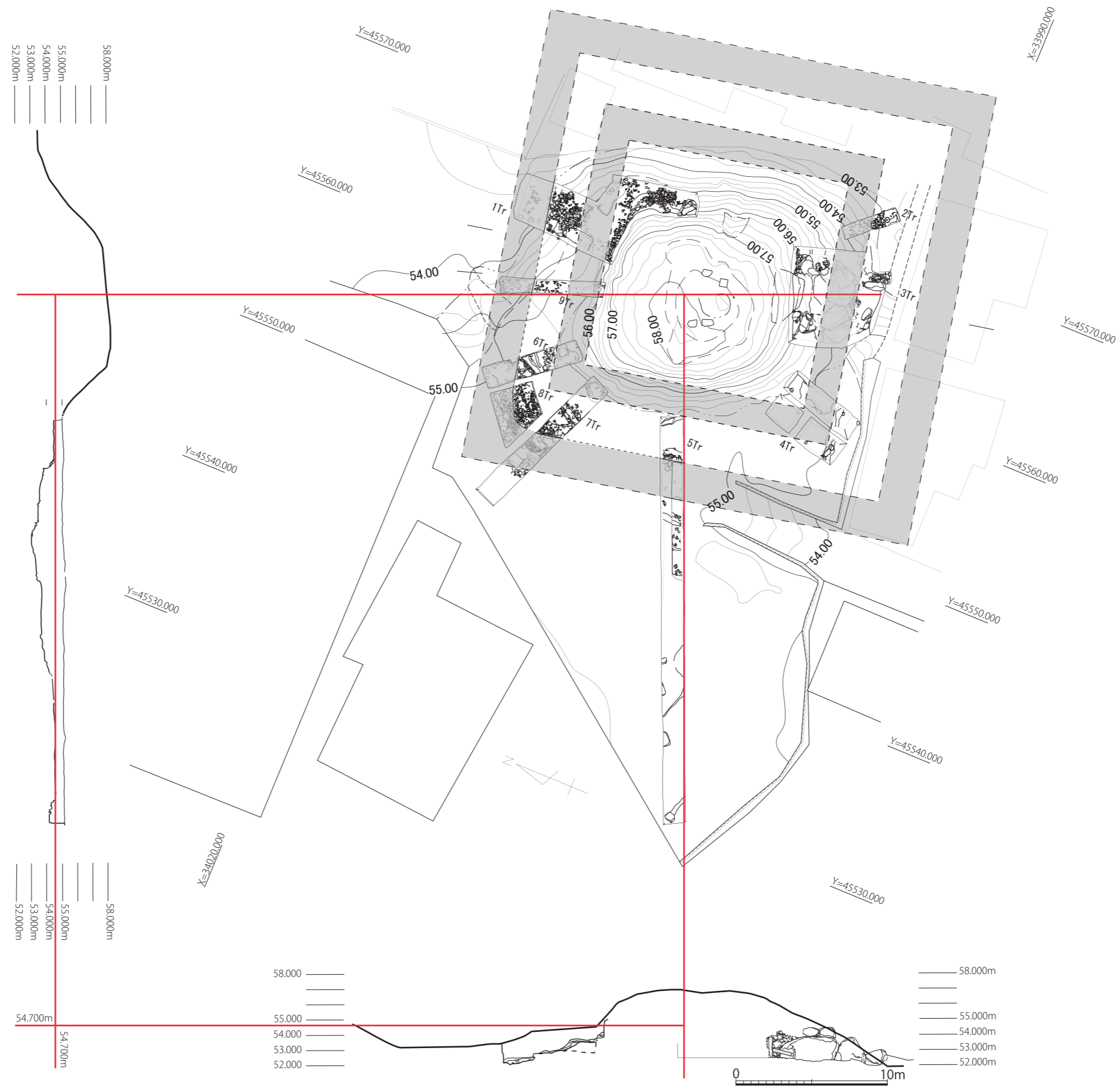
現状での墳丘頂が、58.000 m 余りであるので、墳丘西側の周溝溝状遺構最底面とでは 5 m 余りの比高差がある。墳丘東側の周溝の確認はおこなっていないが、このことから墳丘頂と、最も深くなる東側周溝底面との比高差は 6 m 以上あったものと推定される。

墳丘最下段の墳丘の構築順序を考えると、実相寺古墳群を貫く尾根筋から、鷹塚古墳の基底部を方形に削り出し、切り通す工程において、周溝内溝状遺構の最低面の標高を西側 53.000 m とし、東・南・北の周溝の底面を東側に傾斜させながら、それ以下の標高で方形に削り出す。後に、西側周溝内の溝状遺構を埋め戻すのは、排水の為に傾斜を付ける為と考えられる。次に、その地山削り出しの墳丘基底部の石室床面を、標高 52.500 ～ 53.000m の高さで揃える。そして、概ね高さ 1.5 m の石室の 1 段目、即ち「腰石」を配列した後、封土で墳丘下段の上面を標高 54.000 m で合わせる。

この後、標高 54.000 m の高さに設定された墳丘下段の上面に、墳丘上段の基底部を設定し列石を配置する。列石で、70cm 程の高さの段を構築し、標高 54.700m の高さに上段と下段の間に 1.5 m 幅のテラスを設ける。これは、羨道における腰石上の「2 段目の石」の上面の高さでもある。この空間利用的に前室を意識したと考えられる羨道部の一段上がる天井石の南面が、墳丘上段の南辺になる。

墳丘上段の基底部にも、高さ 60cm 程の高さで列石を配列し、上段とする。上段は、1 辺 15m 程度であると想定される。

以上、前述の通り、方墳の一辺に関しては、課題を残すが、最下段は列石を基準にすると一辺が 25m 余り、5 トレンチにおける周溝内の溝状遺構の最底面を基準にすると一辺 30 m 弱と推定できる。現状では、二段築成と考えており、下段は高さ 2 ～ 3 m 程度で一辺 25 ～ 30 m 弱、上段は高さ 3m で一辺 15m 程度の方墳と想定している。



第 92 図 鷹塚古墳墳丘縦横断面図 (1/300)

表 10 本稿取り扱い方墳一覧

墳丘規模	古墳名	縦(m)	幅(m)	高さ(m)	所在地	備考
1辺60m以上 (約200尺以上)	春日向山古墳	65	65	10	大阪府南河内郡太子町	用明陵
	山田高塚古墳	63	63	12	大阪府南河内郡太子町	推古陵
	段ノ塚古墳	60	65	10	奈良県桜井市	舒明陵
1辺48～54m (約160～180尺以上)	塚穴古墳	54	54	10	大阪府羽曳野市	来目皇子墓?3段
	石舞台古墳	51	51		奈良県明日香村	蘇我馬子墓?
	小山田遺跡	50	50		奈良県明日香村	舒明初葬陵?
1辺36～45m (約120～150尺)	赤坂天王山1号墳	42.2	45.5	9.1	奈良県桜井市	崇峻陵 3段 蘇我稲目墓? 竹田皇子墓? 推古陵?
	都塚古墳	42	41	4.5	奈良県明日香村	
	植山古墳	32	40		奈良県橿原市	
	甲塚方墳	36	46	9.5	福岡県みやこ町	
	橘塚古墳	38	41	4	福岡県みやこ町	
1辺24～30m (約80～90尺)	高崎塚原20号墳	27	27		宮崎県都城市	最大1辺30m?
	新田原44号墳	26	26		宮崎県西都市	
	新田原138号墳	26	26		宮崎県西都市	
	鷹塚古墳	25	25	5～6	大分県別府市	
	赤坂天王山2号墳	25	25		奈良県桜井市	
	常心塚古墳	25	24	3.8	宮崎県西都市	
	秋殿南古墳	24	24	5	奈良県桜井市	
	仏塚古墳	23	23	4	奈良県斑鳩町	
1辺18～21m 約(60～70尺)	上石動古墳	20	20		佐賀県吉野ヶ里町	
	椿原古墳	19	18		熊本県宇土市	

### 3 九州島内における方墳の分布について

古墳時代後期に始まる方墳の系譜は、6世紀末～7世紀初頭に、32代崇峻天皇（在位 587～592年）の陵墓と考えられている赤坂天王山1号墳（倉梯岡上陵?東西 45.5m×南北 42.2m／高さ 3段 9.1m）をはじめとして、31代用明天皇（在位 585～587年）陵（春日向山古墳・河内磯長原陵・東西 65m×南北 60m／高さ 10m）・33代推古天皇（在位 593～628年）陵（山田高塚古墳・磯長山田陵・東西 63m×南北 56m／高さ 12m）の3代の天皇陵に採用された。推古天皇に関しては、最初は竹田皇子の陵に葬られたとされ、方墳である植山古墳（南北 32m・東西 40m）が初葬時の陵墓に比定されている。

昨今では、34代舒明天皇（在位 629～641年）の初葬の陵墓（滑谷岡?）、もしくは蘇我蝦夷（～645年）の墓（大陵?）とされる1辺 50m以上となる小山田遺跡の発見が注目されている。因みに舒明天皇は、最終的には上円下方墳（上八角下方墳）の段ノ塚古墳（押坂内陵・東西 65m×南北 60m／高さ 10m）に埋葬されている。その後、皇極天皇（在位 642～645年）以後、上八角下方墳・八角形墳へと移行してゆくことは周知の通りである。蘇我馬子（～626）の墓とされる1辺が 51m程度の石舞台古墳も、方墳或いは上円下方墳・上八角下方墳であるとされる。蘇我稲目（～570）の墓とされる都塚古墳（推定東西 41m×南北 42m／高さ 4.5m）も、近年再調査されている。

畿内における鷹塚古墳と同時期・同規模の方墳としては、1辺が 25m程度の赤坂天王山2号墳が挙げられる。石室は、羨道が長さ 4.9m×幅 1.7m、玄室が長さ 4.4m×幅 1.8mで高さが 1.5m、全長 9.3mである。因みに赤坂天王山古墳群には、円墳である3号墳があるが、羨道が長さ 6m×幅 1.7mで、玄室が長さ 4.3m×幅 2.5mで高さが 2.6m、全長 10.3mである。その他にも、秋殿南古墳（24m×24m・高さ 5m）や仏塚古墳（23m×23m・高さ 4m）も同時期・同規模の方墳として挙げられる。

九州島内における方墳は、50基程度が確認されているが、そのほとんどは一辺が20m以下である。鷹塚古墳と同規模、もしくは、それを上回る大きさの方墳は、6世紀第4四半期～7世紀第1四半期に集中する。

以下、便宜上、後の律令制下における国ごとに見てゆくと、豊前に甲塚方墳（36m×46m・高さ9.5m）・橘塚古墳（38m×41m・高さ4m）、豊後に鷹塚古墳（1辺25～30m程・高さ5～6m程）、日向には新田原44号墳（26m×26m）・新田原138号墳（26m×26m）・常心塚古墳（25m×24m／高さ3.8m）・高崎塚原20号墳（27m×27m）の7基が存在する。これに順ずるクラスとしては、肥前佐賀県東脊振村の上石動古墳（南北20m×東西20m）、肥後熊本県宇土市の椿原古墳（南北19m×東西18m）の2基が挙げられる。因みに、上記、9古墳の内、周堤を持っていたことが判明している方墳は、甲塚方墳、常心塚古墳の2基である。

#### 4 畿内政権と九州における方墳の築造

6世紀末～7世紀初頭にかけて盛行し始めた方墳が、東九州に築造されることは、当時の畿内政権の政策を反映しているものと考えられる。用明天皇は、用明2（587）年に崩御するが、当初、磐余池上陵に埋葬される。この磐余池上陵が方墳であった保証はないが、推古元（593）年に方墳である河内磯長原陵（春日向山古墳）に改葬される。次代の崇峻天皇は、587年に即位するが、東漢直駒に暗殺された後、崇峻5（592）年に倉梯岡上陵に埋葬され、これに比定されているのが赤坂天王山1号墳である。舒明天皇は、舒明13（641）年に初葬の滑谷岡に埋葬されているが、その陵墓が方墳である可能性が高い小山田遺跡と推定されている。

よって「方墳」を天皇家が採用していた期間は、587～641年の半世紀ほどであったことが把握される。舒明天皇の父親は、仏教排斥派であった30代敏達天皇（在位572～585年）の息子押坂彦人大兄皇子であり、その墳墓（成相墓）として比定されているのが奈良県広陵町の牧野古墳である。押坂彦人大兄は、崇峻天皇崩御の際に、皇位継承者として候補に挙げたという記事以後、文献史料に登場しなくなるので592年～600年代の期間に葬られたことは間違いない。この牧野古墳と崇峻天皇の陵墓と考えられる赤坂天王山1号墳の石室構築技術には、極めて近い類似点が指摘されている。鷹塚古墳の1トレンチの周溝底から出土した須恵器群は、この牧野古墳の須恵器群と併行関係にあると考えられる。

この概ね590～600年代の20年間は、日本史の中において、どのような時代であったのかを考える必要がある。

593～622年、仏教推進派の用明天皇の息子厩戸皇子は、推古天皇の摂政となる。彼は、言うまでもなく、「豪族」を律令制下の官吏たる「官人」に編成してゆく冠位十二階の制定（603年）・その官人の道徳・倫理的訓戒を説く憲法十七条の制定（604年）等、その政策は仏教興隆・国史編纂等の文化事業を通して、皇権を強化して集権的官僚国家へと突き進むもので、後の中大兄皇子の改新政治に先鞭をつけるものであり、「大宝律令」において完成されるものであった。

それまで、地方支配に関しては、氏姓制度の中で「県主」・「国造」・「稻置」・「屯倉」等と、それに伴う「部民制」が重要なものであった。

『隋書』には、以下のようにあり、推古朝の地方組織として「軍尼」・「伊尼翼」を置いていた

事実が記されており、「軍尼」は「国造」、「伊尼翼」は『古事記』・『日本書紀』に記されている「稲置」であると考えられている。

「……有軍尼一百二十人、猶中国牧宰。八十戸置一伊尼翼、如今里長也。十伊尼翼属一軍尼。」

『隋書』倭国伝

「稲置」は、地方官として置かれたものであり、『隋書』には倭に「軍尼」が120人居り、「伊尼翼」は1軍尼（国）に10伊尼翼（稲置）が属すると記してある。この「軍尼」・「伊尼翼」が、大化の改新後、「評督（評造）」や「評」へと転化し、「国造」権力は次第に分割され官人化が促進されてゆく。

対外政策に関しても、注目しておく必要がある。厩戸皇子は、遣隋使派遣（600・607・608・614年）をおこない、朝鮮半島情勢を有利に進めようとする外交巧者の側面もあった。

『日本書紀』には、崇峻天皇の時代に、以下のような記載が見られる。

「冬十一月の己卯の朔壬午に、紀男麻呂宿禰・巨勢猿臣・大伴嚙連・葛城烏奈良臣を差して、大將軍とす。氏氏の臣連を率て、裨將（副將）・部隊（部隊長）として、二万余の軍を領て、筑紫に出で居る。」

（崇峻天皇4（592）年条）

「馭使を筑紫將軍の所に遣して曰はく、「内の乱に依りて、外の事を莫怠りそといふ。」

（崇峻天皇5（593）年条）

以上のように、推古の外征計画以前に、すでに「筑紫將軍」という“將軍”が置かれていたことが分かる。推古天皇は、600年、伽耶西部の任那四県の回復を意図し、蘇我氏の一族である境部臣（境部摩理勢）・穂積臣（穂積祖足）を新羅征討の為に派遣しており、602年には厩戸王の同母弟である来目皇子を征新羅大將軍として派遣しようと試みており、同じく『日本書紀』に、以下のような記載が見られる。

「秋七月に、將軍等、筑紫より至る。」

（推古天皇3（595）年）

「八年の春二月に、新羅と任那と相攻む。天皇、任那を救はむと欲す。是歳、境部臣に命せて大將軍とす。穂積臣を以て副將軍とす。」

（推古天皇8（600）年）

「十年の春二月の己酉の朔に、来目皇子をもて新羅を撃つ將軍とす。諸の神部及び国造・伴造等、并て軍衆二万五千人を授く。夏四月の戊申の朔に、將軍来目皇子、筑紫に至ります。乃ち進みて嶋郡に屯みて、船舶を聚めて軍の糧を運ぶ。六月の丁未の朔己酉に、大伴嚙連・坂本臣糠手、共に百濟より至る。是時に、来目皇子、病に臥して征討つことを果たさず。」

（推古天皇10（602）年）

「十一年の春二月の癸酉の朔丙子に来目皇子、筑紫に薨せましぬ。仍りて馭使して、奏し上ぐ。爰に天皇、聞きて大きに驚きて、皇太子。蘇我大臣を召して、謂して曰はく、「新羅を征つ大將軍来目皇子薨せぬ。其の大きなる事に臨みて、遂ぐるこゝろえずなりぬ。甚だ悲しきかな」とのたまふ。仍りて周芳の娑婆に殯す。乃ち土師連猪手を遺して、殯の事を掌らしむ。故、猪手連の孫を娑婆連と曰ふ。其れ是の縁なり、後に河内の埴生山の岡の上に葬る。

夏四月の壬申の朔に、更に来目皇子の兄当摩皇子（来目皇子異母兄）を以て新羅を征つ將軍とす。

秋七月の辛丑の朔癸卯に、当摩皇子、難波より発船つ。丙午に当摩皇子、播磨に到る。時に、従ふ妻舎人姫王、赤石に薨せぬ。仍りて赤石の檜笠岡の上に葬る。乃ち当摩皇子返りぬ。遂に征討つことをせず。」（推古天皇 10（602）年）

「三十一年の秋七月に、……即年に、大徳境部臣雄摩侶・小徳中臣連国を以て大將軍とす。小徳河辺臣禰受・小徳物部依網連乙等・小徳波多臣広庭。小徳近江脚身臣飯蓋・小徳平群臣宇志・小徳大伴連 名を欠せり。小徳大宅臣軍を以て副將軍とす。数万の衆を率て。新羅を征討す。」（推古天皇 31（623）年）

勿論、『日本書紀』の全てを信じる訳にはいかないが、以上のような、時代背景の中において、6世紀末～7世紀初頭に東九州に築造される方墳群は、中央から派遣、或いは任命された軍人的官人の存在を示すものであると考えられる。征新羅大將軍の来目皇子の墓とも言われる大阪府羽曳野市の塚穴古墳（埴生岡上・54m×54m、高さ10m）は、天皇陵に次ぐ巨大な方墳である。推古天皇 17（609年）年には、「筑紫大宰、奏上して言さく、」ともあり、後の大宰府の最高位である高級官吏が既に置かれていた。筑前国における対外政策の拠点としては、“那津”と“大宰府”が挙げられる。『日本書紀』宣化天皇元年（536）年5月の条には、「官家を那津の口に脩り造てよ」とある。同年7月、磐井の乱を鎮定した物部麿鹿火が没している。いずれにしても、日本の代表的な外港である“那津”は、磐井の乱後、早い段階で直轄地とされたことが分かる。時代は遡るが、『日本書紀』継体天皇 21（527）年には、以下のような記述がある。

「二十一年の夏六月の壬辰の朔甲午に、……重詔して曰はく、「大將は民の司命なり。社稷の存亡、是に在り。勗めよ。恭みて、天罰を行へ。」とのたまふ。天皇、親ら斧鉞を操りて、（大連物部大連麿鹿火）に授けて曰はく、「長門より東をば朕制らむ。筑紫より西をば汝制れ。専賞罰を行へ。頻に奏すことに勿煩ひそ」とのたまふ。」（継体天皇 21（527）年）

この記述を信じれば、磐井の乱後、すなわち 528～536 年の間、物部氏が筑紫以西において、かなりの権限を有していたことが想定される。『旧事紀』及び『天孫本紀』には、「物部竺志（つくし）連公」ともある。その後、麿鹿火の系譜は途絶えるが、代わりに物部尾輿の家系が伸張を図る。尾輿は、仏教を巡って蘇我稲目と対立し、崇峻天皇即位時（587年）には、物部守屋が蘇我馬子及び厩戸王をはじめとした勢力により排除される。

この“那津”及び後に“大宰府”と呼ばれる重要拠点、瀬戸内海を通じて飛鳥と結びつけられていた。畿内政権にとって、豊前地方は九州への上陸地且つ重要拠点であり、ここにも中央派遣の將軍クラスの高級官吏を配置したのであろう事は、甲塚方墳及び橘塚古墳という九州最大級の方墳が築造されたことから推定するに難くない。事実、この2つの巨大方墳を擁するみやこ町から行橋市境にかけて観音山を中心に、おびただしい数の群集墳が密集していることが確認されている。『日本書紀』安閑天皇元（531）年には、以下のような記述がある。

「物部大連尾輿の事の己に由ることを恐りて、自ら安きこと得ず。乃ち十市部、伊勢国来狭狭・登伊（来狭狭・登伊は、二つの邑の名なり。）の贅土師部、筑紫の胆狭山部を献る。」

（安閑天皇元（531）年）

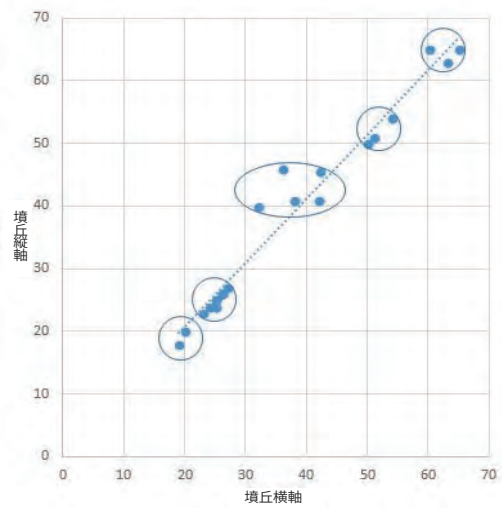
胆狭山は、『倭名抄』中で、豊前国の京都郡及び下毛郡の諫山郷（福岡県京都郡みやこ町勝山町北部・大分県下毛郡）にあったとされる郷であり、この地が、物部氏によって天皇家に献上されたことが分かる。前者は、まさに橘塚古墳と観音山のエリアで、甲塚方墳も近距離にある。

豊前地方は、九州における交通網のハブ的拠点となる地勢を持っており、筑前方面だけではなく豊後・日向方面への分岐点でもある。みやこ町の甲塚方墳・橘塚古墳は、大宰府へと到るルート上にある。肥前の上石動古墳も、那津へ到るルート上に位置する。同様の性格は、豊後の中でも特に速見郡において見られ、鷹塚古墳の所在する別府市は、現代の高速道路網の上でも豊前・筑後・日向への分岐点であり、後の官道推定ラインに接する。

日向に関しては、児湯郡の新富町・西都市という日向中部に3基が集中し、北諸県郡の都城市高崎町に1基が確認できる。前者3基が西都原古墳群を擁する児湯郡に集中していることは、「国造」に睨みを利かす「稲置」・「屯倉」の存在を示しているようにも思える。

後者は、「隼人」の地である大隅国との国境、或いは贈於郡ひいては球磨郡へ睨みを利かせる為の配置であると考えられる。そのような意味に於いては、肥後の椿原古墳も同様の性格を持っているものと理解しても良いのかもしれない。

また、日向の方墳に関しては、4基の存在が知られるが、いずれも一辺25～26m前後と同一規格であり、豊後の鷹塚古墳と同規模である。厩戸皇子による位階制を重んじた推古朝においては、墳形及び墳丘規模の規格も位階制に順じて決定されたものと考えられ、甲塚方墳・橘塚古墳という將軍クラスの官吏の古墳2基、それに次ぐクラスが豊後の鷹塚古墳、日向の新田原44号墳・新田原138号墳・常心塚古墳・高崎塚原20号墳の6基、更にその下に肥前の上石動古墳、肥後の椿原古墳の2基が来るものと考えられる。天皇陵及び將軍クラスの方墳の墳形が横長であるのに対し、それに順ずるクラスは正方形を呈する傾向にあることも、ここに指摘しておく。



第93図 方墳の平面規模散布図（単位 m）



## 5 まとめ

以上、便宜上、後の律令制下の国ごとに見てきたが、推古朝の時代、6世紀末～7世紀初頭の東九州は、畿内政権によって国策として「新羅への出兵計画」と「中央豪族及び地方豪族の官人化」が併行しておこなわれる中で、「外敵に対する東九州の兵士及び兵站の集積地及び中継地」として、また、同時に「隼人」や「第2の磐井」に対する「九州の守備・防衛拠点」としての重要性が増した。筑前には筑紫將軍を置き、後詰めの豊前にも同等の官吏を置いたものと考えられ、その墳墓が甲塚方墳・橘塚古墳であると想定される。同時期の方墳の分布状況を見ると、北部九州から南九州へかけて、東九州から西九州への交通網の分岐点に分布する傾向が把握され、これは「稲置」や「屯倉」をはじめとした中央権力が直接及ぶ土地の分布と重なる可能性が高いことが指摘される。また、後の律令制下において、方墳が立地する土地近郊に、駅及び駅路、豊前では豊前国府、豊後では速見郡衙、日向では日向国府が設置される事もこれを補強するものと考えられる。

前方後円墳の築造停止以後に築造された「方墳」は、日本中の分布及び築造数から見て、かなり限定的な階層にしか築造が許されなかった事が把握される。この「方墳」が築かれた土地は、律令国家胎動期の畿内政権にとって極めて重要な意味をもつ土地であり、鷹塚古墳の位置する土地は、九州経営を見据えた畿内政権にとって、律令制下では豊国北部（後の「豊前」）と豊国南部（後の「豊後」）に国分けされる以前の「豊国」の地理的中心地であり、交通網上の結束点という要衝であった。

当時の畿内政権の施策・経営方針は、後に豊後国の中心地となる「大分郡」に所在する6世紀末～7世紀初頭の前古墳群よりも、「速見郡」に所在する鷹塚古墳及び国指定史跡鬼ノ岩屋古墳群の墳丘及び石室が豊後国において突出したものであることから、ある時点までは「大分郡」よりも「速見郡」を重視するものであったと理解することができる。

鷹塚古墳の被葬者は、この畿内政権の施策・経営方針を円滑化する役割を負った人物であったことは間違いなく、地方における「豪族」の「官人化」の中において、方墳を造営することが許される階層に叙された人物であったと考えられる。

### 参考文献

- 河上邦彦 2005『大和の終末期古墳』学生社
- 河上邦彦編・奈良県立橿原考古学研究所監修 2006『大和の古墳Ⅱ』
- 新近畿日本叢書 大和の考古学第3巻 近畿日本鉄道株式会社・人文書院
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 校注 1995『日本書紀』（四）岩波文庫
- 下原幸裕 2006「三 九州の終末期方墳」『行橋市史』資料編 原始・古代 行橋市
- 白石太一郎編 2005『古代を考える 終末期古墳と古代国家』古川弘文館
- 新納泉 1995「巨石墳と終末型古墳の編年」『展望考古学』考古学研究会
- 魏徴等 撰 636『隋書』第6冊巻81（傳）倭国条 中華書局

## 第4節 実相寺古墳群に所在する二基の石棺について

田中裕介（別府大学）

### 1 はじめに

大分県別府市実相寺遺跡公園には、戦後この周辺で発見された考古資料が集められている。箱式石棺や横穴式石室などとともに公園内に置かれている二基の石棺材も、周辺の開墾時あるいは道路開削時などに出土したものである。この公園に移動した経緯は不明であるが、すでに古くから知られていた。この実相寺公園所在の石棺を実測図とともに初めて紹介したのは清水・高橋 1982 である（註 1）。その論文のなかで実相寺石棺は二棺共に、阿蘇溶結凝灰岩を利用したものではなく、両石棺とも安山岩系統の石材が用いられていることを指摘した。のちに九州の刳拔式石棺を集成した若杉竜太は、ともに刳拔式の家形石棺として両者に実相寺 1 号石棺、2 号石棺という名称をあたえた（若杉 1997）。本稿でもその名称を踏襲する。

この石棺を改めてここで紹介する理由は、ひとつにはこの二つの石棺の素材となった石材が地元のそれもごく近くの別府市内から採取された石材であることが指摘されたことにある。さらに実測の結果、石棺の細部についての詳細が判明したことによる。

本稿ではその経緯を含めて実相寺古代遺跡公園に所在する二つの石棺を紹介し、その特徴を記述したうえで、製作年代と被葬者像を考察する。

### 2 資料

#### (1) 石材

この二つの石棺はいずれも同じ石材が用いられており、大型の角閃石を多量に含み灰白色で気泡がめだつ柔らかく比較的軽い石材である。素人目にも大分県南部で通常石棺材としてもちいられる阿蘇溶結凝灰岩とは異なっている。大分県内で発見されている刳拔式石棺の中でこの石材を用いるのは実相寺石棺の二例が唯一である。そのことはすでに清水・高橋 1982 において「安山岩系統の石材」を用いると違いが指摘されていた。（註 2）。そのご近隣に所在する<sup>はるきよしもと</sup>春木芳元遺跡の 5 世紀後葉の箱式石棺の石材が「凝灰岩質安山岩」であって実相寺山に同質の石材の露頭がみられることが指摘されていた（下森 2007）。

そこで 2012（平成 24）年 5 月に大分県速見郡日出町在住で別府周辺の石材に詳しい大分県地質学会副会長の堀五郎氏に石棺石材を見ていただいた。その結果、両石棺の石材は角閃石安山岩あるいはデイサイトで、別府市内では実相寺山の山体と、上人地区の丘陵の 2ヶ所に分布し、同じ石質は由布市にも分布することの教示をうけた（註 3）。実際に実相寺山にしてみると、さほど広くない山体の斜面に石棺と同一の石質と独特の海蝕痕跡をもつ大型の石材がところどころに露出していることが判明した（写真 8）。そこには石棺材に手ごろな自



写真 8 実相寺山露頭

動車大の石も多い。さらに玉川剛司氏と上野淳也氏のこれまでの調査によって、同じ石材による遺構として、実相寺古墳群の鷹塚古墳石室閉塞石、天神畑1号墳石室閉塞石、春木芳元遺跡箱式石室石棺材、鬼ノ岩屋2号墳の閉塞石、鬼ノ岩屋1号墳の石室石材のほとんど、などの古墳の構造物に使用されるほか、鷹塚古墳墳丘上の鎌倉時代の石仏や、実相寺山周辺の中世石塔や近世の石塔にこの石材の使用が散見されることを教えていただいた。以上の事から実相寺石棺はその実相寺山の山体を構成する角閃石安山岩の転石を利用したものと強く推測された。

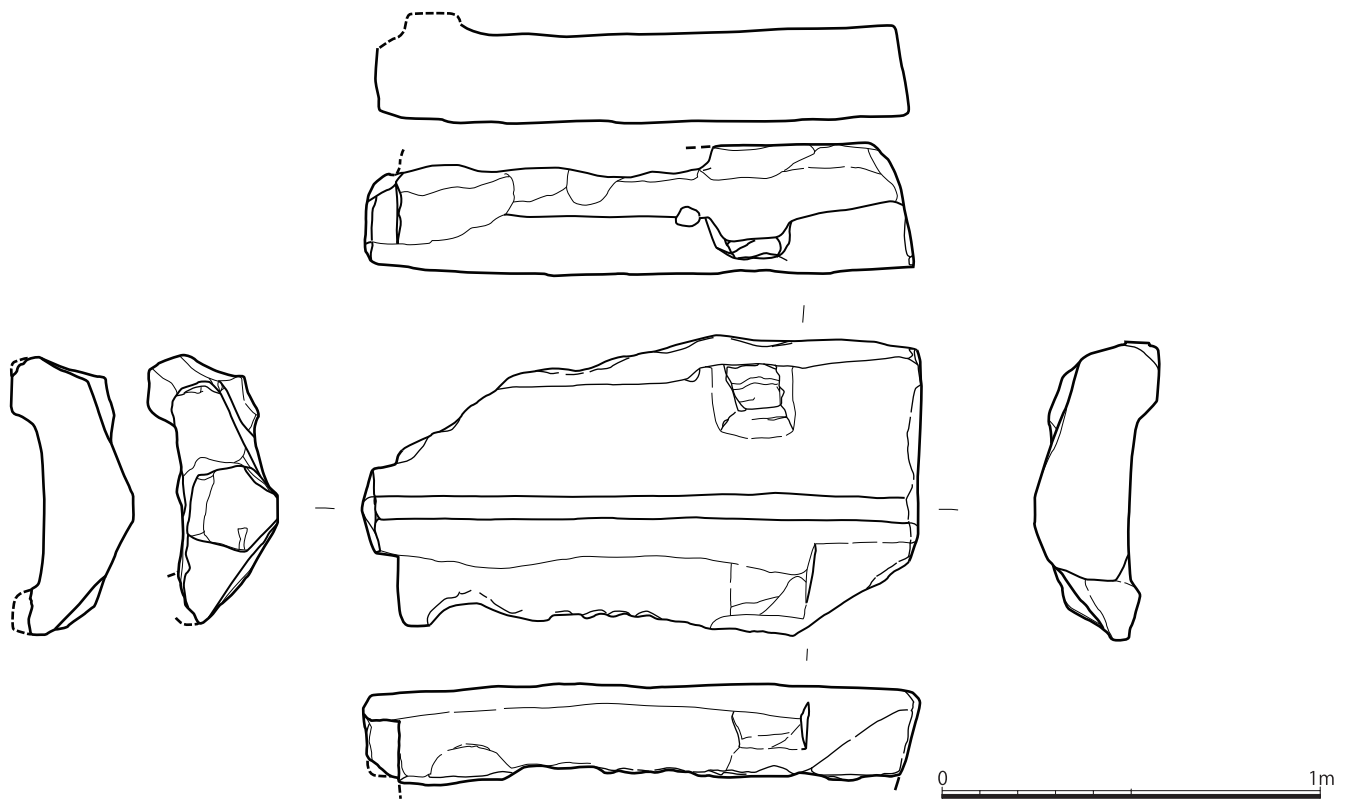
#### A 実相寺1号石棺（図94、写真9）

現在実相寺遺跡公園内に置かれている角閃石安山岩製の刳抜式石棺の棺蓋である。今回棺蓋の切断面を観察したところ、割れているのではなく、短辺と平行になるように丁寧に調整されていることが観察された。したがって別の部材に短辺縄掛突起を彫りだして、組み合わせて使用されたと推定される。つまり現存する棺蓋は、1：2程度の比率で当初から分割されて作られた棺蓋材のうちの大きな方の棺蓋であると考えられる。縄掛突起は側面に1ヶ所ずつ2ヶ所、短辺に1ヶ所あり、いずれも方形の突起で、短辺の突起は棟上面に連続して作られているため正面からみると五角形に見える。短辺の突起は本来の形態をよく残しているが、側面の突起は現状ではほとんど突出しない程度に剥離している。棟は短辺の縄掛突起の上面からそのまま幅5cm程度の平坦面を明瞭に造り出しているが、平面位置をみると中軸上ではなくやや偏っている。棺蓋の幅は短辺付近で70cm弱、側面の縄掛突起の付近で75cm程度である、棺蓋の長さは、小の部分の棺蓋がないので全体の大きさは確定できないが、側面の突起が棺蓋全体の中央に位置すると仮定すれば、短辺のラインと突起の中央の距離がほぼ100cmとなるので、その倍の200cmが棺蓋本体の長さで、さらに短辺の縄掛け突起が両側に合わせて15cmほど突出していると想定される。したがって本来大小の棺蓋を組み合わせて215cm程度の長さで復元される。短辺側の平面形は方形に作られ、内面にはやや浅い断面台形の深さ10cmの掘りこみが幅50cm長さ115cmほど掘りこまれている。棺蓋内面の彫り込みの下からみた平面形態は角が取れた円形である。この特徴は大野川中上流域の舟形石棺に見られる特徴であることは井大樹氏から教示をうけた。

以上形態の特徴をまとめると、①縄掛突起の形態と位置は、方形突起、1・1型式。②断面は、棟の平坦面が明瞭な屋根形（平坦面指数は10以下）だが、全体的に低い。③短辺の縄掛突起が棟続きの高い位置にある。④分割製作された大小二つの石材を組み合わせて棺蓋とする。⑤平面形は長方形だが、内面の彫込み平面形は長円形であると指摘できる。

#### B 実相寺2号石棺（図95、写真10）

同じく実相寺遺跡公園内の1号石棺のそばに置かれている家形石棺の棺蓋である。現在別府市教委に所蔵の1976（昭和51）年に吉留秀敏によって作成された実相寺古墳群の測量図には、天神畑古墳南側の位置に「池造成中に石棺出土」という記載があり、その付近には現在でも大型の石材が露出しており別の横穴式石室古墳が存在した可能性が高いことはすでに上野淳也氏によって指摘されている（前者が天神畑1号墳、後者が天神畑2号墳）。当時の聞き取りと思われるその情報が正しければ、実相寺2号石棺はその横穴式石室墳に内蔵されていたという想定が成り立つ。石材は同じく角閃石安山岩製である。半分が欠失しており、短辺中央に1カ所、側面に1カ所ずつ横長の長方形の縄掛突起がつけられ、突起上面は石棺斜面部の上方に向かってハの字状



第 94 図 実相寺 1 号石棺 (1/20)



写真 9 実相寺 1 号石棺

に狭まりながら伸びている。側面の突起の位置から推定して本来この石棺には短辺に 1 カ所ずつ、側面に 2 カ所ずつ突起が存在した 1・2 型式の配置であると考えられる。突起はすでに欠失しているが、もっともよく残っている側面の突起をみると、垂直面から 10cm ほど飛び出すようである。棺蓋の幅は約 110cm、長さはおよそ 115cm 分が残されている。高さは 38cm、垂直面の高さは場所によって異なるが 15～18cm である。上部平坦面の幅は 57cm、天井部の厚さは 22cm をはかる。側面は短辺部を中心に石材特有の亀裂が横方向に重なり表面全体が磨滅している。これはこの石材独特の海蝕の痕跡で、実相寺山の転石に頻繁に観察され、石棺材の産地推定の根拠の一つである。

平端面指数は  $57 \div 110 \div 52\%$  であり、かなり広い。かつて増田一裕氏はこの点に着目して(増田 2004)、実相寺 2 号石棺を氏の設定した畿内系家形石棺編年第 4 期第 2 段階すなわち須恵器

TK217 型式の時期にあたる可能性を示唆した。内面はしっかりとして台形の掘り込みが行われている。縄掛突起はいずれも斜面から出て、垂直面の半ば以上に達する長方形のつくりで、突起上面の斜角度は 20 度ほどの角度で下に傾斜する。突起の幅は短辺突起で 30cm、側面突起は 25 cm である。

以上の形態の特徴をまとめると、①縄掛突起の配置は短辺 1 カ所、側辺 2 カ所の 6 突起と推定される。②平端面がきわめて広い（平坦面指数 52）。③縄掛突起は長方形で、上面が下に傾斜して垂直面に及ぶ。以上の特徴からみて 2 号石棺は、実見した多くの方が指摘したように畿内系の家形石棺である（註 4）。

### 3 特徴

#### (1) 1 号石棺の型式と特徴 舟形石棺あるいは組合せ式家形石棺

##### A 石棺蓋の型式について

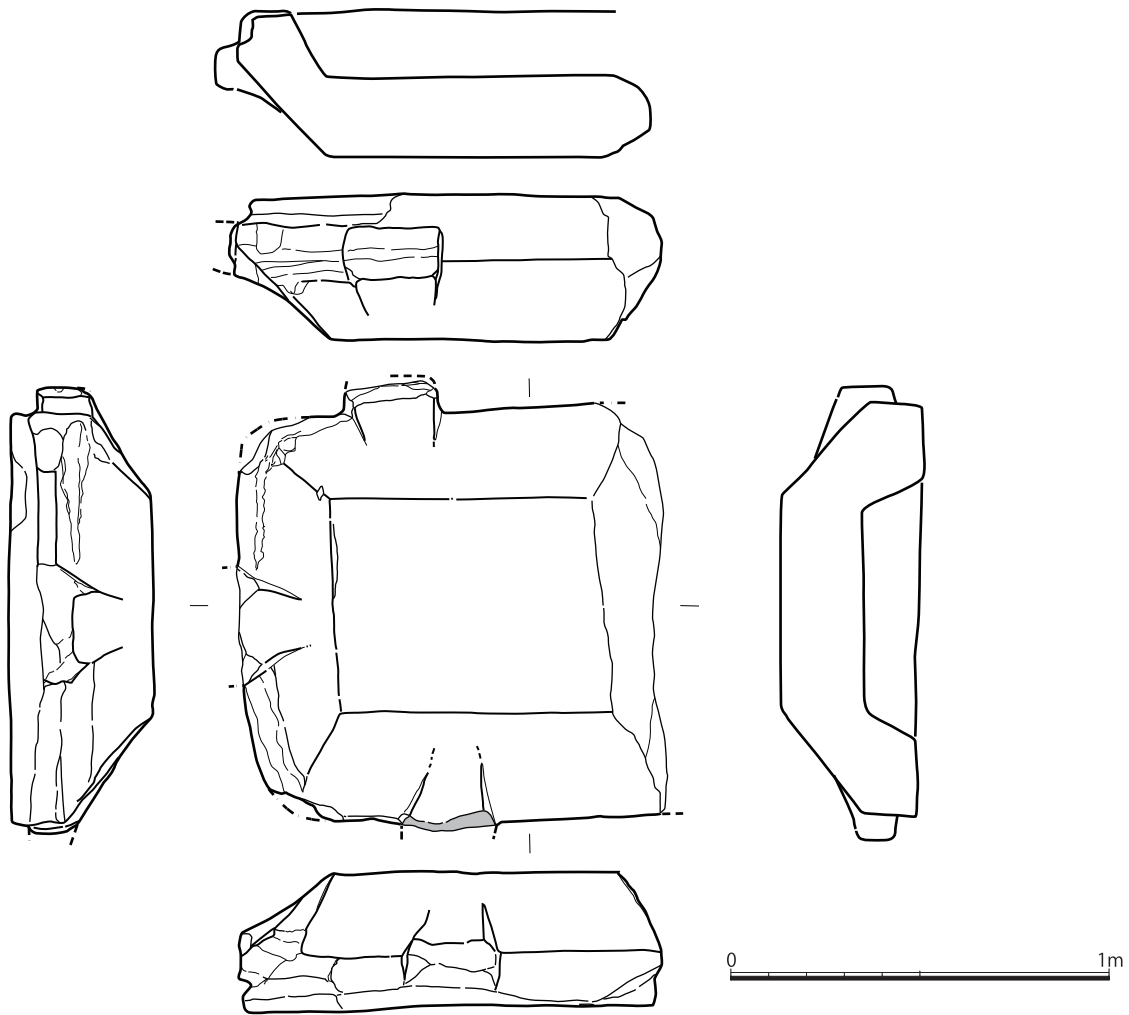
舟形石棺と家形石棺の双方に近似例がある。舟形石棺としては大分県豊後大野市鉢の窪 3 号墳舟形石棺、宮崎県延岡市小野寺田石棺が類似し、いずれも中期後半と考えられている。組合せ式家形石棺としては、宮崎県延岡市南方 23 号墳石棺、吉野 5 号墳石棺、6 号墳石棺など後期初頭の例が類似する。

##### B この棺蓋に組み合う棺身について

棺蓋の小口にあたる短辺平面の形態が円形ではなく方形になることからみて、棺身は平面形が長方形で短辺部分が直線的な構造になることが想定される。そのような構造であれば刳抜式の舟形石棺の棺身でも家形石棺のそれでもありえる。さらに組合せの石棺の棺蓋になる可能性も指摘できる。ことに比較的隣接する春木芳元遺跡において発掘され箱式石棺と報告された 1 号棺は、石材が実相寺 1 号石棺と同一であること、発掘時棺蓋がなかった上に、石棺の上面寸法が、外側で測って長さ 200cm、幅 70～80cm で、現存する実相寺 1 号石棺の想定寸法とほぼ一致し、さらにその箱式石棺のあつらえ方は下部から上方に向かって小口板と側板をハの字形に立てて安定させる形式で、しばしば西九州の組合式家形石棺にみられる方法である。相伴した須恵器から春木芳元遺跡の石棺の築造時期は須恵器 TK23 型式期であり、時期的にも十分この型式の石棺棺蓋が存在しうる時期である。明確に証明することはできないが、石材の一致、寸法の一致等から、実相寺 1 号石棺棺蓋は一つの可能性として春木芳元遺跡 1 号棺の棺蓋である見解を提出しておきたい。

##### C 分割製作された棺蓋について

大分県内においては旧大分第 1 高女所蔵石棺（註 5）、大分市世利門古墳の組合式家形石棺の棺蓋と、豊後大野市鉢の窪 3 号墳の舟形石棺の棺蓋にみることができ、いずれも古墳時代中期中ごろから後半にかけての石棺であり、大分平野から大野川流域の南部内陸に分布する。さらに県外に目を広げると、熊本県内の組合式家形石棺と島根県の石棺の類例が存在し、遠くは和歌山県大谷古墳の組合式家形石棺にも見ることができる（日本考古学協会 2010）。棺蓋を分割製作する理由は、早くから指摘されてきたように（佐田・高倉 1972）、追葬を行う際の開棺の利便性のための工夫と考えられ、筑後平野や菊池川下流域などでは横口を設けることでこの問題に対応し



第 95 図 実相寺 2 号石棺 (1/20)



写真 10 実相寺 2 号石棺

たが、菊池川中上流域やそれ以南では棺蓋を分割製作することで、追葬に対応したものと考えられる。島根県の諸例と和歌山大谷古墳例がいずれも後期に下るのに対し、熊本県と大分県の諸例はいずれも、中期後半とされている。今のところ細かい前後関係を明らかにできないが、このようなアイデアが大分県内で自生したものか熊本県から伝わったものか不明であるが、大分県南部

の大野川中流域では箱式石棺の蓋石を分割製作して突起を削り出す蓋石の例が、豊後大野市鉢の窪3号墳（註6）と漆生古墳群大久保3号墳の棺蓋（田中2014）で知られているので、大分県内でそのような技法が舟形石棺や家形石棺の棺蓋に採用される条件が中期後半にはすでに成熟していたといえる。

## （2） 2号石棺の型式と特徴 畿内系家形石棺

### A 棺蓋の型式と時期

短辺に1カ所、側面に2基の縄掛け突起を有する型式は、6世紀後半から7世紀前半の家形石棺に共通する様式である。そのなかでも平坦面指数は52で極めて広く、畿内で製作された縄掛け突起を有する家形石棺のなかにおくと、もっとも新しい部類に入る（増田2004、太田2005）。縄掛け突起の位置と形状を太田2005の分類に適用すると6類と3b類にあたり、これももっとも新しい一群であたるので、7世紀でも中葉に近い前半となり須恵器形式で言えばTK217型式期の石棺と考えてよいのはなかろうか。

### B 石棺の大きさについて

半分に折れているので正確な長さは不明だが、幅は110cmで、これを石橋2013の規模の分類に当てはめるとD類とされた棺蓋長200～240cm、幅70～140cmに範囲に入り、もっとも類例の多い一群にあたる。東九州に所在する畿内系の家形石棺で古墳時代後期後半から終末期の石棺の規模は、福岡県みやこ町綾塚古墳の家形石棺が長さ252cm幅144cmの大型であるのに対して、大分市丑殿古墳石棺は長さ230cm、幅100cmとかなり小さく、実相寺2号棺はその大きさでは丑殿古墳に近く、石橋分類でA類に近い大きさの綾塚古墳石棺に比べると、一ランク下の大きさ石棺と言える。これはまさにこの時代の実相寺古墳群の首長の畿内王権中枢からみた政治的位置を表しているといえよう。豊前において最大規模の墳丘規模（円墳41m）と石室規模を有する綾塚古墳（玄室面積約12.5㎡）は、石棺の大きさからみても大型と言え、7世紀前葉という築造時期から推して、被葬者は豊前地域を統括した国造級の首長と考えられる。これに対して実相寺2号棺は大分平野の丑殿古墳石棺と同規模であり、綾塚古墳と匹敵する墳丘と石室をもった豊後の国造級の古墳である鬼ノ岩屋2号墳（円墳37.5m、玄室面積12.9㎡）と鷹塚古墳（方墳25m）の直接の後継墳でありながら、その石棺からみた地位は国造級とはみなしがたい古墳に変化しているといえる。

## 4 石質と石棺形式

現在角閃石安山岩製の石棺が分布するのは別府地域の2例だけである。大分県内の削り抜き式石棺は別府市以外ではすべて阿蘇溶結凝灰岩製である。したがって、この石材を恒常的に用いて石棺などの石製品を製作する土着の工人が登場するのは中世以降といえ、古墳時代には外来の石工が、地元の協力のもとに製作したと考えられる。そして石棺形式をみると、1号石棺は大分県南部の石棺と特徴を共有し、2号石棺は畿内型の家形石棺そのものの型式である。この事実はそれぞれ製作された時代は異なるにもかかわらず、この地域の首長墓に使用する石棺製作のために、他地域で経験を積んだ工人が、この地にやってきて在地の石材で石棺を製作したことを物語っている。実相寺1号石棺の場合は、その特徴から大分市内あるいは大野川流域の阿蘇溶結凝

灰岩で経験を積んだ工人が、移動してきて実相寺山の石材を使って製作したものであり、このような工人の移動例の指摘としてはつとに、古墳時代中期の鹿児島県唐人大塚古墳と神領10号墳の舟形石棺が、志布志湾の石材を用いて、宮崎県延岡市付近の工人が移動して製作したと指摘した橋本達也の研究（橋本2005・2016）がある。実相寺1号石棺の例は、比較的近距離ではあるが、工人が移動を仰ぐことで別府の首長が大分南部の首長との関係を持ったことを示している。いっぽう2号石棺の場合は、播磨の竜山石あるいは大和の二上山で家形石棺製作に携わった工人が別府まで移動して、実相寺山の石材を使って製作したと推定される。畿内の王族・豪族と同じ形式の家形石棺を用いることにより畿内の王権との関係の強さを周囲の首長に示す役割を果たすとともに、その大きさが国造級の大きさよりは1ランク下のものであったことからみて、石棺に葬られた首長さらにその系譜に連なる別府の豪族の地位を王権がそのクラスに位置づけたという意味で、石棺工人の移動は王権による地方首長の位置づけを行うという政治的行為にともなうものであったことを示している。

## 5 まとめにかえて ―石棺からみた別府の古墳群―

大分県南部は阿蘇溶結凝灰岩が豊富な地域であり、そこからやって来た石工が凝灰岩の代わりに軟質の実相寺安山岩を使ったことは確実であり、古墳時代中期後半には石工の移動を通して別府の首長と豊後南部の首長の間に緊密な関係が結ばれたものと推定される。

その後1世紀近い年月を経て、古墳時代の後期後半には別府には石室規模と墳丘形態や規模において豊前の甲塚古墳・橘塚古墳・綾塚古墳に匹敵する鬼ノ岩屋2号墳や鷹塚古墳といった国造級の首長墓古墳が築かれる。豊後南部にはこの2古墳に匹敵する古墳がないところから見て、その関係は1世紀前とは異なり別府地域の首長が優位に立っていたものと推定される。そして実相寺2号石棺はその後の別府の首長の様子を物語る。すでにその規模は国造の支配下の一首長クラスの石棺となっているが、畿内系家形石棺を用いたところから畿内の王権と深いつながりを維持していたことは明らかである。その後速見郡衙がこの別府に作られていくことから考えると、律令期の速見郡の郡司に実相寺古墳群の被葬者の後裔が任命されたことは想像に難くない。彼らが速見郡の郡司層になっていく背景には、その前代の畿内王権との石棺に現れたような関係の強さがあったものと考えられる。

しかし奈良時代には大分郡となる現在の大分市内に古宮古墳が7世紀後半に築造されていることから、豊後における国造的地位は、実相寺古墳群の所在する速見郡から大分郡の首長に移ったものと考えられる。

本文の作成にあたり、石棺の実測を共におこなった権丈和徳・崎谷裕紀、トレースを行った奥彩香・北原美希（当時別府大学院生）、石材について教えていただいた堀五郎先生、実相寺古墳群の発掘調査を担当された上野淳也（別府大学准教授）、玉川剛司（別府大学文化財研究所）、大分県内の資料について有益な教示をいただいた井大樹（大分県教育庁埋蔵文化財センター）に感謝する。



## 註

- (1) 石棺については1960年代頃からその存在が知られていたが、清水・高橋1982まで調査されることはなかった。その後1985年刊行の『別府市誌』において実相寺石棺の写真と実測図が紹介されるが、1号棺の代わりに鬼ノ岩屋2号古墳の石屋形の棺蓋の実測図が誤って挿入されている。記述も簡単で、いっぽうの石棺は阿蘇溶結凝灰岩製と記されている(富来隆・佐藤堯1985)。
- (2) 大分県内所在の石棺の研究は資料が豊富な阿蘇溶結凝灰岩製の舟形石棺に関心が集中したため、実相寺石棺に対する言及はなく(神田1990、林田1995)、残念ながら2010年の日本考古学協会兵庫大会の「古墳時代の棺とその歴史的意義」分科会の石棺集成でも修正表から落ちている。
- (3) 最新の地質図(星住ほか1988)によれば、実相寺山の地質は「溶岩(輝石角閃石デイサイト)」解説には「普通輝石黒雲母含有紫蘇輝石普通角閃石デイサイト」と記載され、白色のやや発泡したデイサイトで大きさ2~8mmの斜長石・普通角閃石を顕著に含むとされる。
- (4) 前田達男(前田1986)は、縄掛突起が小型にすぎること、外広きする形状や両側面の突起位置の非対称などから、畿内の直接的影響によるものではないと早く指摘していた。しかしこれは、在地の石材を用いて畿内のデザインの石棺を製作したことによる施工上の変異であって、石工が当時の畿内の石棺型式をほぼ忠実に製作していることを評価して、その意味で畿内からの直接的影響のもと製作されたと考える。
- (5) 現在所在不明になっている旧制大分高女所蔵石棺は、その後の大分の古代朝鮮文化を考える会の方々の聞き取り調査によって、大分市万寿山古墳群から明治時代末年に土地所有者によって発見搬出されたことが判明している。ちなみに若杉1997では「蓬莱塚付近石棺」として記載されている。
- (6) 鉢の窪3号墳には現在墳頂に2基の主体部が並置されており、一方が舟形石棺、一方がこの箱式石棺である。

## 文献(発表年代順)

- 佐田茂・高倉裕彰1972「九州の家形石棺」『筑後古城山古墳』古城山古墳調査団  
清水宗昭・高橋徹1982「大分の石棺」『九州考古学』56 九州考古学会  
富来隆・佐藤堯1985「ふるさとのあけぼの」『別府市誌』別府市  
前田達男1986「別府市実相寺所在の家形石棺」『石垣考古』創刊号 石垣古文化研究会  
柳沢一男1987「石製表飾考」『東アジアの考古と歴史』下 岡崎敬先生退官記念論集 同朋舎  
星住英夫・小野晃司・三村弘二・野田徹郎1988「別府地域の地質」『地域地質研究報告 5万分の1地質図福 別府』地質調査所  
神田高士1990「大分の舟形石棺」『おおいた考古』3 大分県考古学会  
林田和人1995「東九州の舟形石棺」『宮崎考古』14 宮崎考古学会  
若杉竜太1997「九州石棺考」『先史学・考古学論究Ⅱ』龍田考古学会  
増田一裕2004「家形石棺の基礎的分析(下)」『古代学研究』164 古代学研究会  
橋本達也2005「唐人大塚古墳考」『鹿児島考古』40 鹿児島県考古学会  
太田宏明2005「畿内系家形石棺の変遷と系統の統合」『古代文化』56-12 古代学協会  
下森弘之2007『春木芳元遺跡古寺地区』別府市教育委員会  
第3分科会古墳時代の棺とその歴史的意義編2010「石棺集成資料」  
『日本考古学協会2010年度兵庫大会』研究発表資料集、同実行委員会  
三好栄太郎2010「九州一棺身構造の考察を含めて一」  
『日本考古学協会2010年度兵庫大会』研究発表資料集、同実行委員会  
石橋宏2013『古墳時代石棺秩序の研究』六一書房  
田中裕介2014「漆生古墳群第1次調査」『豊後大野市内遺跡発掘調査概要報告書4』豊後大野市教育委員会  
橋本達也2016『大隅大崎 神領10号墳の研究 I』鹿児島大学総合研究博物館

## 第5節 別府実相寺古墳群出土馬具の検討

桃崎祐輔（福岡大学）

### 1 はじめに

別府市では、次郎塚古墳・鷹塚古墳・鬼ノ岩屋古墳で若干の馬具が出土した。なかでも金銅装鏡板付轡は盗難で失われたが、本来は次郎塚古墳南側の横穴式石室の開口部付近から出土した可能性が高い。この地点からは、石室内から掻き出されたと考えられる金銅装鏡板付轡乃至杏葉の細片も出土した。また鷹塚古墳では、畿内産と考えられる TK209 古段階の須恵器群とともに、木製三角錐形壺鐙の残欠とみられる木質付着金具と兵庫鎖が出土した。また伝鬼ノ岩屋古墳出土品には、鉄地金銅張の辻金具もしくは雲珠の脚部片を含み、金銅製の責金具を伴う。本論では次郎塚古墳出土馬具類に注目し、散逸したものの復元的検討を含め3セットの内容を明らかにしたい。

### 2 馬具の発見と調査研究史

昭和33年6月8日の大分合同新聞は、「別府市九電別府変電所鈴木栄氏は実相寺遺跡の古墳跡北側畑地から約1500年前の古墳時代の馬具や矢ヅリを掘出した。特に馬の耳などに飾るぎょうよう（杏葉）は金をかなり含んだ、精巧な唐草模様が刻み込まれている。別府を訪れた九大鏡山猛助教授も「これほどそのままの形をして掘り出されたものは少く、貴重なものである」と折紙をつけており、鈴木氏は近く県の重要文化財として申請するといっている（写真左はぎょうよう右上はクツツ、下は矢ヅリ）」と報道した。この写真には、心葉形十字文忍冬文透鏡板一对、方形立間付素環鏡板付轡、鞍の鞍鉸具1点、鉄鏃片6点が写っており、太郎塚北西出土品とされてきた。馬具類のうち鏡板一对は昭和34年3月20日に大分県有形文化財「唐草文透彫鏡板」として指定されたが、別府市美術館に保管中の平成14年に盗難で失われた。なおこの金銅装忍冬文鏡板付轡は、『別府市史』に記載されたほか、大分県宇佐風土記の丘の図録類にしばしば写真が掲載され、レプリカも展示されていた。その後全国的な馬具集成を進める宮代栄一氏は大分県下の馬具についても集成を進めており（宮代栄一2012）、次郎塚古墳出土の心葉形十字文忍冬文透鏡板一对についても検討を進められているが、その成果はいまのところ公開されていない。

### 3 実相寺次郎塚古墳出土馬具の内容

昭和33年に太郎塚古墳北西畑地から出土した馬具類は、大分合同新聞掲載の写真によれば心葉形十字文忍冬文透鏡板一对、方形立間付素環鏡板付轡、鞍鉸具1点、鉄鏃片6点が確認できる。「唐草文透彫鏡板」一对は昭和34年3月20日に大分県有形文化財に指定されたが、盗難で失われた。

その後、平成19～21年度にかけて別府大学文化財研究所が発掘調査し、太郎塚古墳は径約23m・次郎塚古墳は径約24mの円墳と判明し、いずれも大規模な横穴式石室の内蔵が推定されるとともに、次郎塚古墳では鉄地金銅張鏡板もしくは杏葉の細片が出土した。共伴した須恵器類は、TK209期の新段階にあたる。また昭和33年の太郎塚古墳北西出土馬具は、実際は次郎塚古

墳の南側に開口する横穴式石室の前庭部付近に掻き出されていた遺物の可能性が高いと判断された。

心葉形十字文唐草文透彫鏡板は失われたが、盗難前に武末純一先生が撮影された鮮やかなカラー・スライドがあり、そのうち最も鮮明な画像を選んで写真図版と書き起こし図を作成した。

心葉形十字文透忍冬文鏡板付轡・鏡板 A (図 96-1) : 総高 12.1cm、鏡板全高 8.2cm、最大幅 9.7cm、立間高 1.0cm、立間幅 2.8cm を測る。楕円形平面で下面に僅かな突起が設けて心葉形とし、中央に高さ 1.8cm、幅 2.5cm の楕円形の銜通穴を設けており、裏側の鉄地板側に縦方向銜留の剥離した痕跡がある。残余の部分を十字形に四分割している。上半部の二区画では、上方から中央の銜通穴に垂下し、そこから外側に向かって屈曲し、更に内側に居り返して下縁の水平線に接して跳ね上がる構成をとるが、左右の細部表現は不対称である。これに対し下半部の二区画では、垂直二等分線の下寄りから派生した葉軸から鉤状の子葉を派生させて下縁に接し、外側に向かって大きくカーブし先端が二股となって一部上縁の水平線に接して反転し、先端は下方の葉脈に接している。外縁を縁取るように 43 個の小ぶりの笠鉤を打ち、また楕円形の銜留孔の縁に十字形に四鉤を打つ。立間の突出は低く、そこに幅の狭い長方形の立間孔を設けて舌状の吊鉤金具をかける形をとる。吊鉤金具の中程には僅かなくびれがあり、ここに責金具を伴っていたと考えられる。

心葉形十字文透忍冬文鏡板付轡・鏡板 B (図 96-2) : 総高 10.6cm、鏡板全高 8.0cm、最大幅 10.0cm、立間高 1.0cm、立間幅 3.05cm を測る。楕円形平面で下面に僅かな突起があり、中央に楕円形の銜通穴を設けており、裏側の鉄地板側に縦方向銜留の剥離した痕跡がある。残余の部分を心葉十字形に四分割している。上半部の二区画では、上方から中央の銜通穴に垂下し、そこから外側に向かって屈曲し、更に内側に居り返して下縁の水平線に接して跳ね上がる構成をとるが、左右の細部表現は不対称である。これに対し下半部の二区画では、垂直二等分線の下寄りから派生した葉軸から鉤状の子葉を派生させて下縁に接し、外側に向かって大きくカーブし先端が二股となって一部上縁の水平線に接して反転し、先端は下方の葉脈に接している。外縁を縁取るように 47 個の小ぶりの笠鉤を打ち、また楕円形の銜留孔の縁に十字形に四鉤を打つ。立間の突出は低く、そこに幅の狭い長方形の立間孔を設けて舌状の吊鉤金具をかける形をとる。吊鉤金具の中程には僅かなくびれがあり、ここに責金具を伴っていたと考えられる。

以上、心葉形十字文忍冬文透彫鏡板一对は、写真を見る限り、厚手の銅板に、薄肉彫りで切削屑を出しながら複雑な葉脈の凹凸を削り出し、輪郭に沿って縁部を薄く仕上げた立体的な唐草文を表現する。透彫にあたっては、文様の稜点に錐状の工具で穿孔し、そこから錆びた鉄線と竹ひご弓を用いた糸鋸で切り抜いたと推定される。A・B 鏡板のいずれも、特に下半部はモデルとなったアーカンスを巧みに表現する。しかし文様に毛彫・蹴彫の線條による加飾は認められない。以上、地板鉄板+薄手金銅板+銅製鍍金文様板+銅製鍍金縁金の 4 枚の金属板の縁部に密な穿孔を施し、これらを頭部径 3mm 前後の鍍金銅製の鉤で結合する構造と判断される。これは千賀久氏分類の「薄肉彫り」= a 類に該当し、唐草文の崩れが進み毛彫を省略する点は時期の下降を示す。金銅装馬具破片 (図 96-3) : 次郎塚古墳前庭部出土の鉄地金銅張鏡板付轡もしくは杏葉の細片である。破片が小さすぎて全形が十分理解できないが、中央部に垂直直線状に垂下する部分からみて、退化型式の心葉形三葉文馬具の立間直下部分の残欠と考えられる。但し鏡板では立間直下の鉤を欠くものをしばしば含むため、杏葉の可能性が高く、更に立間上面が舌状をなし、豎に 2 鉤

を打っていた状況が想定される。また垂直に垂下する隆帯の両脇には、本来は上向き鉤状の突起が表現されていたと推定される。全高約9cm、最大幅約9cm程度と推定される。鉄地板＋文様鉄板＋金銅板の3枚からなる1枚被せ技法を用い、径6mm程度の鉄地金銅板被せ技法で製作された笠鉾を僅か4～5点打ち込んで結合する。TK209新相～TK217期に下降する最新段階の型式である。

鞍鞍鉸具（図96-4）：新聞写真に併載された鏡板との対比から全長約11cmの鞍の鞍金具と判断される。全長約6cm、幅5cm弱の瓢形の鉸具の基部に全長5cm強の一脚が付き鞍の木質に打ち込んでいたと考えられる。上記の心葉形三葉文杏葉とセットである可能性が高い。

方形立間付素環鏡板付轡（図96-5）：新聞写真に併載された鏡板との対比から鏡板高約5cm、鏡板幅約6cm、銜幅14.5cm、引手長10.0cm以上の、鉄製方形立間付素環鏡板付轡と判断される。方形の立間がつく環状鏡板部には二連銜の銜外環が連結され、ここに引手内環も連結される。引手端は両方とも端部が欠損しているとみられ、引手壺の形状は不明。

#### 4 馬具の検討

##### （1）心葉形忍冬文の検討

次郎塚A・Bのような心葉形十字文唐草文透彫鏡板の研究は古く後藤守一氏により着手された。

岡安光彦氏は藤ノ木古墳出土馬具に刺激を受け、心葉形鏡板・杏葉を編年（1988、89）した。藤ノ木A組も含め、パルメット・鳳凰文をもつ杏葉と鏡板の多くを舶載品との立場をとる『斑鳩藤ノ木古墳』報告書では、藤ノ木古墳と最も近い馬具が出土した珠城山3号墳が、藤ノ木古墳と同じTK43型式の須恵器を伴う点から、6世紀後半までにおさまるとした（千賀久・鹿野吉則1990）。

小野山節氏は『馬具大鑑』解説で、藤ノ木は第IV期（6世紀中頃～末）にあて、中国北朝産であろうとの見解を示した（小野山1990）。

玉城一枝氏は、パルメット意匠を有する馬具の多くは中国・朝鮮文化圏からの将来品と考えた。またその根拠に、林永周著『韓国文様史』所載の忍冬文透彫鏡板を示し、韓国内の出土地不詳とした（玉城1996）。しかしこの鏡板は、『日本原始美術』収録の福岡県乗場古墳の鏡板轡の写真をトレースしたもので、半島製品説の論拠とならない。

内山敏行氏は、後期第4段階に現れる馬具として唐草文・鳳凰文心葉形鏡板付轡・杏葉を挙げ、「地板と厚手の縁金との間に金銅製の透彫文様板をはさむ。轡は鏡板の外側に二条線引手をつなぐ。文様は唐草・鳳凰・龍がある。文様が極めて精巧な輸入品（珠城山3号・静岡県御子屋原）を後4段階に倭で模倣し始める（一本松1号墳、檀原市妙法寺出土品）。終1段階には急速に小型・疎鈍化して文様が崩れ、消滅する。」「藤ノ木A組は文様板と縁金が一体で、杏葉が棘葉形である点が異なる。埋葬年代からみて後2段階に遡るので、後4段階の輸入品とは直接につながらない可能性がある」と述べる（内山敏行1996）。

千賀久氏は、列島の馬具を新羅系・非新羅系に大別し、藤ノ木セットのような鏡板の外側で二条線引手を伴う心葉形鏡板・杏葉類を新羅系とした。さらに薄肉彫り品(a類)・透彫り品(b類)

に大別し、b類を縁金に鋳を密に巡らすものとその模倣品（b1類）、縁金の要所にのみ鋳を使用するもの（b2類）に細分する。優品が多いa類は、鏡板が唐草文のみであるのに対し、杏葉は双鳳文・龍文・雲文唐草など多様である。初期の遺品では、藤ノ木古墳・珠城山3号墳は杏葉の鳳凰を細かな毛彫りで飾るが、時期の下降とともに毛彫りが省略され、鳳凰文以外の文様も採用されるという流れを読み取る。b類では、b1類の福岡・乗場古墳の鏡板は幅14.2cmと大きく、形体・文様は伝朝鮮半島出土の鏡板に近いとした（これは撤回される）。また熊本・才園古墳の杏葉は縁金・鉤金具とともに鉄地金銅張り製で、室ノ木古墳杏葉のような文様を模倣・改変したとみる。a類とb1類の多鋳打ちを省略したのがb2類に相当する。

a類は時期が下っても金銅製だが、b類は鉄地金銅張りに転換する。b2類の金銅製馬具には、朝鮮半島との中継点にあたる沖ノ島奉納品と壱岐笹塚古墳の副葬品が含まれ、列島内の類例が限られることから舶載品とする。よってa・b類の金銅製馬具は舶載品なのに対し、b1・2類の鉄地金銅張馬具はその模倣品で、出土例が集中する北部九州での模倣生産も想定した（千賀2003）。

桃崎は、飛鳥池遺跡のような倭の工房で、新羅・百濟・高句麗など、外来工人を中核とする国際的なプロジェクトチームがつくられ、中国系モチーフの情報も加味して藤ノ木Aセットが製作された可能性を指摘した（桃崎祐輔2003）。しかしその後、韓国昌寧末屹里遺跡の寺院跡窖藏遺構より心葉形十字文鏡板の縁金が出土したことを重視してa・b1類の金銅製馬具についての国産説を撤回、「新羅の調」として舶載されたとの考えに傾いた。しかし一方、諫早直人氏のように、藤ノ木のような馬具は、朝鮮半島内の製作技法が看取されるものの、異なる地域間の要素が複合するため製作地を特定地域に限定することは難しく、日本列島に渡来した複数地域出身の工人が協業して製作した可能性も依然として高いとして、桃崎の軌道修正を批判した（諫早直人2013）。

次郎塚古墳出土鏡板は、唐草文に彫り崩し技法を用いる点は千賀分類のa類だが、毛彫の加飾がない点は新相を示す。鈴木勉氏は、藤ノ木・珠城山3号墳・神宮徴古館所蔵品・福岡県金隈例が動植物の立体表現に彫崩技法を駆使し、毛彫で線彫りを表現するのに対し、室の木、賤機山、宮地嶽例には立体表現の意図が見られないとして両者に彫金技術上の大きな相違があるとする。次郎塚例は、a類で、子葉の立体表現を志向しつつも、省略が進んだ段階と考えられる。天理参考館には次郎塚タイプの唐草文鏡板がさらに退化少鋳化したようなb1類の鏡板付轡も存在する。

宮地嶽古墳出土遺物群の年代推定にあたり緑色ガラス板に注目したい。小田富士雄氏は、百濟の益山弥勒寺東塔跡付近で出土した「緑釉塊」が本来緑色鉛ガラス板であること、当寺で7世紀前半代の緑釉垂木先瓦が出土していることなどを根拠に、7世紀前半の弥勒寺創建期の所産である可能性を指摘し、宮地嶽古墳のガラス板も7世紀の所産と考えた（小田富士雄1980）。近年、弥勒寺西塔が解体調査され、舍利孔から金製舍利容器、奉納品とともに一辺23cmの緑色ガラス板が出土した。共伴した金製奉安記には、百濟王後の発願で己亥年（639）に舍利を奉安した旨を記す。なお弥勒寺伽藍では武王在位期間中の「丁亥年」（627）と「己丑年」（629）干支銘瓦が多数出土している。よって宮地嶽古墳の緑色鉛ガラスは、百濟武王の治世中に、百濟と倭の正

式な外交関係のもと「百済の調」として舶載された可能性が考えられる。

宮地嶽古墳で出土した新羅製らしい金銅装馬具類（池ノ上宏・花田勝広 2000）も前後する時期が想定され、『日本書紀』に見える 621・622・645・646 等の「新羅の調」「任那の調」にかかる可能性が考えられる。これに若干先行し、TK209 期の所産とみられる次郎塚古墳の馬具類も 600・610・611・621・622 年等の「新羅の調」「任那の調」にかかる舶載品ではないかと考える。

## （2）舶載品説と新羅の調

『前方後円墳集成』編年 10 期前半（MT85～TK43 型式期）は、古墳時代を通じて朝鮮半島系副葬品が最も濃密に認められる舶載品集中期とされ、内山敏行氏はこれを「舶載品ラッシュ」と呼んだ（内山敏行 2003）。末松保和氏は『日本書紀』に見える「新羅の調」・「任那の調」に注目し、倭国に服属していた伽耶は 562 年までに全域が新羅に併呑され、575 年頃までに、新羅王が任那名義の調を貢納する義務を課せられた。しかし履行は不十分で、倭国はその権利をしばしば確認する必要があったと考えた。鈴木英夫氏や山尾幸久氏はこの説を発展させ、新羅が大伽耶を併合する直前の 560 年頃から開始され、新羅が対唐外交を背景に倭国への形式的服属からの離脱をはかる 622 年頃から下火となり、646 年に停止するとした（山尾幸久 1989）。これを踏まえ、藤ノ木古墳等の新羅系馬具の優品は、6 世紀後半に倭と新羅の正式な国交を通じても齎されたとの見解が朴天秀氏（朴天秀 2009）や土生田純之（土生田純之 2010）によって示された。

桃崎も新羅系の鳳凰文・龍文・唐草文等の馬具類のうちに、「新羅の調」「任那の調」にかかる舶載品が含まれていると考え、これらの馬具を保有する古墳の被葬者は、新羅使や任那使の迎接に関わったと考える。最密集地である玄界灘沿岸では船舶で来航した使節の出迎えを首長間で交代で担当したと想定する。一方次郎塚例は、瀬戸内航路への中継を担った可能性が考えられる。

## （3）心葉形三葉文鏡板・杏葉の検討

次郎塚古墳前庭部出土の鉄地金銅張鏡板付轡もしくは杏葉の細片は、退化型式の心葉形三葉文鏡板・杏葉の立聞直下部分の残欠と考えられ、垂直に垂下する隆帯の両脇に上向き鉤状の突起があったと推定される。行橋市福島家コレクション、広島県安芸高田市高宮町上野部古墳、岡山県津山市二宮大成 I 区古墳、岐阜県古川町信包八幡神社古墳、静岡県池田山 2 号墳、群馬県上滝古墳などに近い形状と時期であれば、TK209～TK217 期に下降する最新段階の型式とみられる。

退化型式の三葉文杏葉について、最近、静岡県長泉町原分古墳の考察で検討が行われ、文様要素が有鉤系列と無鉤系列に、製作技法が文様板別被・文様板一体被に大別されることを指摘し、TK209 型式期～飛鳥 I 期後半にかけて使用されたとする（静岡県埋文 2008）。

こうした新式の心葉形三葉文鏡板・杏葉は、鏡板・杏葉が同形同法量同意匠の「ともづくり」と呼ばれる金銅製馬具の 1 種である。その出現を考える上で重要な資料が、奈良県広陵町の牧野古墳（円墳・径 60 m）で、TK209 型式古段階の須恵器とともに、心葉形三葉文鏡板・杏葉 2 セットが出土し、各々文様板別被・文様板一枚被せで製作技法が異なっていた。

牧野古墳は 587～600 年頃没した押坂彦人大兄皇子墓説が有力だが、石室内には複数の石棺が想定される。押坂彦人大兄は敏達天皇（位 572-585）皇子で、息子は田村皇子＝舒明天皇（位 629-641）である。忍坂部をはじめとする押坂彦人大兄皇子伝来の私領は「皇祖大兄

御名入部」と呼ばれ、息子の舒明から孫の中大兄皇子（後の天智天皇）へと引き継がれ、大化の改新後（646）に国家に返納されたと考えられる。彦人大兄の系統が蘇我氏や上宮王家に対抗して舒明即位から大化の改新の実現を可能にしたのは、こうした財政的裏付けがあったからとする見方もある。よって忍坂部（押坂部）が、心葉形三葉文鏡板・杏葉の担い手の候補となる。

敏達天皇と息長広姫の間に556年頃に彦人大兄皇子が誕生すると押坂部が設置されその養育にあたった。押坂宮に各地の押坂部の村から集まった貢納物や近侍者の管理に代々あたった氏族が押坂部造であったとする（山尾幸久1989）。直木孝次郎氏は山背大兄王の斑鳩宮を蘇我入鹿勢が攻囲した際、「数十舎人」が防戦したとされる記事を踏まえ、惣領的氏族をもたない舎人氏族が直接天皇・皇族に隷属し、皇子に仕えて、軍事的任務に服しその伝統によって、門号にウジの名を残したと述べる（直木孝次郎1972）。『日本書紀』敏達紀十二年（583）条にみえる、大伴金村に仕えた、「火葦北国造、刑部鞞部阿利斯登」は、その子日羅が百濟宮廷に第二官の達率として仕えており、刑部の名代化には百濟宮廷制度の影響も考えられる。

また『日本書紀』推古天皇十六年（608）八月条には、額田部比羅夫が隋使裴世清を海柘榴市に迎えた際、75騎の飾馬で出迎えた。推古天皇十八年（610）十月にも額田部比羅夫は新羅の客を出迎えたが、こうした場面では、参集する飾馬の馬装統一が図られたことが当然予測される。

以上、ともづくりの金銅装馬具類は、個別形式の遺例が数十点程度で、6世紀後半～末に出現したのち数段階の型式変遷を経て7世紀中葉に消滅する点から、壬生部・額田部・刑部などの名代部の成立と密接に関わって出現し、皇子宮に勤仕する舎人の装備として使用され、斑鳩宮の滅亡（642）や大化改新後の名代部の廃止（646）で製作が停止したと考えられる。

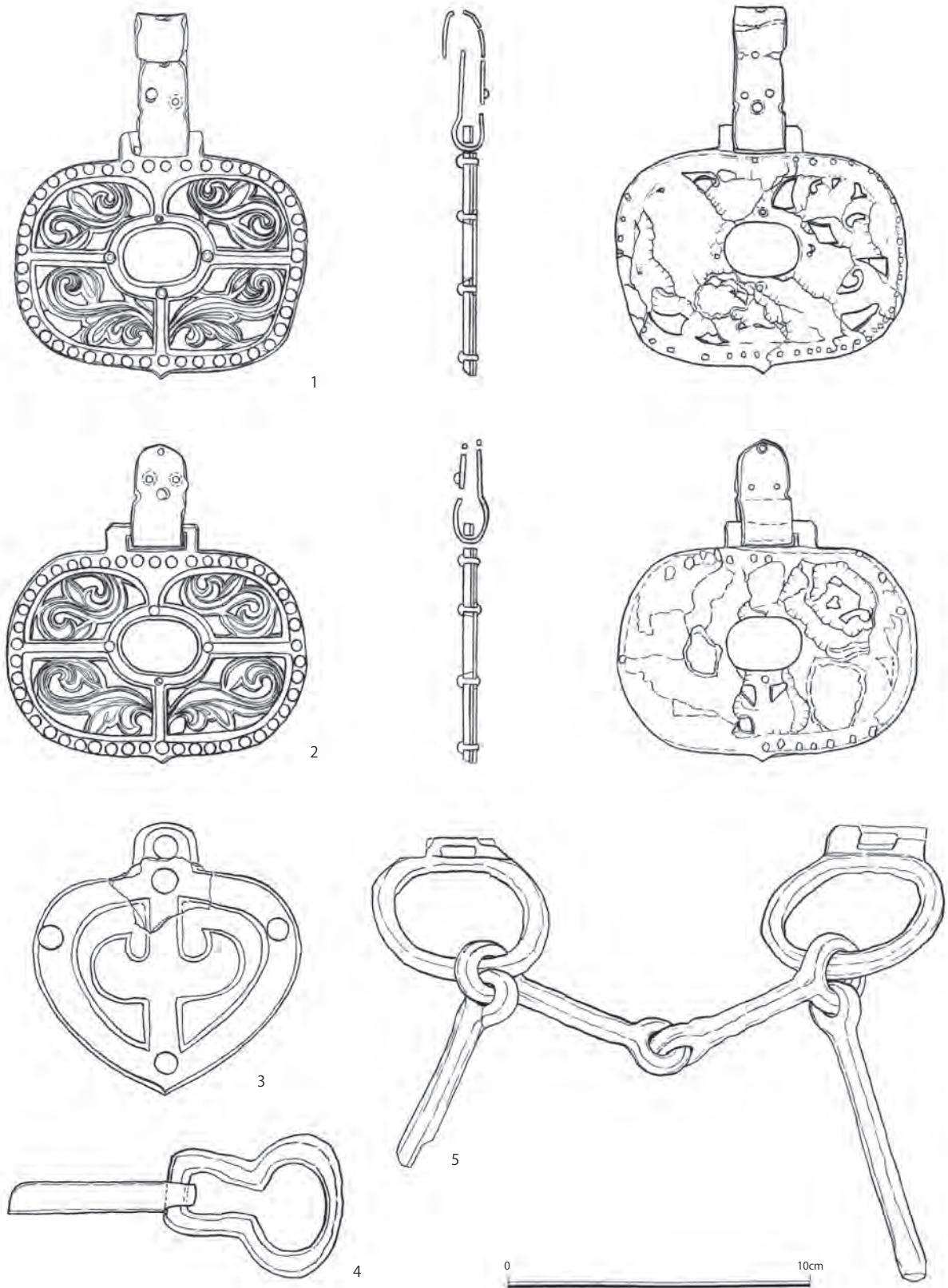
退化型式の三葉文鏡板・杏葉出土古墳と刑部の分布には対応関係が認められ、岡山県津山市松原二宮大成古墳の所在する津山盆地周辺では、岡山県真庭市佐波良（美作郡大庭郡）の形部神社がある。広島県安芸高田市高宮町の上野部古墳は三次盆地に近い備後国三谿郡に所在し、同郡には刑部郷がある。福岡県北九州市日明一本松古墳でも、心葉形三葉文鏡板・杏葉が出土したが、北九州市朽網南塚遺跡出土木簡には、「(企救) 郡の圖生刑部忍国と(国圖) 生調勝男口」を派遣し土地争いを調停した記事がある。福岡県粕屋郡宇美町の岩永浦1号墳でも、心葉形三葉文鏡板・杏葉が出土した。大野城市牛頸本堂遺跡7次調査で「押坂」刻書須恵器（7世紀）が出土した。

よって実相寺古墳群の築造集団からは、刑部の舎人を輩出した可能性が考えられる。

本稿をなすにあたり、武末純一先生より馬具写真を、秦広之氏より関連資料を提供いただき、また宮代栄一氏からは、件の鏡板について種々ご教示賜った。記して御礼申し上げたい。

#### 主要参考文献（報告書は割愛した）

- 池ノ上宏・花田勝広 2000 「筑紫・宮地嶽古墳の再検討」『考古学雑誌』第85巻 第1号 pp. 19 - 56.  
諫早直人 2013 「馬具の舶載と模倣」『技術と交流の考古学』岡内三眞編 同成社 pp.348-359.  
内山敏行 1996 「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『黄金に魅せられた倭人たち』  
島根県八雲立つ風土記の丘資料館 pp.42-47.  
内山敏行 2003 「古墳時代後期の諸段階と甲冑・馬具」『後期古墳の諸段階』第8回東北・関東前方後円墳シンポジウム p.43-58.  
小田富士雄 1980 「筑前・宮地嶽古墳の板ガラス」『鏡山猛先生古稀記念古文化論叢』同書刊行会 太宰府 pp.537-552  
鈴木英夫 1983 「『任那の調』の起源と性格」『国史学』119 国史学会 pp.23-49.  
玉城一枝 1987 「中国・朝鮮系の文様をもつ馬具について—杏葉・鏡板を中心として—」  
『同志社大学考古学シリーズⅢ 考古学と地域文化』  
千賀久 2003 「日本出土の「新羅系」馬装具の系譜」  
『東アジアと日本の考古学』Ⅲ交流と交易 同成社 pp.101-127  
土生田純之 2010 「古墳時代後期における西毛（群馬県西部）の渡来系文物」  
『国立歴史民俗博物館研究報告』第158集 pp.181-195.  
八賀晋 1995 「飛騨の古式古墳について」『飛騨と考古学』飛騨考古学会 pp.219-231.  
宮代栄一 2012 「大分県出土の古墳時代馬具の検討」『平成24年度九州考古学会総会 研究発表資料集』pp.51 - 60.  
桃崎祐輔 2002 「九州地方における騎馬文化の特質と軍事的背景」『考古学ジャーナル』496 pp.15-19.  
桃崎祐輔 2014 「馬具からみた九州の地域間交流—舶載馬具と国産規格品馬具に着目して—」  
『九州前方後円墳研究会 古墳時代の地域間交流2』pp.188-229.  
山尾幸久 1989 「『任那の調』の実態と性質」『古代の日朝関係』塙選書93 塙書房



1 次郎塚鏡板 A トレース図 (武末純一先生撮影写真よりトレース。断面図は概念的に作図) 2 次郎塚鏡板 B トレース図 (武末純一先生撮影写真よりトレース。断面図は概念的に作図) 3 次郎塚心葉形変形三葉文杏葉推定図 (別府大学作図の破片実測図より推定復元) 4 次郎塚鞍鞍鉸具トレース図 (大分合同新聞昭和 33 年 6 月 8 日掲載写真よりトレース) 5 次郎塚方形立開付素環轡 (大分合同新聞昭和 33 年 6 月 8 日掲載写真よりトレース)

第 96 図 実相寺古墳群次郎塚古墳出土馬具トレース図・復元想定図





実相寺古墳群次郎塚古墳昭和 33 年出土品  
唐草文鏡板 A (表面)



実相寺古墳群次郎塚古墳昭和 33 年出土品  
唐草文鏡板 A (裏面)



実相寺古墳群次郎塚古墳昭和 33 年出土品  
唐草文鏡板 B (表面)



実相寺古墳群次郎塚古墳昭和 33 年出土品  
唐草文鏡板 B (裏面)

写真 11 実相寺古墳群次郎塚古墳出土馬具

## 第5章 総括

別府において6世紀後葉から7世紀初頭にかけて大分県内最大規模の大型横穴式石室墳を構築する実相寺古墳群と鬼ノ岩屋古墳群を、鬼ノ岩屋・実相寺古墳群と総称し、発掘調査から得られた成果をもとに検討を行い総括調査報告書のまとめとしたい。

### 第1節 鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の調査成果

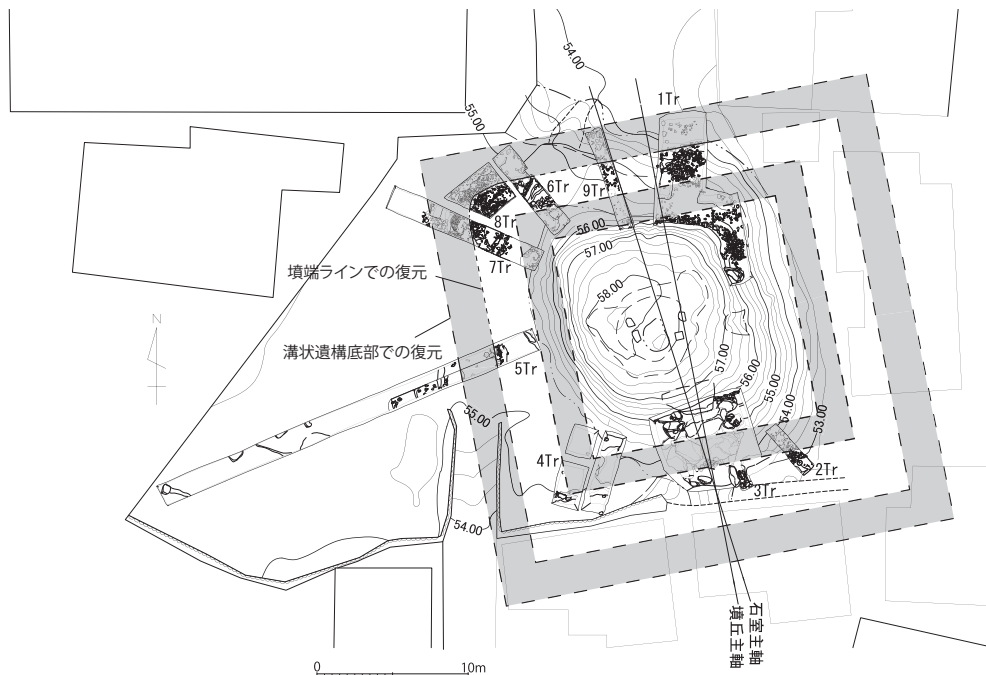
#### 1 鷹塚古墳 (第97図)

鷹塚古墳は、平成20(2008)年度～23(2011)年度にかけて墳丘の周囲に9箇所のトレンチを設定して調査が行われた。この古墳は、従来円墳と想定されてきたが、5・7トレンチでは墳端と考えられる南北方向の列石が確認され、墳丘の北西部に設定された6・7・8トレンチで確認された墳端の列石が隅丸状のコーナーを呈していることから、鷹塚古墳が方墳であることが確認された。5トレンチでは列石の外側に溝状遺構が確認され、尾根から墳丘基底を方形に削り出すための遺構であると考えられる。

墳丘規模については、現状においては1つのコーナーと2つの直線しか確認されていないため推測の域を出ないが、確認された墳端の列石を結び、これを墳丘主軸で反転させると1辺25m程度の方墳になるものと考えられる。

墳丘構造は2段築成になるものと考えられ、墳丘の北側に設定した9トレンチにおいて2列の列石が確認され、外側(北側)の列石は墳丘端部の列石、内側(南側)の列石は段築の基底部の列石と考えられる。また、1・9トレンチでは1段目と2段目の間の平坦面も確認されテラスと考えられる。

横穴式石室は羨道のみ調査が行われているが、調査により確認できた羨道規模は、少なくとも



第97図 鷹塚古墳 (1/500)

長さ 6.5m、幅 2.5m、入口側の高さ 2.2m、玄門側の高さ 1.6m を測り、県内最大規模を有する羨道部であることが確認された。石室主軸は墳丘主軸より 6.5°西側に振れている。

鷹塚古墳の築造時期については、1 トレンチで出土した一括遺物から TK209 型式の古相と考えられる。

## 2 太郎塚古墳 (第 98 図)

太郎塚古墳では、3・7・9・11 トレンチで周溝が確認され、径約 23 m の円墳であることが判明した。7 トレンチの周溝底部からは TK43～209 型式期の須恵器大甕が出土している。主体部は南東方向に開口部を持つ横穴式石室と考えられるが、墳頂部付近の地中レーダー (GPR) 探査では反射に強弱が認められ、石室であれば改変を受けている可能性が高い。

築造時期については、出土須恵器から TK43 型式期と考えられる。

## 3 次郎塚古墳 (第 98 図)

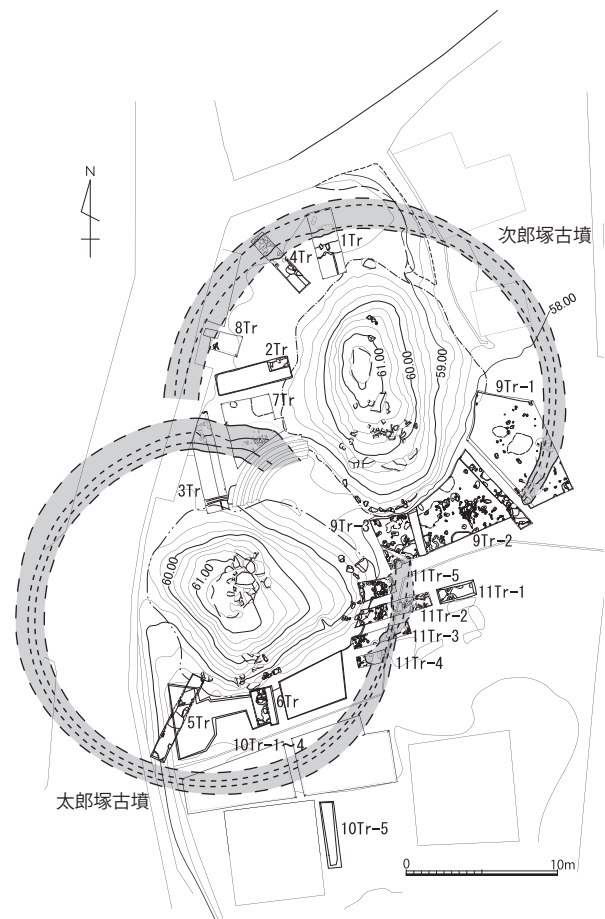
次郎塚古墳では、1・4・9 トレンチで周溝が確認され、径約 24m の円墳であることが判明した。9 トレンチは石室の開口部と考えられる場所に設定され TK43～209 型式期の須恵器が出土した。

主体部の調査は行われていないが、鷹塚古墳や太郎塚古墳と同様に南東方向に開口部を持つ横穴式石室墳であると考えられる。

築造時期については、出土須恵器から TK43 型式期と考えられる。

次郎塚古墳の墳丘南東側の開口部付近では、平成 20 年 (2008) 度の調査では国内で生産されたと考えられる馬具 (心葉形三葉文鏡板・杏葉) が出土している。また、昭和 33 年 (1958) には新羅製と考えられる馬具 (心葉形十字文透忍冬文鏡板付轡・鏡板) も出土している。この馬具は、TK209 型式期頃のものと考えられており、古墳の築造が TK43 型式期と想定されることから、追葬時に副葬されたものと考えられる。これら複数の馬具は、初葬された人物の子弟が都へ上番し活動する中で入手したものと考えられており (桃崎 2016)、実相寺古墳群と畿内政権との密接な結び付きをうかがわせるものである。

また、太郎塚古墳と次郎塚古墳は、出土遺物から TK43 型式期に立て続けに築造され、確認調査の結果、ほぼ同時期の築造と考えられるが、太郎塚古墳が若干先行する可能性が高いと考えられる。



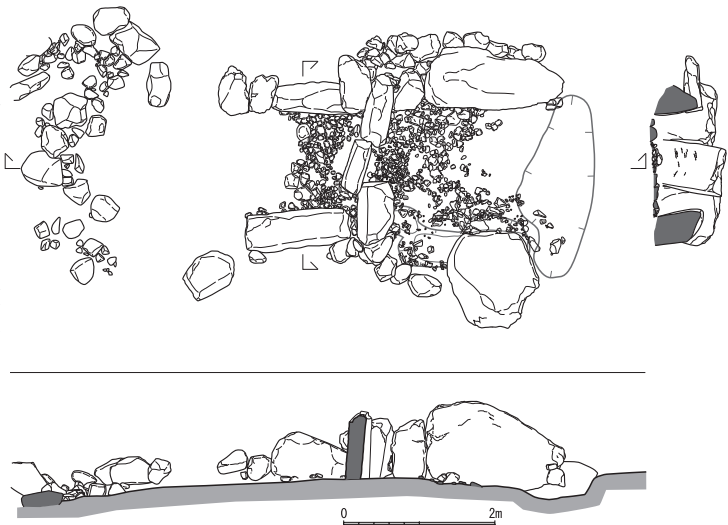
第 98 図 太郎塚古墳・次郎塚古墳 (1/500)

#### 4 天神畑古墳（第99図）

天神畑古墳は、平成2年に行われた発掘調査において発見された古墳である。墳丘はすでに造成により削平されていたが、主体部である横穴式石室の基底部が残存し調査が行われた。

玄室規模は奥壁が石室内側に倒れており正確な規模は不明であるが、奥壁の抜取痕から長さ2.0m、幅1.6mを測る小型の長方形プランであると推定され、玄室及び羨道の床面には、小礫が敷き詰められている。

築造時期については、出土須恵器からTK209型式新相と考えられる。



第99図 天神畑古墳(1/100)

#### 5 鬼ノ岩屋1号墳（第100図）

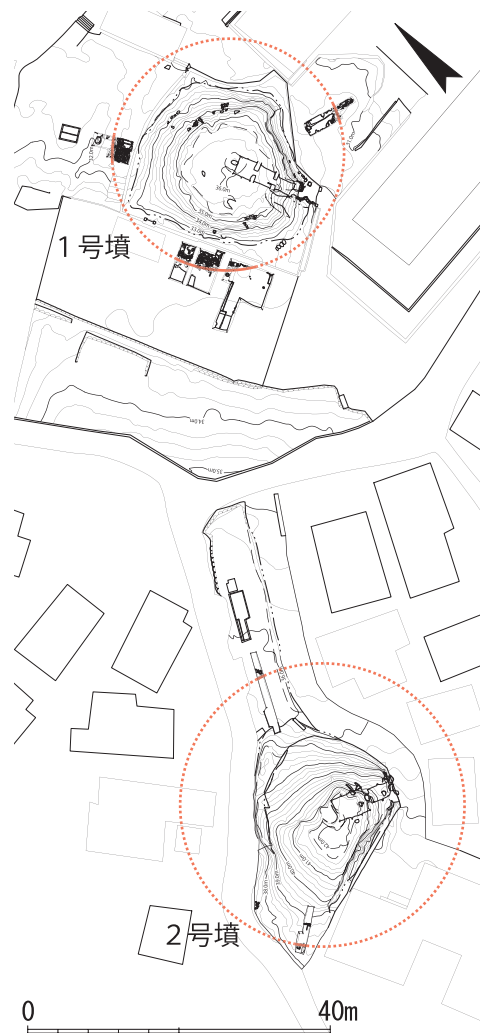
鬼ノ岩屋1号墳の調査では、第1・3・4・5調査区において墳端を確認することができ、直径約31mの円墳であることが確認された。各調査区より周溝は確認されておらず、周溝は構築されなかった可能性が高いものと考えられる。遺物は後世の攪乱を受けているため良好な出土状況ではないが、墳丘北側の第3調査区からTK209型式期の須恵器が出土している。主体部は複室構造の横穴式石室で前室側壁や玄門に装飾を持つ。

築造時期については、第3調査区出土遺物及び石室構造からTK209型式期と考えられる。

#### 6 鬼ノ岩屋2号墳（第100図）

鬼ノ岩屋2号墳の調査では、墳丘の北側及び南東側に設定した調査区から墳端と考えられる根石を確認した。第1・2トレンチで確認された根石を基に墳丘を復元すると径約37.5mの円墳を想定することができ、中心点は石室奥壁上に位置する。主体部は単室構造の横穴式石室出で玄室側壁などに装飾を持つ、玄室規模は長さ4.1m幅、3.2mと県内最大規模を誇る。

築造時期については、石室構造からTK43型式期と考えられている。



第100図 鬼ノ岩屋古墳群(1/1000)

## 第2節 豊後における鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の位置付け

鬼ノ岩屋・実相寺古墳群が所在する別府地区は、大型前方後円墳を築造する国東半島東部と大分や海部の勢力に挟まれ、古墳時代前期から中期にかけて首長墓墳の築造が認められない地域である（第101図）。以下、田中裕介氏の論考に依拠しながら豊後における別府地区の古墳時代の動向を概観する（註1）。なお、田中氏は、豊前東部及び豊後を、3つの地域に区分し、第1地帯を宇佐地域から西国東地域、第2地帯を東国東地域から速見地域を経て豊後南部に連なる地帯、第3地帯を日田・玖珠地域としている（田中2010）。

### 1 古墳時代前期から中期

別府地区を含む第2地帯は、東国東において「纏向型」の系譜をひく前方後円墳である下原古墳（23m）が築造され、同地域では前期前葉に墳長120mの前方後円墳である小熊山古墳が出現する。前期末には海部地域の大在地区において墳長120mの前方後円墳である亀塚古墳が築造される。東国東と海部という豊後最大の前方後円墳を輩出する地域の間であって別府地区には、首長墓は造られなかったものと考えられる。

中期になると大在地区に亀塚古墳の後継となる墳墓は見出せず、国東半島南端の御塔山古墳（造出付円墳：80m）と新たに臼杵地区に臼塚古墳（前方後円墳：97m）が出現する。

別府南部の朝見神社石棺墓群で確認された石棺群からは三角板革綴短甲が出土し、中期前葉に位置付けられている（西嶋2014）。広域盟主墳と考えられる臼塚古墳を中心に海部地域においてこの時期同様の短甲の出土が集中することから、朝見神社石棺墓群は臼塚古墳などの広域盟主層と関連する勢力の墓域と考えられる。中期中葉～後葉には、実相寺1号石棺を保持した古墳が築造された可能性があるが、現状では様相は不明である。中期後葉～末には実相寺古墳群から北西（山手側）300mの位置にある春木芳元遺跡古寺地区において、鉄剣・鉄刀・鉄斧を保持する春木芳元1号石棺が出現し、別府地区に初めて出現した小首長墓になる可能性があると指摘されている（清水2012）。

### 2 古墳時代後期から終末期

別府地区を含む第2地域は、中期末の前方後円墳の築造を最後に前方後円墳の築造が停止する。また、後期の前半段階には有力な首長墓は確認されていない。

後期の後半段階になるとそれまで古墳築造の空白地帯であった別府地区において鬼ノ岩屋2号墳が出現する。径37.5m前後の大型円墳と考えられるこの古墳の玄室面積は12.87㎡を測り、同時代の豊後において最大規模の玄室面積を誇る。日田地区のガランドヤ1号墳がこれに続く（図103）。鬼ノ岩屋2号墳・ガランドヤ1号墳に次ぐ規模のものは玖珠地区の鬼ヶ城古墳で、9㎡前後の規模となり玄室規模の開きは大きい。なお、鬼ノ岩屋2号墳の玄室面積の規模は、豊前の甲塚方墳・橘塚古墳・綾塚古墳と同様の規模となる。

鬼ノ岩屋2号墳の出現を契機として、別府地区では、立て続けに古墳の築造が行われる。鬼ノ岩屋古墳群では、TK209型式期に鬼ノ岩屋1号墳が築造される。実相寺古墳群では、TK43型式



に太郎塚古墳・次郎塚古墳が築造され、TK209 型式期には約 25m の方墳である鷹塚古墳が築造される。この鷹塚古墳は、玄室規模は不明なものの変道幅 2.5m を測り、鬼ノ岩屋 2 号墳を凌ぐ規模の横穴式石室墳となる可能性が高い。TK209 型式期の新しい段階になると天神畑 1 号墳が築造される。実相寺古代遺跡公園に移設されている実相寺 2 号石棺は、その特徴から TK217 型式期のものとされ（註 2）（田中 2016）、実相寺古墳群における古墳築造は、TK217 型式期まで行われていた可能性が高い。

古墳時代後期後半から終末期にかけての豊後中部～南部（第 2 地帯）は、前期から中期にかけて前方後円墳を築造し首長層を輩出してきた東国東地域や海部地域には有力な首長墳は造られず、三重や竹田などの豊後南部地域でも目立った古墳は造られなくなり、別府地区の鬼ノ岩屋・実相寺古墳群が最大の勢力となる。別府地区と同様な動きを見せるのが大分地区で、後期後半から終末期にかけて千代丸古墳・弘法穴古墳・丑殿古墳などの横穴式石室墳が造られる。7 世紀中葉には大分君恵尺の墳墓と想定されている古宮古墳が築造される。大分地区の古墳群は別府地区の古墳群と直線距離にして約 13km と隔絶した距離にあるとは言えず、何らかの関係性を持ちながら存在していた可能性は高い。学史上、大分地区の千代丸古墳・弘法穴古墳・丑殿古墳は、大分君恵尺の墳墓とされる古宮古墳の存在から『国造本紀』に記される「大分国造」の墳墓と目されている。別府地区を含む速見郡は大分国造の領域と考えられているが（西別府 1986）、同領域内の別府地区と大分地区の古墳群を玄室規模で比較すると TK43 型式期では鬼ノ岩屋 2 号墳、TK209 型式期では鷹塚古墳と豊後最大規模の横穴式石室墳を輩出する鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の優位性を認めることができる。田中氏は鬼ノ岩屋 2 号墳と鷹塚古墳を豊後中部～南部（第 2 地帯）の広域盟主墳となる国造級の墳墓と評価し、7 世紀中葉になって古宮古墳が出現し、大分地区の首長墳に盟主首長が移動した可能性を指摘している（田中 2010・田中 2016）。

第 102 図 豊後における玄室規模の比較

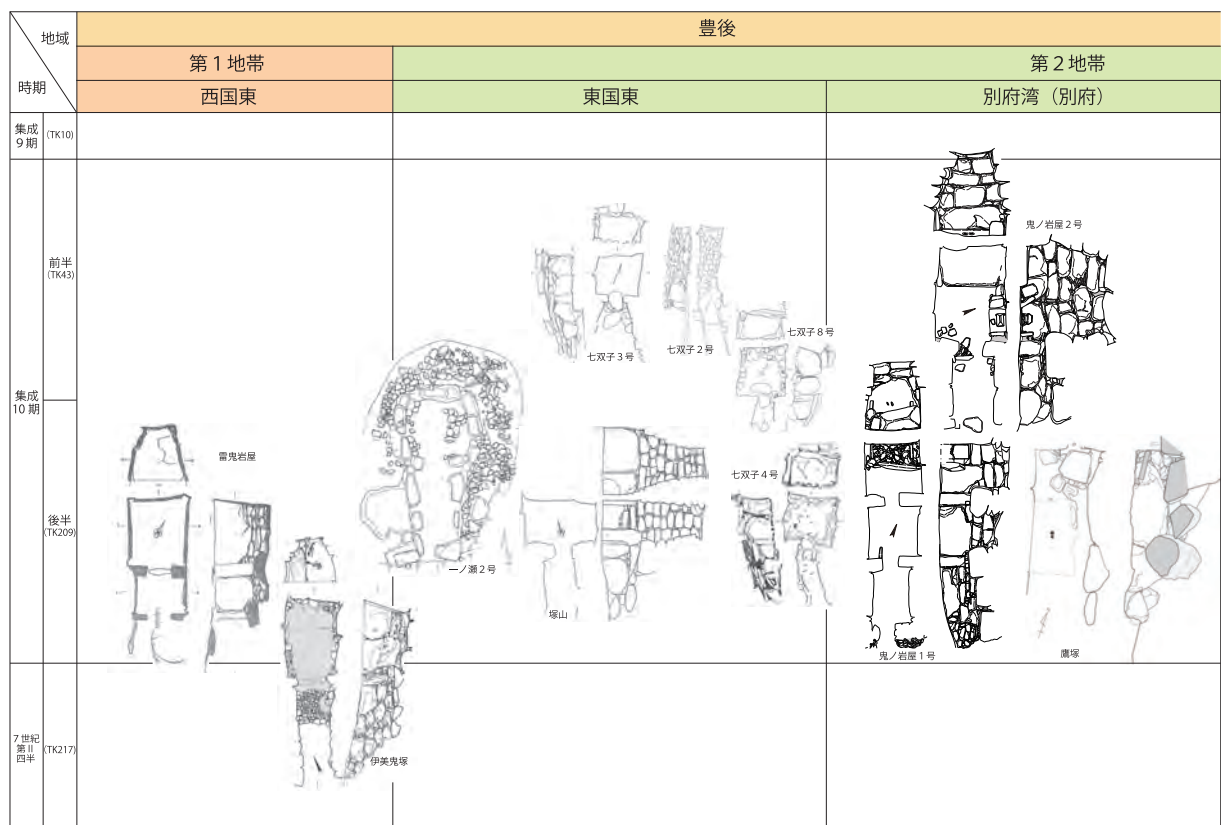
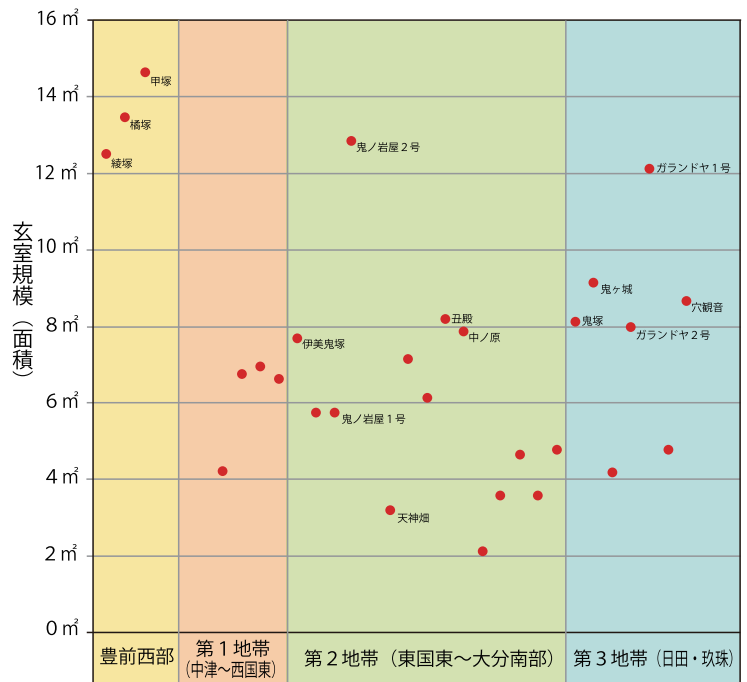


表 11 玄室規模の比較

古墳名称	所在地	時期	玄室長さ (m)	玄室幅 (m)	面積 (m <sup>2</sup> )
綾塚	勝山町中黒田	10期	3.80	3.30	12.54
橋塚	勝山町上黒田	10期	4.15	3.25	13.49
甲塚	豊津町国作	TK43	4.13	3.55	14.66
倉迫二ツ塚1号	中津市三光森山	TK43	2.05	2.05	4.20
相原1号	中津市相原	TK43~TK209	3.38	2.00	6.76
雷鬼岩屋	豊後高田市美和	TK209~TK217	2.90	2.40	6.96
一ノ瀬2号	国東市安岐町	TK209	2.55	2.60	6.63
伊美鬼塚	国東市国見町	TK217	3.35	2.30	7.71
塚山	国東町安岐町	TK209	1.80	3.20	5.76
鬼ノ岩屋1号	別府市北石垣	TK209	2.30	2.50	5.75
鬼ノ岩屋2号	別府市北石垣	TK43	4.15	3.10	12.87
天神畑1号	別府市北石垣	TK209	2.00	1.60	3.20
千代丸	大分市宮苑	TK209	3.75	1.90	7.13
弘法穴	大分市永興	TK209	3.13	1.98	6.20
丑殿	大分市箕菜	TK209	3.10	2.65	8.22
中ノ原	佐賀関町関	TK209	2.78	2.85	7.92
七双子2号	杵築市本庄	TK43	2.15	1.00	2.15
七双子3号	杵築市本庄	TK43	1.80	2.00	3.60
七双子8号	杵築市本庄	TK43	2.20	2.10	4.62
七双子5号	杵築市本庄	TK209	1.80	2.00	3.60
七双子4号	杵築市本庄	TK209	2.10	2.28	4.79
鬼塚	玖珠町小田	TK43~TK209	4.05	2.00	8.10
鬼ヶ城	玖珠町帆足	TK209	3.00	3.05	9.15
有田塚ヶ原	日田市有田	TK43	2.15	1.95	4.19
ガランドヤ2号	日田市石井	TK43	3.15	2.52	7.94
ガランドヤ1号	日田市石井	TK209	4.18	2.90	12.12
法恩寺山3号	日田市日高	TK209	2.45	1.95	4.78
穴観音	日田市内河野	TK209~TK217	3.10	2.80	8.68

※玄室長さ・幅の数値は、最大値と最小値の平均値



第 103 図 玄室規模散布図

豊後			地域
第2地帯		第3地帯	
大分	海部・直入竹田	筑後川上流域	
			時期
			集成9期
			前半 (TK43)
			集成10期
			後半 (TK209)
			7世紀 第II 四半 (TK217)



### 第3節 東九州における首長墓の動向と鬼ノ岩屋・実相寺古墳群

豊後に隣接する豊前と日向の古墳時代後期後半から終末期（TK43～TK217型式期）の首長墓の動向を確認し、それぞれの地域で想定されている古墳築造の社会的な背景や被葬者像についても併せて確認する。

#### 1 豊前地域

豊前地域ではTK43型式期に最後の前方後円墳が築造されたのち、今川流域ではTK43からTK209型式期に方墳の甲塚方墳（36m×46m）が築造され、円墳の彦徳甲塚古墳（径29m）がこれに後続する。長狭川流域ではTK209型式期に方墳の橘塚古墳（38m×41m）が築造され、円墳の綾塚古墳（径41m）が後続して築造される。甲塚方墳は、同時代の天皇陵とも比較しても遜色ない規模を誇り、また、畿内の天皇陵や中央豪族によって採用された墳丘形態である方墳が地方へと拡散する事象では最も早い事例と考えられている（山口2009）。豊前地域はこれら有力首長墓のほかに竹並横穴墓群など1000基を超える横穴群も築造されており、宇野愼敏氏は豊前地域における群集墳を、在地の有力家族層だけでは考えられず「ヤマト政権によって北部九州および西日本から集められた軍事集団に関わる墳墓群」とし、この大規模軍事集団を統括する軍事的指揮権を有する将軍的な役割を担う人物が埋葬された古墳として甲塚方墳や橘塚古墳などの方墳が築かれたと指摘している（宇野2010）。

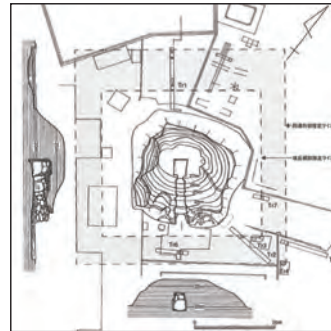
#### 2 日向地域

日向での前方後円墳停止は、TK43型式期に始まりTK209型式期にはほぼ築造は停止し、その後の首長墳は大型円墳や方墳へ移行する（今塩屋2009）。大型円墳は西都原古墳群206号墳（鬼の窟古墳）、方墳は新田原44号墳、新田原138号墳、常心塚古墳、高崎塚原20号墳などがある。今塩屋毅行氏は「日向の古墳時代終末期首長墳は、TK209型式併行期に大型円墳、TK217型式併行期に大型方墳を採用する」として、大型円墳が直径20～40m超と個体差があるのに対し、方墳は1辺25m前後と墳丘規模に規格性があり、なんらかの築造規範が存在していたものと指摘されている（今塩屋2009）。日向における方墳について下原幸裕氏は、「日向国造」や「児湯県主」などの勢力基盤の一ツ瀬川流域に集中する傾向があることから畿内政権と密接に結びついた在地有力豪族の墳墓と考えられている。（下原2009）。

東九州における前方後円墳築造停止は、その地域内における差異はあるものの概ねTK43型式期前後とされ、TK209型式期には首長墓としては大型円墳や方墳へ移行する。鬼ノ岩屋・実相寺古墳群を含む豊後中部～南部は、古墳時代中期末に前方後円墳の築造を停止し（田中2010）、この傾向は日向における五ヶ瀬川流域や肝属平野の動向に類似する。また、方墳の規模については、豊前ではTK43～209型式期の甲塚方墳（36m×46m）とTK209型式期の橘塚古墳（37m×39m）が突出し、他の方墳は一辺10～15mと小規模なのに対し、日向では一辺25m前後と規格性があり、別府地区の鷹塚古墳は一辺25m前後の方墳になるものと想定されており、日向における方墳の規格に類似する。



甲塚方墳  
(福岡県京都郡みやこ町)



橋塚古墳  
(福岡県京都郡みやこ町)



常心塚古墳  
(宮崎県西都市)

第 104 図 関連遺跡

#### 第 4 節 鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の歴史的意義

別府の扇状地は、石垣原と呼称されるように地震や大雨による土石流の堆積により田畑の土地はやせて農地に恵まれたとはいえない(入江 1985)。必ずしも平坦地が多いとは言えない別府の扇状地において、古墳時代後期から終末期にかけて豊後最大の古墳群が築造された背景には農業生産力以外の要因も視野に入れ検討する必要がある。

別府地区における古墳時代後期から終末期の古墳群の特徴は、扇状地の北部を流れる春木川を挟んで約 1 km の距離に 2 つの古墳群が存在することである。春木川の北には鬼ノ岩屋古墳群、春木川の南には実相寺古墳群が存在し、2 つの古墳群が併存するような形で大型横穴式石室墳を築造する。

TK43 型式期では、春木川の北側にある鬼ノ岩屋古墳群において、鬼ノ岩屋 2 号墳が築造される。鬼ノ岩屋 2 号墳は単室構造の横穴式石室を持つ径約 37.5m の大型円墳であり、玄室高が 3.7



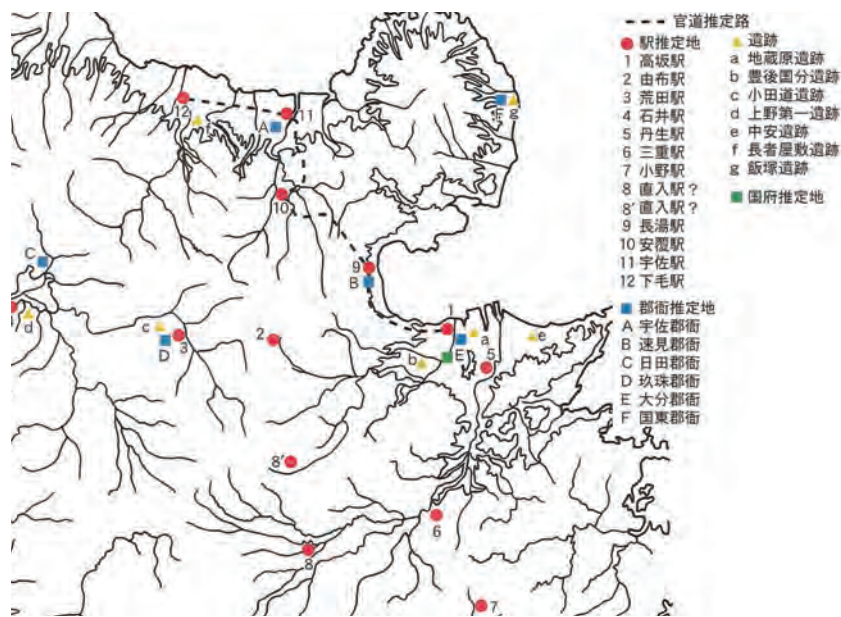
第 105 図 鬼ノ岩屋・実相寺古墳群

mを測る高天井や玄室から羨道の基底石（腰石）に横目地を揃える特徴などが、熊本県氷川町の大野窟古墳を指標とする八代型石室に類似すると指摘され（小嶋 2015）、玄室内部には同心円文や蕨手状の装飾が描かれるなど、筑後地域との繋がりも指摘されている（清水 2003）。また、古墳時代後期後半における豊後最大の玄室規模を誇る大型円墳であることから、国造級の墳墓と評価されている（田中 2016）。

同じ時期、春木川の南側に所在する実相寺古墳群では、太郎塚古墳と次郎塚古墳が築造されている。太郎塚古墳は径約 23m、次郎塚古墳は径約 24m のともに円墳で、隣接するこの 2 つの古墳は時期を違わずに造られたと考えられている。

TK209 型式期になると鬼ノ岩屋古墳群では、鬼ノ岩屋 1 号墳が築造され、豊後中部～南部では唯一の複室構造の横穴式石室を持ち、玄室には石屋形を備える。鬼ノ岩屋 1 号墳の石室構造は熊本県阿蘇市の上御倉古墳と類似し、石室内部には先行する鬼ノ岩屋 2 号墳と同様に前室側面及び玄門に連続山形文などの装飾が描かれる。

同じ時期、実相寺古墳群では鷹塚古墳が築造される。鷹塚古墳は発掘調査の結果、1 辺約 25m 方墳であると確認され、石室は羨道部のみの調査に留まっているものの、その幅は 2.5m を測り、鬼ノ岩屋 2 号墳の羨道幅 1.9m を凌ぐ規模となることが判明した。方墳の規模に関しては、九州では、豊前の甲塚方墳や橘塚古墳に次ぐ規模で、日向の常心塚古墳などと同規模となる（上野 2016）。また、鬼ノ岩屋 2 号墳に続く時期の国造級の墳墓と評価されている（田中 2016）。この鷹塚古墳に後続して TK209 型式期の新しい時期には、天神畑 1 号墳が築造される。また、次郎塚古墳の石室開口部付近からは「新羅の調」「任那の調」にかかる舶載品と考えられる心葉形十字文透忍冬文鏡板付轡や国内で製造されたと考えられる心葉形三葉文鏡板・杏葉など複数の馬具が出土しており、心葉形十字文透忍冬文鏡板付轡が TK209 型式期、心葉形変形三葉文杏葉が TK209 ～ TK217 型式期に位置付けられている。これら複数の馬具の存在から、次郎塚古墳に初葬された人物の子弟が、刑部の舎人や瀬戸内航路への中継を担った可能性が指摘され（桃崎



第 106 図 駅路図(飯沼 2003 より)

2016)、畿内政権との密接な結び付きをうかがわせる。

このほか実相寺古墳群では、出土地不明ではあるが、畿内系家型石棺である実相寺2号石棺が出土している。この家型石棺はTK217型式期のものと考えられ、田中裕介氏の分析によると棺蓋長200～240cm、幅70～140cmと推定されており、大分市丑殿古墳の家型石棺（長さ230cm、幅100cm）に近い値になると想定されている。これは、福岡県みやこ町綾塚古墳の家型石棺（長さ252cm、幅144cm）に比べて小さく、この規模の違いを田中氏は畿内王権中枢からみた政治的位置が反映されたものと想定し、豊後の国造級の古墳である鬼ノ岩屋2号墳と鷹塚古墳の直接の後継墳でありながら、その石棺からみた地位は国造級とはみなしがたい古墳へと変化している可能性が指摘され、TK217型式期以降、国造的地位は大分川流域の勢力へと移動したものと考えられる（田中2016）。

このように別府地区では、TK43型式期には鬼ノ岩屋2号墳と太郎塚古墳・次郎塚古墳が造られ、TK209型式期には鬼ノ岩屋1号墳と鷹塚古墳・天神畑1号墳が造られるなど、春木川を挟んで同時期に併存するように、肥後・筑後の要素を持つ石室が造られる鬼ノ岩屋古墳群と畿内的との結びつきが認められる実相寺古墳群が造られる。この2つの古墳群の系譜については、築造時期にみる近時性やその属性の違いから、一つの首長系譜により造られたものとするよりも、複数の首長系譜が同時に存在しそれぞれの古墳群を造ったとみるほうが妥当性が高いものと考えられる。なお、鬼ノ岩屋・実相寺古墳群で認められるような、狭い範囲の中に複数の首長系譜が認められる事例は、古墳時代終末期の瀬戸内海沿岸の中国地方などに認められ（註3）（広瀬2013）、別府地区と至近距離にある大分川流域の古墳群においても同様の可能性が指摘されている（註4）（長2013）。

古墳時代前期から後期前半に至るまで有力な首長墓が築造されなかった別府地区において、後期後半から終末期（TK43～TK209型式期）にかけて県内最大規模の大型横穴式石室墳が造られ、また、複数の首長系譜が存在する可能性がある背景には、いくつかの要因が考えられるが、一つにはのちに豊前と日向と呼ばれる地域に挟まれた豊後において、別府地区の地理的な重要性が高まった可能性が考えられる。古代の別府には、速見郡衙が設置されその推定地は、鬼ノ岩屋古墳群と実相寺古墳群の中間にあたる北石垣遺跡と推定されている。豊前から豊後へ至る官道は、古墳群を沿うように通り、駅（長湯駅）も別府北部の亀川付近と推定されている（中野1985）。西へは、由布を経由し、玖珠・日田から筑後・肥後へ通じ、東は別府湾に面し瀬戸内海へと通じる（註4）など、古代において別府地区は水陸交通の結節点となっていた可能性が高く、鬼ノ岩屋・実相寺古墳群が造られ始める古墳時代後期後葉から重要視された可能性が高い。

このような地理的な重要性が高まる背景としては、後期前半に起きた磐井の乱後の畿内政権による九州支配の動向や当時の東アジアの情勢などが要因と考えられ（上野2016）、鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の動向は、一地域の首長系譜の問題に帰結するものではなく、畿内政権の政策などと結びついており、律令体制成立前夜の国家形成の一端を示す古墳群であると考えられる。

## 今後の課題

別府大学文化財研究所による実相寺古墳群の発掘調査成果は、鬼ノ岩屋古墳群の再検討をも促し、古墳時代後期後半から終末期にかけて県内最大規模の大型横穴式石室墳を立て続けに造り出す当地域の古墳群の特性を導き出す結果となった。今後は大分県の古墳時代研究の中でも取り上げられるものと考えられるが、鬼ノ岩屋・実相寺古墳群に関しては、鷹塚古墳・太郎塚古墳・次郎塚古墳の石室調査や鬼ノ岩屋古墳群の装飾調査など残された課題も多く、引き続き調査を行う必要がある。

また、古墳群の周辺は宅地化が進んでおり適切な保存を行うためには地域住民への理解促進も必要となる。

今後は鬼ノ岩屋・実相寺古墳群の保存と管理を適切に行うとともに、古墳群を活用した郷土史教育やシンポジウム等を開催するなどして古墳群の周知を図り、別府市の歴史にとって重要な古墳群を次の世代へつなげる取り組みを行っていく予定である。

## 註

(註1) 以下、便宜的に律令制下の国ごとに概観する。

(註2) 昭和51年(1976)に行われた実相寺古墳群の測量図面の中に、平成2年(1990)に発掘調査が行われた天神畑1号墳のさらに東(古墳群の中で標高が最も低い場所)から過去に石棺が出土したという注記がある。

(註3) 広瀬和雄氏は、中央政権によって「もの」と人が結集する水陸交通の重要ポイントに新しい政治センターが設置されたという見解を示めされている。

(註4) 長直信氏は、大分市内の古墳を分析するなかで、千代丸古墳—弘法穴古墳という肥後・筑後系の思想を持つ古墳と別系統の石室形態をもつ丑殿古墳が同時存在していた可能性を指摘したうえで、6世紀後半から7世紀前葉頃になって在地勢力下に畿内的な勢力が入り込んだかもしくは取り込んだ実態を反映されると解釈されている。

(註5) 奈良時代に編纂された『伊予国風土記(逸文)』には、伊予道後で倒れた少彦名命を大国主命が、大分速見の湯を下樋を用いて引いて治療したという神話もあり、豊後水道を隔てた交流があったことを物語るものであろう。

## 引用・参考文献

- 池邊千太郎 1990 「豊前・豊後の横穴墓形態変遷論」『おおいた考古』第3集 大分県考古学会  
飯沼賢司 2003 「第1節 『豊後国風土記』の世界を読む」『別府市誌』別府市  
今塩屋殻行 2009 「日向における後・終末期古墳」『終末期古墳の再検討』  
第12回九州前方後円墳研究会  
入江秀利 1985 「第三節 農民のくらし」『別府市誌』別府市  
上野淳也 2014 「鷹塚古墳の時代」『別府史談 No.24』別府史談会  
上野淳也 2016 「墳丘について」『実相寺古墳群—別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書—』  
別府市教育委員会  
宇野慎敏 2003 「各地の終末期古墳 筑紫」『季刊考古学』第82号  
宇野慎敏 2010 「豊前首長系譜に見る画期と歴史的意義」『九州における首長墓系譜の再検討』  
第13回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨 九州前方後円墳研究会  
和田理啓 2010 「日向の首長墓系譜」『九州における首長墓系譜の再検討』  
第13回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨 九州前方後円墳研究会  
小田富士雄 1979 『九州考古学研究 古墳時代篇』

- 越智淳平 2009 「豊後地域における終末期古墳」『終末期古墳の再検討』  
第 12 回九州前方後円墳研究会
- 小嶋篤 2015 「古墳時代後期の埋葬施設と墳丘」『古墳時代の地域間交流 3』  
第 18 回九州前方後円墳研究会
- 後藤宗俊 1995 「豊後における古道と駅制」『風の考古学 4 豊後国風土記の巻』同成社
- 重藤輝行 2012 「九州北部」『古墳出現と展開の地域層 古墳時代の考古学 2』同成社
- 清水宗昭 2003 「古墳の世紀」『別府市誌 第 1 巻』別府市
- 清水宗昭 2012 『べっぷの文化財 No.42 一別府市の古墳文化一』別府市教育委員会・別府市文化財保護審議会
- 下原幸裕 2006 「三 九州の終末期方墳」『行橋市史』資料編 原始・古代 行橋市
- 杉井健 2010 「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」  
『九州における首長墓系譜の再検討』第 13 回九州前方後円墳研究会鹿児島大会
- 中野幡能 1985 「古代の朝見郷」『別府市誌』別府市役所
- 田中裕介 1998 「前方後円墳の終焉—大分県の場合—」『前方後円墳の終焉』  
第 43 回埋蔵文化財研究集会発表要旨 埋蔵文化財研究集会
- 田中裕介 2010 「東九州における首長墓の変遷と性格」  
『九州における首長墓系譜の再検討』第 13 回九州前方後円墳研究会鹿児島大会
- 田中裕介 2016 「実相寺古墳群に所在する二基の石棺について」  
『一別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告』別府市教育委員会
- 玉川剛司 2016 「須恵器からみる別府市内の古墳時代の様相」  
『実相寺古墳群—別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書一』別府市教育委員会
- 玉川剛司 2016 「別府市内の横穴式石室」  
『実相寺古墳群—別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書一』別府市教育委員会
- 長直信 2008 「東九州（豊前・豊後）における後期古墳の再検討」『後期古墳の再検討』  
第 11 回九州前方後円墳研究会佐賀大会発表要旨
- 長直信 2012 「豊後地域の諸勢力と対外交渉」『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』  
九州前方後円墳研究会
- 広瀬和雄 2013 「終末期古墳の歴史的意義 7 世紀の中央政権の地方統治」  
『新しい古代国家像のための基礎研究』国立歴史民俗博物館研究報告第 179 集 国立歴史民俗博物館
- 福永伸哉 2014 「古墳時代と国家形成」『古墳時代の考古学』9 巻 同成社
- 西嶋剛広 2014 「甲冑から見た九州と倭王権との地域間交流」  
『古墳時代の地域間交流 2』第 17 回九州前方後円墳研究会大分大会 九州前方後円墳研究会
- 西別府元日 1986 「大分君と膳伴公」『大分川流域—自然・社会・教育—』大分大学教育学部
- 村上久和 1989 「第二章古墳時代 第 6 節古墳文化の終末」『大分県史』先史篇Ⅱ 大分県
- 桃崎祐輔 2012 「九州の屯倉研究序説」『日本考古学協会 2012 年度福岡大会研究発表資料集』
- 桃崎祐輔 2014 「馬具からみた九州の地域間交流—舶載馬具と国産規格馬具に着目して—」  
『古墳時代の地域間交流 2』第 17 回九州前方後円墳研究会佐賀大会発表要旨
- 桃崎祐輔 2016 「別府実相寺古墳群出土馬具の検討」  
『実相寺古墳群—別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書一』  
別府市教育委員会
- 吉田和彦 2000 「大分県の横穴式石室—その階層構造理解について—」『おおいた考古』第 13 集  
大分県考古学会



## 報告書抄録

ふりがな	じっそうじこふんぐん
書名	実相寺古墳群
副書名	別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書
巻次	
シリーズ名	別府市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第8集
編著者名	秦 広之・田中裕介・桃崎祐輔・上野淳也・玉川剛司・奈良文化財研究所
編集機関	別府市教育庁生涯学習課
発行機関	別府市教育委員会
所在地	〒874-8511 別府市上野口町1番15号
発行年月日	平成28（2016）年7月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査対象面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
実相寺古墳群	大字北石垣	44202	202043	—	—	H19～ H23・H26	—	範囲確認
鬼ノ岩屋古墳群	大字北石垣	44202	202020	—	—	H19～H23	—	範囲確認
春木芳元遺跡	大字北石垣	44202	202043	—	—	H16	—	開発工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
実相寺古墳群	墳墓	古墳	墳丘	須恵器	—
鬼ノ岩屋古墳	墳墓	弥生	墳丘	須恵器	—
春木芳元遺跡	包蔵地	古墳	箱式石棺	鉄剣・鉄刀・須恵器	—



別府市埋蔵文化財発掘調査報告書 第8集

## 実相寺古墳群

—別府の大型横穴式石室墳に関する総括調査報告書—

平成28（2016）年7月

編集・発行 別府市教育委員会

印刷 大野印刷株式会社